# 夢の城

4

## 第II部　ルブライラ


第4章　カトービル

第5章　カトービル

第6章　ルブライラ

第7章　ルブライラ

第４章

…ぼくは、どこを、どう流れようとしているのだろう？　それは、ぼくにも分からない。しかし、ゆっくりと空を、重なり合うように流れ行く雲――　そして、そよ風に揺れる緑鮮やかな木の葉――　それらを眺めているだけで、何か、ぼくの人生は、とてつもなく広く、つかみようのない、大きなもののように思えて来る。実際、短い一生のあいだに人間は、実に様々な経験をするものなのだ。しかし、人間の一生のあいだには、運、不運がつきまとう。一生涯、日陰の身で細々と生きなければならない人、世の檜舞台へ華々しく登場して行く人、戦乱の為に、二十才そこそこで命を失う人――人の運命って様々だが、そういう不幸の星の下で生きなければならなかった人のことを思うと、心が重くなる。いずれにせよ、人生は全うしなければならないのだ。途中で命を失うことは耐え難い。自殺にせよ、戦争によるにせよ、病死にせよ…

ベッドから身を乗り出すようにして、窓から見える空をボンヤリと見つめているとき、急にドアがノックされて、セーラが入って来た。彼女は珍しく、朝の食事を運んで来てくれていた。この一週間、彼女が勤めているあいだは、絶えてなかったことだ。トーストにジュースにミルク。初めてこの家に泊まった日と、同じ内容だった。

“もう起きているの？”と、セーラは、テーブルの上に置くと、無造作に置いてあった椅子の一つを手にとって自分の方に引き寄せるなり、ベッドにいるぼくの方に向いて、椅子に腰掛けた。

今回は彼女は、ぼくに話してくれるつもりなのだ。

“それで、気分の方はどう？”

“まあまあさ”と、ぼくは答えた。

“――それで、窓の方を向いて、何を考えていたの”とセーラは、気楽な気持ちで尋ねた。

“いろんなことさ”と、ぼくは答えた、“いろんなこと…　結局、人間って、経験したことしか語れやしない。ぼくはもっと、様々な、激しい経験をしたいと思っていたのに、結局のところこんなところで、ひとりぽっちさ。そんなことを考えると、何か空虚なんだ…”

“激しい経験って、例えばどんなことなの？”と、セーラは興味深げに尋ねた。

“例えばお前がセルッカで、マロンたちと経験した、そのような経験さ”と、ぼくは冷静に答えた。

“――でも兄さんって、わたしとマロンのことを、そんなに知っているの？”

“だいたいのことは想像がつくんだ”と、ぼくは答えた、“――ともかくぼくは振り返ってみれば、そんないい思い出は何もない。特に燃えるということもなく、ただ淡々と人生を過ごして来たに過ぎないのさ。――でも今になって、それに対する反省が、ぼくの心を占めるようになって来ている。あのとき、ああすればよかったのじゃないだろうか、とか、なぜ思うようにしなかったのだろうかってね。

でもすべて仕方のないことなんだ。ぼくは内気で、非行動的だったんだからね…　しかし、そのおかげだかなんだか知らないけれど、映画や文学における経験だけは思い切り、した。それによって、激しく燃えるとはどういうことなのか、喜びや悲しみがなんなのか、についての知識を得た。もちろんそういう世界は、実際とは異なっているのだけれども…　しかしぼくの人生に、潤いを与えてくれたことだけは確かなんだ…”

“兄さんの好きな映画って、例えば何？”と、セーラは尋ねた。

“たくさん見て来たけれど、好きな映画っていうものは少ない。ぼくが好きだと言えるものは、人が余り経験しない、ある種の状況なり、感情なりを訴えかけるような映画なのさ”と、ぼくは答えた、“例えば昔見た、「優しい女」という映画がある。それは、一応成功を見た質屋が、入質に来る貧しい娘に憐れみを覚えて、彼女のその境遇を救う為に結婚するが、二人はうまく行くことなく、結局彼女の自殺によって破局を迎える、というドストエフスキー原作に基づく映画だが、ぼくは、全体としてのその出来栄えにではなく、特にあるシーンに心が魅かれるのを感じた。それは、彼女が窒息するような生活の中で、だんだんと病気になって行くときに、薄明かりの射し込む部屋の中で、床に坐って、ひとり、むせぶように悲しいレコード音楽に、耳を傾けているところだった。あのシーンにだけは、ぼくは、息を飲むような彼女の絶望感を感じたものだった。いや、それを越えて、ひとつの美しさすら感じた。絶望や悲しみが、そんなにも美しいものだと教えてくれたのは、それが初めてだった。全くあの場面だけは、繰り返し見たいものさ…”

“それにしても、暗そうな映画ねえ…”と、セーラは顔をしかめるように言った、“でも、映画だからいいわよ。若い娘が絶望しているシーンが美しいだなんて！　もしそれが本物だったら、美しいなんて感心している場合じゃないでしょ”

“そうだね”と言って、ぼくは初めてにっこりした。

それから、ベッドからゆっくりと起き上がると、セーラが用意してくれた朝食をベッドに運んで、さっそく食べにかかった。

“ねえ、お前はいつも忙しそうにしているけれど、いつか、お前と一緒に旅に行ってみたい”と、やがてぼくは、ポツリと言った、“そう言や、お前とは一度も、旅らしい旅に行ったことがないじゃないか…”

“リサとはよく行ったの？”と、セーラは、それとなく尋ねた。

“ああ、何度かね”と、ぼくは、彼女との旅をなつかしそうに振り返りながら言った。

美しい自然高原をハイキングしたときのこと、のどかな牛や羊を見やりながら、高原に咲く花を観察したときのことや、静かなホテルのプールで泳いだときのことなどを、ぼくはなつかしく思い出した。リサと、そんな旅をしたときもあったのだ…

“ねえ、「優しい女」に出て来る娘は不幸だけれど、娘がすべて、ああでなくちゃならない理由はないんだ。むしろ娘は、もっと幸せにならなくっちゃね。旅に行くのもいいし、友だちと陽気に語り合うのもいい。

――でも、そういうこともなく、じっと家の中に閉じ込められて、陰気に過ごす結婚生活なんて、そんな結婚生活なんて、つまらなくて、悲し過ぎるよ”と、ぼくは言った、“そんな結婚なら、しない方がましさ…”
“兄さんはまさか、女の人をそんな風に閉じ込めたりはしないでしょう”と、セーラは言った。
“ぼくかい？”と、ぼくは聞き返した、“お前やリサがいい例じゃないか。ぼくはお前たちの自由を奪った覚えは一度もない…”
“でも兄さん”と、セーラは言った、“さっき旅のことを言っていたけど、当分わたしは行けそうもないわ。御免なさいね”
“いいや、かまわないさ”と、ぼくは答えた、“そのうちお前は結婚して、そういう機会は二度となくなるだろうけれどもね…”

“…でも、こんな日には、どこか旅へ行きたいと思うのは自然なものさ”と、やがてぼくはポツリと言った、“ぼく自身、現在、旅の途中なんだからね”
“兄さんはまた、どこか行くの？”と、セーラは、驚いたような顔をして言った。
“そうだね、すぐにじゃないけど”と、ぼくは答えた、“いずれは、リサのいるメロランスに行ってみるつもりさ。リサに会うのも目的の一つだが、ママの行跡をたどる為にね”
セーラは黙ったまま、聞いていた。
“…でも、旅っていいものさ。ぼくなんか一年中でも旅をしていたい…”ぼくは、そんなセーラを伺うように言った。
“そんな身分になれるって、いいわねえ”と、セーラは言った、“わたしなんか世のしがらみを身につけて、いろんなおつきあいでがんじがらめよ。きょうだってね、朝から約束があったんだけど、せっかくの休日だし、兄さんの為に、午後に延ばしてもらったの。だから、午前中だけ、兄さんと一緒にいられるわ”
“午前中だけのお付き合いって、いうわけかい？”と、ぼくは少し皮肉を込めて言った。
――昔なら、セーラと一日でも一緒にいられたのに。それどころか、今は都会で忙しくしているリサとさえ…　ぼくは少々投げやり気味に彼女に言った、“ぼくの為に、そんなに無理をしてくれなくてもかまわないんだよ”
“そんな、無理をしているわけじゃないの”と、セーラはぼくの気を沈めるように言った、そしてすぐに話題を変えようとした、“旅行と言えば、兄さんに言ったでしょ、わたしの出会ったおじいさんがすごかった。世界各地を旅したのよ。もっとも、職業が船乗りで旅とは言えないかも知れないけれど…　でも、インドやアジアやいろんな国の話しをわたしに聞かせてくれたわ”
“確かにね、そんな旅もいいだろう”と、ぼくは言った、“でもぼくの言っているのはそんなに大きな旅じゃない。もっと小さな旅さ。そんなに遠くまで行かなくても、この近くでもいいのさ。知らない町や村に行って、そこに暮らしている人と出会う。そしてそれが、思い出の町や村なら、なおいいだろう…　ぼくがしたいと願っているのはそんな旅さ。お前だって一つや二つぐらい、

そんな旅の良さを知っているだろう？”

“わたし自身？”と、セーラは尋ねた、“わたし自身、あまり旅をしたことがないの。生活に追われていたものだから。でも、ラミーとちょっとした旅なら、行った覚えがあるわ。そんなものぐらいね…”

“でも、そういう旅が、あとで振り返れば、印象に残るものさ”と、ぼくは言った、“いつか、機会があれば、そのラミーと行ったところやらに、ぼくを案内してくれないか…”

“大したところじゃないの”と、セーラは答えた、“わたしたちがブラヨーラにいたとき、ほんの短いあいだだけど、ラミーとパイク夫人と、静かな保養地の宿へ泊まりに行ったことがあるわ。近くには牧場があって、宿のお庭に茂るリンゴの木がとてもすてきだったわ。確かに、今になって思い出せば、いい旅だったって思うわ。もう、ラミーもパイク夫人も、両方とも、この世にいないんですものね…”

“だから、そういう旅こそが貴重だって、ぼくは言いたいのさ”と、ぼくは言った、“そこはなんという保養地なの？”

“トアエリよ”と、セーラは答えた、“余り知られていないけど、とってもいいところよ。川が流れていて、そこでキャンプをすることもできるの。ごく普通の保養地と言えばそれまでだけど、空気は冷たくて、きれいし、すがすがしい気持になったのを覚えているわ。あの頃が本当に、みんな幸せだったのね…”

“トアエリか。覚えておくよ”と、ぼくは言った、“いつか機会があれば、本当に行って見ようよ。ぼくは行きたい気がするな。だってそこは、お前の一部なんだもの。ぼくの知らなかったお前の姿の一部なんだからね。でも、無理にとは言わない。機会があれば、の話しさ。――でも、お前たちが、ブラヨーラで暮らしていたらしいことは、見当がついていたのさ。一口にブラヨーラと言っても大きいしね、どの辺に暮らしていたの。山手の方かい？　それとも、平地の方？　駅の近くかい？　川の近くかい？”

“兄さんは、わたしを捜す為に、ブラヨーラに寄ったって言っていたわね”と、セーラは答えた、“強いて言うなら、山のふもと近くの団地の一角よ。わたしたち、団地住まいをしていたの。家賃はそれほど高くはなかったわ”

“ぼくは団地にも寄ってみた。でも分からなかった”と、ぼくは言った、“役所にも行ったけどダメだった。きっと違う団地に行ったんだろう。それに、既にお前たちがそこを引き上げた後の話しだったからね。でも、もう少しだったかも知れないな。かなりいいところまで来ていたんだ。そこでお前たちを知っている、という人たちに出会ったかも知れないのに。――いずれにせよ、あのときがなつかしい”と、ぼくは続けた、“あの街で出会った、子犬を連れた美しい少女のことを思い出すよ。もう二度と出会うこともなかったけど、あの街には、そんな少女も住んでいるのさ。ぼくが訪れたのは秋だった。あそこは団地とは違って、山の手の方の閑静な住宅街だったけど、降り積もる街路樹の落葉が美しかった。ぼくは、大きな、白い塀に囲まれた閑静な住宅街を歩きながら、こう思ったものさ。

ちょうどその白い塀にね、つたの葉がからまっていて、それが秋の柔らかい日射しを浴びて、しかも、そよ風に震えているのさ。それを見て、きっとセーラもこの通りを歩いて、この光景を目にしたに違いない。セーラがこの街で見たものを、今ぼくが目にしているのだ、と。そのように、通りを歩くたびに、至るところで、お前の気配が感じられて、ぼくは嬉しかったのさ。実際は、お前がそのつたの葉を見たものかどうかは分からないけどね…”

“兄さんって、わたしのことを、そんなにまで思ってくれていたの”と、セーラは、嬉しそうに言った、“まず、そんな兄さんを見直した、というわたしの気持ちを伝えておくわ。――でも、その閑静な住宅街って、どこでしょうね。わたしもブラヨーラにいた頃はそんな住宅街を歩いたことは何度かあったけれど…”

“ともかく、ぼくが泊まったホテルのすぐ近くさ”と、ぼくは答えた、“いずれにせよまたあの街へ行く機会があれば、そこへお前を連れて行ってあげるよ。ぼくがどんなに必死になって、お前を捜していたか、そのことがよく分かるさ…”

ぼくは食事を終え、最後のジュースを飲み干した。それから、カーテンがたぐし寄せられている明るい窓の外に目を向けた。

“ここでのんびりとこうしていると”と、ぼくはポツリと言った、“ドシアンでひとり過ごしていたときのことが思い出されて来る。ぼくはそこでよく、窓の外の自然を見つめながら、バロック音楽などを聞いていたものさ。とりわけ好きだったのは、コレルリのバイオリンソナタホ短調のジーグ。あれを聞いているとね、目の前に突然、当時の宮殿や、自然や、貴婦人の姿などが目に浮かんで来てね、ぼくの心をうっとりさせたものさ。そこには、光と自然と宮殿や、人々の笑顔など、楽しい雰囲気以外には、何も感じられないのさ。ほんの短い演奏時間のあいだに、そんなことを感じさせる素晴らしい曲だった。ぼくはそんな音楽を聞きながら、ひとりぽっちで、いろいろと想像をたくましくしていたものさ。そして、１７、８世紀の王侯貴族の生活って、どんなだろうと、考えたりもしたものさ。しかし、ジーグの美しい音楽から感じられる限りでは、戦乱も、当時の世ではつきものの、醜い策謀もなく、ただゆったりとした、その当時の人々――とりわけ若い娘の幸せと夢とが感じられるのみなのだ。辛いことがあったかも知れないけれど、今は幸せ――そんな風に、ぼくにはその音楽から感じられた…”

“そんな、夢を誘うような音楽って、あるの？”と、セーラは尋ねた。

“あるさ”と、ぼくは答えた、“いつか、ドシアンに来ることがあれば、そのレコードを聞かせてあげるよ。あれは、あそこで聞くしか、値打ちのない曲なんだからね。そしてぼくは例によって、その音楽に詩をつけた。大した詩じゃないけど、その当時いたかも知れない少女を想像して、詩を書いたのさ。今ではもう見ることのないその当時の若者の恋を想像することは楽しいものさ。恋の内容は現代とも変わらないかも知れない。しかし何か、時代が１７、８世紀ともなれば、ロマンのようなものを感じてしまうんだ。今ではもう失われてしまったような、本当の恋というようなものが、その当時にはあったのかも知れない。

一方では、王侯と貴族、一方では極端に貧しい農民たち、という風に、身分や貧富の差がはっきりしていた時代に芽ばえた恋なんて、今では想像もつかないけれど、当時の建物や自然などを見ていると、何か、ロマンチックなものを感じてしまうんだ。そしてその時代を生きた、溌剌とした、美しい娘ーーそんな娘のことを想像するだけで、ぼくの心は踊ってしまう…”

“兄さんって、面白い楽しみ方を知っているのね”と、セーラは言った、“１７、８世紀なんて、そんな古い時代に目を向けているなんて、この広い世の中でも、兄さんぐらいじゃない”

“そうでもないだろうけれども、少なくとも、あの音楽を通して知られる限りの、あの時代が好きさ”と、ぼくは答えた、“それはただ想像上での時代なのかも知れないけれどね、でも、そんなことはどうでもいいことなのさ。要は、アルカンジェロ・コレルリの素晴らしい曲が存在する、ということなのさ…”

夢見る君ーー
お前は窓辺にいて
通りすがるぼくに向かって
けなげにも 手を振る

口づけをしよう
花を摘んで　頭につけ
馬車が駆けて行き
ほこりが　君の夢を　運んでしまうまで…

それが、ぼくのつくった詩の内容だった。もしその時代を生きたとして､ぼくに向かって、手を振ってくれる娘とは、どんな少女だろう？　そんなことをただ想像するだけでも、ぼくの夢は、どんどんと広がって行くのだった。そしてもし、その娘のことを真剣に考えるならば、恐らく、優に一冊の本が出来上がってしまうことになるだろう…

ぼくは、自分の作った詩の内容まで、セーラに言うことはなかった。このルブライラでは、詩などというものは不適当なのだ。でももし、セーラが、ぼくの住むドシアンに来ることにでもなれば、そのときには、音楽と一緒に、この詩を、朗読さえしてみせるだろう。

ぼくたちはその後、街はずれにある美しい公園にやって来た。古い城を一般に解放したルブライラの市民の憩いの場となっている公園だったが、その庭園は、規模から言っても、美しさから言っても、素晴らしいものだった。ぼくたちは、庭園を横切る小川を渡って、静かな池のほとりにやって来た。

庭園の隅々にまで、至るところ花が咲き、さっきの小川は、人工的に造られた石によって、三段の小さな滝となって、この池に降り注いでいた。池は鈍く濁っていたが、その上を真白な白鳥が数羽、ゆっくりと遊泳している。ぼくたちは、池のほとりまでやって来ると、あやめや、バラなどが咲き誇っているそのすぐそばの、草の上に腰を降ろした。
“本当にいいところだ”と、ぼくは、坐るなり、セーラに言った、“こんないいところを知っていたなんて、もっと早く言ってくれればよかったのに…”
“御免。兄さんが公園に行きたいなんて知らなかったからよ”とセーラは答えた。
“…でも、本当にいいところだ。空は青くて”そう言って、ぼくは、両手を後ろにつくと、真青な空を見上げた、“都会にいた頃の苦しさが、ここにいれば嘘みたいだなあ… それで、その老人の家へ行くことになったのかい？ その老人の名前は、ジオラとか言ったね”
と尋ねたのも、実は、セーラのことを聞く約束で、ここへやって来たからだった。
“そう。また公園へ行ってみたのよ。そしたら、やはり例のおじさんがベンチに腰掛けていたわ”セーラは、その当時を思い出すように答えた。

季節は、まだ春になったばかりだった。セーラが老人と再会できるのを期待しつつ、パーンと公園にやって来ると、案の定老人はいて、新聞を読んでいた。しかし、彼女に気が付くと、今度は向うの方から手を振って挨拶をしてくれた。
“やはり来てくれたね。来ると思っていたよ”と、セーラがやって来ると、にこやかに、老人は言った、“じゃさっそくだけど、この前の約束通り、今回は、君を家に案内しよう”
“かまわないんですか？”と、セーラは不安気に言った。
“何、かまうもんかい。家には誰もいないんだからね”と老人は答えた、“家はすぐそこさ。自分としては気に入っている家だがね…”

確かに、ジオラ老人が言ったように、彼の家は、公園からは歩いて１５分ぐらい、セーラの住んでいる家からもそう遠くない、森のはずれにあった。静かな、だだっ広い地所に、松や樫の木がちらほらと茂っているところに、ポツンとそれは存在していた。白い漆喰と、むき出しの柱や梁がむしろ装飾模様となった、一見、いかにも農家風といった建物だが、よく見ると、いろいろと手が加えられているのが分かった。両開きの窓や、ポーチに置いてある藤椅子、藤で編んだかごなど、さりげない道具の一つ一つに、夢があふれていた。さっさっと行く老人の後について、セーラは、いかにも興味有り気なまなざしで、その家の外観を見つめながら、その家に近付いて行った。
“さあ、ここだよ”そう言って老人は、最初に彼女を居間に案内した。
居間に通されてセーラは目を円くした。明るいガラス戸で外と仕切られた居間は、しゃれた調度と、素晴らしい飾り付けで、おおわれていたからだった。
“しばらくここで待っていなさい”そう言って、老人は、部屋の奥に消えて行った。セーラは、そ

の場にひとり残されて、居間にある一つ一つを、自分の目で点検して行った。

老人にはもはや必要でないかも知れない鏡台が壁に一つ、丸テーブルに、肘掛けと、肘かけでない、アールヌーボ風の椅子がいくつか、それに四角いテーブルもあり、四角いタイル張りの床には、真紅色のや、模様入りの絨毯が、家具ごとに敷いてあった。白い、漆喰壁には、風変わりな鷲の絵を織り込んだタペストリーが一つ、テーブルには、上等な茶器や、石油ランプや、花を活けた花瓶などが、ぜいたくに置いてあった。中でも目立ったのが、鏡台のところに置いてある、ボトルシップであった。天井は、丈夫な梁がぐっと突き出していて、それと交錯するように、細い梁が幾本も、まるで模様のように支えている。セーラは、何気なく、家の外を振り返ってみた。向うには、数十本の樹木が林のように木陰をつくり、その彼方では、のどかな草地が広がっていた。パーンは、その木陰に涼しそうに坐り、舌を出して、こちらを見ていた。部屋の漆喰壁の白さが、この部屋の感じを、いっそう明るくしていた。

“…でも、素敵な部屋”と、セーラは思った。

テラスから吹き込む風が、なんということもなく、さわやかだった。

セーラは、ボトルシップに興味がかられ、ふとそのそばまで歩み寄って、透明な、大きな瓶の中に浮かぶ形のいい帆船に、じっと見入った。

“どうもそれに興味があるようだね”

セーラが驚いて振り向くと、老人が、紅茶に、お茶菓子を入れたお皿を運んで来た。

“まあ、そこにゆっくりおかけなさい。その帆船は、わたしとしては、一番上出来のやつでね”そう言って、老人は、テーブルの上に紅茶とお茶菓子を置きながら、セーラに坐ることを勧めた、“まだ見たければ、わたしの寝室にいっぱいある。現在製作中のも、２、３あるけれどね”

“でもこれ、創るの難しいんでしょ”と、セーラは、テーブルにやって来て、腰掛けながら言った。

“いや、それほどでもない”老人はそう言って、キャビネットからブランデーを取り出すと、それを紅茶に注ぐか、セーラに尋ねた。

セーラは、手振りだけで断った。

老人は、自分のカップにだけ、たっぷりブランデーを注ぐと、次には、持って来たパイプに火をつけ始めた。そうして、椅子に腰掛け、背にもたれた老人の姿は、いかにもくつろいだ、という風だった。

老人に勧められて、セーラは、静かに紅茶を手に取った。

“でも美事だわ。あんなに出来るなんて”と、セーラは、紅茶をすすりながら、感嘆したように言った。

“いや、昔の船乗り友だちに教えてもらってね”と、老人は答えた、“それ用の道具さえ使えば、それほど難しいものじゃない。――でも、こいつには手間取った。なんと言ってもこいつは、かの有名なカティーサークなんだからね”

“カティーサーク？”とセーラは聞き返した、“聞いたことがあるけれど、イギリスの帆船なんでしょ”

“ただの帆船じゃない”と、老人は言った、“とてもすばしっこいティー・クリッパーでね、一時は、並ぶことのない速さを誇ったものさ。これの全盛時代には、上海やインド洋、ホーン岬やオーストラリアなど、それこそ、ありとあらゆる海を駆け巡ったものなんだ。残念ながら現物にはまだお目にかかったことがないが、そいつの甲板やマストには、きっと寄港した国の、様々な香りがしみついていることだろうよ”

“そんなに勇ましい船なの”と、セーラは、感慨を新たに、もう一度、瓶の中の船を見つめた。

“勇ましいどころか、わたしにとっちゃ神様みたいな船さ”と、老人は、満足深げに言った、“動力船もいいが、船は何んといっても帆船が一番いい。それは船の原点でもあるし、帆をいっぱい広げたときには、これ以上の勇壮さはないと思えるほど、素晴らしいものだからね。わたしもできるものなら、帆船に乗ってみたかった…”

“あの瓶の中には、おじさんの思いが込められているのねえ…”と、セーラはそれとなく言った。

“ところで、ここもなかなかいいところだろう？”老人は、今度は、家の外の林のようになっている庭を見つめながら言った。

“ええ、さっき伺わせてもらったところですわ”と、セーラは答えた、“静かで、室内の調度品もいいし、なかなか素敵なところですわ”

“気が付いたと思うが、今、下に敷いているこの絨毯は、ペルシャで買って来たものなんだ”と、老人は言った、“あのタペストリーはシンガポールでね”

“へえ～、随分と知らない、色んな国へ行きなさったのね”と、セーラは、目を輝かせながら言った、“随分と遠いんでしょ。ペルシャやシンガポールは”

“それぞれが、思い出深い国だった”と、老人は、なつかしむように言った、“きっともう行くこともないだろうがね…”

“どうして？”と、セーラは言った、“そんなにいい国なら、また行くことがありますわよ”

すると老人は、静かに首を横に振った。

“実際ね、ここなら住んでみたいと思った国がいくつかあった”と、老人は言った、“タイがそのひとつだ。女は優しいし、食事はうまいし、しかも素晴らしい浜辺がある。若い頃は、そこで錨を降ろそうと考えたこともあったが、結局はできなかったな。こちらに早々と結婚した妻がわたしを待ってくれていたし、彼女のことを思うと、いっときの浮気心はあっても、そんな気にはなれなかった。全くこの国にわたしを引き止めたのは妻のせいだと言っても言い過ぎではないし、もしそうでなければきっと、今頃は、南国の国のどこかに暮らしていることだろうよ…”

“そんなに素晴らしいところなんですか、南国というところは”と、セーラは言った。

“モーリシャス島というところを知っているかい？”と、老人は言った、“あそこはまさに南国の楽園といったところだよ。やしの木が茂っていて、浜辺はまるで宝石のように美しい。わたしも何度か立ち寄ったが、あそこで暮らすことができれば、最高だろうよ”
“おじさんの話しを聞いていると、何んだか行ってみたくなりましたわ”と、セーラは、目を輝かせながら言った。
“君もいつかは行ってみるといい”と、老人は言った、“できるものなら、恋人と一緒にね。わたしも退職してから、妻と一緒にそんな国へ訪れるのが夢だったが、それが実現する前に、妻はあの世へ行ってしまった。全く寂しい限りさ。――そういう意味では、君のような若い娘がこの家に訪れてくれたことは、嬉しいんだよ。心から君に感謝している…”
“そう言ってもらって、光栄ですわ”と、セーラは言った。

そんな会話をかわしているうちに、セーラの表情にもいつしか、楽しい微笑みが浮かぶようになって来た。長いあいだ忘れていた本当の微笑み。ここにいれば、何か、心からくつろぐような気になる――セーラにはそんな気がした。

老人は、セーラに旅の話しや、船上での出来事など、楽しい話題を止めどもなく語りかけ、セーラは退屈することがなかった。老人は、大切に寝室にしまっていた妻の写真を取り出して来て、それをセーラに見せた。
“どうだい？ なかなかの美人だろう”
それは、妻がまだ若かったときの写真と見えて、老人の言う通り、なかなかの美人だった。この老人が、彼女が年老い、亡くなるまで愛し続けたのが分かるような気が、セーラにはした。
“それとはな、もう随分昔の話しだが”と、老人はしみじみと語り出した、“まだわたしも若かった頃、港近くの酒場で知り合ったのさ。彼女はどういうわけか、ひとりで飲みに来ていた。それが、わたしと仲間の目に止まったというわけさ。バーのカウンターで、何か思いつめたようにウィスキーを飲む彼女のことを、バーテンに尋ねても、彼は、初めての客だから分からないって、身振りで教えてくれた。とうとうたまりかねて、仲間の一人が、彼女に声を掛けに行った。「いい夜だから、お友達になりましょう」とか、そんなことを言ったんだろう。しかし彼女は口もきかず、むしろ迷惑そうだった。それでも仲間は仲間で酔っぱらっているので、しつこく話しかけた。そのうち、彼女の様子を別のテーブルで伺っていたわたしには、彼女には何かあるな、ということが分かって来た。わたしも酔っぱらっていたので、そのうち一緒になって押しかけて行ったが、すると、わたしたちの気持が通じたのか、人の優しさに飢えていたせいなのか、彼女は急にカウンターで泣き出したのさ。彼女はすぐハンカチで目をぬぐうと、支払いを済ませ、そこから出て行こうとした。仲間たちはみんな冗談半分だったので、もうほっておけ、ほっておけと騒いでいたが、わたしだけは、これは、ほっておけないとにらんだのさ。

それで、彼女が出ると仲間たちが制止するのもかまわず、彼女を追いかけることにした。もう夜もだいぶ遅く暗い港町だったが、彼女は、靴音をたてて、ひとり寂しく、誰もいない通りを歩いて行った。わたしは、そんな彼女を追いかけた。まるであのときは、今となって思えば、映画の一シーンを見るような思いだった。――ともかくそれが、彼女とのなれ初めだった。彼女は家出娘で、行くところもなかったのさ。それに、勤め先の主人とトラブルを起こして職も追われ、半分やけっぱちになっていたところだったんだ。そういう事情を、彼女の口からかろうじて聞き出し、その晩はとりあえず、自分のアパートへ彼女を泊めることにした。彼女は、わたしが悪意のない人間であることを分かってくれ、そのことに同意してくれた…　まあそれが、彼女との出会いだったわけさ…”

“随分とドラマチックな出会いなのねえ…”と、セーラは感心したように言った、“こんなにきれいな奥さんだし、そんなに困っていたのなら、なおさらのこと、あんたのことを感謝したことでしょう？”

“確かにわたしには優しくしてくれた”と、老人はしみじみと言った、“そりゃ、長い人生には幾度か危機はあったが、その度にそれを乗り越えた。わたしが彼女を亡くしたときにはどんなに寂しかったか、そのことは君にもよく分かるだろう”

“ええ、よく分かります”と、セーラは答えた、“奥さんはおいくつのときに亡くなられたのですの？”

“ちょうど５９だった”と、老人は言った、“まだ十分に生きた、という程でもない。むしろこれから、というときさ。癌だった。相手が癌では仕方がなかったけれどね。晩年の３年間というものは、地獄を見る思いだった。彼女はそれを知っていて、恐れもしたけれど、死ぬ間際にはもう完全にあきらめていた。しかしそんな彼女を見るのが、わたしには耐えられなかった。目の前で苦しみ、衰弱し、やせ細っていく姿を見るのがね…　もっといい病院といろいろ当たってみたけれど、結局は同じことだった。もうあのときのことだけは、思い出したくもないぐらいさ…”

“済みません、思い出したくないことを聞いてしまって”と言って、セーラは謝った。

“いいんだよ、君のせいじゃない”と、老人は言った。しかしそう言う老人の目には、キラリと涙が光っていた。“…しかし、仕事にせよ、家庭にせよ”と、老人は思い直したように続けた、“長い人生には、いろんな災難、と言っていいようなものが降りかかるものだが、それを乗り越えてこそ、本当の人生というものさ。わたしが知ったのはそのことさ。わたしは今でも、自分のことを楽天家だとそう信じているよ”

そう言って老人は、優しいとさえ思われる微笑みを、セーラに向けるのだった。

“でも、息子さんの消息は本当につかめないんですか？”と、セーラは、少し表情を険しくして言った。

“ダメだね”と言って、老人は首を横に振った、“あれが好きになった女というのは、まだ１７のほんの小娘だった。ちょうど君と同じ年だな。そんな娘と結婚する、と言ったものだから、相手のことも考えてみな、と言ってわたしは反対したんだ。

もう少し期間を置いて、冷静になって欲しかったのさ。ところが息子の方は、これでは結婚を潰されると考えたためか、彼女と駆け落ちをしてしまいやがった。その後、どこでどうしていることやら…”

“そのとき、息子さんはいくつでしたの？”と、セーラは尋ねた。

“まだ２２だった”と、老人は言った、“実のところ、相手の娘のことよりも、そんな年で本当に自活して行けるのか心配だったのさ…”

そう言って、老人はセーラを見た。

“さあ、わたしのことはもう随分話したから、今度はあなたの番だ”と、老人は言った、“君は今の勤め先へ来るまでに、ひとりで転々として来たということだったが、そこのところをわたしに話してくれることは、いやなことなのかい？”

セーラには確かに話したくないことだった。幼い頃の孤児院での生活。セルッカでの貧しい暮らし。そしてとりわけ、失恋で自殺まで思いつめたことについては——

“確かに余りいい人生じゃありませんでした”と、セーラは、目を伏せがちに、ポツリと言った、“人に話すほどのいいことなんて、何もなかったんです…”

“でも君ほどの可愛い娘が、世間の目を惹かず、ひっそり暮らしているなんて、きっと何か訳でもあったんだろう”と、老人は鋭く言った、“わたしは全くのひとり者だし、誰にもしゃべりはせんよ。わたしに話したからと言って、何か具合の悪いことでもあるのかい。仮にあるとしても、それをわたしに話してくれるわけには行かないだろうか。わたしは君のことをもっとよく知りたいし、それに——何か、力になってあげたいような気がするんだ…”

その言葉でセーラは迷った。この老人の言葉に嘘、いつわりはない。しかし、自分のことを語って、自分に対する見方が変わるのを、セーラは恐れたのだ。せっかく親しく話せる老人が見つかったと思っていたのに、自分のひと言で、老人の心が自分から離れてしまうのではないだろうか。——しかしセーラは思い出した。老人がまだ若かった頃、妻にした相手というのが、ちょうど生活に行き詰まって、悲嘆のどん底にあった人だったということを。そんな娘を、優しくいたわってくれたのが、この老人だったのだ。そう言えば、そんなふんいきを、この老人は確かに持っていた。人をだましたりはてきそうもない。人にだまされることはあっても決してこの老人はそういうことは出来ないだろう。そして、女性に対しては、心からの優しさを持っている。ある意味では、この老人は、今でも青年あるいはもっと純心な、子供の心を持った人なのかも知れないのだ。この人に愛された奥さんはきっと幸せだったことだろう——老人の表情や言葉のはしばしからにじみ出る内容から、セーラはそんな気がした。この人なら自分の本心を打ち明け、頼ってもいいのだと。セーラはそれで本当のことを言うことにした。ただ、昨年の暮れ、マロンに失恋して、死にかけたことだけは言う決心がつきかねたけれども…

しかし、自分の経歴を語り終えただけでも、老人は感心したようにうなづいていた。

“それで、アパートに行っても、君の兄さんも妹ももぬけの殻だったというわけかい？”と、老人は、セーラに同情するように言った、“じゃあ、本当に君は、ひとりぽっちになってしまったというわけなんだね。――でもいいじゃないか。わたしもひとり。君もひとり。これでお互いひとりぽっちだということが分かったわけだから、これも何か、運命の引き合わせ、と考えたほうがよさそうだ。その同じひとりぽっち同士が、あの公園で出会い、こうして、同じ屋根の下で話し合うようになっているんだからね。まあこれを機会に、これからも末長く、お付き合いを願いたいものだね…”

老人は、セーラの話しに対してそう締め括り、セーラも心の中で、ほっとしたものを感じた。

“わたしこそ”と、セーラも言った、“孤独で、何んのとりえもない娘ですけど、これからもよろしくお願いしますわ”

“君のような若い娘にそんな風に言われるなんて、嬉しいね”と、老人は、セーラのその言葉でにっこりして言った、“これでわたしも、これから、何十年も若返りができそうだ…”

セーラにもやっと笑顔が戻って、その老人に答えた。

ふと、部屋の外を見ると、庭ではパーンが、室内の二人の様子を、訳の分からない表情でじっと見入っていた。しかし、犬のその無邪気な表情が、セーラにはたまらなくいとおしかった。「お前のおかげで、大事なお友達を一人得たのよ」セーラは、パーンにそう言ってやりたかった…

そのようにして、その日は、パーンを連れて、セーラは帰って行った。セーラの心は浮き立つようで、その歩みも自然はずんだ。彼女は久し振りに、自然と突いて出て来た鼻唄などを歌いながら、日が暮れ行く野道を帰って行った。

しかし館ではスコーピさんが忙しく夕食の支度をしており、セーラの帰りが遅くなったことに少し腹を立てていた。彼女が帰るなり、遅くなった理由も聞かず、いきなりあれこれと仕事を言いつけた。セーラは、いきなり現実に帰ったみたいで、がっかりした。夢も希望もない館での生活――それがこれから夜更けまで続くのだと思うと、早くもうんざりした気持ちになると共に、あの老人の家でのひとときが、どんなに歓びに満ちたものであったかを、今さらながら思い知るのだった…

“それでセーラ”と、ぼくは言った。

目の前には、人気のない穏やかな公園が見えている。鏡のようになめらかな池。その水面には、対岸の、美事なばかりの、よく刈り込んだすいかずらのモンスターや、よく茂った樹木のざわめきを映している…

“今のお前は幸せそうだね”

水面を眺めるセーラの目は、潤んだように、キラキラと輝いていた。
“今は幸せよ”と、セーラは、微笑むように答えた、“いろいろあったけど、いろんなことを乗り越えることを、あのおじいさんは教えてくれたの。その言葉は、今でも、わたしの心に残っているわ…”
“いいねえ、そんなおじいさんに巡り会えて”と、ぼくは言った、“ぼくなんか…　誰ともめぐり会えやしない…”
そう、ぼくはつくづく思うのだ。ぼくは誰の為に生きようとしているのか、と。自分の為であるはずがない。とするなら、セーラの為？　そして、リサの為？　――恐らくそうだろう。ぼくの妹のみならず、かつてぼくが愛したことのあるすべての女の為に、ぼくは生きようとするだろう。たとい彼女らが、ぼくの存在に気づいていないとしても…
“そんなことないわ、兄さんだって”と、セーラは振り返ってぼくを見つめ、慰めるように言った、“きっと、いい人に巡り合うわよ”
人と人との出会い――それは不思議なものだ。街に出れば確かに多くの人と出会う。しかしそこにはまず、本当の出会いというものはない。たいていは、すれ違いで終わるだろう。人が出会うには、偶然に、同じ場所ということが必要なのだ。同じ学校。同じ職場。そこへ集まったのはみな偶然に過ぎない。しかし共同の場ということで、自然な出会いというものがそこには存在するのだ。――そう、ぼくがかつて愛したことのある女たちもそのようにして出会ったのだ。だが、たいていはぼくの一方通行に終わった。ぼくのように陰気な人間は、全く救いようがなかった。しかし、ぼくが愛したことのある女性は、ぼくにとって、確実に光っていた。ぼくは、彼女たちと暮らしたいなどとは思わなかった。ただ彼女たちがぼくに与える霊感によって、彼女たちを讃える詩をつくりたかったのだ。そして彼女たちの埋もれた美しさを、ぼくの胸の中にとどめるだけではなく、そのようにして、全世界の人々に知ってもらいたかった。その為には、ぼく自身が、大詩人にならなければならなかった。そしてぼくは、そうなることを願ったのだ。――今になって思えば、それが愚かな挑戦であることが、ぼくには分かった。ぼくの中に、それほどの才能がないことが分かったのだ。しかしこれだけは分かって欲しいのだ。彼女たちを愛するということは、結婚することとは別物だということを。そしてぼくは、誰よりも激しく、彼女たちを愛したのだ、ということを…
“ぼくは消極的過ぎてダメさ”と、ぼくはポツリと言った、“たとい愛する人がいたとしても、行動に出やしない。そしてその果たせない夢を別の方面で解決する他はないのさ…”
“別の方面って？”とセーラは尋ねた。
“たとえば詩をつくるとか、そんなことでさ…”と、ぼくは答えた、“だってそんな方法でしか、彼女を記憶に残す方法は見当たらないんだもの。それはぼくが彼女を愛した、という証でもあるのさ”
“そしてその詩を、彼女に聞かせたりするの？”と、セーラは尋ねた。

“いや、何もしない。じっと自分の胸の中に閉じ込めておくだけさ”
“それじゃ、彼女には何も分からないじゃないの！”と、セーラは、あきれたように言った、“兄さんがその人を愛しているのかも、どうして欲しいのかも、その人には何も分からないわ！”
“そういうことだね…”と、ぼくは力なく言った、“――でも、今は分かってもらわなくてもいいんだ。その代わり、遠い将来には、そんなときがあったのだと、分かってもらいたい気はしているんだ…”
“でもそんなの、彼女だって、それに兄さんだって、そのときまで生きているとは限らないわ”と、セーラは言った、“大切なのはそのときじゃないの。そのとき行動しなければ、何もなかったのと同じことじゃないの…”
“…ぼくの心の中って、複雑なのさ”と、ぼくは言った、“それが分かる人は、恐らく誰もいまい…”
そう、恐らくぼくは、自分の閉じ込められた心の中を、誰にも語りはしないだろう。それは恐らく、詩か、小説によってしか、語ることが可能でない内容だからだ。ぼくは非行動的な人間だ。人に話すことによって行動を起こすには、どうしても無理が伴うのだ。

秋風がすべての人間の苦しみ、愚かな行い、かつての過ちなどを引きずり、きれいに洗い流してくれる。なんとさわやかで、青い空なんだろう！　ぼくたち罪ある者は、苦悩の底から、そんな空を仰ぎ見なければならないのだ。ほんの一瞬でもその美しい空は、ぼくたちの苦悩を慰めてくれることだろう。

人間の苦しみ――ぼくにとってそれは、愛する人と結ばれない苦しみのことなのだ。彼女と暮らせばどんなに幸せな生活が待っているか分からない、その生活の一切を失うことを意味するのだ。そして結局は、元どおりの一人に戻る。寂しい、誰もいない、ひとりぽっちの生活。一人で、彼女と行ったかも知れない美しい山へ行き、楽しげな遊園地を尋ね、広々とした大海原へ行く――そんなことにどんな意味があるだろう？　結局一人では何も行動しはしない。そんなことに大して意味があるとは思えないのだ…

セーラだって失恋した女性だ。そしてぼくも。そんな者同士が結ばれる、というのは世の中によくあるパターンだ。だがぼくとセーラとは結ばれることがない。セーラは、ぼくの妹なんだもの…

“ねえ、今はお互い一人者同士さ”と、ぼくはポツリと言った、“一人者の寂しさというものもよく分かっているはずさ。お互いこれからも、頑張って行こうね…”
“兄さんだって”と、セーラは、微笑みながら、ぼくを見て言った、“頑張ってよ。世の中って、厳しいわぁ。それを何んとか生き抜いて行かなくっちゃならないからね…”

“それでお前は、きょうまでその世間の荒波を生き抜いて来た、というわけなんだね”と、しばらくしてからぼくはポツリと言った。
セーラは、池を見つめながら、ゆっくりとうなづいた。
“女がたくましく世の中を生きて行く――それはいつも、ぼくにとっては感嘆の的さ。とりわけお前のような年若い娘に、どうしてそんなことができるんだろってね”
“バカなこと言わないで！”セーラは半ば笑いながら言った、“それができなけりゃ、わたしたち、みんな死んでしまうじゃないの。それよりも、兄さんこそ、兄さんのようなひ弱な男の人がどうして世の中を渡って行けるのか、その方がよほど不思議なくらいよ”
セーラのその手厳しい発言に、ぼくは苦笑いをした。
“ぼくはひ弱そうに見えるけど、決して負けちゃいないよ”と、ぼくは、せめてもの反論を言った、“生活、その他では人並以下かも知れないけれど、精神的には決して負けてはいない。そのつもりさ…”
そう、ぼくはくじけないつもりだった。たとえ、ぼくに強烈な印象を与える女性がそこにいて、しかも、ぼくに何んの手だしもできないとしても、ぼくは、心の中で泣きながら、それでも決してくじけはしないつもりだった。そういう失恋の苦い苦しみは、もう何度もかいくぐって生きて来ているのだ――ぼくはそれを、人には言わないし、ぐっと自分ひとりの胸の中に納めて来ただけのことだ。でも、だからといって、そんな彼女の印象を、どうして忘れることができるだろう！　ぼくがくじけないのは、たといもう二度と触れ合うことがないとしても、そういう彼女の為に生きることこそが、ぼくの人生の目標でもあるからなのだ…
“若い娘って、不思議だね”と、ぼくは言った、“どうして彼女らは、こんなにも、ぼくたちの心をかき乱すのだろう。すべての若い娘が、とは言わない。でも、魅力的で、惹きつけられる女性がいることは事実なんだ。――そんな娘が間近かにいれば、それこそ、ぼくの心は潰されそうになってしまう…”
“あら、わたしだって同じことよ”と、セーラも言った、“わたしたちだって、そんな男性がいれば、心をときめかすものよ。――でもお互い、ピッタシと行かないのが、人生の不幸なのね。でもまた、そういうことがあるから、人は成長して行くものよ…”

ぼくたちの恋――それはなんだろう？　それは、夕立がいっときつくるあの淡くて、美しい虹のように、はかなくて、淡いものなのだろうか。短い人の一生にとって、それは確かに重要な要素を占める。でもやがて、時が経ち、老いや、その人の死と共に、人々の忘却の彼方へと過ぎ去るものだから…

美しくて、人々の、ぼくたちの心をあれほどかき乱した彼女も、やがては年老い、醜くもなることだろう。そんな彼女に乾杯さ。そんな彼女が精一杯花を咲かせているその時機に、めぐり会

えたという幸運に出会えたのだから。

たといその花が後にしおれたとしても、その花がどんなに素晴らしかったかを伝えるのは、ぼくたちの特権というものなのだから…

　時は過ぎて行く。静かに、風に揺れながら…　人生に、様々な思い出を残そうとも、今回はセーラの話しに耳を傾けることにしよう。素晴らしい空ーーうろこ状の雲が、青い空を走っている…

　“それで、セーラ”と、ぼくは言った、“ジオラ、とかいう爺さんとの関係はどうなったの？”
　セーラは、不意の話しで振り向いた。しかし彼女は、生き生きした目を輝かせながら、うっとりとした表情で、過去の出来事について、語ってくれた。
　“その後も、お爺さんと何度か会っているうちに”と、セーラは言った、“この身寄りのないお爺さんのたった一人の息子さんを、何んとか捜し出してあげるわけには行かないかしら？と思うようになって来たの。というのも、そのうちお爺さんは、わたしのことをまるで実の娘のように可愛いがってくれることが、明らかになって来たからよ。このままではいけないって、わたしも分かって来たわ。でもお爺さんは、息子さんの話しを持ち出すたびに不快な顔をしたものだから、息子さんの消息を捜すといっても、お爺さんには内緒でやらなければならなかったし、そのうえ、館勤めのわたしには自由が利かなかったし、どうしたものかと思案していたとき、向うの方からとってもいい解決法がやって来たの”
　“へえー、どんな解決法だい？”と、ぼくは、セーラの話しに耳を傾けながら、言った。
　“セアンのフィアンセのね”と、セーラは、表情をいくらか引き締めて言った、“アレックスが、わたしにも少し気があることは分かっていたわ。それに時々、セアンはアレックスを伴って、わたしのいる館にもやって来たものね。どちらかと言えばセアンは、アレックスを家に迎えるとき、両親のいる実家よりも、この館で過ごすことの方を好んだの。館の主のスプローク氏は、最初セアンが少し挨拶に行くだけで、めったに姿を現さなかったものだから、セアンは館を勝手気ままに使えることに満足していたの。それにセアンは、父親に、わたしの面倒をも見るように、とも言われていたものだから、わたしを誘い出す為にもよく館に現れたわ。そして、ちょうどその日も、アレックスを伴って、セアンはやって来たの”

　その日もよく晴れた日だった。セアンはやって来るなり、きょうは別にどこも行かず、この館でのんびり過ごすのだ、とセーラに言った。アレックスも、彼女を見るなり、軽く会釈をした。それから、セアンは、アレックスを連れて、いつものように、祖父のいる書斎へ挨拶に出かけた。
　セアンが来る日は決まって、家政婦のスコーピさんの機嫌が悪かった。

セーラがセアンと一緒になって遊ぶ為、労働力が減少するからだ。その為に、そんな日は、朝早くからセーラに、何かと仕事を言いつけ、彼女らが来るまでに、何んとか掃除などの仕事は終えてしまいたいようだった。セーラは、朝早くから、モップとバケツとを持って、せっせと廊下を拭き始めた。力のいる、かなり辛い仕事だったが、その為に生活費をもらっているのだから、やらないわけには行かなかった。そんなとき、急に外で車の止まる音が聞こえ、やがて家の中に二人が姿を現したのだ。セーラはすっかりメイドの仕事着を着ていたが、その音で仕事の手を休めた。やがて彼女らは、スコーピさんと何やら話した後、階段を静かに上がって来て、二階の廊下にいたセーラとすれ違った。

“スコーピさんには、あんたの仕事のことはよろしく、と言っておいたわ”と、セアンは、セーラを見つめながら言うのだった、“だからもう、今からはやらなくていいのよ。さあ早く、そんなものはしまってしまいなさい。後は、スコーピさんが、暇があればやってくれるわ”

“でも”と、セーラは言いかけたが、

“じゃ祖父に会う為に、ちょっと書斎へ行って来るわね”という声と共に、セアンはもうアレックスを連れて、向うへ行ってしまっているのだった。

セーラは、彼女らが来る前に、廊下の拭き掃除が終わらなかったことを恥じ入りながら、仕方なく、掃除道具を片づけにかかった。

途中、スコーピさんに会うと、

“済みません”と小声で謝ったが、スコーピさんがいい顔をしていないのは明らかだった。

しかしセーラは、ときたま外へ遊びに行く以外は、仕事着を着替えることは許されなかったが、庭に出て、ほっとした気分を味わった。エプロンで手をぬぐいながら、じめじめした部屋の中から、陽光の満ちる庭に出て、この上ない解放感を味わうのだった。

その日の午後はゆっくりと過ぎて行った。昼食を終えると、屋外のテラスで、セアンは、ゆっくりと本を読み、アレックスも、庭で見つけて摘んだ花を片手に、所在なく時を過ごしていた。

セーラは、食事の後片付けを終えると、スコーピさんに断って、再び庭に出た。セーラがお気に入りの場所は、中国風のあずま屋のある澄んだ、小さな池のほとりだった。セーラは、例によって、パーンを伴って、そのあずま屋が中央に浮かぶ池のほとりまでやって来て、腰を降ろした。パーンもすぐ脇で、しゃがみ込んだ。

しかし、セーラが厨房からパーンを伴って池に行く姿を目に止めたのが、アレックスだった。アレックスは、まだ本を読み続けているセアンをその場に置いて、ひとり席をはずすと、セーラの後を追い掛けて、池のほとりまでやって来た。

セーラは、驚いたような顔をして振り向いたが、それがアレックスだと分かると、心を静めた。

“やあセーラ、ここがお気に入りの場所なのかい？”と、アレックスは気さくに声を掛けた。
“ええ、この屋敷でも、ここが一番好き”と、セーラは、満足深げに答えた。
“午前中は、バドミントンをして楽しかったね。以前に比べてだいぶうまくなったじゃないか”と、アレックスは言った、“君って、本当に、魅力のある女性だ…”
セーラはしかし、その言葉を彼から聞かされるのが、以前から何んとなくいやな気がしていた。その言葉に対してセーラは、答える言葉を見い出せなかった。しかもこの日は違った。この日はさらに、こんなことも彼は、セーラに言うのだった。
“ここだけの話しだけどね、セーラ”と、彼は、セーラにささやくように言った、“セアンはぼくのことをフィアンセだと触れ回っているけど、ぼくはまだ一度も、そんな言葉を口にした覚えはない。彼女は確かにいい娘には違いないけれど、彼女との関係が、これからも先、ずっと続くかどうかは、ぼくにも分からないのさ。ぼくだって男だ。彼女よりももっといい女性が現れれば、乗り換えることがあるかも知れないしね…”
“でも、どうしてそんな話しをわたしにするんです？”と、セーラは、彼の顔は見ずに、尋ねた。
“それはね”と、彼は落ち着いて言った、“君が気に入っているからさ。あの日――あの最初の日、ひと目見たときから、君のことが気に入ってしまった。ぼくがこれまで出会いたいと願いながら、なかなか出会わなかった女性――それが君だったのさ。どうして君は、若い娘に似合わず、いつもそんなに落ち着いているの？　ぼくは、セアンのようなタイプの女性は何人も知っているが、君のようなタイプの女性に出会ったのは初めてなんだ。君の年齢には似合わず、控え目で、それでいて、ぼくを惹きつける何かを持っている。きっと君の、その表情だろう。それは、セアンのような娘にはない何か――きっと、意志の強さのような何かなのさ”
“どうか、やめて下さい！”と、セーラは、耐え難くなって言った、“それ以上の言葉は聞きたくありません。わたしはここのメイドなんです。それに、あなたはセアンさんの彼氏です。そんなあなたが、そんなことを口にするなんて、よくありませんわ！”
“少し言い過ぎたようだね”と、アレックスは、セーラの剣幕に少し圧倒されて、照れたように言った、“でも、これだけは知って欲しい。ぼくが君の魅力に惹かれていることも事実なんだ。だから、何んとか、君の力になってあげたいとも考えているんだ。君のような娘がこんなところで埋もれているなんて、相当の事情があったに違いないんだ。だから、そんな君の為に、何かをしてあげたい。君も遠慮なくこのぼくのことを信頼して、してもらいたいと思っていることを、言ってくれていいんだよ”
セーラは、そんなに好きな相手ではないにしても、そのように優しい言葉をかけてもらって、嬉しい気がした。しかし、それの意味するものが、現在のこの生活の苦しみを少しでも楽にすることだと思って、セーラは、丁寧にその申し受けを断ろうと思った。

しかし、その瞬間、彼女の頭にひらめいたのが、以前からどうしたものかと思案していた、例のジオラ老人の息子の消息捜しを、この人に頼めば、ということだった。セーラは、この人なら、やってくれるかも知れない、と思った。
“本当にその言葉をお受けして、いいんですか？”と、念を確かめる為に、セーラは今度は、アレックスの方に振り向いて言った。
“ああいいとも。ただし、ぼくのできる範囲内の話しだけれどね”と、アレックスは、予想に反して手ごたえがあったので、顔をほころばせて答えた。
“実は、人捜しをお願いしようと思って”と、セーラは、とうとう話す決心がついて、ゆっくりと切り出した。
屋敷の人には、セアンも含めて、誰にも言っていないが、実はある老人と懇意であること、その老人の身寄りは、ただ一人いるだけだが、その息子は行方不明であること、しかし、いつまでもそんな状態にしておくのは可哀そうだから、見つけてやりたいと考えていたこと、ただし、このことは誰にも伏せて、極秘にやりたいと考えていること、しかし、自分にはそんな暇がないので、誰かやってくれるにふさわしい人がいないかと考えていたこと、などを、ひとつ残らず、セーラは、アレックスに打ち明けた。

それを聞いて、アレックスが最初に言った言葉は、
“よくぼくを信頼してくれた”という言葉だった。彼は満足そうに、微笑みを浮かべていた。
“そんなことなら、お易い御用さ”と、アレックスは胸を張って答えた、“ぼくには現在、それをやって行けるだけの自由がある。少々時間がかかってもいいということなら、君の為にやってみてもかまわないよ。結果はどうなるかは分からないけれどね。それと、このことは誰にも言って欲しくないということだけども、大丈夫、ぼくは誰にも言いやしないよ。これは、君とぼくとの二人だけの秘密――それでいいんだね？”
そう言って、彼は手をさし出した。
セーラは、ゆっくりとうなずき、彼のさし出した手の平に、そっと、自分の手を添えるのだった。
“もし、調査に費用がお入りようなら、わたし、お支払いしますから”
セーラはただ一言、そう付け加えることを忘れなかった。
“いいんだよ、そんなこと”と、彼は、セーラの手を握りながら言った、“なに、そんなにかかるものじゃない。それより、君との連絡を、どうつければいいだろう？　ここへひとりで来るわけには行かないしね”
“それじゃ、いい案があります”と、セーラは言った、“わたし、いつも決まった時刻に、この犬を連れて、屋敷の外に散歩に出るんです。その道筋は大体決まっていて、町に寄ったあと、必ず街はずれの公園に寄るんです。だいたい午後の三時頃です。もし話しがおありなら、そこへ寄って下さい。

あそこは余り人目のつかない、ちょうどいい場所ですし、緊急の用事でもない限り、たいていわたしはそこに来ていますから。――それとも、そこへ行くのが大そうだとおっしゃるなら、連絡先の電話番号さえお教え願えるなら、ときどきわたしの方から、確認の電話を差し上げますけれど…”

“いいや、その場所でかまわない”と、アレックスは満足の笑みを浮かべて言った、“何んだったら、次回、いつ会おうか、その都度決めておいた方がいいだろう。その方がより確実に君と会えるからね。――ぼくはこれから先、君と会える日が来るのを楽しみにしているからね…”

“でも、誤解してもらっては困ります”と、セーラは言った、“これは調査の依頼で、逢引することじゃありませんわ。もしそういうつもりなら、もうわたしは、あなたに頼んだりはいたしません”

“分かっているよ”と、彼は答えた、“これが君にとっては大切な仕事であることを、肝に銘じておくさ。――ところで、調査をするに当たってだね、ただひとつ聞きたいことがある。その消えた息子さんを捜すのに、何か、重要な手がかりでもあるのかい？”

“そのことよ”と、セーラは言った、“いろいろ考えたんだけど、あると言えばあるし、ないと言えばないの。でもただひとつ、一緒に駆け落ちをした娘さんの家が、コグランにあるという話しなの。そこへ行きさえすれば、あるいは、家の人が知っているかも知れないわ。ただ、娘さんの消息を尋ねるにしても、全く別の用件で尋ねる、という風にしてもらいたいの。ジオラ老人の名前は、一切出さないようにしてもらいたいわ”

“分かったよ。そこへ尋ねてみるさ”と、彼は言った、“その娘さんの名前は、なんていう名前なの？”

“クレメンス”と、セーラは答えた、“クレメンス・ドリア。場所についてはだいたい分かっているから、後で地図をつくっておくわ。帰るまでには、あなたにお渡しする手配をしておくわ”

“分かった。場所さえ分かれば、近々、そのドリアとかいう家に当たってみるよ。学校時代の同窓会の名簿に必要だからとか言ってね”と、アレックスは言った、“今はその人、何歳ぐらいになっているだろう？”

“わたしの計算では、もう３２にはなっているはずよ”と、セーラは答えた。

“じゃ、ぼくが同級生では若過ぎるね”と、彼は言った、“まあ、何んとかやってみるよ。そのときには必ず君に連絡をするからね”

そのとき、向うからセアンがやって来る姿が見えたので、二人は振り向いた。

“ねえ、あんたたち、そこで何をしているの？”セアンは別に二人の仲を勘繰る風もなく、にこやかに尋ねた。

“ちょっと、セーラさんと秘密の話しをしていたのさ”と、アレックスは、わざと冗談めかせて言った、“さあ、それじゃ行こうか”

そう言って、アレックスは立ち上がった。

“ちょっと、秘密の話しって何んなの？”と、セアンは言った。

“秘密だからそれは教えられないよ”アレックスはそう言いながら、セアンの手を引いて、その場から去って行くのだった。
セーラはその場に坐ったまま、もう一度、静かなさざ波を立てている池を眺めた。
“きっとうまく行くわよ、お爺さん”
セーラは、心の中でそうささやいた…

“人間って、結局は孤独なのさ”と、ぼくは静かな池のさざ波を見つめながら、不意に言った、“お前の話しを聞いていても、つくづくそう感じてしまう…”
“どうしてなの？”と、セーラは、驚いたように、ぼくを見て言った。
“でもさ”と、ぼくは言った、“人間、何かの目標を持って生きている限りは、その孤独さを忘れてしまうこともできる。でも、その目標を見失ったとき、いやでも自分の孤独を見つめてしまうことになるんだ。ぼくはもう、何度もそういう経験をして来た…”
“兄さんは、目標を見失ったの？”と、セーラは尋ねた。
“目標なんて”と、ぼくは言った、“所謂目標なんて、ぼくには何もなかったさ。そもそもの初めから、ぼくは孤独だったんだからね。分かるだろう？　ぼくたちのたどって来た道を――でも、別の意味では、ぼくにははっきりした目標があったし、それは今でも変わってはいない。それは、ママの失そうにより、失われた過去を回復する、という目標さ。それ以外に、ぼくが再生する道はないような気がしているのさ…　それはともかく、お前の話しに戻ろう。ぼくは、お前の話しの陰に、お前の孤独がちらついているのが、目について仕方がないんだ…”
“どうしてそんな風に感じるの？”と、セーラは、ぼくを見て言った。
“だってお前もぼくと同じ、孤独の影をしょって生きている人間だからさ”と、ぼくは言った、“みんなが、とは言わない。でも、お前もぼくもリサも、この三人だけは同じく、孤独なのさ。つくづくそう感じるよ…”
“どうしてよ”と、セーラは、いどみかかるように言った、“わたしは今、そんなに孤独じゃないわ。お友だちも多ぜいいるし、みんなと話し合っているときは幸せよ。それにリサだって、きっと都会でうまくやっているに違いないわ。わたしはあの子の性格をよく知っているもの。結局、今も孤独なのは、兄さんひとりだけじゃないの”
“お前だって今に分かるようになるさ、ぼくの言っている意味が”と、ぼくは、静かに答えた、“今は、お前の言う通りかも知れない。でも、少なくとも、お前の話しを聞く限りは、お前は、そのお爺さんと友情を結ぶことによって、少しでも、自分の孤独を慰めようとしていたんじゃなかったのかい？”
“だって、あのときは仕方がなかったわ”と、セーラは言った、“他に話し相手って、それほどいなかったんですもの…”
“ぼくがお前のその話しから感じられるのは、お前のその孤独なんだ”と、ぼくは言った、“人は何をしても、どんなに気を紛らせているように見えても、やはり孤独なときがある。

それは、その人が、本当の人生というものをつかんでいないからなのさ。うわべの楽しみ、うわべの人生だけで、その人が本当に満たされるものだろうか？　そんな気晴らしは、かつて何度もぼくは試て来た。でも、そんな生活はただ空しいだけで、根源的な自分の欲求というものを満たすことにはならなかったのさ。だからと言って、お前とそのお爺さんとの関係がそのようなものだ、と言うつもりはない。それはそれなりに、お前にとっては大切な関係だったはずなのさ…”

“確かに兄さんの言う通りかも知れないわ”と、セーラは、また元の静けさに戻って言った、“わたしには他に、これといって目標はなかったし、ただお爺さんだけが目標だったの。そのことによって、自分の孤独さや惨めさを紛らせようとしていたのかも知れない…　だって、そのお爺さんは結局、死んでしまったからよ”

“死んだ？”と、ぼくは驚いたように、セーラに振り返って言った。

“そう、亡くなったわ”と、セーラは、寂しそうに、池の方を見つめながら言った、“そしてそのときになって初めて、兄さんの言ったような、孤独の寂しさや悲しさや惨めさがどっと、自分の身に降りかかって来たわ。お爺さんの存在が、そういう辛さからこのわたしを守って下さっていたのよ。そのときになって初めて、そのことに気が付いたの。わたしは孤独で、寂しくて、死んでしまいたい気さえした。それらはすべて、運命のいたずらか何かは知らないけれど、あの寂しい秋に向かって、仕組まれていたことなのよ…”

“そこのところをもう少し詳しく、ぼくに言ってくれないか”と、ぼくは言った。

“あの寂しい時期にあって、お爺さんに会いに行くときだけがただ一つ、わたしの楽しみだったわ”と、セーラは、そのときを振り返り、まるでなつかしむかのように、瞳を輝かせながら言った、“それはまるで、灰色の世界にあって、そこだけがぽっと明かりがともっているそんな家へ行くようなものよ。――でも、そんなにたびたびは行けなくて、一週間に一度か、へたすればほぼ一ケ月近く行けなかったこともあったわ。でも、行った時の話しは、そのひとつひとつを今でも鮮明に思い出すことができるわ。だってそれほど、お爺さんに会いに行くことが、楽しくて仕方がなかったんですもの。そこへ行けば必ず話しに花が咲き、楽しい話題と、すっきりした気持ちで帰路に着くことが出来たんですもの。それに反してあのスプロークさんの館は、相変わらず息が詰まりそう。厳格で、堅苦しくて、スコーピさんは、ガミガミ言うし。一度、帰りに雨が降って、帰りが遅くなってしまったことがあったの。そのときどんなにスコーピさんにしぼられたことか。スコーピさんは腹立たしさの余り、つい、わたしのほっぺに平手打ちを食らわせたのよ。わたしはそんなことは初めてで、泣く泣く自分の部屋へ逃げ帰ったわ。そして、ベッドの上で何度も涙をこぼしたけれど、それはやがて嬉し涙になって来たの。だって、雨が降ってくれたおかげで、とんなに楽しい日中を過ごすことが出来たかを思い出したからよ。それは、スコーピさんの鬼の顔以上の、お爺さんの優しい顔が、わたしの気持ちを慰めてくれたからよ。雨のおかげで、わたしは初めて、お爺さんの台所に入って、夕食の仕たくをちゃんとつくってあげたわ。お爺さんはたいそう、そんなわたしを喜んでくれた。

「そんなことまでしてくれなくてもいいのに」と、お爺さんは言ったわ。でもわたしはしたかったの。お爺さんの為ならどんなことでもしてあげたかったの。「まあまあ、わたしに任せなさい」と言って、わたしは、冷蔵庫にあるあり合わせの材料で、その晩の献立を考えて、オーブンに火をつけて、鍋を取って、料理をつくってあげたわ。本当はわたしも一緒に食事をしてあげたかったんだけど、そうもできなくて、あいにく雨が止んだお蔭で、帰ることになってしまった。今から考えても、本当に残念なことをしたわ…”

“お爺さんと食事ができなかったことかい？”と、ぼくは言った。

“でも一度だけ、お爺さんと食事に行ったことがあったの”と、セーラは、そのときをなつかしむかのように言った、“勿論休暇をもらってよ。だからその日は、本当のデートだったわけよ。夏の日だったわ。わたしは、お爺さんが知っているという、コグランのはずれにあるしゃれたレストランへ連れて行ってもらったの。山裾のなかなか景色のいいところよ。お爺さんとのデートなんて、もちろん初めての経験だったし、周りからどんな風に見られるか、正直言って少し不安でもあったわ。でもきっと、少し年の離れた父と娘ぐらいにしか思われないでしょうと思って、わたしは思い切って、お爺さんの誘いに乗ることにしたの…”

“これはこの前君が、夕御飯の支たくをしてくれた、そのほんのお礼のしるしだよ”と、ジオラ老人は、ゆったりした表情をしながら、丸テーブルの向かいにいるセーラに向かって言った。

斜面の下の方では、ゆったりと川が流れている。民家の屋根も、森も、川の向うに広がる平野も、すべてか伸びやかで、すがすがしかった。レストランの屋外テーブルの上には、ニジマスを主体とした料理と、ワインとか乗っていた。

“あんなの、わたしにとってはお手のものですわ”と、セーラは答えた、“それで、味の方はどうでした？”

“とってもうまかったよ”と、老人は言った、“なんと言っても君の手料理なんだからね。ただ、君と一緒に食べられなかったのが残念だった。――でも今やっと、その念願がかなえられたわけだ”

“御招待して下さってありがとう。本当にいいところね”

そう言ってセーラは、うっとりした表情で、周りの景色を見渡した。

“ところで、この前は遅くなってしまって、怒られなかったのかい？”と、老人は心配して言った。

“少しね”と、セーラは、悲しげな表情をして答えた、“でも、もうすんだことですわ”

“相当しぼられたようだね”と老人は、セーラの言葉の裏を読み取って言った。しかしもうそれには触れないで、老人はわざと話題を変えた、“ここはね、実は、思い出の場所なのさ。結婚して間もない頃、妻とたまたま訪れて、印象に残ったレストランなんだ。余り気に入ったんで、その後も何度となく訪れた。今はその息子がやっているけれど、ここの主は、実はわたしとも顔なじみなんだ。わたしの妻のこともよく覚えているよ”

“それで、今の主人も愛想がよかったんですか？”と、セーラは尋ねた。
“今のは息子の方だがね、まあそういうことさ”と、老人は言った。
“でも、奥さんと来られたその思い出の場所に招待してもらって、とても光栄ですわ”と、セーラは、胸が熱くなって言った。
“いや、なんでもないことさ”と、老人は言った、“今回は君が主役だからね。わたしも、こんなに若い、君のような娘とこのレストランに来ることになるなんて、思いも寄らないことで、喜んでいるよ。本当によく、このデートを承知してくれたね”
“そんなこと”と、セーラは言った、“娘なら、信頼できる男の人にお誘いを受ければ、めったなこと、断りませんわ”
“年は関係ない、ということなんだね”と、老人は嬉しそうな顔をして、言った、“でも君は、ここへ来るまでのあいだ、気にならなかったかい？　こんな年寄りと一緒に歩いて来たことを”
“だって、誰にも分からないことでしょう”と、セーラは答えた、“それに、周りの人がわたしたちに気が付いたとしても、親子だと思っているかも知れませんしね”
“親子ね”と、老人は、気が付かなかったように言った、“わたしにも君のような娘がいれば幸せだったんだろうけれどね…　でも君を見ていると、ふと、妻のことが思い出されて来たりするものさ。それも、昔の、若い頃の妻の姿がね”
“奥さんって、どんな人でしたの？”とセーラは、ふと尋ねてみた。
“いや、妻の話しはもうよそう”と、老人は、ひとり言のように首を横に振った、“きっとこの場所が、余り思い出深い場所だから、いけなかったんだろうね。今回は君がわたしの恋人なんだ。そこへ別の女の人の話しを持ってくることは、いけないことだよ”
“そんな風にわたしのことを、愛して下さっているんですか？”と、セーラは、半ば冗談めかせて尋ねた。
“君を見ていると”と、老人は言った、“わたしの気も随分若返るものさ。今になってもう一度、青春を取り戻した気になるんだ。この年になったからと言って、君のように若くて、可愛らしい娘を、どうして愛さずにいられよう…”
“ねっ、あのボトルシップ、難しいですわね”と、セーラは話題を変えて言った、“やりかけて、まだ一つの作品もできないんですもの、随分気の長い作業ですわ”
セーラも、老人の家に何度かお邪魔しているうちに、老人に、ボトルシップの造り方の講習を受けていたのだ。
“君のはまだ作業場に置いたままだよ”と、老人は言った、“ちょっとは手を加えてあげようかとも思うんだが、やはり君ひとりでやった方がいいと思ってね。いずれにせよ、息の長い作業には違いない。しかしわたしの場合、早くて一週間でやり通した作品もあるけれどね…”
そのようにして、会話は弾んで行くのだった。

眺めのいい、老人の思い出のレストランで二人が食事をした後、セーラのたっての願いで、二人はふもとの川床に降りることにした。セーラの表情は、かつてないほどほころび、幸せそうだった。

“お爺さん、わたしが手を引いてあげましょ”と、彼女は元気よく年寄りに手を差し伸べた。

“いいんだよ、わたしはまだそんな年じゃないんだから”と、老人は一度は断りかけたが、セーラの熱意に負けて、二人はしっかりと手をつないだ。

“君のような若い娘に手をひかれると、わしは照れ臭いよ”と老人は小声で言った。

“いいのよ、誰も”と、セーラはそれに対して答えた、“わたしたち二人がデートをしてるなんて、見ていないんだから。ねえ、とってもいい天気よ。それに川もきれいわ。早く行ってみたい…”

“君のその弾んだ声を聞いていると”と、老人は言った、“わたしは、十年も二十年も若くなったような気になって来るよ。――でも、君の相手をしているのが、若い男ではなくて、こんな年寄りで済まないね”

“何を言っているのよ、お爺さん”と、セーラは振り向いて言った、“お爺さんは、わたしたちの知らない時代を生き抜いた、経験豊富な、素晴らしい方よ。そんなお爺さんを相手にすることができて、わたしこそ幸せよ。本当のところ、わたしは、年の若い、余り経験のない人を相手にするよりも、お爺さんを相手にすることができたことを喜んでいるの。お爺さんの中には、わたしたちにはない、六十年余りの様々な経験が詰まっているわ。それこそ、お爺さんの持っている貴重なたまものだ、とそういう風には思わない？”

“そうかねえ”と、老人は、手を引かれるまま、にっこりして、セーラを見た、“君がそう言ってくれるなら、わたしは嬉しいよ…”

二人は、こんもりした森のあいだを縫うようにした、小さな石畳のスロープを降りて行った。最後には石の階段があり、ちょっとした公園のようになっている川床に二人は降りたった。

“ここも素敵なところねえ…”と、セーラは、ゆったりと流れる川や、向う岸の森を見つめながら言った、“あそこでは釣をやっている人がいるわ。何を釣っているのかしら？”

“きっと、さっき食べたニジマスだよ”と、老人は言った。その目は優しく、セーラの上に注がれていた。

セーラは川のほとりに立ち、じっと川の中に目を注いだ。爽やかな風が吹き、河原に茂っている樹木の葉を震わせるとともに、セーラの柔らかい髪の毛や、赤いスカートをも震わせた。

“わたしがまだ若かったら”と、老人は、セーラの後ろに立って急に言うのだった、“きっと君のような娘を、結婚の相手に選んでいたことだろうよ…”

セーラは不意にそんなことを言われたので、驚いたように振り向いた。
“あら、困りますわ、そんなこと”と、セーラはきっぱりと言ったのだった、“誤解しないでね。お爺さんとは、ほんのお友達のつもりよ。このままずっと、いいお友だちでいたいと思っているわ。――それに、お爺さんにはちゃんとした奥さんがいたじゃないですか。そんなこと言って、奥さん、お墓の下で苦虫をかみつぶしているんじゃございません？”
“一本参ったねえ、君には”と、老人は笑いながら言った、“君を見ていると、ふと、妻のことを忘れてしまったよ。――でも、これだけは言わせてもらうよ。妻もよかったが、君も、違った意味でとってもいい。素敵だよ”
“そんなに褒めてもらって嬉しいですわ、お爺さん”と、セーラは言った、“ねえ、話しは変わるけど、やっぱりこの川にいるのは、お爺さんの言っていたニジマスのようね。ねっ、あそこで泳いでいるのはそうじゃありません？”
そう言って、セーラは、少し川向うに、流れに逆らうように静止している魚を指さした。老人も、セーラと一緒にその魚を見た。
“その通りだよ。数匹はいるねえ”と、老人は川を覗き込むように言ったが、その手はしっかりと、セーラの肩にかかっていた。
やがて、川から向き直ると、老人はしっかりとセーラを見つめた。
“君の表情はとってもいい”と、老人はやがて言った、“わたしも年を食ってしまったが、男なら、君のような娘を見逃しはしない。こんなこと言っていいだろうか。君のその頬にキスをさせて欲しいんだ…”
セーラは、その言葉で、とてもいい表情になった。
“そんなことぐらいなら、お易い御用ですわ”と、セーラは言った。
そして目を閉じると、やがて、そっと、優しい唇が、セーラの頬に触れた。
セーラは目をあけ、老人を見つめた。老人は、とってもいい顔をしていた。その瞬間、ここには、小川と森と老人以外には、誰もいないように、セーラには思われた。そして、彼に対する感情が、セーラには思いも寄らなかった恋心ではないか、という気さえ、セーラにはして来て驚くのだった…

老人に対するこの奇妙な感情は、その後もセーラの心を支配し続けた。老人が彼女のことを愛してくれているのは分かっている。そしてもし、彼女もこの老人を心の底から愛し、その愛を受け容れれば、そのときには、どのようなことが起こるのだろう？ この親子以上も年の離れた二人のあいだに――

二人は、川岸の公園で、日頃の辛さをも忘れるような、楽しい時を過ごした。
セーラは、老人の前で、ひょうきんに踊ってみせたり、両手を広げてバランスを取りながら、一本の丸太の上を上手に渡って見せたり、折れそうもない丈夫な木の枝に、まるでコアラのよう

にぶら下がって見せたりして、老人を喜ばせた。

その為にすっかり汗をかいてしまったが、彼女は久し振りに、失われていた子供時代を取り戻したような気になった。老人は老人で、そんな子供のような彼女を、幸せそうな表情で、じっと見つめていた…

“疲れたわ”と言って、やがてセーラは、ベンチの上にどっかと腰を降ろした。

“そりゃそうだろう”と、老人も、優しくセーラの横に腰を降ろした、“あれだけ激しい運動をした後なんだから”

“ねえ、わたしってバカみたい”と、セーラは、腕で額の汗を拭いながら言った、“お爺さんの前で、こんなにはしゃぐなんて。通行中のアベックも、家族連れも、わたしたちを見ていたようよ。みんな、どう見ていたのかしら。――でもわたしは平気よ。久し振りに羽を伸ばすことができたんですもの。お爺さんは、わたしのことを、バカな女だという風には見ない？”

“そんなことはあるものか”と、老人は、セーラと同じく、遠くを見つめながら言った、“君はまだ若いんだから。わたしはまだ体力では君に負けないつもりでいたが、君のような真似はもうできない。その点、君は幸せだ。君にはまだまだ、これからの未来というものがあるからね…”

“あら、お爺さんだって”と、セーラは老人の方を向いて言った、“まだまだこれからですよ。人生を引退するような考え方はいけないわ。せっかく今まで、あんなにいろいろと生きて来られたのに…”

“君に、そんな励ましを受けてもらって、嬉しいよ”と、老人は感謝するように言った。

老人のその瞳は、少し潤んでいるような、そんな気がセーラにはした。

“しかしね”と、やがて老人はポツリと言った、“もうこの年になれば、君たちのような年齢に戻ることは不可能なような気がする。その点、君たちのような未来のある人を見ているのが、羨ましい気がしないでもない。本当に、君が今いるときが、人生でも一番いいときなのさ…”

“そんな風に、お爺さんをわたしと区別するのはいや”と、セーラは少し悲しそうな声を出して言った、“わたしが今青春なら、お爺さんも今青春よ。そうでしょ？”

老人は、その言葉で、苦笑いをするのだった。

“そうだね”と、老人はポツリと言った。

“さあ、それじゃ、しっかりして！”と、セーラはベンチから立ち上がって、老人に向き直ると、手を差し伸べた。“さあ、行きましょ…”

この日の旅は、セーラにも、老人の心にも、印象深いものを残したようだった。生涯には忘れ難い日々というものがあるものだが、それがこの日だった。

そのようにして、セーラは再び普段の生活に戻った。普段の生活に戻っても、彼女の胸のうちは、奇妙な感情に満たされていた。それが、愛されたことによる喜びなのか、それとも、恋する心なのか、単なる人恋しさなのか、セーラ自身にも分からなかった。

しかし、このことがあってから、彼女自身の心のうちが、活発に、燃えるようになって来たのも事実だった。それまでの沈みがちな心も、今再び覚醒し、生き生きと活動を開始し始めた。

　その後、雨の日が続いたり、来客で忙しかったりで、しばらく老人と会うことはなかった。そんな日が長引くにつれ、セーラの心はただ老人に会いたいという気持ちだけが高ぶって行った。ところが、次に会ったのは、老人ではなく、思いがけなくもアレックスとだった。セアンは、その後も頻繁にスプロークの館を訪れたが、たいてい一人で、アレックスを伴ってはいなかった。「アレックスはいま論文の作成で忙しいの」というのがセアンの説明だったが、セーラには、あるいは例の件の実行の為のカモフラージュかも知れない、と直観した。その直観は、その後間もなくしてから、アレックスとの出会によって証明された。
　彼女が例によって、公園まで犬を連れて来ると、ベンチの後ろの黒い木陰に男の影が見えたので、セーラは少し気味悪くなって、早々とそこを立ち去ろうとした。ところが、彼女が立ち去ろうとすると、その木陰の方から、
　“セーラ！”と、彼女を呼び止める、聞き覚えのある男の声が聞こえたのだった。
　振り向くと、木陰から姿を現したのは、あのアレックスだった。彼は、たばこに火をつけ、ニヤリとして、彼女を見つめていた。
　“どうしてそんなに急いで、そこを立ち去ろうとするんだい？”と、彼は言った、“まさかぼくだと知って、避けようとしたわけじゃないんだろうね”
　“そうじゃないんです”と、セーラは正直に答えた、“そこに怪しげな人影が見えたもんですから…”
　“それがこのぼくなら、別にかまわないんだろう？”と、アレックスは言った。
　セーラは、あっけにとられたように、ただじっと、アレックスを見つめていた。
　“それにしてもここは”と、アレックスは周りを見渡しながら言った、“余り人の寄りつかない寂しいところで、逢引きには持って来いの場所だね。ここを選ぶなんて、君もなかなかやるじゃないか”
　“言っておきますけど”と、セーラは、きっぱりとアレックスに言うのだった、“これは何も、あなたと逢引きしようと言っているわけじゃありません。わたしがあなたに頼んだのは、そんなことじゃなかったはずです”
　“何もそう向きにならなくても”とアレックスは言った、“ほんの少し冗談を言っただけだよ。それで、その件だけどね、これを調べるには随分苦労をしたんだよ。セアンには、「ただいま論文を作成中でーす」と言って、しばらく交際を断ったりしてね。こんなに苦労するなんて、思いも寄らなかったよ。君には、ここのところを汲んでもらいたいと思っているけれどね”
　“ええ、それは感謝しています”と、セーラは、目を伏せがちに言った、“それで、どうでした？見つかりましたの？”

“まあ、そうあわてないで”と、アレックスは、セーラを落ち着かせて言った、“話しをするのに何かいい場所でもないかね。近くのレストランとか”
“レストラン！”と、セーラは驚いたように言った、“今、犬を連れてお散歩中ですよ、レストランに入るわけにはいきませんわ。そこのベンチじゃだめですか？”
“そこじゃ人目について具合が悪いだろう？”と、アレックスは言った。“じゃ、あの木陰の芝生の上がいい。あそこなら、人目につかなくて済むだろう”
そう言って、アレックスは、セーラを、木陰へ連れて行った。
芝生に腰を降ろすと、アレックスはさっそく、用件について、話しを始めた。

“まずね”と、彼は、ひと息ついてから話し始めた、“順序として君の作ってくれた地図に従って、コグランにあるドリアの家から当たってみた。少し変装をしてね、こう言われたときはこう答えると、自分で予行演習までしてさ。ところが、蓋をあければ、その必要が全くないことが分かったのさ。現場に行けば、もうその家が何年も前に引越ししていないことが分かった。初っ鼻から頭をガ〜ンとやられた感じさ。でも、手ぶらで君のところへ帰るわけにも行かないしさ、案外簡単に事が運ぶんじゃないかと楽観していたのに、その日から苦闘の日々が始まったのさ。なんと言っても手がかりはほとんどない。それをどうやって見つけ出すかさ。いろいろと考えたけどらちがあかない。それでともかく行動を起こすことにした。順序を組み立てればこうさ。そのジオラの息子とクレメンスとが仮に今も一緒に暮らしているとして、その居場所を知っていると考えられるのは、彼の友人か、彼女の友人か、あるいは、その両親しかいない。ところが、彼女の交友関係、あるいは、彼の交友関係については何も知らないから、結局のところ、やはり、彼女の両親から当たるしかない、とそう結論づけたのさ。だが、その両親が、どこかへ引越ししてしまった。さあ、それでどうしよう。そこでひらめいたのが、親の勤め先が分からないものか、と思ったのさ。それが分かれば、何んらかの手がかりが得られるかも知れない。それで近所の人で、彼のことを知っている人はいないものかと、一軒一軒当たってみたのさ。幸い知っている人が見つかって、引越先もある程度まで教えてくれたが、勤め先についてははっきり教えてくれた。今もそこに勤めているかどうかは分からないが、ともかくそこを当たって見ることにした。それで分かったことだけど、クレメンスの父親はね、小さな衣料品会社で働くまじめなサラリーマンだった。性格が大人しくて、まじめ一方でね、そういうところが娘の反発を招いたんじゃないかと思ったぐらいさ。いずれにせよ、ぼくが訪ねたときは、もうやめて、その会社には勤めていなかった。でも、同僚の一人が、彼から来た手紙を持っていて、こっそりとその住所を教えてくれた。それまで、細い細い糸と思っていたのが、急にパッと明るくなった感じさ…”
セーラは熱心に彼の話しを聞いていた。彼は再び、話しを続けた。
“ともかくそれでようやく、クレメンスの親の家に行くことはできた。家もコグランじゃなくて、随分遠くのセルッカに移り住んでいたのさ。

でも幸い、セルッカと言えば、ぼくの大学のあるところでね、地理についてはある程度通じていたから助かった。というより、よく調べてみれば、なんのことはない、ぼくらの大学のほん近くだったのさ。ぼくは大学に戻ってから、さっそく訪ねてみた。今度は、クレメンスの幼友だちから頼まれているんだ、と話しを変えることにしてね。というのも、同窓会名簿作りだけでは理由が弱いし、その為に、こんなに熱心に捜していることがもし彼らに分かっていたら困る、と思ったからさ。でも、そんな心配は無用だと分かった。幸い家には母親がいて、快く応対してくれた。父親はまた別の会社に勤めていて留守だったけど、駆け落ち当時のことをもちろんよく、母親は覚えてくれていた。そして、あのときは本当に、娘に対する失望で腹が立ったけれど、今は許している、とも答えてくれた。そこで、肝腎の居場所だが、母親はメロランスにいるらしい、としか教えてくれなかった。というより、それしか実際、母親は知らなかったんだ。家出してから、２、３度便りが来たのが、そこからだったし、その文面からして、生活は相変わらず苦しそうで、その苦しいのを知られるのがいやさに、住所を教えたくないのだろう、と母親は言っていた。メロランスと言えば、ここから随分遠い都会さ。しかも肝腎の母親が住所を知らなくて、また振り出しに戻ってしまった恰好だった。それを聞いて、期待していただけに、ぼくはお先真暗になってしまった気持ちになったね。――でもあきらめずに、ぼくはもう少しいろいろと、この母親から聞き出すことにした。その結果、中学生時代に、彼女とごく親しくしていた友だちが今もコグランにいるはずだ、その人なら、クレメンスのことを知っているかも知れないし、わたしじゃなく、あなたになら、あるいは教えてくれるかも知れない、と話してくれた。またコグランの出発点に戻ったわけだが、今となってはそれだけが唯一の細い細い糸だった。ぼくは負けずに、またコグランのその家を訪ねることにした…”

“随分とお世話をかけたようね”と、セーラは、彼が一息ついたすきに言った、“そんなに複雑な経過をたどるなんて、知りませんでしたわ”

“と思うだろう”と、アレックスは、セーラを見て言った、“でも、話しはまだこれからなんだ。人捜しがこんなに苦労を伴うものだなんて、ぼくは知らなかったよ。――でも君に、少しでもその苦労が分かってもらえたなら、と思ってぼくは話しているんだ”

“ええ、分かっています”と、セーラは、少し恐縮したように答えた。

“それでともかく、コグランのその友人の家に行ってみた”と、アレックスは再び続けた、“幸い、その友人は家にいた。今では家庭の主婦となっていて、その姓も、昔の姓と変わっていた。その主婦然とした姿から、彼女の友人のクレメンスも、きっとこのような年で、このようになっているんだろう、と偲ばれもしたものさ。その彼女は、クレメンスのことはよく知っていた。駆け落ちしたときのことも、以前から二人の交際は知っていたけれど、まさかそこまでなるとは思ってもみず、驚いたと語ってくれた。クレメンスは、大人しく、素直な、別にこれといって目立つところもない、いい少女だった、と、その高校時代の学友は語ってくれた。そして彼女にも、その後クレメンスから数度便りが届いた、ということでぼくは期待したが、やはり彼女にも、親と同様、居場所を知らせてはいなかった、ということだ。

それで失望もしたが、ただ彼女に対しては、クレメンスから長距離電話がかかって来て、生活に苦労しているが、なんとかやっているので安心をして。たまたまメロランスに、同じ高校の女友達がいることを知って、その学友にときどき世話になることもある、と話してくれた、ということだった。しかも彼女は、この学友とも友だちで、その学友のメロランスでの住所はちゃんと知っている、と教えてくれた。――だから、そこへ行って聞けば、その学友が、クレメンスの居場所を知っていて、教えてくれるかも知れない。そんな期待が持てたわけさ。ただ、それはもう随分昔の話しで、それ以降会っていないから、もしその後引越しをしていれば、その住所が分からない不安もあるが、ともかく行って捜してみる他はない、という次第さ。ただメロランスと言えば、ここからは遠いし、いくら自由の身のぼくだって、そう簡単に行くわけにも行かない。それにね、実際、論文の作成も、全くの嘘じゃなくて、実際やらなくちゃならないことだしね、それと平行してやって行かなくちゃならないことなのさ。――でもセーラ、安心をおし、ちょうど一週間後に、その暇ができそうなんだ。大学のゼミの先生が、仕事の関係で少しばかり出張するので、二週間ほどゼミはお休み、というわけさ。このあいだを見計らって、捜しに行くことはできる。ただ、このことが、あのセアンにバレると少しやばいんだが、そこはなんとか言ってごまかすつもりさ。だから、行けるとすれば、その二週間ほどのあいだだけさ。そのあいだに、ぼくはメロランスに行って、その友人に会うなり、できるだけのことはしてみるつもりさ。ただね、もしその間に見つからなかったとすれば、もうそれで、この件は、かんべんしてもらいたいのさ。だって、他にどうしようもないだろう。やるだけのことはやった。仮に探偵を雇ったところで、これ以上のことはできないだろうさ。それでも見つからないのなら、それは、手の打ちようもないほど遠いところへ彼女たちは行ってしまっている、ということを意味するだけなんだ。そのときには君も、それ以上の注文を、このぼくにつけないで欲しいんだ…”

アレックスの説明はそこで終わった。

セーラは、その話しにじっと耳を傾け続けていた。

“それで、メロランスには行って下さるの？”と、やがてポツリとセーラは、アレックスを見上げて言った。

“ああ、それが君の望みだろう？”と、アレックスは淡々と答えた。

“すみません、そこまでして下さるなんて”と、セーラはやがて、言葉を詰まらせながら言った。“もし、費用がお要りようなら、このわたしが出しますわ。その他、必要なものはなんなりと、このわたしに言って下さい…”

“バカだなあ、セーラは”と、アレックスは、うなだれるセーラを慰めるように、優しく言った、“そのぐらいの金は、このぼく自身で、なんとかなるさ。それより、その費用を出せば、困るのはむしろ君のほうだろう？　君の給料が決して高くないことは、セアンから聞いて知っているさ。だから心配しないでいいんだ、そんなことは。これはぼくの好意だと思って、素直に受け取ってくれればいい…”

“でもそれじゃ、余りにも迷惑をかけ過ぎです”と、セーラは言った、“貴重なあなたの時間を裂いてもらったうえ、その費用まであなたに使わせるなんて、そんなことはできませんわ。だからせめて、その全部は無理だとしても、その一部だけでもお返しさせていただきたいんです…”

しかしセーラがそう言っても、アレックスはとりあおうとはしなかった。

彼女が余り何度もそのことを言うので、アレックスはとうとうこう言った。

“それじゃセーラ。その件は、これがすべて終わってから、ということにしようじゃないか。それまでは、この件についてごたごた言うのは、お互いやめにしよう。本当は、これはぼくの好意でやっていることであって、別に気にしてくれなくていいことなんだけどそこのところがどうしても気になる、と言うんなら、そのことは後回しにしようじゃないか。さあ、もうそれぐらいでいいだろう。後は大船に乗ったつもりで、気をしっかり持っていればいいのさ…”

セーラは、やむなく、アレックスの言葉に従うことにした。何んと言っても今、ジオラ老人のことで頼れるのは、このアレックス一人しかいなかったのだ。彼の気をそこねるようなことは極力避けねばならない。そう思ってセーラは、もうそれ以上何も言わなかった。そして、その件についてはもうそれ以上話題にはならず、セーラの近況のことや、アレックスの生活ぶり、その他のことを話し合って、この密かな会合は、ほぼ一時間程で終わった。

いつの間にか空には黒い雲が出て来て、風も冷たく、半袖のセーラには少し肌寒くさえ感じられた。セーラは、空をゆっくりと駆け抜ける黒い雲の姿を仰ぎ見、おじいさんとも過ごしたこの楽しかった夏も、もうそろそろ終わりだな、ということを感じた。そしてやがて、秋が訪れるだろう。感傷的な、寂しい秋――

アレックスは、自分の近況について心ゆくまでセーラに語った後、幸せそうに笑顔を浮かべて立ち上がり、彼女の手を取って、その手の甲にそっと口づけをすると、名残り惜しそうに別れの言葉を口にした。

“じゃあ、行って来るからね”と、アレックスは、セーラを見つめながら言った、“今度会えるのは、メロランスから帰ってからさ。なに、心配しなくていい、きっといい土産を持って帰って来るからさ。それじゃね、君も時間がないだろうから、また、２週間か、３週間後のこの同じ場所、同じ時間に、ここで待っているからね。じゃ、さようなら…”

そう言ってアレックスは、彼女から離れ、何度も振り向き、手を振りながら、彼女のいる公園から、どこへともなく去って行った。

彼が去った後、公園に残されてセーラは、急に寂しさを感じた。ふと落葉が一枚、ひらひらと、風に流されて舞い落ちるのを目にして、同時にセーラは、自分の惨めさも感じた。どうして自分は、こんなところにひとりでいて、しかも、見ず知らずだったお爺さんの為に、こんなに一生懸命なことをしているのだろう？ そんな自分のことが、わけもなく悲しかった…

　その後しばらくは、スプロークの屋敷に行事があったりで、セーラは忙しくて、老人の家に行くことはできなかった。久し振りにスプロークの親戚や、地方の名士たちが集う晩餐会が催され、そのときには臨時雇いのコックも動員されたほどで、スコーピさんも、セーラも、臨時雇いの女中たちも、みんなてんてこまいだった。セアンもその晩餐会に出席したが、彼女の横に、いつもいるはずのあのアレックスの姿が見えないのが、彼女をひと際、寂しいものにしていた。しかし、招待された名士の中には、若い男もいて、セアンはその彼とダンスをしたり、結構楽しそうだった。日頃、書斎に閉じ篭もり、陰気とさえ感じていたここの当主ルミノ・スプローク氏は、このときばかりは、完全なホスト役を勤め、彼の中に、ユーモアの才やもてなし方など、意外な才能があるのを、セーラは発見した。あの日、セーラを救ってくれたミゲル・スプローク氏も、妻と一緒に、久し振りに姿を見せて、セーラのことを色々と気づかってくれた。今の生活に不満はないか、辛いことやいやなことがあれば遠慮なく言ってごらん、と言われたけれど、セーラには、そんなことを彼に言ったところで始まらないことが分かっていた。変わったことではジオラ老人との関係があったが､それについては、スプローク氏にさえ、言うことはできなかった。それでセーラはただ、結構今の生活で満足していること、そして、こうまでしてもらったミゲル、及び、ルミノ、のスプローク父子には、心から感謝していることを伝えた。そして、セアンのことは、特に世話になっていることも伝えた。そのセーラの言葉は、ミゲル・スプローク氏を一応満足させたようだった。彼は再び、他の客人との会話の中に入って行き、セーラのことはもうそれ以上、気に留めることはなかった。セーラはせっせと、厨房と客間とを往復し、上等のワインやシャンペン、そして、臨時雇いの一流のコックが手塩にかけた御馳走を運び続けた。酔いにまかせて、質の悪い客がつい、セーラの体に触れたりもしたが、セーラは気にしなかった。そしてしまいには、年配の男に請われてダンスの相手までさせられたが、セーラは素直にそれに従った。――そのようにして、その夜は、ゆっくりと更けて行った…
　しかし、そのような楽しいふんいきにあっても、セーラの心に残っていたのは、あのジオラ老人のことと、アレックスがメロランスでうまくやっているか、ということだった。

　一晩に渡るバカ騒ぎが終わった翌日、客人たちは、ひとり、また一人と去って行った。帰って行く客人の中には、名も知らぬ地方の名士もいたし、彼女とダンスを楽しんだ男もいた。セーラは、そんな彼らを、他の召使たちと共に、丁寧に送り帰した。その中には、明け方の六時頃に帰るミゲル・スプローク氏の姿も見られた。彼は、この晩は、最高に楽しかった晩だったことを言い、セーラが初対面の客人に対してもよく尽くしてくれたその労苦をねぎらってくれた。そして、君をこの屋敷に置いた自分の目に狂いはなかった、今後もこの屋敷に尽くしてくれるよう、そう言い残して、彼はまだ朝霧の立ち込めた屋敷から去って行った。

　セアンや、まだ一部の客人が、屋敷内に残ってはいたが、ミゲル・スプローク氏が去って、祭が終わったことをセーラは感じた。そして実際、その日のうちに、この屋敷には元の静けさが戻ったのだった…

　あれからもう二週間ほどが経っていた。その間、アレックスからの音信が来ないのはおろか、老人の家へ行くことさえなくなっていたのだ。セーラがまず最初に思ったことは、老人の家に行く、ということだった。幸い、その機会は間もなく訪れた。

　もう季節は秋だった。彼女がパーンを連れて歩く沿道の樹木も、北風に吹かれて、落葉をひらひらと落としていた。まだ枝には葉をしっかりとつけていたが、それでも夏のあの盛りに比べれば、随分寂しくなったことをセーラは感じた。それにしても老人はどうしているだろう？　久し振りに会う期待に、胸をときめかせると共に、一抹の不安があったのも事実だった。人気のない公園を過ぎ、再び森におおわれた並木道にセーラはやって来た。もう何度も老人と歩いたこの道――この老人の家へ通じるこの道へやって来るのが、セーラは好きだった。パーンも、ここへ来ると急に生き返ったみたいに駆け出す。彼にも分かっているのだろう、その先に何があるのかということが…
　セーラは、期待に胸踊らせながらついに、あの家にやって来た。森が開け、急に樹木がまばらとなった林の奥に、その家がポツンとあった。白い漆喰壁とそれに縦の筋が入ったような、幾本もの柱とで、すぐそれだと分かる、なつかしい気もするあの家。自分の住む屋敷に比べれば随分質素な気もするが、しかしほっとするような、人間味のするあの家――セーラはついにその家にやって来て、一歩一歩近づいて行った。しかし近づくにつれ、その家がいやに静かなのが、セーラの気にかかった。いや、静かなだけではなく、いつもなら空いているはずのあの窓も、きょうは閉ざされている。どうしたのだろう？　留守なのだろうか？　セーラは急に不安になった。
　実際、家の前まで来て、留守だということがセーラには分かった。ベルを鳴らしても、ドアを叩いても、中からは何んの音も聞こえては来ない。念のために裏に回ってみたが同じことだった。窓という窓が閉ざされ、どれ一つとして、開いている窓はなかった。たまたまきょうは留守なのだろう、と、セーラは、失望と、あきらめの気持から立ち去ろうかとも思った。それにしても、仮に留守だとしても、あのお爺さんがこんなに厳重に窓を閉めたことがかつてあったろうか？
　何か別の理由があるのではないか、セーラは、これまでのいきさつからして、ふと、そんな直観がした。向うの林では、パーンが、元気そうにはしゃいでいた。やがて、彼は、何を見つけたのか、玄関の方にやって来て、けたたましく吠え出した。セーラは、パーンがうるさいので、彼をなだめる為に、再び玄関までやって来た。すると今初めて気づいたのだが、パーンが向かっている相手は、表に据えつけてある郵便ポストからこぼれ落ちた、封のしてある雑誌の束だった。パーンは、それに牙を向け食いちぎろうとさえしていたので、セーラはすぐ彼から、その雑誌を取り上げた。

そして、何気なく手にしたその雑誌を見ると、それは、船の模型に関するものだった。セーラは、既に満杯になった郵便ポストと、自分が手にした雑誌とを交互に眺め、それの意味するものが何んであるかをさぐろうとした。答えはやがて見えて来た。これは、この家が、一日や二日の留守ではなく、長期に渡る不在を意味しているに他ならないのだ。だとするなら、お爺さんは、どこへ行ったのだろう？

幸い、セーラには、頼りとする人がすぐ見つかりそうだった。近くに住む農家のおかみさんなら、お爺さんとも親しく話ししていた間柄だし、セーラとお爺さんとの関係についても、別に不思議な顔もせずに、知っていた。話しのよく分かる、親切な、いいおばさんだった。セーラはすぐ、その家に向かった。

そこも、林に囲まれた、静かな農家だったが、セーラがドアを叩くと、間もなくしてからあのおばさんが姿を現した。セーラを見るなり、おばさんは驚いた顔になった。

“まあ、あんたでしたの。さあ、さあ、中へお入り”と、彼女は、家の中へ案内するそぶりをした。

“いいえ、ここで結構です”と、セーラは断った、“実は、ここへ来たわけは…”

“ええ、分かってますよ”と、セーラが話すまでもなく、おばさんの方から切り出した、“ジオラ老人のことでしょう。そりゃ大変だったんですよ。まあ、中に入って、ゆっくりお話ししましょう”

その言葉で、セーラの顔には、一瞬血の気が引いた。

“おじさんに何かあったんですか！”と、セーラは驚いて言った。

“今は小康状態ですけど、気は許せません”と、おばさんは、セーラの目を見つめ、きっぱりと言った、“今は、町立の病院にいます。急に、脳溢血になられて、お可哀そうに意識があっても、話すこともできない状態です。ちょうど一週間前の水曜日でした…”

そう言って、おばさんは、ジオラ老人が入院に至ったそのいきさつについて語り始めた、

その日は、うららかな日で、おばさんがちょっとした用事で老人の家の前を通ったときには、庭に長椅子を持ち出して、本を読んだりして日光浴を楽しみ、通りがかりのおばさんにも、手を上げてあいさつを送ってくれたこと、しかし、帰って来たときには、前向きに長椅子から倒れていたので様子が変だと思って駆けつけてみると、ただ事でない状態だったので、あわてて近所の老人を呼び、電話で医者を呼んでもらったこと、そのときにはかなりの重体だったが、手厚い手当のおかげで一命は取り止めたこと、しかしまだ回復するには程遠く、悪くなったりよくなったりの状態をくり返して、病室で眠ったままの状態でいること、自分もときどき看病に行くが、身うちがいないので困っていること、ただ、セーラのことも頭に浮かんだが、日頃、老人から、彼女の立場もあるから、彼女の屋敷へ連絡をとってはならぬと堅く言われていたので、どうせ彼女の方からやって来ることもあるだろうし、と思って、今日まで彼女に連絡せずにおいたこと、などをおばさんは、一気にまくしたてた。

　そして最後に彼女は、セーラに、ただひと言、こう付け加えた。
　“セーラさん、今すぐ行ってやりなさい。病院に行けばすぐ案内してくれますよ。きっとあの方も、あなたが来るのをお待ちかねだと思います”
　“ええ、行きます。行きますとも”と、セーラは、涙ながらに答えた。
　セーラは、心の中で何かが燃えるような、熱いものを感じた。何かが、激しく揺れて落ちて行くような、頭がくるくる回る、めまいのようなものを感じた。
　“お爺さん、しっかりして！　わたしを残して死なないで！”と、病院へ駆ける道中、セーラは何度も心の中で叫んだ。

　町立病院は、カトービルの少し町はずれの、小高い山の中腹にあった。近代的なコンクリート造りの建物で、そのモダンさが、人々の目を惹いた。曲線を主体としたその造形美には、どう目すべきものがあった。周囲には、樹木がおい茂り、病院の環境としては申し分がなかった。セーラは、パーンを入口近くの樹につなぎ、しばらく大人しくしているようにと注意を与えた後、病院の中に入って行った。
　外見にたがわず、建物の内部も、清潔で、すっきりしていた。受付で来院の理由を告げると、受付嬢はすぐ電話で連絡を取ってくれた。２～３分後、一人の年若い看護婦が廊下の向うからやって来た。
　“今、ドクターは往診中で来れませんが、わたしが案内します”と、やって来るなり彼女は言った。
　病室は二階にあるらしく、看護婦に案内されるまま、二人はエレベーターに乗った。
　エレベーターに乗っているあいだ、セーラは、老人の容体を看護婦に尋ねた。
　“何んとも言えませんねえ”と、彼女は言った、“正確な診断はドクターに聞いて下されば分かりますが、以前に比べればよくなっているようですよ。最初の三日ほどは昏睡状態でした。でも今は、ときどき目を覚まされて、こちらを見たりなさいます。ただ、しゃべったり、自分を表現したりすることは無理なようです。こちらの言っていることなどは、お分かりになっているようですが、それもはっきりしたことは分かりません。ともかくお会いになったら分かりますが、今は絶対安静が必要なときですから、患者が興奮するようなことだけはなさらないで下さいね…”
　エレベーターのドアがあき、清潔なクリーム色の病院の壁が両側に見える広い廊下が目の前に現れた。看護婦は静かに前を歩き、一番奥の病室へセーラを案内した。
　ドアが開くと、カーテンが降ろされ、室内を薄暗くしたその片隅に、影のようになったベッドの上に一人の老人が眠っている姿が、かすかな光の中に浮かび上がった。セーラが近寄っても、その老人は眠りを続けていた。鼻からは、ものものしい流動食の管が取りつけられ、以前見慣れていた老人の顔というには、余りにも痛々しい顔だったが、それでも、以前のあの優しい、落ち着いた表情は、今でもはっきりと認められた。老人は、安らかに、眠りに陥っているようだった。セーラは、老人の表情をじっと見つめ、そっとその額に手を当てた。

すると間もなく、深い昏睡状態から覚めたように、老人は目を開けた。その目は初め、あらぬ方向へさ迷っていたようだったが、やがて、セーラの顔を捕らえた。するとそのとたん、何かショックでも感じたのか、動きとしてはかすかなものだったが、ある種の興奮が、彼の全身に走るのが認められた。口も、何かもぐもぐさせようとするのだったが、動きというには余りにも小さ過ぎた。そしてただ手だけが、毛布の下でかすかに動くのが分かった。きっとそれは、セーラに手を差し伸べようとしているのだとセーラは感じ、セーラは、その手を取って、自分の頬に当て、老人の目をしっかりと見つめた。その手は冷たく、以前に比べてやせ細っているように感じられたのが、セーラには悲しかった。老人の目は、そのあいだにもじっと彼女を見つめ、何かを語りかけるように、静かに彼女を見つめていた。

“恐らく、あなたのことは分かっているんでしょう…”と、看護婦は、ポツリと言った、 “――でも、自分を表現することができないんです。語ることも、体を動かすことも、ままなりません…”

セーラは、老人の手を頬に当てたまま、悲しさの余り、目には涙があふれて来た。

“ねえ、どうしてこんなことになってしまったの”と、セーラは、心の中で語りかけた、“せっかくあなたの息子さんを捜して、何もかも順調に行っていた矢先だったのに。こんなになるなんて、余りにもひどい。余りにもむごいわ”

“お爺さん”と、セーラはやっと口を開いた、“わたしのことが分かる？ いえ、分かったようね。でも何も答えてくれなくてもいいの。黙って聞いてくれているだけでいいわ。わたしが遅れて今やって来たの。ごめんなさい。――でも、何も知らなかったの。きょう初めて知ったのよ。こんなにヒドイことになっていたなんて。さぞ苦しかったことでしょうね。近所のおばさんから、あなたのことを聞いたわ。あのときわたしがついていたら、こんなにまでならなかったかも知れないのに。それなのに可哀いそうなお爺さん。たったひとりで病気になって、助けを呼んでも誰もいなかったなんて。わたしが悪かったわ。もっと頻繁に来ればよかったのに。御免ね。長いあいだ訪ねに来なかったわたしを許して…”

いつのまにか、セーラの声は、涙声に変わっていた。

“さあ、もうそれぐらいでいいですか…”と、看護婦は、彼女の肩に手を当てて言った、“余り長くいて、患者に興奮を与えるといけませんからね。今は絶対に安静が必要なときですから…”

セーラは止むなく、看護婦の指示に従うことにした。

“お爺さん、また来ますから”と、セーラは、しっかりと、彼の手を握り締めて言った、“今は辛いけど、頑張ってね。そのうち、お爺さんに、いい知らせを持って来れるかも知れない。今は言えないけど、それを楽しみにして。そしてまた、すっかり回復したら、前みたいに、田舎のレストランへいっしょに食事に行きましょうよ。そのときが来るのを楽しみにしているわ。それじゃね、お爺さん。さようなら…”

そう言ってセーラは、そっと、老人の手を、元の毛布の中へしまうと、もう一度、静かに老人の表情を見やった。彼の目は、相変わらず、セーラの顔を見つめたままで、心なしか、その目が潤んでいるようにも、セーラには感じられた。セーラは、心の中では、今にも泣きそうな熱いものを感じながら、それを振り払うように、その場から去って行った…

セーラは、病室を出ると、ハンカチで目を拭きながら、看護婦の後について、一階の事務室へ向かった。入院にかかる費用の支払い、老人の家族のこと、その他のことについて伺いたいと、事務室の人から言われたからだった。

費用については、幸いなことに本人の保険で行っているということだったが、一部負担金やその他、入院にかかる諸々の雑費については、目下のところ誰が負担するのか目度がたっていない、ということだった。それに、家族のひとが見つからないのが一番困っている、と彼は言った。医師によれば、病状は決して芳しくなく、事によると命も危うい状態なので、その覚悟もある程度決めておいた方がよい、とも彼は言った。命に別状がない程度の病なのか、それともそうではないのか、それが分かるのは、ここ１～２週間が山だ。それを越しさえすれば、恐らく命は助かるだろうが、後遺症が残るかも知れない。いずれにせよ、以前のような健康体に戻るのはほぼ不可能な状態で、相当の覚悟を決めてかからねばならない。そして、そのときの面倒を誰がみるのかまで、併せて考えておかねばならない、とまで彼は言った。その話しを聞かされたとき、セーラは、今度こそ本当に、目の前が真暗になったような気がした。

しかし老人の家族については幸い、セーラは既に手を打っていた。まだアレックスからの連絡はなかったが、セーラはそのことを、彼に告げた。

“そうですか、それは助かりです”と、彼は言った、“もし帰って来られれば、あとはその方にお任せすればいいでしょう…”

“――でも、もし見つからない場合でも”と、セーラは言った、“そのときにはわたしがします。あの人のことは、たとえ他人でも、ほおってはおけないのです…”

“分かりました”と彼は、カルテやその他の書類を見つめながら言った、“そのときには、あなたに相談を致しましょう。ああ、ちょうど、ドクターがお見えになりました”

そう言って彼は、忙しそうに持ち場に戻った。

ドクターは、まだ四十にも達していない、比較的若い、知的な顔をした男だったが、セーラをすぐ診察室へ案内し、レントゲン写真などを見せて、老人の症状について細かく説明した。病名は「脳溢血」で、頭蓋骨の等身大写真のすぐ際に、大きな白い出血の跡があるのが、セーラにもよく分かった。ドクターによれば、それは相当にヒドく、余り期待は持てない、ということだった。今後の見通しについても、事務担当の彼が言ったのと同じことをくり返すばかりだった。

“しかし、そうがっかりしないで”と、彼は、最後に、セーラを慰めるように言った、“患者の容体を、冷静に見つめてあげることですよ”

　セーラは、今後、毎日見舞いに来たいが、それはかまわないか、とドクターに尋ねると毎日、ほんの少しの面会なら、それはかまわないだろう、と彼は答えた。
　そうして、ほんの短いドクターとの会見を終えた後、セーラは、弱々しく病院を引き上げることにした。途中、廊下ですれ違ったさっきの看護婦が、元気のない、そんなセーラのことを気づかってくれているようだった…

　セーラは、病院を出て、今こそ本当に、老人の容体は重いのだ、ということを認識した。とするなら、一刻も早く、彼の息子に、そのことを知らせてやらねばならないではないか。あいにく、アレックスからの連絡は、歯がゆいほどのんびりしていた。だからと言って、彼に連絡をとる手だては、セーラにはなかった。ただセーラには、彼との待ち合わせ場所に、決まった時刻に行って、彼が来ているか確認する以外にはなかった。そのあいだにも、老人の病状は、一進一退をくり返していた。

　ちょうどその日から三日目の午後、いつものように、この日もまたダメだろうと思いながら、人気のない寂しい公園にやって来ると、一本のまっすぐなイチョウの木の脇に、それにもたれかかるように、一人の男が立っていた。その男は、間違いなく、あのアレックスだった。彼は、セーラの姿を見るや、すぐに駆けて来た。
　“きょうはいやに寒いねえ”と、彼は、くわえたばこをしつつ、両手をもみながら言った、“君が来るまで随分待たされたよ”
　“御免なさい”と、セーラは、胸の中では喜びを覚えながら、言った、“少し出発が遅れたものですから。それで、どうでした？　息子さんと会えましたの？”
　“まあそうあわてないで”と、彼は、いきり立つセーラを静止するように言った、“結構楽しい旅だった。何につけてもね。まあ、順序よく話すからね。収穫があったか、と言われれば、イエス、とも言えるし、ノーとも言える。でも、結論をそう急がないで、どこかでゆっくりと話そうじゃないか。ただしきょうは寒いから、この前のような場所ではいやだよ”
　それで、セーラは仕方なく、彼と近くのレストランでお茶を飲みながら話しを聞くことに同意した。
　公園のこんもりした樹木が少し遠くに見えるレストランにやって来ると、二人はその中に入り、窓際のテーブルに、向かい合わせに坐った。アレックスの表情は陽気で、それに比べて、セーラは、打ち沈んだような、浮かぬ表情だった。窓の外の樹木も、一段と葉を落とし、裸の、枝のみが目立つようになっていた。一枚、また一枚と、落葉が風に舞っていた。
　“君は、きょうはいやに浮かぬ顔だね”と、アレックスは坐るなり、セーラの顔の変化に気づいたのか、そう言った、“ぼくのいないあいだに、何かあったのかい？”
　“ええ、でも、その話しはあとで。まず、お爺さんの息子さんの話しを聞かせて”と、セーラは、アレックスを見つめて言った。

“分かったよ。じゃ、順序立てて話すからね”そう言って、アレックスは、この二週間ほどのあいだにあった出来事について語り始めた。

“まずね、ぼくはメロランスに行った。随分遠い都会で、ぼくも一度は行ってみたいと思っていた街だった。恥ずかしい話しだけど、あそこへ行くのは、実は初めてだったのさ。生粋の都会っ子で鳴らしたぼくだったのに、メロランスだけは行ったことがなかったのさ。――でも、初めて行くことになったのが、君の為の用事だと知って、ぼくは嬉しかったさ。もちろん、それだけじゃないけれどね、あの郊外にある大聖堂などは、一度は行ってみたいと思っていたところだったしね。だから、セアンには、純粋に研究の為に行くって言って出かけて行った。セアンは、一緒に行くことを望んだけれど、今回に関しては、じっくりと、一人で研究したいからと言って、ごまかしたのさ。だからもちろん、その仕事も、平行してしなければならなかった。それでちょっと、帰って来るのが予定より遅れてしまったんだ。――それでだ、本題に入るけれど、喜んでいいよ。見つかったんだ。居場所も分かったし、本人にも会った”

その言葉を聞いて、セーラの目は急に輝いた。嬉しさの余り、心臓がドキドキするのが感じられた。

“ただしだね、ここが肝心さ”と、アレックスはひと息ついてから言った、“会ったのは、息子の方ではなく、クレメンスの方で、その息子の方は、もうとっくに亡くなっていたのさ…”

“死んだ？”セーラは、驚いたように言った。

“そう、建築作業現場で、足を踏みはずして、転落事故でね。それはもう、三年も前の話しだった”と、アレックスは冷静に言った、“それでクレメンスは、今は、彼の息子と娘と三人で暮らしているのさ。昼間働きに出て、親子三人が何んとか暮らして行けるだけの収入はあるみたいだ…”

“そう、じゃ、息子さんはもういないのねえ…”と、セーラは、悲しそうにうつむいて言った。

“確かにね”と、アレックスも表情を押さえ、セーラに同情するように言った、“爺さんには気の毒な話しだけどねえ、でも、孫がいるからそれだけでも収穫があったと言えるんじゃないかな。いずれにせよ、そこへ至りつくまで、これもまた大変だったのさ”

そう言ってアレックスは、セーラが打ち沈んだ表情でうつむき、聞いているといまいとにかかわらず、そこに至るまでのいきさつについて、ひとりでまくし立てた。

まずメロランスへ、メロランスに住む学友の家へ訪ねに行ったこと。もう古い話しだから、その住所についてはあまり当てにしていなかったが、案の定、その通りでもう住んではいなかったこと。それでしょっぱなから手がかりを失い、途方に暮れたが、念の為もう一度、コグランにいる学友の方に長距離電話を入れてそのことを伝えると、あのときうっかりして忘れていたが、その後、手紙が届いたことがあり、それによると、住所は別の住所になっていたと、謝りつつ、彼女は伝えてくれた。それでさっそくそちらの住所に当たってみた。

するとそこには、その学友はちゃんと住んでいて、共働きだった為、昼間は両方とも家にいなかった。夜になってもう一度訪ねると、やっと彼女に会えた。彼女は、クレメンスについて知っていた。居場所については、彼女についても教えないで、そればかりか、何度か転々としているようだ、と彼女は語り、しかし、彼女自身、ときどき、自分の家へやって来ることがあり、たいていそれは借金の申し込みの為であり、最近も来たことがある。彼女はどうも下町のあまり良くないアパートに暮らしているようだが、その勤め先については知っている、と教えてくれた。もうそれで、ずっとクレメンスに近づいた気持になったが、念の為、夫のことを尋ねてみると、夫はもう亡くなったと聞いている、とあっさり彼女は言い、少し驚いたが、ともかく、その職場を当たってみることにした。クレメンスが勤めていたところは、小さな食品売場のレジ係で、そのほっそりとして、黙々として仕事を続けている彼女の姿を見たときには、本当に、感動で打ち震えもした。この彼女こそ、あんなに一生懸命捜し回り、ついにこのメロランスまでやって来たその当の本人なのだ、と思って、胸が熱くなるのを、感じもした。向うはもちろん、こちらのことなど知ってはいない。その店で少しだけ、彼女の為果物などを買ってレジに行くと、クレメンスは、普通の客のようにごく事務的に応対した。自分が「クレメンス」と言うと、初めて、彼女は驚いた顔を向けた。そうして、彼女との接触に、ついに成功したわけさ…

アレックスは、自分がクレメンスに出会うまでのいきさつについて、まるで手柄話でも語るように、とうとうと語った。

“君の夫を、是非もう一度、父親に会わせたがった人がいる、と言ってみたけどね、もう死んでいたのでは、その説得力に欠けてしまったけどねえ…”と、アレックスは言った、“でも、孫を、その老人に見せてあげてはどうだろうか、と言ったときには、クレメンスも、少しは乗り気になったようだった。老人には、ちょっとした財産があり、今のような貧しい暮らしを子供たちに強いるのは忍びないと、少しはクレメンスも感じたのだろう。

――でも、その話しについては、またの機会に、ということで別れて来た。というのも、向うの居場所は分かったのだし、あとは、お爺さんの意向を聞いてからでないと、事は運べないだろう。そこのところは、もちろん、君がやってくれるね”

そう言ってアレックスは、自分のやるべきことはすべてやったとばかり、満足の笑みを浮かべた。

その話しが終わったとき、セーラの目にはつい、涙があふれて来た。

“そのお爺さんが、今、入院中なの”と、セーラは声を詰まらせながら言った、“しゃべることもできなければ、手を動かすことすらできない。そればかりか、明日の命も知れない状態よ。――だからお願い、急いで。クレメンスに急いで帰って来るようにって、伝えてちょうだい。お爺さんに身寄りって言えば、そのお孫さんしかいないのよ…”

“へえ〜、そんな状態だったのか”と、アレックスは驚いたように言った、“いったい、いつの間に。大丈夫。連絡はとれる。自宅の呼び出し電話の番号は聞いてあるからね。じゃあ、今晩でもさっそくやってみようか。ところで、その爺さん、どこに入院しているんだい？”

“カトービル町立病院よ”と、セーラは答えた、“脳卒中なの。今は少し意識があるけれど、生死のあいだをさ迷っているわ。だからお願い、すぐに帰って来るようにって、頼んで…”
“分かった。それはやるけど、君は、見舞いには行っているんだろう？”と、アレックスは言った、“もしよければ、このぼくにも、その爺さんと会わせてくれないか”
“ええ、いいわ”と、セーラは言った、“実はこれから行くところなの。もしよろしければ、一緒に来られる？”
“ああ、是非”と、アレックスは答えた。

二人は連れだって、あの白い、モダンな建物の病院までやって来た。毎日セーラが見舞いに来ているせいか、看護婦は、ごく事務的に二人に応対した。アレックスは、初めての対面のせいか少し落ち着かない様子だったが、それに比べてセーラは、努めて冷静を装った。やがて看護婦はドアを開き、まずセーラと、続いて、アレックスが、その薄暗い病室の中に入った。
“きょうはぐっすりとお休みのようですよ”と、看護婦は、小声で言った、“でもね、きのうの晩は食事を戻されてね、本当に往生しましたよ。本人には何も分からないのが、せめてもの幸いです…”
セーラはベッドのそばに歩み寄り、じっと老人の顔を見つめた。流動食を吐いた跡なのか、老人の顔の一部が、汚れの形となって残っているようにも見えた。アレックスも、こんな病人を見るのは初めてと見え、恐る恐るベッドに近寄った。老人はもう目を覚ましはしなかった。セーラには、安らかに、何んの苦痛もなく、眠っているように見えた。
しばらくして、二人は廊下に出た。
“相当ヒドいようだね”と、アレックスは言った、“あんな状態がずっと続いているのかい？”
“ええ、ここ２～３日”と、セーラは答えた、“回復の見込みがあるのか、それも分からないわ。だから、このことも伝えて、できるだけ早く帰って来るように、クレメンスに言って欲しいのよ”
“分かったよ。ぼくは見た通りのことを確かにクレメンスに伝えるよ。そうすればクレメンスだって、じっとしているわけには行かないだろう”と、アレックスは言った、“老人の病気は重い。ぼくはそう伝えるよ。そして、クレメンスの返事を君に伝えに、明日また、この病院へ直接来よう…”
二人は病院を出てから別れた。
セーラは、スプロークの屋敷に戻ってからも、老人のことが気がかりでならなかった。

その翌日は、朝から雨が降って、うっとおしい天気だった。

セーラはベッドから体を起こし、窓の外の霧雨となった戸外の様子を、不安な面持で眺めた。ともかくできるだけ、クレメンスに早く帰って来て欲しい。お爺さんはこのまま死んでしまうかも知れないのだ。セーラにはそのときのことを想像することはできなかったが、思いの外早くやって来るかも知れないという胸騒ぎのようなものを、その朝感じたのも確かだった。

前々から考えていたことだったが、セーラは二日ほど、休暇を取ろうと考えていた。もし死ぬのなら、その前にお爺さんとじっくり病院にいたい、と考えたからだった。その日をいつにしようかと思っていたが、スコーピさんの忙しそうな様子から、口に出せないままでやって来た。

その日の午後一時頃になって、突然屋敷に電話のベルが鳴り響いた。

やがてスコーピさんが、セーラのいるところへやって来た。

“カトービル町立病院から、あなたにですって”と、スコーピさんは不審な顔をセーラに投げかけながら、セーラに言った、“あの町立病院に、あなたと関係のある人でもいるんですか？”

しかしセーラは、その名前を聞いたとたん、はっとなり、不吉な予感がして、スコーピさんの質問には返事もせず、その電話口に飛んで行った。

“今、ジオラ老人は危篤だからすぐ来るように”電話口の男はそう言って、直ぐ切った。

セーラは、顔から血の気が引くのが感じられた。しかしもう一刻も猶予はならなかった。セーラは、今すぐ病院に行かねばならない用事が出来たので、きょうは休ませて欲しい、とスコーピさんに言い、明日も休むことになるかも知れないと告げて、スコーピさんが血相を変えているのもかまわず、すぐ服を着替えて、理由も告げず、屋敷から飛び出して行った。

病院に駆けつけると、病室では既に何人かが駆けつけていた。医師や看護婦が必死の応急処置をしている他、数人の老人の知人がその様子を見守っていた。その中に、あの隣のおばさんの姿も見られたが、他はみな、セーラの見覚えのない人ばかりだった。老人は、数人の医師や看護婦に囲まれて、ベッドに横たわったまま、口には酸素吸入を受け、大きな注射を腕に打たれていた。一目見ただけで、セーラには、老人の最後が近づいていることが分かった。

隣のおばさんは、セーラの姿を見ると、これ以上見せるのは忍びないと、セーラを病室の外へと連れ出した。セーラは、廊下にあったベンチの上に腰を降ろすと、両手で、うなだれるように、顔をおおった。おばさんは、そんなセーラをいたわるように、肩に手を当て、自分の方に引き寄せた。

セーラは、両手に顔をうずめながら、ただひたすら祈った。

“お爺さん、死なないで、死なないで、死なないで…”

しばらくして、病室から人が出て来る気配で、セーラは顔を上げた。

　そこから出て来たのは、すべてを尽くした医師や看護婦で、それを見て、セーラにははっきりと分かった。一切が終わったのだ、ということが…

　病室にいる老人の顔に白い布がかぶされ、様々な器具が撤去され、セーラの悲しみも一段落した頃、廊下の向うから、アレックスがやって来た。
　“老人が亡くなったんだってね”と、彼はセーラを見るなり言った、“残念だなあ、ひと足違いだった。クレメンスにはちゃんと連絡が取れたんだが、あしたに帰って来る、ということだった。今は彼女に連絡を取れない状態だし、こうなればあした彼女が帰って来るまで黙っている他なさそうだ。セーラ、君も、気を落としちゃダメだよ”
　“ええ、アレックス”と、セーラは半分、泣きそうになりながら言った、“今はあなたしか頼る人がいないの。ねえ、お爺さんがお墓に入るまで、わたしについていてくれるわね。お願い”
　“君がそう言うのなら…”と、アレックスは優しく答えてくれた。

　葬儀は翌朝、しめやかに取り行われた。教会の墓地に参列したのは、セーラ、アレックス、隣のおばさん夫婦、その他、ごく少数の、老人を知っている人だけだった。神父は決った文句を唱え、棺は、ゆっくりと、地中深く降ろされて行った。
　その日も、天候のすぐれない日だった。北風が一段と吹き荒れ、空をさえ切る黒雲を、無気味に移動させていた。枝に残っている葉という葉は、この日を最後に、すべて風に持って行かれるような勢いだった。墓穴の周りに立っているセーラの髪の毛も、黒いスカートも、ブルブルと風に震えていた。
　老人の棺が、完全に土の中に埋まると、会葬者たちは、それぞれに帰路についた。セーラは、アレックスに付き添われながら、老人の家の方へと帰って行った。

　クレメンスが来るまでのあいだ、葬儀の一切を任されたのは、セーラだった。もちろん、支払の件に関しては、セーラにその能力はなく、アレックスがその肩代わりをしたのは言うまでもないことだった。
　セーラとアレックスは、静まり返った老人の家にやって来ると、ほっとひと息ついた。
　“それでどうするんだい？　クレメンスが帰って来るまで、ここで待っているのかい？”と、アレックスは言った。
　しかしセーラは、その声には答えず、悲しげに周りを見ていた。
　つい最近まで老人が生活していたその部屋が、そのままの状態で残っていた。長椅子を同時に寝そべるようにも改造してある両用の椅子、藤でできた安楽椅子、スタンドや、テーブルの上に無造作に置かれた小物類。暖炉にくべかけの薪。壁に飾られた諸外国の数々の珍しい品々。それらが、まるで主を失って宙に浮いたように、悲しげに、無言の表情を見せていた。

ただ、壁に掛けられた掛け時計が、主が亡くなったのを知らぬかのように以前と変わりなく、忠実に時を刻んでいた。大きく開け放された窓の外は、葉を落とした樹木が寂しく並び、分厚い雲に閉ざされて、日の射し込まない庭が、まるで亡き人を憂うかのように、落葉を風に舞い上がらせていた。

それを見て、セーラは再び悲しみを感じた。

“夏はあんなに楽しかったのに”と、セーラは、静かな室内や、庭の様子を眺めて思った、“今はもう何もない。コグランのレストランへ食事に行ったのが、あのときにはあんなに楽しそうな表情を見せていたのに、あれが最後だったのね。わたしが甘えて、それでも嫌がらずに、幸せそうな表情を見せていたお爺さん。あのお爺さんの笑顔が、もう見られないなんて、信じられない。信じられない…”

やがてアレックスが、物珍しそうに、向うの部屋から、まだ未完のボトルシップを持って来た。

“爺さんに、こんな趣味があったのか”と、彼はそれを机の上に置き、透明のガラス瓶の外から、興味深げに眺めまわした。“――でもまだ、完成していないようだね”

セーラはそれとなく、その瓶の方に目を向けた。

するといつか、暖かい夏の日、セーラが老人の家を訪ねに行ったとき、ドアが半開きになった工房の部屋の奥で、作業着を身につけ、一生懸命製作に励んでいたときの、その老人の姿が目に浮かんで来た。あのとき、セーラは老人と会うのを楽しみにし、次第に出来上がりつつある瓶の中の船が、徐々に完成に向かって行くのを見るのが楽しかった。それを、老人と二人で、一緒になって楽しんだものなのだ。暖かい夏の日射し、楽しげな雰囲気、パーンも、葉をいっぱいつけた樹木の茂る庭で跳びはね、老人の表情にも力がみなぎっていた。セーラは、この家に来ると、初めて、我が家のような幸せを感じ、まるで我が家に帰って来たみたいに、くつろいだ気持になることができるのだった…

あのとき、造りかけのボトルシップがそこにあった。まるで生命を失ったみたいに、冷たいガラスのきらめきだけが、いやによそよそしかった。すべてがこのように、セーラから、急速に遠ざかって行った。楽しかった思い出の夏も、老人の笑顔も、幸せの笑みさえ彼女から遠ざかって、彼女は今、それらの幸せから追放されたみたいに、冷たく、静けさだけが支配する、もう何もない、老人の家の中にいた。

“それ、最近の作品のようだね”と、アレックスも、机の上に打ち捨てられたようなボトルシップを見つめながら、それとなく言った、“可哀そうに。爺さんはきっと、これを完成したかったろうに…　君も、爺さんがこれを造っていたことは、知っていたんだろう？”

しかしセーラは、その質問にはもう、答えたくはなかった。余りにも、生前の老人の印象が生々しく、それを思い出すと、泣けて来たからだった。セーラは、急に両手で顔を覆い、ぐすんぐすんと泣き出した。

アレックスは、そんなセーラを、両手で優しく抱いた。

“君はもう疲れているんだ”と、アレックスは言った、“だって、きのうの晩はほとんど徹夜だったろう。少しは眠らなくっちゃ。それに――クレメンスだって、きょう来ると言っていたけど、あてになるものか。ああいう感じの娘は、あまり信用のおける娘じゃないからね。だから、鍵は隣のおばさんに預けて、もう帰ろうじゃないか。こんなところに長くいれば、思い出が強過ぎて、君にとっては悲しみが増すばかりだからね、余りいい場所だとは思えないんだ。だから――クレメンスが帰って来るのは、あしたになるか、あさってになるかも知れない。そんな不確かなものを待っているより、さっさと帰って、ゆっくり休もうじゃないか。それに、ぼくだって、いつまでもこうしてはいられないからね…”

セーラは、その言葉で、初めて顔を上げた。

“もし忙しいと言うのなら、ここを引き上げて下さい”と、セーラはアレックスに言った、“わたしはここに残ります。クレメンスが来るまで、一日でも、二日でも、ここに残るつもりです。でもあなたまで、ここに引き止めるつもりはありませんから、どうぞお先に帰って下さい”

“何もそんなつもりじゃ”と、アレックスは、心外なように言った、“君のことを思って言ったつもりなのに、通じなかったようだね。――でも、そうまで言うのなら、悪いけど、先に帰らせてもらうよ。今、本当に、論文の追い込みに追われていて、忙しいんだ。君の為にももっといてやりたいんだけどね、そうもやっていられない。――でもまた、様子を伺いには来るつもりさ。セーラ、気を落とさずに、元気を出して、ね”

そう言って、アレックスは立ち上がった。

そのときセーラは、急に、アレックスの手を取った。こうまで優しくしてくれたアレックスに、セーラは、感謝の気持を伝えたかったのだ。

“アレックス、今回の件に関しては、心から感謝しているわ”と、セーラは、アレックスを見上げながら言った、“あなたがいなければ、クレメンスも見つからなかったし、この葬儀だってどうなっていたか分からないわ。――でも、曲がりなりにも、お爺さんを手厚く葬ることが出来たのも、みんなあなたのおかげよ。本当にどう言っていいか。心から済まないと思っているわ。本当に、ごめんなさい、アレックス”

“いいんだよ、そこのところさえ分かってもらえれば”と、アレックスは、セーラの手に、自分の手を重ねて言った。そして、彼女の手を、一層強く握り締めた。

“じゃ、帰るよ”しばらくしてから、アレックスは言った、“ここは寒いから、体には気をつけてね。それに、無理をして、残る必要のないことなんだよ。クレメンスが来なければ、適当に引き上げればいい。――でももしやって来れば、ぼくからもよろしく、と言っておいておくれよ。それじゃセーラ、くれぐれも体に気をつけて。気を落としちゃダメだよ。さようなら…”

アレックスはそう言って、庭に通じるガラス戸から出て行った。庭に出て、日が射さず、灰色の林の中で、一瞬とまどったように左右を確認した後、方向を見定めて、アレックスは去って行った。

　セーラは再びひとりになった。深まり行く秋の気配が、ひしひしと、この静けさのみが取り巻く部屋の中にも、感じられて来た。セーラはもう一度、もう死んだように静まり返った部屋の様子を、その家具の一つ一つを、ぼんやりと眺め回した…

　もう、夕方の四時だった。時計の音で、セーラは目を覚ました。昨日の疲れのせいか、いつのまにか、セーラは眠っていた。相変わらず室内は、ヒンヤリと静かで、物憂い表情に変わりなかったが、窓の外に、いつのまにか、柔かな光が差し込んでいるのが、彼女の気をなごませた。セーラは、自分が悲しい境遇に置かれていることも忘れ、つい、光が、葉を落とした林に射し込むその庭の方に歩み寄った。老人の死んだその翌日が、こんなに美しく、こんなに神々しい光景を見せてくれるのだとは、思ってもみないことだった。セーラは、その優しい光と、冷たいが、心地良く吹く北風に誘われて、庭に出た。雲はまだ空の大半をおおっていたが、その一部には、青空が顔をのぞかせ、その隙間から、太陽光が、幾筋もの光線を、地上に投げかけていた。まだ葉をいくつか残し、寒そうに震える、樫の林。セーラは、葉を落とさない松の木も含めて、林の一本一本の樹について、丹念に見つめながら、一歩一歩、庭の中を歩き回った。まるでそれらの樹木が、老人の形見であり、老人の息吹でも感じ取ろうという、老人の膚に触れるかのように…

　そうして、セーラが庭を散策しているとき、ふと向うの、遠い道の向うに、黒い点のようなものが動いて来るのが､セーラの目に止まった。セーラははっとなって、その方向を見つめた。
　遠く、向うの森を背景にしてこちらへやって来るのは、明らかに人影だった。まだ濡れて、ところどころ水溜まりもある、土くれだった田舎の道を、ちょうど、造りかけの、骨組みだけが出来上がった大きな家畜小屋の横を通りかかったとき、あの、黒い服を着て、大きな荷物を持った婦人と、その両側を歩く子供の姿は、クレメンスとその子供たちだ、とセーラは確信した。ついに彼女は、あの遠いメロランスの都会から、この田舎町の、辺ぴな老人の屋敷まで、はるばるとやって来たのだった。セーラは、初めは林の陰から、ついには家から道に体を乗り出して、とぼとぼと向うからやって来る、まるで救世主のようにも思える、クレメンス一家の姿を見守った。その影は次第に大きくなり、くすんで、余りぱっとしない曇り空を背景に、今や、病的なほど色白で、やせぎすな、クレメンスの表情さえ、はっきりと見分けることができた。黒いドレスのせいか、彼女のやせた姿は、一層細く感じられた。そのクレメンスが、家から、体を乗り出すように立っているセーラを目ざとく見つけ、無表情に、ただセーラをじっと見つめたまま、急ぐのでもなく、とぼとぼと歩いて来た。
　彼女は、セーラのところまでやって来ると、抱えて来た大きな荷物を、重そうにどっと、道の脇に置いた。
　“わたし、クレメンス・ドリアと申します。ジオラ・ベネットの家は、こちらでしょうか？”クレメンスは、セーラを見つめ、表情を崩さず、むしろ疲れた表情で、セーラに尋ねた。

　セーラは今やはっきりと、彼女を知った。彼女よりも体つきは一回り細く、表情もきりっとしたところもあるが、目もくぼみがちで、生活の苦労を一身に背負ったような、やつれ果てたクレメンス。このまだ年若い母親に何が出来るのかと一まつの不安もあったが、この家を引き継ぎ、きりもりして行くのは、もう彼女しかいないのだった。
　“ええ、そうです”と、セーラは答えた。それから少し間を置き、セーラはきっぱりと、この弱々しい夫人に言った、“多分、ご存知ないでしょうが、ジオラ・ベネットさんは亡くなりました”
　しかしそれに対して、クレメンスの反応は、弱々しいものだった。
　“そうですか”と、彼女は、弱々しく答えた。まるでそのことが、自分とは関係のないことのように。彼女が連れて来た二人の子供も、その点では同じだった。突然お爺さんがいる、と言われても、見たことも会ったこともない老人のこと、彼の死を知らされたとしても、まるで他人事のように映ったとしても、別に不思議はないのだ。
　“ともかく、休ませてもらえますか？”と、クレメンスは、疲れ果てたように言った、“長旅で疲れたものですから…”
　“ええ、どうぞ”と、セーラは答えた、“ここはもう、あなた方のものですよ…”
　その言葉で、クレメンスが連れて来た二人の子供は、急に、この大きな屋敷が自分たちのものになった歓びのせいか、はしゃぎ出した。
　“これっ、あなた方！”と、クレメンスは、みっともない二人の子供を叱った。
　“ところで、あなた様ですか？　夫の父と、わたしどもを引き会わせようと、わざわざメロランスまであの方を遣って下さったのは”と、ふとクレメンスは、立ち止まって、セーラに尋ねた。
　“そうです。あの方と親しくしていたものですから…”と、セーラは、静かに答えた。
　それから、セーラはもう、自分の役割が終わったことを感じた。
　“あなたに、ジオラ・ベネットさんの死を伝えようと思って、残っていました”と、セーラはポツリと言った、“――でも今、その役割を終えましたし、老人は、今、近くの教会の墓地で眠っています。きのうの昼過ぎ、二時頃にお亡くなりになって、けさ、葬儀を済ませたばかりです。もしよろしければ、そこへあなた方を案内してもかまいません。――でも、きょうはお疲れのようでしたら、わたしはこれで、失礼させてもらっても結構です。そして、これがこの家の鍵です”
　そう言って、セーラは、その場から立ち去ろうとした。
　“あの、もし”と、クレメンスは、そんなセーラを呼び止めた、“お名前を伺っていませんでしたけれど…”
　“セーラ・ホールバラです”と、セーラは答えた。
　“セーラさん”と、クレメンスは、彼女を見つめて言った、“わたしはたった今、ここへ来たばかりで、何も分かりません。もう少しここにいてもらいたいんですが…”
　セーラは、彼女の言葉を嬉しく思い、それに同意することにした。

クレメンスは、二人の子供の手を取って、初めて触れる家の異様さに、子供のような驚きの目を向けて、その第一歩を踏み入れた。これから自分たちが住むことになるかも知れないこの家を、クレメンスはどのような思いで見つめていることだろう。しかしそれがまだ自分のものになっているという実感も沸かないように、居間にやって来るなり、

“立派なお屋敷ですねえ”と、クレメンスは言った。そして、例の大きなガラス戸の向うに、美しい松や樫の林のある庭を見つけると、思わずそちらの方へ駆け寄った。“あの庭も、この家のものですか？”と、クレメンスは振り向き、まるでこの庭のついた屋敷など、見るのも初めてだという風に、セーラに尋ねた。

“そうです。結構広い敷地でしょう”と、セーラは言った。

セーラの心の中は、今や、歓びに輝いていた。クレメンスとその二人の子供が来て、再び、庭も、この館も、命を取り戻し、生き生きとその光を輝き出しているのを感じたからだった。お爺さんが愛用していた家具も、鏡台も、椅子も、壁に掛けられた珍しい品々も、再び息を吹き返したことだろう。部屋の中をはしゃぎ回るかのように、子供たちは、それらの珍しい品々に、身を乗り出すように見つめていた。クレメンスも、庭をたっぷり眺めた後、子供たちが見つめているところへやって来た。

“お爺さんは元船乗りだったそうよ。だから、こんな品があるんでしょう”と、クレメンスは、子供たちに、言い聞かせるように言っていた。

セーラは、そう言うクレメンスや子供たちの様子を見て、“すべてこれでいいんだわ”と、心の中で思った。

それから、クレメンスは疲れたように、居間の椅子に、どっと腰を降ろした。しかし、その快適さに、満足の表情が表れているようだった。

“お爺さんのことで、本当にお世話になりました”と、クレメンスはようやく、セーラに向かって言った、“どのような状態だったか、もう一度聞かせてもらえませんでしょうか？”

それで手短かに、セーラは、そのいきさつについて説明した。

“それじゃ費用がお要りようだったでしょう”と、最後にクレメンスは言った、“あいにく今、手持ちはないんですが、お返ししなければ…”

“いいんですよ、その方は心配してもらわなくても”と、セーラは言った、“それに、葬儀に関しては、わたしのお爺さんに対する気持ですから、これについては心配して下さらなくても結構です”

セーラは、心からそうするつもりだった。実際は、アレックスから多大な借金をしていたのだったが、少しづつでもそれについては返して行くつもりだった。

“でもそれじゃ…”と、クレメンスは言ったが、セーラはその点については譲らなかった。

“でもそれではあまりにも気の毒です”と、クレメンスは、仕方なく言った、“それじゃせめて、お爺さんの形見でも、なんなりと持って行って下さい。晩年のお爺さんと一番親しくしていただいたのはあなたですし、思い出深いものがいろいろとおありだと思いますから。わたしのお返しできることと言えば、もうそれぐらいしかありません…”

その提案は、セーラも受けることにした。残されたジオラ老人の貴重な品々の中でも、一番思い出深い品――彼の未完のボトルシップをひとつ、指さした。

“ええどうぞ”とクレメンスは言い、むしろ、その数の少なさに驚いたようだった。

“たったひとつだけでいいんですか？”と、クレメンスは言った。

“ええ、わたしの住んでいる部屋は、小さいですから”と、セーラは答えた。

いずれにせよ、もうこの館とも別れるときが来たことを、セーラは感じた。そう思うとお爺さんといたときのことがなつかしく、名残惜しい気もして来たが、感傷にふけっている時ではなかった。クレメンスは、きょうは疲れているうえ、もう遅いので、墓参りにはあした改めて行くと言ったので、セーラは、もうここに、これ以上留まっている理由はないと判断した。

“それじゃわたしも、もうこれで用はございませんし、失礼させていただきたいと思います”と、セーラは言った。

“そうですか？　もう少しゆっくりして行かれればよろしいのに…”とクレメンスは言ったが、あえて引き止めようとはしなかった。

セーラが出るとき、クレメンスと二人の子供たちが、玄関まで来て、丁寧に見送ってくれた。

セーラが、クレメンスたちがやって来たその同じ道を帰って行くのを、クレメンスたちは手を振り、長いあいだ見送ってくれていたが、その館が、遠くの点景に過ぎなくなる地点までやって来たとき、セーラは急に、寂しい思いがした。今度こそすっかり、老人の思い出までもと、縁が切れてしまったのだ。残されたものと言えば、形見にもらったこのボトル・シップただひとつだけだった。そのときになって初めて、老人はどこへ行ってしまったのだろう？という思いが、ふとセーラの胸の中をかすめた。再び、曇った空の間に晴間が出来て、幾筋もの柔らかい光線が、セーラのいるこの場所まで届き、セーラははっとなった。あの光線は、老人が天から自分を呼んでいる、その光線なのだろうか。セーラには、空の淡い光がそのようにも見え、いっそのこと、そこへ飛んで行きたい、そして、天にいる老人のふところの奥深くへ飛び込みたいような、そんな気がした。

やがて静かな田舎道を通って、森を通ると、あのなつかしい公園に近付いて来た。ちょうど半年ほど前に、老人と初めて会ったあの公園だった。あのときには、老人が腰掛けていたベンチの周りには、ブルーベルが美事に、一面に咲いていた。そして今、ふと公園の、そのベンチの方に目をやると、ベンチの周りには、美事なまでのイチョウの葉が降り積もっていた。

それはまるで花のように、ベンチのすぐ後ろの大きなイチョウの木を軸に、大きな輪を描くように降り積もっていた。それが、秋の風に吹かれて、まるで花が揺れるように、さらさらと揺れていた。そして、その中心にあるあのベンチが、今は人気もなく、だが、また誰かが坐るのを待っているかのように、ひっそりとそこに置かれていた。セーラはふと、なつかしくなって、ベンチの方に歩み寄った。イチョウの葉は、ベンチの上までもおおっていた。空はどんよりとし、淡い光が、この公園にも届いていたが、それだけにいっそう、イチョウの葉の黄色い様は、美事だった。「もう季節は変わったのだ」と、それを見てセーラは思った、「それと共に、お爺さんもいなくなってしまった。もうこの公園には訪れる人も、誰もいない。でも」と、セーラは思った、「来年、ブルーベルが咲く頃にはまた誰か訪れるだろう。でも、もうその人たちの中には、お爺さんの姿は見られないのだわ」そう思うと、なぜか、セーラは悲しい思いがした。

“お爺さん。ここにいたお爺さん”と、セーラは、もう誰もいない、イチョウにおおわれたそのベンチに向かって、声を掛けた、“本当に、どこへ行ってしまったの。このわたしをひとり残して…”

何度も、そのベンチに目を向けて、優しく、微笑むように新聞を読んでいるあのジオラ老人の姿をそこに見ようと思ったが、ベンチは凍ったように冷たく、その上に散るイチョウの葉が、風に揺れているだけだった。そのときになって初めて、セーラは、あのお爺さんは、もうこの世の中のどこにも存在しないのだ、ということを感じた。もうどこにも、この公園にも帰って来ることはない。

セーラは、ついに泣けて来て、

“お爺さ〜ん！”と、そのもの言わぬ公園に向かって叫んだ、“どこへ行ってしまったの！”

それからセーラは、うなだれ、その場に泣き伏した。この、冷たく、人一人いない公園では、そんなセーラを慰めるような人もいなかった。セーラは本当に、死んでしまいたい気持だった。

しくしく泣いた後、やがて立ち上がると、公園のベンチも、イチョウの葉もそのままで、変わりなかったが、そのとき急に、西の方から日光が射し込んで来て、公園のベンチやイチョウの木や、周りの樹々を黄色く染めた。それとともに、泣いている自分の影が、他の樹木の影と共に、イチョウの落葉の上に、長く延びて、映った。この、長い曇り空の後に、夕方になって急に晴間が見え出したことは、それが何か、セーラには希望の光のようにも思われた。この、周囲を黄色く染めた、オレンジ色の輝き――それは、セーラが生き返る為に、わざわざ天が、送ってよこしてくれたものなのだろうか？　いずれにせよ、この気象の変化が見せる公園の美しさに、しばらくセーラは、我を忘れた。そのとき、公園のベンチに坐っていた老人の笑顔が、公園の奥の方へすっと、吸い込まれるように消えて行くのを感じた。

“さようなら、お爺さん”と、セーラは、イチョウの葉を散りばめた公園のベンチに向かって、言った、“わたし、生きて行きます。あなたの分まで引きずって…”

全体が黄色く染まったこの公園にあって、再び力強く決心したセーラは、爽快だった。

もう、お爺さんがいなくなったという過去には捕らわれない。未来に向かって力強く生きて行かねばならぬのだ。そのように、気持の高揚を感じたセーラは、イチョウの散りしきる、美事な公園のベンチから、そのベンチが次第に遠ざかって行くのを、まるで思い出との訣別であるかのように、ゆっくりと立ち去って行った…

第５章

…翌朝、セーラが目を覚ましたとき、朝のほの明るい光が、奥の出窓から射し込んでいた。屋根裏部屋の、斜めの天井に沿って窓の両側の壁にまで貼られている、赤い縦縞模様の壁紙や、白い格子窓のすぐ下の、白い布におおわれた机、その上に置かれた白い円鏡、窓際の棚に置かれたあの老人のボトル・シップなどが彼女の目に触れ、セーラは、そのほのかな光景に、何か胸を打たれるような気がした。とりわけ、昨日とは打って変わったような、窓の外の、あの抜けるような青い空。輝くばかりの、白い、ちぎれたような雲と、庭の樹木の緑豊かな梢とが、その青い空をさえ切るように見える二つのものだった。セーラはそれらを目にし、ふと、ここが天国ではないか、という気がした。スプローク家の屋根裏ではなく、どこか、天国にある素晴らしい田舎の一軒家であり、ここから少し離れた別の一軒家では、死んだはずのあの老人が、今も元気に過ごしているに違いない。そんなことを思わせるほど、晴れた、うららかな空であり、この、白と赤の簡素な部屋の中も、申し分なく、さわやかだった。そして、それを目にしていると、セーラは、本気になって、そのことが信じられるような気がして来るのだった。季節も、今は秋ではなく、きっともう春に違いない。老人の家の庭には、初めて訪れたときのように、美事な桃の花が咲いて、それは素晴らしい光景に違いない。そして、この天国では、老人の家と、自分のこの家と、そして、あの公園以外には、もう何も存在していないのだ。まるで原始のような、一面、広がる森と野原だけ――　セーラはふと、自分はそんなところにいるのだ、という気がした。そしてもしそれが本当なら、自分は今すぐにでも、あのジオラ老人の下へ会いに行くこともできるのだ…

　そう思って、セーラはゆっくりと起き上がった。そして、白い机と鏡台ごしに、白い格子窓を通して外を眺めたが、期待に反して、そこから見えた光景は、もう何度も目にし、すっかり見慣れている、庭の樹木の茂みや、その遠くまで広がる、うっそうとした森や、草原のなだらかな起伏のある光景でしかなかった。それを見て、初めて、セーラは悲しい気がした。やはり――あの老人は行ってしまったのだ。この地上から永遠に、姿を消してしまったのだ。そしてそのときになって、この冷たい部屋の、まだベッドから起きたばかりの、スリップを身につけただけのセーラの身には、朝の冷たさが、身にしみた。セーラはさっそく、丸椅子の上に脱ぎ捨ててあったローブを取って羽織り、ゆっくりと円鏡の前に歩み寄った。鏡に映る、自分の悲しげな表情を見るのがいやだったのだ。しかし、セーラには朝の仕事が待っていた。好むと好まないとにかかわらず、セーラは鏡の前に立ち、ゆっくりとブラシで自分の髪をとかし始めた…

　セーラの一日は、そのようにして始まった。しかし、この日の始まりは、もはや今までのようではなかった。セーラは、きのうの晩家に帰って来たとき、スコーピ夫人から、こっぴどく叱られたのを忘れてはいなかった。

今までしたこともない無断の休暇を、しかも三日間も、たて続けにとったのだ。その理由については一切口にしなかった。その為、一番被害を受けたスコーピ夫人が、ただでさえ、セーラのことを余り良く思っていなかったスコーピ夫人が、そのことを怒るのは無理もなかった。スコーピ夫人は実際、セーラのいない間に、あの娘を辞めさせて、別のもっとよく働く娘に変えて欲しいと、この館の主、スプローク氏に進言したほどなのだ。それでセーラはさっそく、この朝は、スプローク氏に、朝食を運ぶときに、呼ばれることになっていた。

青い、メイドの服に着替え、セーラは、朝のパンとコーヒを乗せたお盆を持って、定刻通り、静かに、スプローク氏のいる書斎へと向かった。キッチンでパンとコーヒをお皿に載せるとき、処分は主人に任せてあるとばかり、スコーピ夫人は、セーラに全く口をきいてはくれなかった。セーラは、スコーピ夫人の、冷ややかな視線を浴びながら、キッチンを後にしたのだった。

ドアをノックし、お入りとの声で、セーラは中に入った。

スプローク氏は、薄暗い書斎の中でも、大きな格子窓があって、比較的明るい、庭に面した、大きな書棚のあるところで、深々と椅子に坐り、朝の新聞を読んでいた。

“食事は、そこのテーブルに置いて。それから、君は、そこの椅子に腰掛けて…”

主人に言われるまま、セーラは、その指示に従った。

スプローク氏は、まだ読みかけの記事があると見えて、セーラを椅子に坐らせたもののそれにはかまわず記事を読み続けた。

セーラの目には、恐ろしいほどの静寂と、身を突き刺すような沈黙の時が流れた。

やがて、コーヒを手に取り、それを口に運ぶと、スプローク氏は、この件とは全く関係のない話題から話を始めた。それは、スポーツの記事で、スプローク氏がひいきにしているチームが出る、サッカーの話題だった。それが、昨日の試合で負けたのを、しきりに悔しがっていた。そのことをセーラに話しかけたのだが、セーラに余り反応がないのを見て取ると、

“君は余り興味はないのかね？”と、彼は尋ねた。

“いえ、そんなことはありません”と、セーラは、主人の機嫌を取るために答えたが、本当は余り好きではなかったのだ。

“まあ、女性には余り興味のないことだ”と、主人は、セーラの気持を察したのか、そう言った。“…それで、例の件だけど”と、彼は続けて言った、“いったいどういうことなんだ。詳しく話してごらん”

セーラは、余り話したくはなかった。もう亡くなってしまった老人のことなど、この人に言って分かってもらえるだろうか？　とてもそんな気はしないのだった。しかし、ここの主人を前にして、セーラは話さないわけには行かなかった。セーラはきちんと腰掛けたまま、目を真直ぐ主人の方に向けると、ポツリポツリと話し始めた。

主人は、新聞を膝の上に置くと、あるときはパンを口にし、あるときはコーヒーを飲み、またあるときは、火をつけた煙草を吸ったりしながら、セーラの方には直接目を向けずに、セーラの話しに耳を傾けた。

セーラは、主人に老人のことを言ったが、アレックスのことだけは、一言も口に出さなかった。彼が、主人の孫のセアンの恋人であることを主人も知っているので、とても言えなかったのだ。セーラは、ときにはつくり話しも交えて、老人が亡くなって、クレメンスが家にやって来たときまで一通り話すと、話しを終えた。そのとき、薄暗い書斎にさし込む唯一の明かり窓が一段と明るく感じられ、その格子窓を通して覗かれる庭の明るい樹木や空の光景が、それを目にしたセーラの心を不思議な感動で包むのを、感じたのだった。セーラはまだ、自分がこの世で生きているのではなく、半分は、あの世で生きているような気持ちだった。あの明るい庭の向うには、今もあのジオラ老人が生きていて、自分を呼んでいるに違いない。そんな気がした。

“それをずっと秘密にしていたんだね”と、鋭く主人が言った、“どうしてなんだね？”

その言葉で、セーラははっと我に返った。再び、冷たい室内が目に飛び込んで来た。薄暗い室内に、ごちゃごちゃと置かれ、黒光りさえする、テーブルや木製の椅子、フロアースタンド。テーブルの上に置かれた灰皿や、小物類。鋼製の人物像をほどこした置物。日陰であまりよく見えない、壁に掛けられた額。それらが一度にセーラの目に飛び込んで来た。この主人は、それらに囲まれて、一日中ここで暮らしているのだ、ほとんど外に出ることもなく…

“今だから言います”と、セーラは正直に答えた、“それがわたしにとって唯一の心の励みだったんです…　あの老人と会うことによって、わたしの気も晴れました…”

“しかし何も、秘密にすることはなかったのに…”と、主人は考え込むような顔つきで言った、“おかげでスコーピさんは君のことを、疑心暗鬼だよ。しかも、その老人も亡くなってしまったことだし、これから君はどうするつもりなんだね？”

セーラは、その質問には答えられなかった。

もちろん一からやり始めたい気持はあった。しかし、主人がここを去れと言うのなら、去っていく他はないのだ…

セーラが黙っていると、その気持を察したのか、主人は優しく言った。

“君のやって来たことは別に悪いことじゃない。ただ誰にも話さずやって来たことがまずかっただけなんだ。君も、その老人を亡くして、今は辛いときだろう。――でも、その辛さを乗り越えて行くつもりがあるのなら、ここにいてもらってもかまわないんだよ。スコーピさんには、そのことをよく言っておくつもりだが、どうなんだね？”

“ええ、ありがとうございます、スプロークさん”と、セーラは、目を伏せるようにして言った、“わたし、できましたら、ここで勤めさせていただきたいんです…”

“分かった”と、主人は納得したように言った、“君もやる気があるようだし、今回の件については、確かにスコーピさんに迷惑はかけたが、それは仕方のなかったことだ、ということにしておこう。スコーピさんには、君の今の話しも含めて、納得してもらうようにわたしからよく言っておくよ。

君は知っているかは知らないが、スコーピさんは、君がいない間、君を解雇するように、わたしに言って来たほどなんだよ。――でも、そういう原因をつくることは、確かによくないことなんだ。理由はどうであれ。ともかくこれだけは言っておくよ。秘密はよくない。分かったね。今後、秘密だけはやめるように。分かったら、もうここを出てよろしい”

“はい、スプロークさん”そう言って、セーラは椅子から立ち上がって出て行こうとした。

“ああ、セーラ”と、主人は、そんなセーラを呼び止めた。

セーラが振り向くと、主人は、優しい顔をセーラに向けた。

“スコーピさんとは仲良くやって行くんだよ。そうでないと、君が損だよ。――それから、もう食事はいいから、これを片付けてくれないか…”

セーラは、そんな主人に一礼すると、主人に言われるまま、食器を盆の上に片付け、それを持って、書斎から出て行った…

その後、スコーピさんも主人に呼ばれ、戻って来たときには、いくらかセーラに対する態度も柔いでいるように見えた。事情も、もうスコーピさんにはすっかり分かっているはずだし、主人にきっと、優しく接してやれと言い含められたからでもあるのだろう。セーラは黙って洗濯を続けていたが、さっそくそこへスコーピさんがやって来るなり、

“あんたはあのジオラ老人と付き合っていたんだってね”と、言った。

“知ってなさるんですか？”と、セーラは振り向かずに答えた。

“いいえ、あまり詳しくは知らないけどね”と、スコーピさんは言った、“でも何かあるとはにらんでいたんだよ。たかが犬の散歩に、余りにも時間がかかり過ぎることがあったからね。――でも、その相手が老人だったとはね”

“黙っていて済みませんでした、スコーピさん”と、セーラは謝った。

“いいえ、そのことはいいんですよ”と、スコーピさんは言った、“もう済んだことだし。――でも、ジオラ老人と言えば、元船乗りをしていたとか言う…”

“ええ、そうです”と、セーラは答えた。

“やっぱりね”と、スコーピさんは、したり顔になって言った。

“それがどうかしたんですか？”と、セーラは、気になって尋ねた。

“いえね”と、スコーピさんは、一息つくと、咳払いをしてから言った、“もう亡くなった人のことなのに、こんなことを言っちゃなんですがね、あの人については、ちらっと聞いたことがあるんですよ。あの人が、この村では、よそ者だってことは、あなたも知っているでしょう。だから、昔のことを知っている方は少ないんですよ。いずれにせよ、余りいいようには思われていませんでしたね。一説によれば、過去の仕事は詐欺師だったという話しもあるくらいなんですよ。あんたには気の毒だけど、あの方は、あんたに船乗りだって近付いたんでしょう。元、船乗りだっていうのも本当か、どうか。そういう手口で、よその町で事件を起こした、という噂もあるくらいなんですよ。

――でも、それが本当かどうか、わたしは詳しくは知りません。あくまでも噂ですからね。――でもあんたも、よりによって、そんな人と付き合っていたなんてね。亡くなって、それでよかったんじゃありませんか…”
“嘘です”と、セーラは泣きたくなって言った、“そんなの嘘です。デマに決まっているじゃありませんか。お爺さんは…　そんな悪いお爺さんじゃありません。それに、あそこにあった飾り物は、みんな本物ですし、お爺さんが、自分で、海外から集めて来た品物なんです。単によそ者だというだけで、どうしてそんな噂が立ったのか、わたしにはよく分かりません。どうして人は、お爺さんのことをそんなに悪く言うんですか”
“いずれにせよ、もうあんたとは関係がなくなったんだから、それでいいんじゃないですか”と、スコーピさんは言った。“噂は、あくまでも噂。あんたさえ、それを気にしなきゃ、それでいいんです…”
スコーピさんはそう言って、忙しそうに自分の持ち場へ引き上げて行った。
セーラはその場にひとり残り、もう泣きそうだった。
“お爺さんは、そんなお爺さんじゃない”と、セーラは、空を見上げて思った。“可哀そうなお爺さん。本当にどこへ行ってしまったの”
青い空には、白い雲がゆったりと流れていた。まるでその白い雲が、お爺さんのいる国へ流れて行くかのように、セーラはじっと、その雲の流れを目で追った…

そうして、数日が過ぎた。クレメンスの一家が村の老人の家に住むようになったという噂は、数日後にセーラの耳にも入った。きっとうまくやって行くだろう、とセーラは思った。セーラはあの日以後、クレメンスに会いに行くことはなかった。再び、何もなかったように秋の季節は過ぎ行き、セーラも以前の生活に戻った――かのように見えた。

木枯らしが、一段と落葉を舞い落ちさせる日、セーラは再び、パーンを連れて午後の散歩に出掛けた。スコーピさんも午前の仕事を終え、一段落したところで、椅子に腰掛けたまま、セーラが出て行くことに、別に注意を払う風もなかった。セーラは、いくつかの買物を頼まれていたので、いつものように、買物かごを下げて、パーンと共に館から出て行った。

間もなく、田舎道を通って、村に向かう途中、もう何度も通り、道の左側に小川が流れ、その向う側に、樫の木が一本立っているよく見慣れたところに差しかかったとき、道の向う側から勢いよく走って来る余り見慣れない、一台の青い車がセーラの目に止まった。セーラは、パーンにもしものことがあってはならぬと自分の方に呼び寄せると、道の際に立って、その車が通り過ぎるのを待とうとした。ところが、その車はセーラのところにやって来ると止まったばかりか、運転席の窓から、なんとあのアレックスが姿を現した。
彼は、威勢の良い表情でセーラを見つめ、愛想よく声を掛けた。

“やあ、久し振りだね”と、彼は言った、“相変わらず、元気にやっているの？”

“ええ”と、セーラは、その場に立ったまま、風のせいで、少し目を細めながら、アレックスの方を向いて答えた。

“最近、聞いた話しだけど、クレメンスの方も、なんとかやっているという話しじゃないか”と、彼は、車のエンジンをうならせながら言った。“――君は、本当に人助けをしたんだよ…”

“そう言われるほどでは…”と、セーラは答えた、“それで、あなたの方も相変わらず？”

“そうだね。メロランスへ行ったおかげで、研究論文の方も、一気に進んだことだし…”と、アレックスは、笑顔を浮かべながら答えた、“今まではそれの完成に向けて頑張って来たんだけど、少し暇ができたもんでね、それでひょっくらこの村にやって来たんだ”

“きょうはセアンと一緒じゃないの？”と、セーラは、少し不思議そうな表情をして彼に尋ねた。

“いつも一緒というわけには行かないさ”と、アレックスは平然と答えた、“実はね、セアンは今、別の男とドライブ中さ。例のあの赤いぼくのオープンカーでね。ぼくが友人に頼まれて、貸してやったのさ。おかげで、こちらとくれば、その友人の貸してくれたこのポンコツ野郎に乗るはめになってしまった。それでも一応は走るし、エンジンもそう悪くはない。普通の走行には全然差し支えがないんだ”

“それで、どこへ行こうとしていたの？”と、セーラは尋ねた。

“もちろん、君に会う為さ”と、アレックスは、あっさりと答えた。“ところが、こんなところで会ってしまったんで、君のいる屋敷には行く必要がなくなってしまった”

“屋敷まで、わたしに会いに来るつもりだったの？”と、セーラは驚いたように言った。

“もちろん、そんなことはせずに、屋敷の近くの、例の公園で待つつもりだったさ…”と、彼は、悪びれることなく答えた、“あれから長いこと会っていないんで、どうしているんだろうかって、それが気がかりだったのさ。――それに、君の姿を見ないと、何か落ち着かないんだ。ジオラ老人の件で動いていたときには、頻繁に君に会えていたのにね、もうそういうこともなくなってしまったからね…”

“あの件では本当に、今も感謝しているわ、アレックス”と、セーラは、謙虚に言った、“あんたの助けがなければ本当に、わたしひとりの力じゃ、どうすることもできなかったんですもの…”

“…でもお互い、人助けをしたんだから、良かったじゃないか”と、アレックスは、セーラを励ますように言った、“それで相談だけど”と、彼は続けた、“人を助けた方のぼくたちが、お互いを祝う、ということをまだしていなかったね。それで一度、そういう機会をつくってみたいと思うんだけど、どうだろうか？　何も、今すぐとは言わない。別の機会でかまわないけど、なるべく早くね。たった一日でもかまわないんだ。ゆっくりと、君と一緒する日を設けたいんだ…”

“ということは、わたしに休暇をもらいなさい、ということ？”と、セーラは尋ねた。

“まあ、そういうことになるね”と、アレックスは答えた。
セーラは少し考え込んだ。これがデートの約束になるのなら、少し危険だ、とも思ったのだ。しかし、あれだけ自分の為に尽くしてくれた彼の誘いを簡単に断るわけにも行かない。それもただ一日ぐらいのことなら…
“ええ、いいわ。考えておくわ…”と、セーラは、ようやく結論を出して答えた。
“そうでなくっちゃ”と、アレックスは、跳びはねるような表情をして言った、“そうと決まれば話しは簡単さ。ぼくがここへわざわざやって来た目的の大半は終わってしまったんだからね。そのときには、きっと、君が納得するような所へぼくが連れて行ってあげるよ… それはともかく、どうやら君は今、村へ行きそうな様子だね。なんだったら、この車に乗せて、君をそこまで運んで行ってあげようか…”
“いえ、結構よ”と、セーラは、それに対しては、丁寧に断った、“パーンが一緒だし、この犬の為にも、一緒に散歩させてやらなくちゃならないの。悪いけど、村までそう遠くないし、歩いて行くわ”
“そうかい、それじゃね”と、アレックスは言った、“君のいい返事を待っているよ。返事は、ぼくの下宿先にしてくれればいい。電話番号は、この前教えたから、知っているだろう。それじゃ”
そう言ってアレックスは、手を振りながら、車を発進させ、しばらく言ってUターンさせると、もと来た道を、エンジンをうならせながら、意気揚々と、走り去って行った。
セーラは、そんな彼の車の去り行く姿を、パーンと一緒に立って、ただ茫然と見つめていた。
“さあ行きましょ、パーン”と、しばらくしてから、セーラは、犬に声を掛けて、歩き始めた。“親切なあの人のことだから、きっといい一日になるわ。その日が来るのを今から楽しみにしましょ”
セーラはゆっくりと、小川の流れる田舎道を歩いて行った…

セーラとアレックスとの約束のデートの日は、意外に早くやって来た。

その日は、風が強く、空がよく晴れ上がった日だった。セーラは、休暇をもらい、少しめかした服を着込むと、朝早く、カトービルの駅に向かった。そこからコグランまで行けば、その駅にアレックスが迎えに来ているはずだった。いつもなら、セアンが乗っているはずの、あの赤いオープンカーに乗って。セーラは、少し罪の意識を感じながら、しかしアレックスとデートすることは何か楽しいことが起こりそうな、そんな気がしていた。彼は、とっておきの海辺へ彼女を招待しようと、電話でそう言ってくれたのだ。ガラ空きの汽車に乗っているあいだも、セーラは何か浮き浮きした気がしていた。窓の外を流れる景色が、珍しく晴れて、彼女に何か微笑みかけるように感じられたせいだろうか。コグランに着いたときも、その気持は変わらなかった。

汽車から降りて、駅の隅に咲いているキクジシャの赤い花や、おうごんそうの黄色い花が、風に揺れている様を目にしたとき、セーラは、何んとも言えない感慨のようなものを感じた。久し振りに降り立ったこのプラットホームは、セーラがあの冬の夜、セルッカから初めてこの地へやって来た思い出の駅であると共に、また、あのジオラ老人とのデートの途中で、一度訪れたことのある駅でもあった。あれから時が流れ、今またアレックスとデートをする為に、この駅に降り立ったのだ。しかし今やセーラは、不思議と幸せな気がした。それは、アレックスが優しくセーラを誘ってくれたせいなのか、セーラ自身が哀しみを乗り越えたせいなのか、彼女自身にも分からなかった。他の乗客に混じって駅を出ると、もうそこに、アレックスが彼女を待っていた。彼はオープンカーを向うに置いて、わざわざ歩いて、彼女のところまでやって来た。

“どうだい？ 気分のほうは”と、彼はセーラを見て言った。

“上々よ”と、セーラは、幸せそうな笑顔をつくって、彼に答えた。

二人は車に乗り、さっそくドライブが始まった。

車で走ると、景色がどんどん変わって行く。少し寒いので幌をつけて走ったが、少しあけた窓からは、冷たい風がセーラのいる車内にも入って来た。アレックスはセーラを驚かせようと、目いっぱいのスピードで走り、カーブもスリリングにこなして行った。雄大な野原や小さな森や山が、次々と違った顔を見せて行った。

“そんなにあわてなくても、海はそんなにここからは遠くないんでしょ”と、セーラは楽しさと同時に、恐ろしさも少し手伝って、言った。

“車って、スピードを出さなくちゃ、意味がないさ”とアレックスは言って、セーラの言うことを聞かなかった。

そうしているうちにも、明らかに向うが海と感じられる、濃い緑におおわれた小高い山が、前方に見えて来た。山の斜面のふもとの方には、ところどころ、白っぽい色の建物が日光を浴びようと顔を出している。走っている車の前方にふと、深い杉木立におおわれたところに、尖塔のある大きな白っぽい建物の群が見えて来たのでそのことをセーラが尋ねると、アレックスは、あれは教会が経営している結核療養所だと答えてくれた。セーラはこんな海に近いところにある建物の素晴らしさにみとれると同時に、自分も一度、あんな病院で働いてみたいという気がして来たのだった。もう少しじっくりと見たいという気もしたのに、アレックスは非情にも、猛スピードで、そのそばを駆け抜けて行った…

そしてセーラはついに見た。雄大な海。青い海が静かに横たわり、その上を幾隻もの船やヨットが航行している。風が強いせいか、至るところ波頭の白い泡が、海を色どる模様のように見えていた。海に突き出た岬には白い灯台がひとつ、寂しく立っているのが、セーラのいる小高い山の上からも眺められた。アレックスは車を止め、しばらく展望の為、二人は車から降りた。

“いつ見てもいいわねえ、海って”と、セーラは、強い海風をまともに受けながら言った。

アレックスは彼女の横に立った。
“向うに見えるあの灯台のところまで行ってみるつもりさ”と彼は言った、“言っていた通り、なかなかいいところだろう。かねがね思っていたんだが、この海岸線ではここが一番いいところだと、ぼくは思っていたのさ”
“そうね、なかなか素敵なところね”と、セーラはうっとりしながら答えた。
“ところどころ海へ突き出た入り組んだ地形や、何よりも灯台のあるあの岬がいいのさ”と、アレックスは言った、“もうここへは何度も、こんな風にドライブで訪れたことがあるよ…”
“セアンとも？”と、セーラはふと尋ねてみた。
“もちろんセアンともさ”と、アレックスは快く思わない口調で答えた。“…さあもういいだろう。あの灯台の近くには、なかなかしゃれたレストランがあるのさ…”

季節風が強かったが空はよく晴れていた。やがて車は海のすぐ近くまでやって来た。アレックスはそこでいったん車を止め、一度海岸まで降りてみるかい、と助手席にいるセーラに誘った。セーラも久し振りに海岸に出て、潮風を浴びてみたい気がした。
車から降りると、さわやかな潮風がセーラのところにも降り注いで来た。地面に落ちていた枯葉が風に巻き上げられて独特のダンスを始めた。久し振りにかぐ浜の匂いがプーンとセーラの鼻をついた。しかし海は、潅木を少し降り下った向う側にあった。
“おいでよ、セーラ”と、まずアレックスが、道案内すべく先に降りて行った。
薄茶色の石灰質の岩場が、潅木のすぐ向うに現れた。そのすぐ向うはもう海だった。波頭をたてた海が一面に広がっている――遠く、あの水平線まで。そして、沖合いを、白い波をけ立てて、貨物船がゆっくりと視界を横切るように航行していた。セーラは岩場に出て、思わず、うっとりとそれらの光景を眺めた。アレックスは、そんなセーラにはかまわず、どんどん先へ進み、もう渚のすぐそばまで行くつもりらしかった。しかし、岩はゴツゴツしていて、セーラのはいているハイヒールでは、歩くのが少し無理なような気がした。それでもアレックスが向うに立って手招きするので、セーラは仕方なく、思い切って靴を脱ぎ、靴はそのままそこに置くと、ストッキングをつけただけの素足で、足場を十分に注意しながら、彼のところへ歩いて行った。アレックスは、そんなセーラの危なげな様子を、岩場に立って、ただじっと見守っていた。セーラはやっとアレックスに追いついた。もうそこは、すぐ下に波が打ち寄せる渚だった。背の高い岩もあり、沖合いに突き出ている岩もあった。そこに波が当たっては、白い泡をたてて砕けていた。
“裸足で来たのかい？”と、アレックスはセーラの手を取り、彼女の素足を見つめながら言った。
“だって、仕方ないでしょ。あの靴じゃ安定が悪いんですもの”と、セーラは答えた。
それからセーラは、初めて、周りの様子をもう一度よく眺めた。

“いい眺めねえ…”と、セーラは、すぐ足下の波打ち際から、沖合や、遠く水平線の彼方まで見渡しながら、ひとり言のように言った。“こうして海を見ていると、気持も広がる思いがするわ…”

セーラは、かつて、海を見るたびに、そんな思いがしたのだ。気持も大きくなり、何か遥かなる思い、望郷の念にかられるような、そんな気がした。海風は、容赦なく、彼女にも吹きつけて来た。セーラは、この浜に、自分たちただ二人しかいないことも忘れて、うっとりとただ海を眺めていた。

“夏にはね、ここで泳ぐことだってできるんだよ”と、やがてアレックスがポツリと言った、“釣り竿をたてて、沖にボートを浮かべてさ、海にもぐったりして遊んだものさ。ここじゃないけど、近くにボートを収納してあるボート小屋や、別荘地がある。そこに、ぼくの知り合いが持っている別荘があってね、夜はそこに泊まらせてもらったものさ。夏はこの辺だって、結構賑やかなんだけど、まるで嘘みたいに静かだね…”

“いいわねえ、そういう生活”そう言って、セーラは、空に浮かぶ白い雲を眺めた。アレックスの言葉を聞いて、セーラもふと、自分もかつて、マロンやその友人、そしてリサたちと、夏の海で遊んだ日のことを思い出した。あれはもう、去年の夏になるのだ。そのときには確か、セーラたちはヨットに乗ったり、こういう磯にヨットをつけて、遊んだりしたものなのだ。セーラはなつかしさで、言いようのない思いが胸に込み上げて来るのを感じた。――恐らくアレックスは、そういうことをセアンと楽しんだりして来たのだろう。しかしあえてそのことを、彼に尋ねようとはしなかった。彼には彼の夏があり、セーラにはセーラの夏があったのだ… 遥か海の上に広がる雲を目にして、セーラは、それらがすべての夢を包んで、どこかへ運び去って行くように感じた。

それにしても、セーラの目がやがてその方に向いて、釘づけとなったのは、沖の方に突き出た薄茶色の岩の岬の上にそそり立つ真白な灯台だった。それが、青い海と青い空との境界に、光を浴びて真白に輝いている様は、美しくさえあった。セーラはそれを見て、ふと、昔読んだことのあるヴァージニア・ウルフの小説「灯台へ」のことを思い出した。そこで、けんらんたる言葉で語られたその内容の細部についてはもう忘れてしまっていたが、登場人物のラムゼイ夫人が息子に約束した灯台行きが、ラムゼイ氏の不吉な言葉によって果たされず、十年後になって初めて――そのときにはもうラムゼイ夫人は亡くなっていたが――息子とラムゼイ氏らとのボート行きによって果たされる、というその大筋については覚えていた。そういう風にして神秘性をもつ灯台が、まるで幻のように、セーラの記憶に残っていた。銀色をした、夕暮れどきには、ガラスに反射した光が、黄金の目のように見えた灯台が、十年後にそばに近づいて見ればそれほど美しいものではなかったのだ、と分かる灯台。そのことがずっとセーラの頭に残っていたし、今、セーラが目にしている灯台も、そのようではなかったか、という気がして来るのだった。そして、自分も、あのラムゼイ氏とその息子たちのように、ボートに乗って、灯台のふもとの岩場まで、漕ぎ出して行きたい――そんな気がした。

“ねえ、アレックス”と、セーラは不意に振り向いて、アレックスに言った。“ヴァージニア・ウルフの「灯台へ」という小説を読んだことがある？”
“うん、あるけど”と、アレックスは、セーラを見て言った、“ヴァージニア・ウルフは苦手だね。難解だから…　どうして？　向うに灯台が見えるから？”
セーラは、黙ったままうなづいた。
“そうよ、ふと思い出したの”と、セーラは答えた、“心理描写が多くて、よくは覚えてないけど、あれを見ていると、もう一度、読み返してみたい気がして来るわ”
“君って、小説が好きなんだね”と、アレックスはそんなセーラを見て言った。“でも今は、そんな小説のことなんかは忘れて、ほら、足下をさらいそうな波でも見つめていようじゃないか”
そう言ってアレックスは、波が打ち寄せる岩の下にセーラの注意を向けさせた。

“もういいわ。少し寒くなったわ”やがてセーラは言った、“もう行きましょ”
“そうだね”アレックスもしぶしぶ彼女に同意した。
セーラは、潅木のところまで戻って来ると、そこに脱ぎ捨ててあった靴を、片方づつ履き始めた。安定が悪く、履くのが窮屈そうなセーラの姿を見て、アレックスは、
“何んなら、ぼくが履かせてあげようか”と申し出た。
“いいのよ、これくらい、自分で履けるから”と、セーラは答えた。
しかし、履くのにどうしてもバランスが悪かったので、アレックスはそっと、セーラの片方の手を取った。セーラは思わず振り向いたが、それ以上別に気にはしなかった。おかげでようやく、両方のハイヒールを履くことができた。
潅木の茂みをかいくぐって、二人は再び、車のところへ戻って来た。
“さて、それじゃいよいよ灯台へ行ってみようか”アレックスは運転席に腰を降ろすと助手席にいるセーラにそう言った。

車からはやがてさわやかな音楽が流れて来た。車内はヒーターのおかげで暖かく、外は申し分なく晴れていた。青い空と、緑色の岬が突き出た海の景色を眺めながら、セーラは、幸せな、うっとりした気になって来た。アレックスは、煙草を吸いながら、ときどき、助手席にいるそんなセーラを、チラリと横目で見つめた。
“それで仕事の方は相変わらずかい？”と、アレックスはふと話しかけた。
“ええ、いつもと変わらずにね”と、セーラは何気なく答えた。
“あの大きな屋敷で、スコーピさんと、スプローク氏といつも三人だけなんて、考えてみればぜいたくな話しだな”と、アレックスは、ひとり考えるように言った、“なかなかイカスお屋敷だからね。でも、あのお屋敷も、いずれは、あのセアンのものになるんだって。スプローク氏が、セアンのことは、特に可愛がっているようだからね。そして、このぼくが、将来のセアンの婿候補の一人だというわけだ。

――でも、ぼくは、そう簡単に承諾はしない。相手も伺っているけど、このぼくも、じっとセアンのことを伺っているというわけさ。というのも、セアンだって欠点がないわけじゃない。とりわけ、ときどき高慢な態度を取るのが、鼻につくのさ。お嬢さん育ちの欠点で、我がままなところが目につくしね…”

“どうしてそんなことをわたしに言うの？ アレックス”と、セーラは尋ねた。

“というのも”と、アレックスは運転しながら言った、“セアンより、今の気持としては、君の方が好きだ、ということが言いたかったのさ…”

“それはダメ、アレックス”と、セーラは驚いたように、アレックスを見て言った、“わたしは何も、そんなことの為にここへ来たんじゃ…”

“分かっている”と、アレックスは言った、“あの事件の締め括りとして来ただけだ、と言いたいんだろう。――でもセーラ、君にもぼくの気持を、少しでもいいから分かって欲しいのさ。あんな相談に乗ったのも、もとはと言えば、君のことを思えばこそじゃなかったのかい？　それが、君でなけりゃ、ぼくだって相談に乗ったか、どうか分からないさ…”

“じゃあれは、純粋にお爺さんのことを思ってやってくれたことじゃなかったの？”と、セーラは言った。

“少し言い方がきつかったかも知れないけれど、ぼくがどうしてお爺さんのことを思える？　見たことも会ったこともないんだよ”と、アレックスは言った、“みんな君の為さ。君が好きだからさ。好きで好きでたまらなかったからさ…”

その言葉で車内は一瞬沈黙が支配した。ただ、美しいメロディーの音楽だけが流れている…

“でもそんなことを言われたって、アレックス”と、セーラはやがてポツリと言った、“わたしには何もできないわ”

“いいんだよ、ぼくもどうこうしろって言うつもりはない”と、アレックスは冷静に答えた、“今はこうして、デートに出て来てくれているだけで嬉しいんだ。でもただ、ぼくはどうやら、君に恋をしてしまったらしいっていうことだけは、理解していて欲しいのさ…”

“ねえ、アレックス。ホラッ、灯台があんなに近付いて来たわ。真白で、素敵ねえ…”と、セーラはわざと話題を変えた。“――アレックス、あんたが、あの老人の為に骨身を削って動いてくれたことは、今でも感謝をしているわ。そのことは、今後も忘れないつもりよ。いつか、そのお礼もしたいって考えて来たの。それで、その気持も込めて、今回は来たんじゃないの。でも、それ以上のことは、今は言うべきじゃないわ…”

セーラが言った通り、岬にそそり立つ白い灯台に車は近付きつつあった。灯台はまだその向うの、大海原に突き出た岬の先端にそそり立っていたが、その前に、二人は手前のしゃれたレストランで休憩することにした。この時期に灯台へ訪れる人は余りないと見えてレストラン内は閑散としていたが、それでも営業はしていた。

二人は海がよく望まれる窓際の席に腰を降ろした。
“どうだい？ なかなかいいところだろう”と、アレックスはさも自慢げに言った。
“確かにね”と、セーラは、窓の外に広がる海を見つめながら言った。
遥か、眼下に広がる海には、この日は風が強いせいか、しきりに波頭があちこちに立っていた。漁船や、貨物船が沖合を、ゆっくりと航行している。このレストランからなら、今や、海と陸とを分ける海岸線をくっきりと見降ろすことができた。
セーラは、しばらく雄大な海を眺めた後、アレックスの方に振り向いた。
“ここへはよく来るの？”と、セーラは尋ねた。
“そうたびたびじゃないさ”と、アレックスは答えた、“二度か、三度かな、――たいていは夏だったから、こんな季節に来たのは初めてかな。でも、相変わらずここから眺める景色は素晴らしいねえ。だから、ぼくはここが気に入っているのさ。将来、こんなところに住めばいいだろうねえ…”
“近くに灯台もあるし”と、セーラは言った。
やがて、ウェイトレスがやって来て、二人は昼食を注文した。

昼食を終えると、二人はいよいよ灯台へ行くことにした。灯台へは車で行くことができず、ここからは、潅木の茂みのあいだにある細い道を少し降り下って行く他はなかった。まずアレックスが、続いてセーラが慎重に降りて行った。灯台へは他に行く人とて誰もいないようだった。
“ねえ、アレックス、あの灯台には誰か人がいるの？“と、セーラは何気なく尋ねた。
“いや、確か、ここ十年ほどは無人になっていると、どこかに書いてあったはずだ”とアレックスは、さりげなく答えた。
“そう、じゃ、無人の灯台なのね”と、セーラは言った。
そう言っているうちにも、灯台はすぐ近くにまで迫って来ていた。
高圧電流の流れる変電室の白い建物のもう少し向うに、それはあった。灯台の周囲には小さな庭が広がり、柵で立ち入り禁止のように仕切ってあったが、その奥の方に、美しい形をした白亜の灯台が堂々と立っていた。今は昼の為、カンテラは休止していたが、その銀色の目のようなカンテラが、透明なガラス窓の奥に見え、さながらそれは、あのヴァージニア・ウルフが描写した小説に出て来る灯台の光る目そのものだった。今は昼だが、夜ともなれば、それはきっと、闇夜の海の彼方まで照らし、船の安全な航行を助けているのだろう。セーラは、灯台の柵のところまでやって来て、ただ茫然と、白亜の灯台の美しさに見とれた。その灯台の彼方には、抜けるような青い空が広がり、白い雲がぽっかりと浮かんでいる。やがてアレックスが、セーラのそばにやって来た。
“これが遠くから見えていたあの灯台さ”と、アレックスは言った、“思っていたほどは大きくなくて、少しはガッカリしただろう。

でも、なかなかのものさ。本当を言えば、中を見学させてもらえると有り難いんだが、いつもここの灯台は、このように柵がしてあって入ることができないんだ”

“でも、本当に無人なのねえ”と、セーラは言った、“こんな、誰も訪れないところでひっそり立っているなんて、寂しいくらい…”

“セーラ、こちらへ行くといいところがあるんだよ”と、彼は手招きをした。“海が見えるんだ”

セーラは、灯台の周りを走る細い道に沿って、アレックスの後を追った。すると確かに一面広がる海が、茂みのあいだから、目に飛び込んで来た。

“ここの岩場においでよ”と、彼はセーラを誘った、“ここが明るくて、腰掛けるにちょうどいい”

セーラは言われるまま、彼の横に並んで坐った。

“さあ、ここなら、後ろに灯台が見えるし、前には一面の海だ”と、アレックスは言った。“日射しもいいし、一番理想的なところだから、しばらくじっといようよ”

そう言って彼は、そっと、セーラの肩に手をやった。

しばらく二人は、ぼんやりと海を見つめていた。

やがて、アレックスが、ぽつりと言った。

“ねえ、さっきの話しだけど、ぼくにはどうも君のことが分からない。君が何を考えているのか、君がこれから先、どうしようと考えているのか、そこのところがさっぱり分からないのさ。なるほど今の仕事を続けたいという君の気持ちはよく分かるさ。――でも、あんな生活じゃ、寂し過ぎやしないかい。いつも顔を合わすのは年寄りばっかりで、若いものが周りには一人もいないじゃないか。そんな生活で、君の心が慰められるなんて、とても思えない。一方ぼくは、今は大学生だけど、そのうち卒業すれば、どこかの会社に就職する。ある程度はどういう会社か、目度はついているんだけどね。多分、親父の経営する会社に入社するだけさ。親父はスポーツウエアーを生産する会社を経営しているものでね。今のところは順調に行っているし、そこに入社が決まれば、将来の生活の不安もない。そのぼくが、君が好きだと言っているのに、君は見向きもしない。どうしてなんだい？　それとも、過去に何かあったのかい？　考えてみれば、ぼくは君のことを、ほとんど何も知らないんだ。去年は全然君はいなかったのに、今年になって突然ぽっと、君はあの屋敷に現れた。セアンの説明によれば、君は、お父さんの知り合いの人の紹介で、ここへやって来たという話しだけど、それ以前にどんな生活をしていたのか、ぼくは全然知らないんだ。確か以前にセルッカのレストランで働いていたという話しは聞いたことがあるけれどそのときから既に、今のような、暗い、無口な性格だったのかい？”

セーラは黙ったまま海を見つめ、彼が言うままに任せていた。

“ねえ、セーラ。ぼくのどこがいけないんだい？　どこが不足なんだ？　君の為にあれだけのことをしてあげたのに、それでも不足だと言うのかい？”

そう言うなり、アレックスはいきなり、セーラの唇にキスをした。

　セーラは驚いて、彼を押しのけようとした。まさかいきなり、こんな挙に出るなんて、思ってもいなかったのだ。しかし、アレックスの力は強く、セーラはあえなくその場に押し倒されてしまった。
　やがてかろうじてアレックスのキスから逃れると、
　“何をなさるおつもりですか！”と、セーラはアレックスをにらむように見つめて叫んだ。
　しかしアレックスは不敵な笑顔を浮かべて、
　“これぐらい、させてもらってもかまわないだろう”と言った。“それとも、それすら許してくれないとでも言うのかい？　ぼくがこれまで君の為にしてあげて来たこと、それすら君はもう忘れてしまっているのかい？”
　セーラは今や、アレックスの目的が実はこれだったのだ、ということを悟った。そう考えると、アレックスを恨むより、自分のことがなさけなくなり、言葉も出て来なかった。もはや抵抗する力も失せて、観念したように、セーラは草むらに押しつけられた姿勢のまま目を閉じた。
　アレックスはそんな彼女の様子を見て、同意を得たと思ったのだろう、再びセーラの唇に激しいキスをした。
　すべてが終わって、セーラが体を起こしたとき、心はうつろだった。泣きたくとも、涙ひとつ出て来なかった。
　それに引きかえ、アレックスは、満足そうな微笑みを浮かべていた。
　“アレックス、わたし、もう帰るわ”と、セーラは、唇をふきながら、やがて弱々しく言った。
　“どうしてなんだ？”と、アレックスは、ふに落ちないように答えた。
　“ちょっと、気分が悪いのよ”と、セーラは答えた。
　“まさか、キスがこれが初めてだ、というわけでもないんだろう”と、アレックスは言った。“それとも、こういうことは嫌いなのかい？”
　アレックスは、セーラの表情を少し気遣うように見ていたが、自分のやったことに、いささかの後悔の念があるようにも見えなかった。むしろ、満足感と自信にあふれていた。
　“まあいい。本当はもっとここにいたいんだけど、君がそう言うんなら仕方がない、引き上げるとするか”と、アレックスはしぶしぶ同意した、“でも、これだけ言っておく。このことを決して悪くは思わないでおくれよ。これは、男女のあいだではごく普通のことだから、何も罪はないはずなんだ。分かってくれるね”
　セーラは、よろよろと立ち上がりながら、それに対しては、分かりましたとばかり、うなづいた。
　アレックスは、彼女の背中についた草などを払い落としながら、彼女のその身ぶりに、すっかり満足しているようだった。
　“さあ元気を出して。別に大したことでも何んでもないんだから…”

　アレックスはそう簡単にこの件を締めくくったが、セーラの胸の内では、決して大したことではない、で済まされるようなことではなかったのだ。セーラは、悲しい気持になりながら、海を見つめ、“お爺さんはどこへ行ってしまったの！”と、心の中で叫んだ…

その翌朝、セーラは居間にいて、ガラスのドア越しに外を眺めていた。一面敷き詰められた芝生の向うには、まるで林のような樹木が茂っていたが、今やその庭に、今年初めての雪が舞っていた。もう秋も深まり、季節は冬にさしかかろうとしていた。その降る雪を見つめるセーラの胸には、昨日の灯台での出来事、そして、帰ってから起こっためまぐるしい出来事が思い起こされ、もう死んでしまいたいぐらいだった。

昨晩、日が暮れてから帰って来たセーラを待ちかまえていたのは、あの親切にこの屋敷への就職を世話してくれた、セアンの父親のミゲル・スプローク氏と、セアンの女友だちのピーナ、それに、スコーピさんの三人だった。セーラには一体何が起こったのかすぐには呑み込めなかったが、何か自分にとって都合の悪いことが起こっていることは、彼らの険しい顔つきから、すぐ分かった。

ピーナという、セーラが初めて見るその娘は、セーラの顔を見るなり、

“間違いなくこの人です”と、証言した。

その言葉で、スプローク氏の表情は、ますます険しくなった。

すぐに分かったことだが、セーラ達には分からなかったが、コグランの駅でアレックスとセーラが逢引していた姿を、偶然通りがかったピーナが目撃していたのだ。ピーナが何気なくそのことをセアンに言ったつもりだったが、セアンはそのことを非常に気にしだした。最近セアンのところへやって来ないのは、論文の仕上げに忙しいからだと言っていたのに、陰で、見知らぬ女性と付き合っているなんて、一体その相手は誰だろうと気になったが、ちょうど、スプロークの屋敷へ久し振りに遊びに行ったところ、セーラが休暇をもらっていると、スコーピさんから聞かされ、セアンの疑惑はますます深まった。もしや相手は、セーラでは。そんな気がしたのだ。それで、以前、セーラらと一緒にバドミントンをやったときの写真を取り出して、思い切って、ピーナにその写真を見せることにしたのだった。ピーナはその写真を見て、写真ではよく分からないが、ほぼここに映っているこの女性に間違いないと、セーラを指さした。それを聞いたセアンのショックは大きかった。一体いつのまに、アレックスとセーラとは、そんな関係になっていたのだろう。セアンは、アレックスのそつのない、あいまいな性格にときには苦々しい思いもさせられたが、それでも深く彼を愛していた。将来はこの人と、と、親も認めていたし、自分もごく自然な気持で、そう受け止めていたのだ。その彼に裏切られた、という思いがショックだった。しかもその相手が、あの大人しいセーラだと知って、耐えられない気持になった。セアンはそのまま、自分の部屋にとって帰り、部屋の鍵を締めると、ベッドの上で思い切り泣き伏した。

そんな娘のことを心配したのが、母親であり、やがて仕事から帰って来たスプローク氏だった。事情が分からず、おいおい泣くだけの娘にドア越しに話しかけたが、娘から何んの返事も返っては来なかった。やがて、セアンのことを心配してやって来たピーナに両親は事情を聞いた。ピーナは写真に写っていたセーラのことまで語り、そうして、両親には事情の一切が呑み込めたのだった。

そこでスプローク氏は、セアンのことはとりあえず母親に任せるとして、ピーナにもう一度確認してもらう為に、彼女を連れて、父親のルミノ・スプローク氏の屋敷まで飛んで来た、という次第だった。

“間違いなくこの人です”とピーナは、帰って来たセーラを見るなり証言した、“今朝コグランの駅でアレックスさんと一緒におられたのは、この人でしたわ…”
セーラは思わずピーナを見、それからスプローク氏を見つめた。
その横に立っていたスコーピさんは、それ見なさい、というような表情をしていた。
“そう言えば、以前からこの娘は秘密の多い娘だと思っていました”と、スコーピさんは、スプローク氏に証言した、“どこかの、あまり評判の芳しくない年寄りとこっそりと交際していたかと思えば、あのアレックスさんとまで交際していたんだとはねえ…”
それらの言葉を聞いた後、初めて、スプローク氏は険しい顔をして、セーラに言った。
“セーラ、今のことはみんな本当なんだね”と、彼は、体を震わせながら言った、“アレックスがどういう立場の人間か、それもよく承知していたんだろうね”
セーラには今や自分の身に何が起こっているのかが、すっかり分かった。
しばらく間を置いた後、セーラは、一種の開き直りからか、
“ええ、分かっていました”と、冷静に答えた。
弁解がましいことは一切言おうとは思わなかったのだ。
その冷静さが、却ってスプローク氏の神経を刺激したようだった。
“もういい、君のことは聞きたくない！”と、彼は、怒鳴るようにセーラに向かって言った、“きょう一日、何をして来たのか、そんなことはどうでもいい。君が不幸だからと思って今日まで君を育てて来たつもりだったが、その報いがこんなことだとは。――もういい、こうなった以上は一刻も早く荷物をまとめて、この家から出て行ってもらおう。後は君の好きなようにするがいいが、もう二度とこの館の敷居だけはまたがないでくれたまえ。もうわたしは、わたしは、君のことを思い出したくもないんだ…”
そう吐き捨てるように言うや、スプローク氏は、きびすを返して階段に向かい、二階の父親のいる部屋へと向かった。スプローク氏にはピーナが付き添った。
その場に立ちすくんでいるセーラの耳には、ピーナが小声で、アレックスのことを心配して、スプローク氏に尋ねている声が入って来た。
“アレックスさんも、もう絶交なんですか？”
“むーっ、それが難しいところだ”と、スプローク氏が答えた、“いずれにせよ、当分は謹慎してもらわねばならないだろうな。彼にも落度があるのは疑いない。彼のことは、セアンが落ち着いてから、それから考えればいい…”
彼はいずれ許され、再びこの館に迎えられることになるだろう、と、セーラは思った。しかしセーラは、申し開きをすることもなく、弁解の余地もなく、永久に追放なのだ。

セーラは、目の前が真暗になって、その場に崩れそうになりながらも、その場に立っていた。

スプローク氏とピーナは、二階へと階段を上がって行ったが、スコーピさんだけはセーラを監視するように、その場に残っていた。もともと親切なおばさんではなかったが、このときは一層冷ややかな目で、セーラを見つめていた。

“分かったでしょ”と、スコーピさんはやがて口を開いた、“あんたもよく胸に手を当てて考えてみることね。これはあんたがやったことの当然の報いなんですよ。――それでもあの方は慈悲深い方で、きょうまで働いたお給金だけは、きっちり支払うように、と言って下さっているのよ。そういうことも考え合わせて、これまでやって来たことを、じっくり反省してみることね。――わたしも、あんたに秘密が多いことは知っていたけど、そこまでは考えつかなかったわ。あのセアンさんのいいなずけの、アレックスにまで手をつけていたなんてねえ、本当にあんたも、なかなか隅に置けない娘ね。大人しい表情には似合わず。――それから、これもあの方の情のおかげだけど、荷物をまとめるのは今晩ゆっくりすればいいことで、出発は明日の朝すればいいということよ。ただし、朝は早くしてね。みんなが起きて来る前にしてもらわないとねえ…”

スコーピさんはそう言うと、忙しそうに調理室へと引き上げて行った。

セーラは、ホールにひとり残った。シャンデリアの明かりが、そう明るくもなく、静かにホールを照らしている。暖炉の薪はまだくべたばかりで、ようやく炎が本来の活気を取り戻して来た頃だった。椅子もテーブルも室内の花も、ホールの隅に置かれた一台のピアノも、その置かれた位置は、セーラが初めてこの館に足を踏み入れたときから少しも変わってはいないのだった。セーラはふと、ピアノに視線が行き、アレックスと知り合って間もない頃、昼間のバトミントンに疲れた後、みんなでピアノを弾き合って楽しんだ日のことを思い出した。セアンが弾き、アレックスが弾き、そしてセーラも思い切って弾いたのだ。今、その関係が、美事なまで引き裂かれてしまっていた。――今になって、セーラは初めて、この館に足を踏み入れた日のことがなつかしい気がして来た。思えば、人生に絶望し、自暴自棄になったそんな精神状態のまま、親切なスプローク氏に拾われて、この館まで連れて来られたのだった。そして、パーンという一匹の犬を当てがわれ、セーラは、束の間の精神の安定を得ることができた。それから、セアン、アレックス、ジオラ老人、彼らの表情や姿が、まるで夢のように現れては、消えて行った。そのような紆余曲折はあったにせよ、初めてこの館にやって来た頃は、何もかも目新しく、新鮮で、この初めて経験する新しい生活環境が、すっかり落ち込んでいた孤独なセーラを、どれほど慰めてくれたことか。今となっては、あの絶望的な状態から徐々に立ち直されてくれつつあったあの新鮮な日々のことが、なつかしかった…

セーラは、もう一度ホールを見渡し、初めてここを訪れた日も、ホールがこのようだったかを確認すると、その身を引き裂くような辛い思い出から、自らを断ち切るかのように駆け足で、そのホールから出て行った…

…今、窓の外は曇った空、細雪が舞い、風に林がざわめいて、まるで冬の悪魔がうめいている光景のように、セーラには思えた。ふと腕時計を見ると、時計の針は、もう七時を少し過ぎていた。セーラは、足下に置いてあった大きなバッグ一つと、つばの広い帽子に埋めたボトルシップを、それぞれ両手で抱えると、それらの荷物を重そうに引きずりながら、門のある庭の中へと、ガラス戸をあけて、部屋から出て行った。そんなセーラを見送る人は、誰れ一人としていなかった…

外界へ出て、セーラは外の寒さをひしと身に感じた。一歩一歩歩くたびに、自分が館から遠ざかりつつあることを感じた。今さらのように、自分がこの館から追放された身であることを感じた。初めてこの館にやって来たときの道を通りながら、あの古びた、鋼鉄製の黒いゲートまでやって来たとき、セーラはもう一度、館の方に振り向き、そのどっしりした歴史を感じさせる古びた屋敷を目にしながら、
“さようなら…　セアン、スプロークさん”と、心の中でつぶやいた。
ギィーッという音と共に、鋼鉄製のゲートの外に出たとき、今度こそ、すべてが終わったことを、セーラは感じた。
もう再び会うこともないだろう、セアンにも、スプローク氏にも、アレックスにも。そして、あのジオラ老人は、今はもう土の中だ。ただ、パーンだけが、おりにつながれた身で、まるでセーラが去るのを悲しんでいるかのように、何時までも大きな声で泣き叫んでいるのだけが、セーラの耳にも聞こえていた。
“…でも、もう会えないの”と、セーラは、心の中でパーンに向かって言った、“わたしがいなくても、いつまでも元気にしているの。分かった？”
心なしか、パーンの泣き声が少し大人しくなったように、セーラには思われた。セーラの心の言葉が、パーンに通じたのだろうか…
セーラは再び重々しい荷物を両腕で担ぎ、ゆっくりとスプローク氏の館から去って行った。

セーラは、もう何度も通った朝のなつかしい田舎道を歩きながら、いつのまにか、目には涙があふれて来た。吹雪はいっときのもので、今はやんで曇り空となっていたが、空気は冷たかった。その曇った重々しい空が、セーラの胸を心もとないものにしていた。追放された身で、これから行く当てもないセーラに、未来に対する展望は何もなかった。しかし、小さな村にポツンとある駅に着くまでのあいだに、セーラにはぼんやりと、行きたいと思う町が浮かんできた。そもそも、この町へ来ることになったきっかけは、セーラが漠然と、昔、マロンと遊びに来たコグラン行きの切符を買ったことに始まっていた。しかし、セーラにとって、時に印象深い町は、マロンと二人きりで遊びに来た海辺の町、ブールビルだった。あそこのヨットハーバーから、二人きりで海洋へ乗り出して行ったことがあったのだ。そのときの思い出が、今になってふと、セーラ

の脳裏を過ったのだ。別に、他に目的はなかったが、ただ漠然と見たかったのだ。海と、ヨットハーバーとブールビルの町を――

セーラがカトービルの駅に着いたとき、ブールビルまでの切符をためらわずに買った。
駅員は、大きな荷物を持ったそんなセーラの姿を、不思議そうに眺めた。

朝の汽車はすいていた。セーラは何度か通ったことのある、この鉄道から見える風景を、ただなつかしむようにぼんやりと眺めていた。つい昨日、アレックスに会いに行ったのも、この鉄道だった。そのずっと前には、ジオラ老人と一緒に通ったこともある。しかし今は、車内に空席ばかりが目立ち、空いた席にポツンポツンと坐っている人は、みんな等しく、疲れたように眠っていた。

コグランで汽車を乗り換え、いよいよブールビルへ向かう電車に乗ったとき、セーラの目は輝いた。思えば、去年の暮れ、このブールビルへ行こうと漠然と思い立ったのに、知らぬ間に、コグランとは反対側の内陸の村、カトービルへ迷い込み、以来一度もブールビルの町を見たことばなかったのだ。そして今ようやく、あの絶望の日の、当初の目的を実現しようとしているのだった。ブールビルへ行ったところで、どうにかなるわけではないことは、セーラにも分かっていた。しかし今は、自分の将来のことよりも、ただ見たかったのだ。ブールビルを見て、自分の昔に触れてみたかった…

さっきのローカル線とは違って、海沿いを走るこの鉄道は、乗客の数も多かった。通勤に利用している人も多く、セーラは、その人々とかち合ったのだ。やがて鉄道は、美事な海の風景を見せてくれた。空は相変わらず曇っていたが、広い海のところどころには、小さな鳥や、岩場が浮かび、その表情が美しく、セーラの胸を打った。マロンに連れられて、ヨットで、見知らぬ島へ上陸し、探検したのは、あの島ではなかったろうか…

間もなく列車は、明るい山が海岸にまで迫り、海岸沿ギリギリのところを走ると共に、山の斜面には、いかにも保養地を思わせる別荘風の白いアパートが立ち並ぶそんな風景が目に飛び込んで来た。低い山の上の方には、コルクガシやユーカリなどの樹木がよく茂っていたが、ふもとに行くにつれ、開発され、むき出しの地膚がよく目立つようになっていた。列車はいよいよブールビルの駅に近付いて来た。線路の数が増え、少し遠のいた山の斜面には、一段と立派なアパートの群が、一層華やかに見えて来た。そうして静かに列車は、鋼鉄のドームにおおわれたブールビルの駅の中に入って来た。今入って来たばかりのドームの後方には、山の斜面が迫って見え、華やかな別荘やホテルの群が、ただですら明るい感じのこの駅に、一層の色どりを添えていた。きっとシーズン中には、この駅も観光客たちでさぞかし賑わうことだろうが、今はシーズンオフのせいもあって、駅には人もまばらで、ひっそりとしていた。セーラは、他の乗客に混じって、やっと念願のブールビルの駅に降り立った。セーラは、汽車ではこの町に来たことがなかったので、今さらながら、この町の、とりわけこの駅の素晴らしさに目を見張るのだった。

　セーラは駅を出て、やしの木が茂る駅の素晴らしさを改めてうっとり見つめ直しながらタクシーに乗ろうかとも思ったが、歩いて海辺へ行くことに決めた。ゆっくりとこの町のふんいきを味わいながら行きたかったのだ。大きなバッグを下げて、いかにも家出娘のように見られる様は、あまりいい姿とは思えなかったが、思い切ってそのまま行くことにした。
　やがてセーラは、静かな、広い公園にやって来た。かつてブールビルに来ながら、一度も見たことも、知ったこともない公園だった。両側に背の高い樹木が茂り、その下の芝生には、ところどころアベックの姿も見られた。やがてセーラは、砂地の広場の中央にある円形の噴水を見つけると、そこまでやって来て、石でできたモニュメントのへりにそれとなく腰を降ろした。歩き疲れただけではなく、気分も決してすぐれていたとは言えなかったのだ。しかし腰を降ろして周りを見ると、ちょうど噴水の反対側の同じような場所に、やはりアベックが幸せそうに腰を降ろしていた。セーラは何気なく彼らの語り合っている背中を見、それから再び、足下の、自分のかついで来たトランクやその他の荷物に目をやった。そうして――しばらく時が流れた。噴水のピチャピチャと水のしたたり落ちる音に混じって、やがて、公園の向うの角から、一群の賑やかな子供の叫び声が、まるでこの静かな公園を響かせるように聞こえて来た。その声の主がやがて、樹木の陰から姿を現した。セーラは驚いてその方を見つめたが、その叫び声の原因が、どうやら最初に姿を現した子供が、続いて姿を現した子供たちに追いかけられ、騒いでいる為の叫びだということが、セーラにもすぐ分かった。しかしその先頭の子は、他の方向へ逃げるのでもなく、真直ぐに、セーラのいる噴水のところまで走って来た。そして、このモニュメントが、なみなみと水をたたえているのを発見すると、すぐそのそばにセーラが坐っていることもかまわず、振り向くと、その先頭の子供は、追い駆けて来る子供に向かって、笑いながら水をかけ始めた。セーラは驚いてその子供を見つめた。しかし、もう遅かった。戦闘は開始され、遅れてやって来た子供たちも、負けじとばかり、少し向う側から、その子に向かって水の応酬を始めた。他の子供たちは、砂をつかんで、それをその子供に投げつけたりもした。彼らは、そのすぐそばにセーラがいることをまるで無視してかかったので、水しぶきの多くを、そして砂のいくつかを、セーラは否応なく浴びることになってしまった。砂のいくつかは、セーラは、振り向いた自分の顔に、まともに受けてしまったのだ。セーラは腹を立て、「やめなさい！」と叫ぼうかとも思ったが、彼らの夢中な様子では効目も薄いと判断し、ここを立ち去る方が無難だと思った。セーラはそれで、トランクをかつぐと、子供たちの戯れを横目にしながら、静かにその場から立ち去って行った。
　セーラはやがて、安住の地を求めて、そこからそう遠くないベンチのところまでやって来ると、そこに腰を降ろした。ここからなら、さっきの噴水のあるモニュメントも、公園の樹木のあいまから少し見られる程度の距離があり、子供たちにさっきのように邪魔される恐れもないのだった。

あの子供たちの騒いでいる姿はここからも見え、その叫び声も、ここにいるセーラのところにまで達してはいたが、ずっと小さいものだった。セーラは、ホッとベンチに落ち着くと、やがて、もう何も見るのはいや、とばかり、目を閉じた。しばらくすると、子供たちの声もピッタリとやみ、恐ろしいほどの静けさが、セーラの周りを襲った。子供たちは消えてしまったのか？　セーラは再び目をあけた。もう噴水には、さっきのアベックも、子供たちの姿も見えなかった。きっと、どこかへ行ってしまったのだろう。すると、セーラは、言いようのない寂しさを感じた。まだ彼らがいたあいだは忘れていたが、今や、全くのひとりぽっちの自分を見い出したのだ。行く当てもなく、こんなところにいる自分が、情ないほど惨めだった。セーラは悲しくなって、ふと、目に涙がにじんで来るのを感じた。

――しかし、そうした公園の静けさを味わったのも、ほんの一瞬だった。やがて今度は森の向うから男の話し合う声が聞こえて来た。それらの声は、公園のあちこちの梢に反響し合うように聞こえて来て、内容はよく聞き取れなかった。セーラは、その楽しげによく弾む声の主がやがて姿を現すのを、どこか期待した。彼らはやがてこの前を通り、そこで、まるで家出娘のようにひとりポツンといるセーラの姿を目に止めずにはおかないだろう。そんな彼らに、惨めな自分をさらすのはいやだという気持と同時に、この寂しさから逃れる為にはまだその方がいいという気持が混然として、セーラを不思議な気持に誘った。やがてその声の主たちが、森の向うから姿を現した。しかしセーラは、わざと平静さを装うように、彼らの方には向かず、じっと地面の一点を見つめていた。その彼らが、セーラの予想に反し、思いの他若い男たちであることは、セーラにもすぐ分かった。それどころか、セーラの期待を裏切るかのように、彼らは、ベンチに腰掛けているセーラには目もくれずに、やがてあっけなくその前を通り過ぎて行ったのだ。セーラは失望すると同時に、そんな彼らに声を掛けられることを密かに期待した自分を恨んだ。見たこともない通りすがりの男たちに助けを求めたいと思った自分が、情ないほど悲しかった。セーラは、そんな自分が惨めで、恥ずかしくて、今すぐにでもこの場所から逃げ去りたいような気持がした。とそのときだった、通り過ぎたはずの彼らが、やがて立ち止まり、振り向きさえしたのは。地面を見つめるセーラには、そんな彼らが自分を見つめていることは、はっきりと分かった。そしてその次は？　彼らは声を掛けに戻るのだろうか？　それとも、セーラは、そのときに備えて身構えようとした。だが、次の瞬間、はっきりとセーラには聞き取ることができた。

“よせよ、どうせどっかの家出娘なんだろう。めんどうになるだけだ”

男のうちの一人がそう言うと、どういうつもりなのか、みんなどっと笑い出した。そして再びみんな向き直ると、そのまま先へと歩いて行くのだった。

その場に一人残ったセーラには、彼らの笑いが、自分に対する侮蔑の象徴のように思われた。彼らにとって自分は、家出娘、乞食、哀れな末路が待っているだけの可哀そうな娘でしかないのだ。彼らの目に映ったそんな自分のことを思うと、たまらなく惨めになり、また泣けて来るのだった…

　いつのまにか時が経ち、周りがすっかり静まり返った公園にはもう人が誰もいないような気がした。ベンチにずっと坐り続けていたセーラには、秋の空気の冷たさが膚にしみ入った。空にかかる雲は、どんよりと曇っている。あれから、どれほど時間が経過したのだろう。あるいは、セーラはいつのまにか、ベンチに腰掛けたまま、うたた寝をしていたのかも知れなかった。もう公園には、子供たちの姿はおろか、恋人たちの姿も見ることはなかった。彼らには帰るべき場所があり、セーラには帰るべきところがなかったのだ。この世の中でもうひとりぽっちなのだ、と思うと、急に絶望的な寂しさが体の中を充たすのを感じた。セーラはしばらく、両手で顔をおおうようにして坐っていたが、やがてカバンを取ると、弱々しく立ち上がった。そして、とぼとぼと噴水のある広場へと歩いて行ったがもちろん、その周りにはもう誰もいす、ただ噴水のピチャピチャいう音だけが、この静かな公園内で虚ろに響かせているだけだった。もう誰もいなくなった公園内で、セーラひとりだけが歩いていた。世の中からとり残されて、帰るところもなく、数時間前にくぐった公園の門を再びくぐって、セーラは公園からひとり出て行った…

　セーラは再び道路沿いを歩いていた。道を走る車の本数は決して多いとは言えなかったが、それでも何台かの車が勢い良くセーラのそばを駆け抜けて行った。セーラは両手に荷物をかかえ、黙々と歩いていたが、ただむやみに歩いていたのではなかった。セーラにはちゃんとした目的があり、この道がいずれは港につながっていることを、セーラは知っていたのだ。
　公園を出て、まだそれほど時が経たないとき、一台の赤い車が、他の車と同じように勢いよくセーラのそばを駆け抜けて行った。セーラは、それがただの車だと思って無視したところがその車は少し先まで行くと急に止まり、そのまま動かなくなってしまったのだ。セーラは、それが自分の歩く先をふさぐように、道の脇で止まったので、少し不吉な予感がしたが、かまわず歩いて行くことにした。そして、セーラが止まった車のほんの近くまでやって来たとき、急に車の左右のドアが開いて、チンピラ風の若い男が出て来たときには、セーラは、急に恐怖に襲われた。本能的に危険を感じ、セーラは重い荷物を持ったまま、今来た道を引き返すように駆け出した。
　“おい、待て！”彼らのうちの誰かが、そんなセーラに向かって叫んだ。
　もう疑う余地もなかった。彼らは、無防備な、ひとりきりのセーラに、今にも襲いかかろうとしていたのだ。しかし、重い荷物を持ったセーラの足どりは重く、恐怖の表情で振り向いたときには、もう男たちはすぐそばまで追いついていた。セーラはそれで、大きな叫び声をたてると共に、さっきの公園の続きである草むらの方へ、道路からそれて逃げて行こうとした。が、ものの１０メートルも行かないうちに、あっけなくセーラは、ひとりの男に腕をつかまれてしまった。セーラは恐ろしげに叫び、わめき、体を動かしもしたがもう後の祭だった。

“さあつかまえたぞ、いなか娘。金はあるんだろ！　金を早くよこせ”そのうちのひとりが、恐怖にひきつるセーラに向かって叫んだ。
セーラがそれに答える間もなく、別の男がセーラの手からハンドバッグとトランクをもぎ取ると、それをパッと広げて、草の上に中身を散らかした。無残にも、セーラの持ち物のすべてが、その草むらの上に散らばった。セーラの数少ない衣類はもちろんのこと、化粧品や、大事な指輪、現金を入れた財布、ネックレスや、本や、その他のものが散らかった。それを目にして、セーラは、泣き叫んだ。
“ねえ、あんたたち、何をするつもりなの！”
“うるせえ、いなかの姉ちゃん”と、腕をしっかりとつかんだ男は怒鳴った、“静かにしねえと、痛い目に会うぞ”
そう怒鳴ると、実際に、セーラのか細い腕をねじ曲げたので、セーラは余りの痛さで、思わず体をのけぞらせてしまった。
そのあいだにも、別の男が、散らばった中から金目のものをひとつひとつ収集していた。財布はもちろん、マロンがくれた大事な指輪も、ネックレスも、手に取って自分のポケットにつっ込んだ。
それを見て、セーラは思わず叫んでしまった。
“他のはともかく、それだけは持っていかないで！”
しかしその男は、チラッとセーラの方に一瞥をくれただけで、他に金目のものはないかと、散らばったセーラの荷物をかき分けた。
別の男は、セーラがかかえていたボトルシップに興味を示したようだったし、散らばったセーラの下着を手にしては、それを、頭巾のように頭にかけて仲間に見せ、喜んでいた。
しかし、セーラの手をねじ伏せている男が、いらいらしたように叫んだ。
“金目のものを取ったら、早くずらかろうぜ、ここは場所が悪い！”
そう叫ぶや、男たちは一目散にその場から逃げ出した。ボトルシップに興味を持っていた男は、結局それを置いて行くのではなく、小脇にかかえて逃げて行った。
それを見て、思わずセーラは叫んだ、
“待って、それは持って行かないで！　それは、お爺さんの大事な形見なのよ”
その叫びも空しく、振り向きもせず逃げ去って行く男たちの後ろ姿を見ながら、追いすがる元気もなく、荷物が散らかった草むらの上で、セーラは、へなへなとその場に坐り込んでしまった。
“いいわ、みんな持って行くがいいわ。どうせわたしなんか、わたしなんか、何もなくていいのよ…”
セーラは、その場に崩れるように坐り込むと、急に悲しみが込み上げて来、泣いてしまった。止めどもなくあふれて来る涙を手でぬぐいながら、四つん這いになって、セーラは泣いた。
“もう知らない。わたしなんか、もうどうなっても、どうなってもいいのよ…”

　セーラは、草むらに散らばった荷物を目にしながら、限りなく痛めつけられた自分の運命の不遇さを呪った。本当にもう死んでしまいたいぐらいの気持ちだった。彼らは、いっそのこと、このまま殺してくれた方がよかったのだ。その方が、どれほど自分の運命の苦しみや、汚辱を味わわずに済んだことだろう。ナイフのひと突きで、もう生きていても仕方のないセーラの運命を、永久に閉じることができたのだ…
　――セーラはなおも、草むらの上に、四つん這いになって泣いていた。周囲はひっそりとし、そんなセーラに声を掛ける人も現れなかった。しかしだんだんと、涙に潤んだ目に、色んなものが見えて来た。草むらに散らかったセーラの色んな物だ。そして林のように立つ松木立。少し向うでは、それら衣類や化粧類などを入れていた大き目のバッグが、口を開いたまま、無造作に打ち捨てられていた。別のバッグも、同じように逆さ向きに、少し向うに打ち捨てられていた。セーラはそれらを目にし、やがて這うようにしながら、自分の持ち物のひとつひとつを、バッグに詰め始めた。泥にまみれた下着も、丁寧にたたんで、バッグの中に入れた。セーラにとって大切なもの、思い出の品々はもう何もなかったが、それでも残りのものをひとつひとつ片づけた。別に生きようという意志が働いたわけではなかった。ただセーラは、もう一度海を見たかったのだ。残りの品々を全部バッグの中にしまい込むと、やがてセーラは弱々しく立ち上がった。足の膝や、スカートの一部が泥で汚れていたが、セーラは別に、丁寧にその汚れを取ろうとはしなかった。自分はもう死んだも同然の人間、汚れた人間で、その方が自分らしい気がしたのだ。やがてよろよろと歩きながら、セーラは、あのとき、マロンに捨てられたあの夜、紳士に救われるのではなく、あのまま列車にはねられていた方がよかったような気がした。あれ以後、今まで生きて来たのはなんらかの間違いで、恐らく神様は今、そんな自分に対して天罰を与えて下さったのだ、そんな気がセーラにはした。あれ以後、生きて来たことにもし意味があるとすれば、それは、ジオラ老人と会う為としか考えられなかった。その老人も今は天国にいて、きっとセーラが来るのを心待ちにしていることだろう。セーラも、早く天国に行きたい、と思った。
　再びセーラは道路を歩き出した。車が何台か、セーラの横を走り抜けて行ったが、泥に汚れたそんなセーラに目を止めるような人はいなかった。

　やがて、落ち着いた建物が立ち並ぶ通りの向う側に、青い海が覗くと同時に、たくさんのマストが立ち並ぶ港の風景が、目に飛び込んで来た。町はずれの公園とは違って、ここには活気がみなぎっていた。通りを行く庶民の姿にも、どこか活気があった。今は、レジャー用のヨットは、ほとんどが帆をたたみ、漁船のみが、活動しているようだった。セーラは遂に念願の海にまでやって来たのだ。しかし、岸壁を行きかう人々に混じって、セーラが波止場までやって来たときには、夏のあの華やかさとは打って変わったように、波間に漂う眠ったようなヨットの群を目にして、セーラは急に寂しさのようなものを感じた。

ただ港を見たいと、期待に胸ふくらませて来たものが実はこれだったのかという、一種失望の感じを味わわされたのも事実だった。港には、死んだように眠っている、マストだけのヨット、行き交う人々の群以外には、何もなかった。セーラが親しみを感じる顔は、その中のどこにもなかった。もちろん、あのマロンがいるはずもなかった。セーラは港に来て、再びひとりぽっちの自分を見い出したのだ。ーーしかし、なつかしさがないわけではなかった。あのときは、マロンやその友人に連れられてやって来ただけで、よく記憶していなかったが、間違いなく来たのはこの場所だ、とセーラは確信した。港のすぐ横にある活気にあふれた魚市をみんなで眺めて回ったのもここだったし、ずらっと並んでいるあのヨットの群れの中のどれか一つに乗って、ここから海へとくり出して行ったのも間違いはなかった。なんと、あの幸せな日々は、遠くなってしまったのだろう。セーラは、なつかしい波止場に沿って、ゆっくりと歩いて回った。人々は自分の生活に忙しく、そんなセーラに目を止める人もいなかった。

　セーラはやがて、岸壁に無造作に置かれた木箱の一つを見つけると、トランクを脇に置いて、その上に腰を降ろした。海風が快く、しきりに吹いて、セーラの髪の毛や赤いスカートを震わした。セーラは木箱に腰を降ろしたままぼんやりと、人々で賑わう魚市の風景や、波止場につながれたヨットの群れ、居並ぶ建物や、あるいは、海辺の風景などを眺めた。少し冷たくはあったが、潮風がなんとも言えず快かった。小さな漁船に乗って、老人と若い漁師とが、ゆっくりと波止場から離れて行く様を、セーラはぼんやりと目で追った。あの楽しかった夏の日以来、再びこのような形で、この港に来ることになろうとは、セーラにも思いも寄らないことだった。そして今、あれほど来たいと憧れた一応の目的は達したのだ。セーラは、不思議な幸福感に充たされると共に、どこか自分の魂が、この地から離れて行くことを意識した。セーラは、あのチンピラに襲われて以来、一文無しの身であることを知っていた。ただの一※※すら、セーラは持っていなかった。それどころか､金目になるようないかなる貴金属も、セーラは持っていなかった。明日からと言わず、今からどうして生活することができるだろう。そう考えると、却って、身が軽くなったような気がした。本当に自由を、自由というものを感じたのは、この時が初めてだったろう。自分にはもう何も無いから、自分は空気のように軽いから、何をすることも可能なのだ。そして、その可能性の中の一つに、死があることも、セーラは意識していた。しかし、そのように漠然と考えるセーラの胸の内には、不思議とある種の爽快さと幸福感とが混じり合っていた。それは、悲しい幸せ、と言っていいような感情だったかも知れない…

　そうして、しばらく時が流れた。通り過ぎて行く誰も、セーラに目を止める人はいなかった。いや、いるにはいたが、それは、母親に手を引かれた五つぐらいの男の子だった。その子は、母親に手を引かれるまま、そんなところにセーラが木箱に坐っているのが不思議だと言わんばかりの表情で、じっとセーラの顔を見つめていた。セーラもまたその男の子の顔を見返した。母親は、そんな二人の関係などつゆ知らず、男の子の手を引いたまま、どんどん先へ歩いて行った。

やがてセーラは、両膝に手をつくと、立つことにした。もう充分、この港を堪能したし、いつまでもこうしているわけにはいかなかったのだ。行く当てもないまま、セーラは立ち上がり、歩き始めた。一歩一歩、岸壁沿いを歩くセーラの足どりは重く、まるで自分は、強い潮風を背に受けながら、綱わたりをしているような気がした。

“そこにいる皆様方、わたしは今、人生の綱渡りをしているのよ。御覧なさい、わたしのこの哀れな姿を。もし可哀そうだとお思いになるのなら、どうか見物料をこのわたしに投げて下さいまし…”

もし言えるものなら、セーラはそう言いたかった。本当にここで何か、周りにいる人々があっと言うようなことをおっ始めようか、セーラはそんな気さえした。――どうせ文無しで、明日の命さえ知れない身だもの、なんだってできるわ。そう思うと、セーラは、急に勇気さえ出て来た。

そう思って、セーラは、まるでダンスをするようなステップを刻むと、周りの人が注目しようがしまいがおかまいなしに、さらに先へと進んで行った。

そうしてふとやって来たところは、街の裏通りに当たるところで、少しいかがわしそうなところだった。戸口の上に掲げてある看板で、それとなくセーラには分かった。セルッカでも、同じようなところを何度も見て知っていたのだ。昔なら、その前を通ることを恐れもしただろう。しかし不思議と今は平気だった。その細い路地裏を、たった一人で通って行くのに、セーラはなんのためらいも感じなかった。しかし、しばらく歩いて行ったときに、急にそのうちの一つの扉がパタンと開いて、中から一人の年老いた酔っぱらいがよろよろと出て来た。つまようじを口にしがみ、その足どりもおぼつかなかったが、通りすがりのセーラを見ると、その老人は急に声を掛けた。

“おい姉ちゃん、見慣れない顔だけど、この辺で働く気かい？　だったら、いいところを紹介してやるよ。姉ちゃんはべっぴんだから、きっと多くの客がつくって。へっへっへっ”

そう言って、その酔っ払いは、顔をのけぞらすようにして笑った。

セーラは気味悪くなって、足早にその場から去って行った。

しかし、その驚きがまだ覚めやらないうちに続いて出会ったのは、向うの角から突然現れた男女の姿だった。男はまだ若く、肉体労働者のような体格をしていたが、その彼の腰の辺りに手を回し、彼を支えるようにして連れ添っている女は、明らかに年も上で、そのハデな服装から、年齢を偽ろうとしている様が、セーラにもありありと分かった。その二人連れが、いかにも楽しそうに笑顔を浮かべ、会話をかわしながら、セーラのそばを通り過ぎて行ったのだった。セーラはその場に立ち止まり、彼らが去って行くその後ろ姿を見て、急に、こんなところへ迷い込んだ自分のことが惨めになった。知らず知らずのうちに、こういう世界の中へ足を踏み入れようとしていた自分が恐ろしくなった。生きる為、無意識のうちに、足がこの界隈へ向かわせたとでも言うのだろうか？ そして、転落の道をたどる為に…

　セーラは、気分が悪くなって、その通りから出た。空は曇っていたが、あの路地裏で味わった空気のことを思えば、何倍もましだった。しかし、表通りに出ても、セーラの目ざすべきところはどこにもなかった。
　相変わらず人通りは多かったが、セーラに目を止める者はいなかった。もう昼はとっくに過ぎており、腹が減ってはいたが、レストランに行くこともできなかった。やがてセーラは再び、波止場にやって来たが、そこにあるシーフードのレストランへ入って行く幸せそうな親子連れの姿を見て、セーラは、自分が厳しい現実に置かれていることを意識した。空は曇っていて、海から吹きつける潮風は相変わらず強かった。セーラは立ち止まってもう一度、波止場の風景を見、くすんだ建物や、魚市を行き交う人々、桟橋に係留されたマストだけのヨットの群れなどを目にして、それらの街の風景が急速に自分から離れて行くような気がした。セーラが文無しであることに関心を払ってくれる人など、誰もいないし、誰も助けてはくれないだろう。セーラには、もう残された道は二つしかないように思われた。再び、あの薄汚い裏通りへ行くか、それとも、今、目の前にしているあの海に身を投げてしまうか――の二つだった。セーラは、もう自分が分からなくなって、ふと足が岸壁に向かった。岸壁にまで来て、そこに立つと、セーラはふと海を見降ろした。すると揺れる波のあいだに、海を見降ろしている自分の薄暗い姿が映っているのを目にした。そこに映っているのは間違いなく自分の姿だが、髪の毛がほつれ、波で揺れているせいか、顔もゆがんで見え、なんと哀れな女の姿だろう――とセーラは思った。そして、今はそこに映っているだけの女が、やがてはそこの波間に浮かんで漂うことになったときの姿を想像して、セーラは悲しくなった。そうなれば、ここにいる人々は何んと思うだろうか。身元不明の、哀れな家出娘の最期。人々は再び、岸壁へ自分を運び上げ、いくらかの同情は誘うだろう。しかしそのまま救急車で病院の解剖室へ運ばれて、それでお終いなのだ。きっと身元引き受け人は誰も現れず、この港のどこかの墓地へ、名もなく葬られることになるだろう。――それでもう自分は、永久にこの地上から姿を消す。そのときに本当に、あの天国で、お爺さんに会えるだろうか…
　そんな想像から覚めたとき、まだ、セーラの姿は波の間に映っていた。…こんな哀れな娘。明日のない娘など、生きてたっていっしょよ。セーラはそんな気がした。早くこの世界から姿を消すこと。もうこの世界とは会えないけど、そうすればきっと、あのお爺さんに会うことができる。そこはどんな場所かは知らないけれど、今なら、それを信じることができる。さあ、哀れなセーラ。身を投げるのよ。今すぐ。何をためらうことがあるの！　まるで暗示をかけるように、もう一人のセーラの声が、セーラの耳に聞こえて来た。セーラはまだ波間に映る哀れな自分の姿を見つめていた。海が、そんな自分を手招きしているようにさえ思われて来た。すると急速に意識が衰え、全身の力が抜けて行くのが感じられた。手に持っていたトランクがガタンと地面に落ちた。それで、はっと気を取り直してもう一度海面を見降ろしたとき、そこに、哀れな自分と、驚いたことに、それ以外に、見たこともない若い少年が、自分の横に立っている姿を目にして、セーラははっとなって振り向いた。

“一体どうしているんです？　そんなところで”

その少年は、別に悪びれる風もなく、セーラに面と向かって言った。

セーラは、その少年の無邪気な様子が目に触れて、なぜか急におかしさが胸に込み上げて来るのを感じた。それでセーラは思わず、にっこりとその少年に微笑んでしまった。

“何かおかしい？”とセーラは、笑顔のまま、その少年に言った。

“ええ、おかしいですよ”と、その少年は、相変わらずまじめな顔をして言った、“さっきのあなたの様子を伺っていたら、まるで海へ飛び込もうとしていたみたいだ。まさか本当にそうしようとしていたんじゃないでしょうね”

“もしそうだとしたら、あなた、どうする？”と、セーラはもう一度尋ねてみた。

“もちろんそれはいけないことだ”と、その少年は言った、“ぼくなら、やめさせますよ。――でもまさか、本当じゃないんでしょ？”

“あなたの想像にお任せしますわ”セーラは、それには答えず、笑顔で言った。

“――でも、あなたの様子を見ていれば、何かお困りじゃないんですか”と、少年は、飛び込みの件は不問にし、優しい言葉をかけてくれた、“ぼくでよければ、なんなら相談に乗りますけれど…”

明らかに年下だと思えるその少年から、そんな優しい言葉をかけてもらって、セーラは嬉しかった。この子になら、ためらうことなく、自分の恥ずかしい現在のことを言うことができる、そんな気がした。

“恥ずかしいけど、わたし、今、文無しなの”

セーラは、悪びれずに、笑顔のまま、その少年に言った。

“文無しですか！”少年は驚いたように、セーラに言った。“またどうしてそんなことになったんです？”

“ここへ来る途中、チンピラに全部持って行かれたの”セーラは正直に答えた。

“じゃ、さっそく警察に届けなくっちゃ”と少年は言った。

“警察なんか”と、セーラは言った、“警察に届けたって返してくれるわけじゃなし…”

“それで、あんな様子をしていたんですか”と、少年は、理解したとばかり言った。

“わたしが飛び込んだかも知れないっていうこと？”と、セーラは尋ね返した。“あるいはね。――でも、本当のところは分からなかったのよ。ただ海を見つめていただけで…”

“――でも、これからどうするつもりだったんです？”と少年はなおも尋ねようとしたが、セーラがそれに答えるのに苦しそうな表情をするのを見て取ると、話題を変えた。“ともかく場所を変えましょう。お金がないなら、お腹も空いているんじゃないですか。とりあえず、近くのレストランでも行きましょう。いいですよ、ぼくのおごりですから…”

“でも”とセーラは言いかけたが、それ以上言うことをよすことにした。いずれにせよ現在の状況では誰かの助けを借りなければならないのは、誰よりもセーラ自身、よく分かっていたからだった。

“有り難う。助かりますわ”と、セーラは素直に感謝した、“正直言って、朝から何も食べていなくて、腹ぺこなの。この御恩は忘れませんわ…”

“そんな堅苦しい言葉って、言いっこなしですよ”と、少年は言った、“人が困っているのを見れば、助けてあげるのは当然のことじゃありませんか…”

そう言って、少年は、そこに置いてある自転車のところへ歩き出したが、その少年がビッコを引いていることがすぐセーラの目に止まった。しかし、ビッコを引くその少年は、セーラという少女を得て、いかにも身も心も弾んでいるようだった。彼は、買物にここへ来たと見え、買ったばかりの新鮮な魚を荷台に積んだ自転車のところまで来ると、振り向いた。

“さあ、それじゃ行きましょう”

セーラも笑顔で答えたが、どうしてもビッコを引く、その少年の足のことが気になった。

“あらっ、足がお悪いんですか？”と、セーラは尋ねた。

“これですか？”と、少年は振り向いた、“そんなに大したことじゃないんです。――幼いときに交通事故に会いましてね、そのとき以来、親父はいなくなってしまったんです…”

“あら、お気の毒に…”と、セーラは表情を険しくして言った。

“それからというものは、ずっと母親と二人きりですよ…”少年は、その後の生活が決して順調ではなかったと見え、呪われた過去を、吐き棄てるように言った。“今も、その母親が病気でね、だからぼくはこうして買物に来ているんです…”

“そう…”と、セーラは同情するように言った。

“もしよろしければ”しばらく行くと、その少年は、急に弾んだように、初めて笑顔を向けると、セーラに言った、“今晩ぼくの家に泊まらないですか？　決していい家とは言えませんけど、あなたが泊まるだけのスペースはあるはずですよ。今晩行くところがないんでしたら、是非そうして下さいよ”

“でも……いいんですか、そんなにまでしてもらっても”とセーラは、気の毒そうに、少年に言った。

“じゃ、来てもらえるんですね”と、少年は嬉しそうに言った、“あなたみたいなきれいな人に来てもらえるなんて、初めてだ。なんなら、一日と言わず、次の落ち着き場所が見つかるまで、何日でも泊まってもらってもかまわないですよ。決して居心地の良い家とは言えませんけれどね。ともかく――来てもらえるんですね”

“ええ、あなたの言葉に甘えさせてもらって…”と、セーラは答えた。

すると、少年は、なおも嬉しそうに言った。

“実を言うとね、ぼくはきのう、１５才の誕生日を迎えたばかりなんです。そのとき、ぼくはお祈りをしたんです。どう祈ったか御存知ですか？”

セーラが首を横に振ると、少年はさらに続けた。

“とっても美しい、心の優しい女性がぼくの家に来ますようにって、祈ったんです。その祈りがまるで神様に通じたみたいですよ…”

“その女性がこの私っていうわけ？”と、セーラは、にっこりして答えた。
“そうですよ。もちろんですよ”と、少年も笑顔で答えた。
“そう言われて光栄よ”と、セーラは答えた。今やセーラは、秋空のように、心も晴れて、嬉しかった…

やがて少年は港に面した小ぎれいなレストランにセーラを案内した。ちょうど窓際の席が空いていたので、二人はそこに腰を降ろした。窓からは、港の魚市の賑わいが、違った角度から見えていた。空は相変わらず曇っていて、黒雲が、港の上を不気味に移動していた。やがて、ウェイトレスが注文を取りに来たので、セーラは、その少年にもう一度断った後、それほど高くない魚介類の料理を注文した。ウェイトレスが去ると、少年はセーラに話しかけて来た。
“…でも悪い奴だ、あなたのようなか弱い女性の身ぐるみを剥ぐなんてね。そのチンピラたちの人相は覚えています？”
“ええ、二度と忘れませんわ”と、セーラは、もう思い出したくもないと言わんばかりの表情をして答えた。
“――でも、まだ盗まれただけで、乱暴されなかっただけましですよ”と、少年は、セーラを見つめながら、淡々と言った、“若い女性が乱暴されたって話しはよく聞きますからね…”
“乱暴なんて”と、セーラは、ぞっとするように言った、“――でもあるいは、もう少し時間に余裕があれば、やったかも知れませんわね。でも彼ら、あせっていたようでしたからね。きっと車のよく通る目立つところで、場所が悪かったんです。――でも場所が悪かったら、わたしもどうなったか分かりませんわ。そういう意味では、まだ助かった方ですよ…”
“それにしてもヒドイ奴らがいるもんですね”と、少年はこの件を締めくくるように言った。“世の中は、本当に気を付けなくっちゃ”
それから、少し間を置いてから、少年は一番尋ねたかったことを、セーラに聞いた。
“…でもどうして、この街へやって来たんです？　誰かを訪ねて来た、という風にも見えないし。それとも本当に、家出をして来たんですか？”
セーラは初め、困ったような顔をしたが、やがて笑顔をその少年に向けた。
“どうしても知りたい？”セーラは、念を押すように言った。
“ええ、知りたいですね、どうしても”と、少年は答えた、“だって、少なくとも今晩は家で泊まる人だ。少しは知っておかないと…”
“そうね。じゃあ、話しますわ”セーラは、やっと決心がついたように言った、“わたしのこと、話すと少し長くなるんですよ。――でも最近のことを言えば、わたしはついけさまでカトービルの村にいました。きのうまではそこの立派なお屋敷のメイドをしていたんです。

でも、ちょっとしたことの為に、そこを首になってしまったんです。それで、行く当てもないままに、ついふらふらっと、この港町へ出て来たんですよ…”

“ちょっとしたことって、それ、何んです？”と、少年は、やはり一番尋ねたかったことを聞いた。

“お屋敷のお孫さんのフィアンセと少し関係を持ったことです”と、セーラは、悪びれずに、笑顔のままで答えた。

“へえ～、あなたが！”と、少年は、セーラを見直したかのように、驚きの目を向けながら言った。

“――でも、それは全くの誤解ですよ”と、セーラは、悔しそうに言った、“あの人に、わたしのことで助けてもらったから、その恩返しにと誘いに乗っただけのことで、あのお屋敷の人が考えたようなそんな関係になったわけじゃ、決してなかったですわ。少し冷静になって考えれば、そういうことがすぐ分かったはずですよ…”

“それじゃ、そういうことを言えば…”

“言わせてもらえなかったんです”と、セーラはきっぱりと言った。そのとき、セーラの目には涙が少しきらめいていた。“一方的に解雇を告げられ、そうしてけさ、出て来たんです。――でもやはり原因の一端は、わたしにもあったんですから、それも仕方のないことかも知れませんわね。――でも、事前に解雇を告げられるならまだしも、突然のことでしたから、出る為の何んの準備もできてなかったんです。心の準備も、どこへ行くべきかもね。ともかく、昔、ここへ来たことがあったものですから、それでやって来たんです…”

“そうですか…”と、少年は、同情したようにセーラを見つめた。

窓の外では、数少ない一本の木立の枝が、風に揺れていた。

“でも本当に、帰るところはどこにもないんですか？”と、少年は念を押すようにセーラに言った。

“帰るところなんて…”と、セーラは悲しそうに言った、“実はカトービルに来る前までは、セルッカのアパートで、兄と妹と一緒に住んでいたんです。でも一度いつか尋ねて行ったとき、もうその家には住んでいませんでしたわ…”

“じゃあ､本当にひとりぽっちなんですか”と、少年は驚いたようにセーラを見つめて言った。

“正真正銘のひとりぽっちよ”と、セーラは答えた。

“――でも、両親は？　両親はいるんでしょ”

“父は、幼いときに亡くなりました”と、セーラは答えた、“そして母は、しばらくしてから行方不明なんです。こんな話し、本当はあまり話したくないんですけど…　だからわたしのことは、最初に、話せば長くなるって言ったでしょ”

“そうですか…”と、少年は同情するように言った、“いや、いいですよ。別に昔のことは話してくれなくても。それで、あなたのことはだいたい分かりましたから”

“どんな風に分かりましたの？”と、セーラは尋ねた。

“だから、あなたが気の毒な境遇の方だ、ということがですよ”と、少年はさらりと答えた、“一見したところ、そんな風には見えませんでしたけれどね。むしろ、家出して来たはねっ返りのお嬢さんのように見えましたよ。ーーでも、人は、見かけによりませんね…”

セーラは、にっこりして少年を見つめた。

“わたしがお嬢さんだなんて”とセーラは言った、“本当にお嬢さんなら、どんなにかいいでしょうにね…”

“そうそう、まだあなたのお名前を聞いていませんでしたね”しばらくしてから、その少年が言った、“ぼくの名はラミーです。ラミー・パイク。よろしく”

“ラミー・パイク”と、セーラはくり返すように言った、“わたしは、セーラ・ホールバラ。よろしくね”

そう言って二人はテーブルの上に手を差し出し、固く握手をかわした。

第６章

…ふと、水面を見ると、そこにはセーラと、そしてぼくの顔が映っていた。さわやかな風がさっと吹き寄せ、水面にさざ波を立てると共に、ぼくたちのいる草むらや、対岸の樹木を快く揺らした。草むらに咲くクローバの花が、可愛く揺れている。空はまっ青に晴れて、何んと快い春なのだろう…　この自然、この公園の静かな風景が、ことの他ぼくの目をなごませた。ぼくは今、幸せのまっただ中にいるような気がした。そしてもう一度、水面を眺める。そこに映るのは、寂しい表情のセーラと、まっ青な空と、そして、対岸のあの緑がまぶしい木立の姿。他には何もない。何もない。快く響いて来る、どこかで鳴いている小鳥の声と、爽やかに吹く、春風のささやくような子守歌の他には…

“そのようにして、お前はラミーと出会ったわけさ”と、ぼくはぽつりと言った。“しかし、ぼくの知らないうちに、お前の身に、いろんなことが起こったんだね。そんなことなど、ぼくは何も知らなかった。お前が、カトービルや、ブールビルで苦しんでいるあいだ、ぼくとリサは呑気に、あのレビエの湖畔の館で幸せな毎日を過ごしていたというわけさ。時々旅行をしたり、リランの高級レストランへ食事をしに行ったり、コンサートや芝居を見に行ったりしてね。それまでできなかったぜいたくの味というものを、一度に取り戻したみたいだった。あの頃は、毎日が天国だった。そして、その天国の余韻が今も続いているというわけだけれどもね…　しかしそのあいだお前は相変わらず貧しいままだった。ラミーと出会ったからと言って、生活が急に楽になったようでもなかったようだしね。レストランで食事をした後、ラミー少年の家に行ったとしても、そこは決していい家じゃなかったんだろう？”

“ええ、その通りよ”と、セーラは、目を細めるように、遠くの景色を見つめながら言った、“裏通りにあるアパートの小さな部屋。あそこの窓際の一室に、あの病気がちのパイク夫人が、そのときも病気で、ベッドに伏せながら、ラミーの帰りを待っていたの。まさかわたしが一緒に付いて来るなんて、想像もできなかったでしょうね。だから、わたしがラミーと一緒に、家のドアのところに姿を現したときは、本当にあのおばさんは驚いていたわ。「一体、この娘は誰だ？」っていうような顔をして。するとラミーは、わたしのことを、「波止場で拾って来た」なんて紹介するのよ。しばらくお世話になるにしても、「拾って来た！なんて、あんまりね。でもわたしは、初めての家だから大人しくしていたわ。ーー本当になつかしいあの日。できればもう一度、ブールビルのあのアパートに行ってみたいわ。決していいアパートとは言えないし、ひょっとしてもう壊されているかも知れないけれど、でもわたしにとってはあそこは、本当になつかしいところなのよ…”

セーラはそう言ったきり、その当時を思い出すかのように、口を閉じてしまった。

“ともかくそのようにして、お前の一つの物語が終わり、次の長い長い物語が始まったわけさ”と、ぼくは、快い草の匂いをぷんとかぎながら言った、“ラミー少年との物語が始まり、ついにはこのぼくと再会する、というところまでのね。

――でも、ラミー少年の物語の方は、またいつか話してもらうことにするよ。今は、そんな話しより、お前と二人だけのこの時を大切にしたいんだ…”

“わたしが経験して来たことが物語だ、なんて”と、セーラはひとり言のように言った、“そんなものじゃないわ”

“分かっているよ”と、ぼくは言った、“ただそのように表現しただけのことさ。ただぼくが言いたかったのは、人生にはいろんなことが起きるし、とりわけ、そのような経験を積んだお前が、一層好きになった、ということなんだ。お前は、以前のお前よりも一層輝いて見えるよ…”

雲がゆっくりと、水面を流れて行く。

“ねえ、いい日ねえ”と、セーラはやがて言った、“今、こうして兄さんといると、あんなことがあったのが、まるで嘘みたい…”

“そうさ、そのようにして時が流れて行く”と、ぼくは言った、“その分だけお前は賢くなって、そして、自分の過去を振り替えることができるのさ。そして、そこにいろんなことがあればあるほど、その人は経験も積み、賢くなっているのさ…”

“少なくとも恋に関してはね”と、セーラはポツリと言った、“今頃マロンはどうしているかしら？”

“そんなことはもう忘れることさ”と、ぼくは忠告した。“今頃、六年前にお前を捨てた男を思い出して、それが何んになるんだよ。お前にとって、本当に愛した男が彼ただ一人だとしても、遥か海の彼方へ去ってしまった彼のことはもう死んだも同然と思う他はないのさ…”

“恋って残酷ね”と、セーラはポツリと言った、“だって彼のことは、今だに思い出すことがあるんだもの”

そう言ったセーラの瞳は、遥か遠い過去をいつくしむかのように、対岸の公園の、樹木の梢の、遥か彼方を見つめているように思えた。

“きっとそれは、お前にとって、お前だけしか通ることのない、細い一本の道なんだね”と、ぼくはやがて言った、“それは、お前ひとりの為にだけ用意されている道なのさ。他の誰も通る為にできた道じゃない。――ぼくはそんな道を、ときどき夢に見るのさ。それは、よく晴れた野原のあいだに、一本まっすぐ延びた道で、鉄道も、それと平行して走っている。その道がどこに通じているのかはよくは分からない。恐らく、本当の憩いのある我が家が待っている、と思えるだけで。そして、つい最近も、女友だちと別れて、その道を帰って行こうとしたのさ。でも、夢はいつもそこで覚めてしまう。それから先に何が待っているのか、ぼくはいまだに知らないんだ…”

“きっと、わたしたちの人生も、そのようなものね”と、セーラは言った、“わたしもそういう道を歩んで行くつもりよ。そして、兄さんもね”

“ああ、お互いにね”そう言って、ぼくたちはお互いに顔を見合わせるのだった…

　そのようにして、セーラとの束の間の、公園でのひとときは終わった。ぼくたちは再び家に戻って来、セーラと二人だけの軽い昼食を取った後、セーラは約束があるからと言ってあわただしく、ひとり家から出て行った。セーラとの二人だけの昼食は、静かだったがそれなりに趣のある、楽しいものだった。セーラが玄関のドアをばたんと閉めて家から出て行ったとき、急に、薄暗い部屋に訪れた沈黙のときが、ぼくに再び「寂しさ」を感じさせた。ぼくは再び、ひとりぼっちの時を得たが、それは、自由を喜ぶときではなく、耐えがたい孤独と対面するときであった。ぼくは、二階の、元パイク夫人が使っていた仮の自分の部屋に上がると、そこからしばらく、ぼんやりと窓の外を眺めた。セーラは夕方、街のダンスホールで楽しいパーティがあるから来ないかと親切にもぼくを誘ってくれたが行くかどうか決心がつきかねた。しかし今は、そんなことよりも、この時間を、いかに過ごすか、ということだった。

　セーラは、公園で自分の思い出を語りながら、その最後にふと、ブールビルのあのアパートに暇があれば行ってみたい、という言葉をもらした。ぼくにとっては、その言葉がすべてだった。ぼくの知らない土地、知らない場所で過ごしたセーラの思い出の土地のひとつひとつへ、ぼくも行ってみたい、そんな気が、ひとりになってからして来るのだった。カトービルの田舎家で、クレメンスは、そしてその息子たちは、今頃どうしているのだろう？　セーラが泣きながら葬ったというジオラ老人の墓は、どんな教会の、どんな墓地に今も眠っているのだろう？　ジオラ老人がその最期に運び込まれたという、カトービルの小高い山の中腹にあるという、素晴らしい病院というのは、どんな姿をして、そして今も、春の日射しを浴びていることだろう？　そして、スプローク家のセアンは？　セーラを誘惑し、破滅に追いやったアレックスは、今頃どうしているのだろう？　セーラがいつも散歩に連れて行ったというパーンは、そして、意地悪だった家政婦のスコーピさんは、今も元気にしているのだろうか？　セーラが初めてジオラ老人と出会った公園は、きっと今もそのままの姿であり、きっと今頃は、セーラが信じたように、美しいブルーベルの花を一面に咲かせているに違いない。――ぼくにとって、それらひとつひとつは訪れてみたい場所だった。そして、ぼくの知らない時期を生きた、セーラの苦い青春時代というものに、今度はぼく自身の手で、もう一度触れてみたかった…

　だが、それは今のところは、夢としてとどめておこう。彼らには彼らの生活があり、それをいたずらにかき乱すことは、厳に慎むべきなのだ。もし仮に行くことになるとしても自分の身分は隠し、さっと過ぎるだけにしておこう。その方が、セーラの為にも、彼らの為にもいいことなのだ。だが、それにしても、引っかかる男がひとりいた。セーラの人生を、これほどまでに狂わせてしまった許せない男、マロン。彼は今頃、海の彼方で、どんな人生を送っているのだろうか？　セーラは今もなお、そんな彼に未練を残しているようだった。セーラが今もなお、結婚を拒んでいる理由のひとつに、そんなところがあるのかも知れない。だとするなら、そんな罪な彼を、なんとしてももう一度セーラに引き合わせてやりたい――そんな気が、ぼくにはして来るのだった。

彼の生活は、満たされて、幸せなものかも知れないが、一方のセーラの方は、こんな苦しみをなめたのだ――それでは不公平だ、という気がした。マロンこそ、セーラに謝りに来るべきなのだ。そして、どのような形をとるにせよ、いくらかでも、その罪の償いをすべきなのだ。そうするまでは許せない――とぼくは思った。

本当は、セーラが言ったように、二人が愛し合ったのが事実なら、その二人が結ばれるのが一番幸せなことなのだ。そしてそれ以外に幸せなど、訪れるはずもない。ぼくはひとり、自分の部屋にいながら、なんとしても、この二人をもう一度引き合わせ、そしてついには結ばれるまで持って行けないだろうか、と思案するのだった。それは、ぼくの可愛い妹、セーラの為にも、そして、あのマロンの為にも、必要なことなのだ…

対面の山の斜面に茂る、黒っぽくて細長いヒバの木がそう思わせたせいなのか、ぼくはふと、セーラが勤めているという農業試験場へ行きたくなった。本当はセーラのエスコートで行くのが一番いいのだが、セーラに断りなしにこっそりと覗きに行くのも別にかまわないだろう。

そうしてぼくは再び外出した。バスに乗って行くには少々時間がかかるが、その程度のことは耐え忍ばねばなるまい。外に出ると、春の太陽がいやにまぶしかった。そして青い空に浮かぶ真白な雲が、いっそうぼくに、セーラが勤めるという農業試験場への郷愁をかきたてた。

どこをどのようにしてぼくはやって来たのだろう。思い出せばぼくはルブライラの街から、セーラと一緒にマルーラの村へ行ったときのあのバスに乗って、この試験場近くの停留所に降り、そこからとぼとぼと、森に囲まれた静かな小道を歩いてやって来たのだった。途中の道は晴れて気持がよかった。ところどころに、ポツポツと民家があった。二、三度来たことのあるあのクラーレさんの屋敷も、今ではもうはっきりとは覚えていないが、恐らくこの近くにあるのだろう…

ぼくがあのとき、マルーラの村から、歩いてこの村を通りかかり、そこでセーラと出会ったということは、全く幸運の一言に尽きた。あのとき、ぼくが別のルートをたどっていたら、そしてもしセーラがあのとき、物干しの為庭に出ていなかったら、ぼくとセーラとの巡り会いは、もうあと何年か、何十年か、それとも永久に、延びたかも知れないのだ。そのことを考えると、ぼくはあの恐るべき偶然に感謝せずにはいられなかった。――しかし、その日は恐らく近付いていただろう。この機会を逃すともう二度目はないとの危機的な気持でここまでやって来ていたのだし、マルーラの村を去ってから、ぼくはルブライラでしばらく滞在するつもりだったのだから。仮にあの出会いがなかったとしても、ぼくは、ルブライラの滞在中に、セーラに関する何んらかの情報をキャッチしたかも知れない。あるいは、街を散策している裏通りで、セーラの姿を見かけたかも知れず、あるいは、街の公園でセーラとの劇的な出会いになったかも知れない。

いずれにせよ、セーラの居場所に一歩一歩近づいて行く、その包囲網は狭められていたのだし、その道程はもっとスリリングなものになっていたかも知れない。そしてそのときのことを想像すると、想像は膨らんで、ぼくはもっと劇的な出会いというものを――まるでメロドラマを見ているように――思い浮かべることもできるのだが、例えば、尋ね歩いた末に、街を流れる小川のほとりでセーラとついに再会するとか、そしてそれは、一度街で見かけた彼女を、街の雑踏で見失い、それを必死に捜した結果だ、という風に想像することもできるのだが、そうならずに出会えたのは、それが現実であり、神が引き合わせて下さった、とでも言うべきなのだろうか…

一年前に出会ったあのときのなつかしい日々を振り返りながら、陽気に誘われて、のんびりした田舎道を歩いて行ったが、途中で、農業試験場と書かれた立札があり、それに従って丘の方に道をとると、やがて不意に、黒々とした林におおわれた丘の陰から、日光を浴びて、真白に輝く、二本の銀色の煙突を天高く突っ立てた、モダンな、背の高い建物が現れ、その美事さに、一瞬ぼくの目を釘づけにした。それは美事としか言いようがなかった。壁も、室内も、真白で、幾何学的に美しく組立てられて、明かりをいっぱい吸い込みそうな大きな窓も、細い窓枠も、白い壁も、外に面した手すりも、すべてが美事だった。セーラは、こんなところで働いているのかと、ぼくは一瞬、羨ましい気がしないでもなかった。黒いモミ林と、その白い建物のコントラストが鮮やかで、ぼくはそれに見とれるまま、一歩一歩、細いよく舗装された坂道を登って行った。

入口に来ても、門は空いたままで、人気がなかった。ただ、ゲートのプレートに刻み込まれた文字だけははっきりと読み取ることができた。

ルブライラ国立農業試験場。

横には、関係者以外立ち入り禁止の立看板もあったが、ぼくはかまわず入って行くことにした。

入ってすぐ気がついたのは、あの森におおわれた白い、立派な本館の他に、研究用の小さな建物が、この広い敷地内のところどころに建っている、ということだった。ゲートからの見通しはよく、なだらかな斜面の上の方には、煉瓦作りと、サンルームとを兼ねたような平屋建ての小さな建物が、ポツンとあった。その周りには美事な植物の群れ――まるで花の遊園地にでもやって来たような、実に美事な、様々な花が咲いている。

こんなところを、一部の研究者たちにだけゆだねているのはもったいない、とぼくは思った。

ぼくは、この広い施設を巡るにあたって、とりあえずは、ぼくの気をひいてやまなかった白い研究所から見てやろうと思った。ざっと見渡したところ、研究所への入口は、下からだけではなく、一段と高くなった丘の上の方から延びている通路を通って、上からも侵入できると分かると、ぼくはそちらから入ろうと考えた。急な斜面を無理して登り、最後の草の根っこをつかんでようやく通路の入口までやって来て、ぼくはもう一度研究所を眺めた。きょうは休日のせいか、人気は感じられず、まるで無人のように静かだった。ぼくは思い切って、コンクリートで出来た、白い通路を通ることにした。

白い壁や天井で仕切られた屋上の空間がなんとも言えず素敵なその研究所へ侵入して行くのが、ぼくの胸を、まるで童心に戻らせたように、わくわくさせた。春の光は否応なくこの白い建物に降り注ぎ、周りに茂るモミや、その他の木立が形づくるまだら模様の影を、その白い壁や、通路の白い壁面に投げかけていた。ぼくは、子供のような冒険心を胸に感じながら、その通路を通って行った。

非常口のドアと、各階の廊下に通じる非常ドアはあけられていたが、研究室に入る廊下のドアだけは、固く閉ざされていた。木製の廊下は明かり窓から射し込む光で、鈍いつや光を放っていて、人気も感じず、静かだった。ぼくはまるで、研究員になったような気持で、一歩一歩廊下を踏みしめて行った。薄暗い廊下はまっすぐ奥の方まで延びていて、突き当たりに、その暗さにとどめを刺すような、ほのかな明かりがさしており、そこが、上下階に通じる階段場になっていることが分かった。廊下に沿って延びる白い壁におおわれた研究室のドアは、冷酷にも固く閉ざして、ぼくをその中へ寄せつけまいとしていた。ぼくは廊下の突き当たりまで行くと、そこの窓ガラスごしに見える、外の青々と茂った森林の様子などに目を奪われながら、階段を降りて行くことにした。再び同じような形式の廊下が現れた。ところがその中で、一ヶ所だけドアのあいている部屋があったので、ぼくはハッとした。中に人がいるのだろうか？　いずれにせよ、ぼくは好奇心にかられてその部屋に向かった。研究室の中がどうなっているのか見る為の絶好のチャンスなのだ。

ドアはあいたままで、そこだけが、研究室からの明かりが洩れて、明るくなっていた。

ぼくはドアのところまでやって来ると、そっと、室内を覗いてみた。

外の景色が実に美しく見える、総ガラス張りの明るい室内には、見慣れぬ機械類や、明かりのついたコンクリート製の天井に突き立てるような鉄製の支柱、あるいは、実験用のテーブルの脇に結わえつけられた、銀色に輝くガスボンベなどが見え、近くの棚には黒っぽい瓶に収められた薬品類が、所狭しと並べられていた。実験用のテーブルは何ヶ所かに分かれていて、それぞれに珍しい実験機具や、装置などが置かれていた。合成板のさっぱりした壁には、絵画の他に、表彰状らしい額がいくつか、無造作に並べられていた。しかし、この研究室には、雑然とした中にも明るさが充満し、窓の外の何んとも言えぬ健康的な明るさとあいまって、一種独特の世界を形づくっていて、それがぼくの胸を打った。――そうして、ひととおり眺め回したとき、ぼくは気がつかなかったのだが、薬品の棚で死角に当たる所に、どうやら人がいるらしいことが分かった。ぼそぼそと言う声が、研究室の静かな空気を伝わって、ぼくの耳にも達したからだった。ぼくは、彼らが見える所へと、そっと室内に足を踏み入れた。

黒い薬品瓶が並ぶ棚の陰ごしに、外の、樹木がおい茂る美しい庭が見えている明るい窓を背景に、実験台のそばで向き合って立っている一組の若い男女の姿が見えたが、よく見ると、その若い女姓がセーラだと分かって、ぼくは驚いた。彼女はいつのまにか白い服を着、もうひとりの白い服を着た研究員と話し合っていたのだ。彼女は、明るい、景色のいい窓ガラスを背景に、多少身振りも交えて、楽しそうに彼に話していた。

彼は、背のスラッとした、眼鏡をかけた、割とハンサムな青年で、物陰から見つめているぼくの目には、この静かな環境の中で、生活を楽しんでいるようにも見える二人の姿が、しっとを感じさせるような光景にも思えた。セーラの横顔は、逆光のせいで少し影になっていたが、それでも、セーラの豊かな、楽しそうな表情は、手に取るように、ぼくにも分かった。窓の外の光はまぶしく、少しあけられたガラス窓からは快い風が入って来ているせいか、たぐし寄せられたベージュのカーテンが、ゆらゆらと揺れていた。窓の外の樹木の輝きと、建物の白い壁の輝きが、ぼくにはまぶしいほどだった。セーラと、その相手の研究員とは、ぼくには気が付いたそぶりもなく、相変わらず向き合って、器具や、顕微鏡や、ガラス瓶などが置かれたテーブルのそばで、何か話し合っていた。その光景は、はっと息を呑むような、これまで目にしたことがないほどの、素晴らしい光景だった。ーー彼らの姿をしばらく観察しながら、ぼくはこのまま大人しく引き下がろうかとも思った。そしてそうすべくゆっくりと退散しかけたとき、足が、薬品の棚に引っかかって、大きな物音を、室内に響き渡らせる結果となってしまった。すると、その音と同時に、彼らの視線が急に、ぼくの方に注がれた。

背の高い若い研究員は驚いた表情で、そしてそれ以上にセーラは、もっと驚いた表情でこのぼくを見た。

“あら、兄さん！”セーラは、ぼくがここにいるのが信じられない、といった表情で、ぼくに言った。“どうしてここへ？”

“邪魔をして御免ね”と、ぼくはまずは謝った。“ただなんとなく来たくなって、来てみただけさ。非常口があいていたからここまでやって来たんだけど、お前がいるなんて思ってもみなかった…”

“どうしても気になる仕事があってね、それで来たの”と、セーラは、普段の表情に戻って言った。それから、彼とぼくとの紹介がまだ済んでないのに気がついて、セーラはさっそく紹介した。

“あっ、この人、わたしの兄さんなの。シレール・ホールバラと言います。よろしくね”

そう言って、セーラは、ぼくを、白衣を着た背の高い青年に紹介した。彼はじっと、紹介されたぼくを見つめた。それからセーラは、ぼくの方に振り向くと、今度は彼を紹介してくれた。

“この人は、ここの研究室の助手の、ポール・ストペイアさん。今のところは、この人の研究のお手伝いをさせてもらっているのよ…”

“ポール・ストペイアです”と、彼は、ぼくのところに歩み寄って、握手を求めた。“なかなかいい妹さんをお持ちで、羨ましいですよ”と、彼は素直に言った、“もし何んでしたら、しばらくここにいてもらっても結構ですよ。セーラさんに、ここを案内してもらってもよろしいですし。わたしは所用で、ちょっと出掛けなければなりませんので…”

そう言って彼は、いそいそとこの部屋から出て行こうとした。

“ーーでも、お邪魔じゃなかったんですか？”と、ぼくは気がねをして、もう一度言った。

“いいや、きょうの仕事はもう終わりましたから…”

彼はぼくの方に振り向くと、そう言い残して、本当に部屋から出て行ってしまった。

彼の靴音が廊下に響いて行き、次第にそれが小さくなって、ついに静寂がこの室内にも戻ったとき、ぼくはとうとうセーラと二人きりになったという気がした。しかもこんな素晴らしい研究室で――

彼が消えてしまうと、ぼくは再び、セーラの方に向き直った。

セーラはまだ、そこに立っていた。

“なかなかよさそうなところだね”と、ぼくはもう一度、周りを見渡すようにしながら言った、“こんなところで、お前は働いていたのかい？”

“ええ、なかなかいいところでしょ”と、セーラは、微笑みながらぼくに言った。“わたし、ここでの仕事を、心から気に入っているわ…”

“そりゃ、こんな環境のいいところなんだものね”と、ぼくは、研究室の空気を胸いっぱい吸い込みながら言った。

“それで、どんなことをここで研究しているんだい？”

セーラは、それには直接答えず、実験テーブルの上にある一台の顕微鏡を指さした。

“それを覗いてみなさいよ。なかなか面白いわよ”

“そうかい。何んだか分からないけど”そう言って、ぼくは顕微鏡を覗いてみた。

見ると、何か、キノコのような形をしたものや、細長い網状のようなものが中に映っていた。

“何んだい、これは？”と、ぼくは顕微鏡を覗いたまま言った。

“子のう菌類のクロカビよ”と、セーラは答えた、“なかなか面白い形をしているでしょ”

“それで、こんなものを見て、どうしているんだい？”

ぼくはやっと顕微鏡から目を離すと、セーラの方に向き直って、尋ねた。

セーラは、ぼくを見つめると、さり気なく言った。

“これはわたしが培養した糸状菌の標本の一部よ。――いろんな土壌から採集して来た土に付着している細菌や、放線菌や、糸状菌を培養し、観察するのがわたしの仕事よ。兄さんも聞いたことがあるでしょう。ストレプトマイシンという抗生物質を。あれは、ストレプトマイセスという放線菌の一種から造られたものなのよ”

“それで、そのなんとか菌とかいうものを研究して、別の薬の一つでもつくろうとでも思っているのかい？”

ぼくがそう言うと、セーラは思わずにっこりした。

“誤解しないでね。ここは製薬工場ではなくて、農業試験場よ。兄さんは知らないでしょうけれど、最近は土壌というものが見直されているのよ”と、セーラは言った、“とりわけ、その中の土壌微生物がね。

土壌微生物の第一の特徴は何んと言っても有機物を無機物に分解するという作用よ。でもそれ以外にもいろんな作用があることが分かって来たの。とりわけ見直されて来たのは、作物との関係で、根圏における土壌微生物の役割よ。根圏というのは、高等植物の根のまわりでは他のところに比べて著しく土壌微生物に影響を与えるところで、根の表面からほぼ５ミリぐらいまでのところとされているところなの。それは、ヒルトゥナーという人が１９０４年に発見し、命名したところなんだけど、そこの土壌を調べることによって、作物の根と、土壌と、土壌微生物のあいだのいろんな関係や役割が分かって来るというわけよ”

“へえ～、でも、随分と骨の折れるような仕事のようだね”と、セーラの説明に、半ばあきれ、半ば感心しながら、ぼくは言った。

“そうね、たいていは平板法という培養法で細菌や放線菌などを調べるんだけど、確かに根気のいる仕事よ”と、セーラは答えた、“――でも興味深いものよ。ペトリ皿に、ペプトン入りの寒天の培地をつくってね、それに純粋培養していると、そのうち表面にいくつかの糸状菌のコロニーが生じて来るのよ。それの数を数えたり、顕微鏡で調べたりするのよ。それで、ある作物の根圏には、どんな微生物が優勢か、そんなことを調べて行くのよ…”

“なんとなくお前の言っていることが分かったような気がする”と、しばらく考えてからぼくは言った、“要するにそんな地味なことを続けながら、行く行くは作物の成育に貢献する、ということなんだろう”

セーラは、ぼくを見つめながら、うなずいた。

“それにしてもさ”と、ぼくは再び、息を呑むような、周りの素晴らしい光景を目にしながら言った、“こんなにいい環境の中で、そんな地味な、骨の折れる仕事が続いているなんて、ぼくには信じられないなあ。こんな立派な研究所のことだから、もっと大きな、もっと大それた研究でもやっているのかと思っていたけど、案外と、小っぽけで、地味なことをやっているんだねえ…”

“研究って、みんなそうしたものよ”と、セーラは、素っ気なくぼくに答えた、“――でも、それなりに苦労はあっても、それに見合う以上の歓びがあるのも事実よ。なんと言っても毎日、こんなに広い自然のあるところで、いろんな花や作物と会話をすることができるんですもの。決して辛い仕事なんて言えないわ。むしろ毎日が楽しい仕事よ…”

そう言うセーラの表情には、生活の歓びがあふれていた。セーラは、様々に苦労を積んだ末、とうとう自分の天職を見い出したのだ。彼女は単なる補助員で、彼女自身の研究ではないにせよ、この地味な仕事の中に生きがいを見い出しているのは、明らかだった。ぼくには、そんなセーラが、羨ましい気がした…

ぼくは、ガラ～ンとした研究室の片隅に白衣を着て立っているセーラを、改めて見つめ直し、それからぽつりと言った。

“似合うよ、その白衣…”

セーラは思わずぼくの方を見、微笑んだ。

“そう？　ありがとう。今ではもうすっかりこの研究所に溶け込んでいるの”と、セーラは淡々と言った、“えらい先生方もたくさんいらっしゃるけれど、みんな顔見知りよ。――毎朝ここへ出勤してはね、あいさつをして、それからめいめいの持ち場へ散って行くのよ。それぞれが研究テーマを抱えていてね、違った作業をしているの。ここへ来るのが、毎朝楽しいわ…”

“分かるよ、お前のその表情を見れば…”と、ぼくは言った、“日頃のお前が、どんな顔つきで作業に取り組んでいるのか、そういう現場を一度見てみたいものさ。――それはともかく、これからどうするんだい？”

“せっかく兄さんが来たんだから、何んでしたら、ここを案内しましょうか”と、セーラは言った。それからセーラは、白衣のポケットに両手を突っ込み、窓際に寄った。セーラは、窓の外を見つめながら、ぼくに言った。

“見えるでしょ、向うの、芝生の向うに見える、ソーラハウスのような、レンガ造りの建物が。あれが、ここの自慢の温室よ。あそこには、いろんな熱帯地方の植物が咲いていて、美事よ。それに、あの背後に広がる森もね、とても広大でいろんな木が茂っているわ。植物の演習場も、ここからは見えないけれど、あの温室の裏手の、そう遠くないところにあるの。そこにも、今の季節のいろんな花が一面に咲いていて、美事という他はないわ…”

“確かにね、ここはいいところさ”と、ぼくも、セーラの横に立って、窓の外の美しい景色を眺めながら言った。

空はよく晴れて、春の強い日射しが、この研究所の庭一面に降り注いでいた。森のふもとに広がる芝の緑の輝きと、森の上に広がる空の青さとのコントラストが、実に美事で、ぼくの目を打った。研究所の窓のすぐそばに茂るケヤキの葉が光を浴びて金色に光り、それらが風にざわざわと揺れていた。

“世の中にはこんなところもあったんだね…　ぼくは知らなかった”とやがてぼくはポツリと言った、“こういうところで勤められているお前は、幸せ者さ。見て御覧よ”そう言って、ぼくはもう一度、外のまぶしさに比べれば、薄暗くさえ感じられる、静かな室内に振り向いた。“実験用のテーブルや、ぼくの知らない装置や機械。向うの棚にはたくさんの試薬瓶が並んでいるし、顕微鏡もいくつかある。もったいぶってカバーをかけられた大事な装置もありそうさ。それらは何に使われるのか、ぼくにとっては分からない。言わば、全く意味を成さない代物さ。でも、そんなところで働いていた人がいたなんて、また働くことができる人がいたなんて、ぼくには全く、想像もつかなかったことさ…”

“それで、何が言いたいの？”と、セーラは、相変わらず白衣を着たまま、尋ねた。

“つまりさ、こういう世界もある、ということを知ることができて、ぼくも幸せさ、ということさ”と、ぼくは言った、“しかもお前がここの一員だから、なおさらのことさ。ぼくは、そんな妹を持つことができて、誇らしい気持さ…”

“誉めてくだすってありがとう”と、セーラは優しく答えた。“それで、兄さんも、こういうところ

で働きたいって、思っているの？”

“いや、ぼくはダメさ”と、ぼくは即座に答えた、“小さいときはね、確かにね、研究所に勤めたいと思ったこともあった。セーラも覚えているだろう。いつか家族揃って、天文台に行った日のことを。あの日もちょうど、この日のように空が晴れて、気候のいい春だった。あのとき、偶然通りがかった天文台に、パパが無理を言って、家族全員が中に入らせてもらったものさ。あのときの経験は、今でも忘れることができない。ぼくが日頃から欲しいと思っていた、真白な、お化けのような望遠鏡が、どっしりと据え付けられていたんだからね。あのふんいきも、ちょうどこのふんいきに似たようなものさ。静かで、少し薄暗くて、外は暖かいと言うのに、中は、空気がヒンヤリとして冷たくて。――あの頃は、空の星を見るのが好きだった。ちょうど今の季節の空なら、しし座のレグルスが夜空を彩っているはずなんだが、そんな風に、星座の名を覚えたりするので夢中だった。お前たちはそれほどでもなかったけれどね、ぼくは無理にお前たちを引っ張り込んで夜空の星を眺めたものさ。そして、そんなときにあの天文台に出会ったものだから、あのときの、お前やママたちの驚いて、巨大な望遠鏡や、ドームの天井を見上げていたときの表情は、今でもよく覚えているよ。それはともかく、ぼくは、大きな天文台の内部をつぶさに観察して、子供心ながら漠然と、将来、こんな研究所に勤められればいいな、と夢見たのは事実さ。――でもそれは、あくまでもはかない子供の夢さ。星を見るのは今でも好きだけれど、でも研究員にはぼくはなれないよ。だってさ、根気がないというわけじゃないんだけれど、ぼくの心はすぐ、詩の方に向かってしまうんだから…”

“そう言えば兄さんは、詩人にしかなれないって、言っていた時期があったわね”とセーラは、すぐ納得したように、笑顔になって言った、“あのときと、今も変わっていないのねえ…”

“というのもぼくは、いろんな世界や状況を直観する方で、細かく観察する方にはまわれないからさ”と、ぼくは言った、“つまりぼくは、世界を、ただ孤独に眺めるだけなんだ…”

“分かったわ。そういう兄さんを、他の人に、どういう風に紹介すればいいのかしら？”とセーラは言った、“詩人です、とでも言えばいいの”

“そんなこと…　ただ兄です、と言えばいいじゃないか”とぼくは、いささか、現実に戻って言った。

“分かりました、兄さん”と、セーラは少しばかりひょうきんになって言った、“それでいずこへ御案内たまわりましょう。つまりは詩人の兄さんにですね、その霊感とか言うものを呼び覚ませてもらう為に、研究所のどういうところへ案内させてもらったら、ようございますのでしょう。この部屋もよろしければ、あちらの外もよろしいかと存じますが、さらにあの温室なんかもいかがなものでしょう。詩人の霊感なるものを呼び覚ますにはもって来いの場所だと存じますが…”

“そんな風に楽しく案内してもらえるのもいいね”と、ぼくも苦笑しながら言った、“とくにお前のように可愛い娘に案内してもらえるのはね”

“そうですか？”とセーラは、ふっとこちらを見た。まだ演技を続けていた。“分かりました。おおせの通りいたしましょう。なんと言っても、わたしの「兄貴大先生」で、しかも、「詩人大先生」でいらっしゃるもの。さあそれじゃ、こちらへいらっしゃいな…”

そう言ってセーラは、大げさな身振りで、研究室の入口の方に向かった。

しかしぼくはまだ実験中のテーブルの上が気になった。

“いいのかい、実験台をこのままにしておいて”と、ぼくは言った。

入口に向かっていたセーラは、不意に振り向き、ぼくを見た。今度は、セーラにはひょうきんさはなく、普通のセーラに戻っていた。

“いいのよ。もう済んだあとなんだから”と、セーラは普通に言った、“さあ、早く出ましょ”

研究室を出て、白い壁と天井とに囲まれた廊下を歩いて行く、白衣を着たセーラの後ろ姿を、ぼくは目で追った。それから、廊下や壁に光を投影している窓の方に目をやった。窓からは、相変わらず深い森が、春の光を浴びて、澄んだ空の下で、ざわざわときらめいていた。

“いい眺めだねえ…”と、ぼくはふと足を止めて、セーラに声を掛けた。

セーラはその声で振り向き、足を止めた。

“何を見ているの？”そう言って、セーラは、ぼくのところに戻って来た。

“いや、何んでもないさ。ただ外の景色がねえ…”とぼくは、相変わらず、明るい外を眺めながら言った、“耳を澄ますと、森のざわめきや、小鳥の声が聞こえて来るね。本当にここは静かで、いいところだ。お前は毎日、こんなところで働けて、幸せ者さ…”

“でも兄さんみたいに、外をぼんやりと眺めているわけには行かないのよ”と、セーラは言った、“でもただ昼休みのときだけは別。食事のあとで、天気のいい日には、屋上のテラスに出てぼんやりと空を眺めていたりね、庭に出て、日光浴を楽しんだりしているわ。そういうときが、本当に一番楽しいわね”

セーラは、そのときを思い出すように微笑んだ。セーラの白衣も、窓からの光を浴びて輝くような白さと、陰影とを形づくっていた。ぼくは、この明るい、静かな廊下に立つそんなセーラを目にして、言いようのない感情が、心の中に燃え上がるのを感じた。

“ぼくはここでお前に会えた、ということが何よりも嬉しいよ”と、ぼくはそれとなく言った、“もう一度よく見せてよ、その白衣。本当に、お前によく似合うんだから”

そう言うと、セーラはくるりとぼくの方に向いて微笑んで見せたが、すぐにぼくの手からすり抜けるように、さっと振り向いて向うへ行ってしまうのだった。

“待ってよ、セーラ。何をそう急ぐんだい！”

ぼくはあわててそんなセーラを追いかけた。廊下をころがるように走りながら、妹を追いかける自分の姿の惨めさのようなものを感じながら…

やっと階段の踊場でセーラに追いついたが、セーラは相変わらず足早だった。
“どうしてそんなに速く歩くんだい？”と、ぼくは後ろからセーラに声を掛けたが、セーラは足を留めずに、ぼくには振り向きもせず言った。
“だって、これからいろんな研究所の施設を兄さんに案内しなくちゃならないでしょ。それなのに兄さんは、研究所の方を見るんじゃなく、わたしの方をジロジロ見るんですもの”
その言葉に、ぼくは思わず笑ってしまった。
“そうかい、悪かったよ”と、ぼくも、息を切らせながら言った、“その服を着たお前があんまり可愛いいものだから、ついね。そのことに気を悪くしたんなら、御免ね”
“いいの”と、セーラは足を留めると、今度は、ぼくの方に振り向いて言った、“わたしを見るのは勝手だけど、研究所の方をもっとしっかり見てね”
“ああもちろんだとも”とぼくはきっぱりと答えた。

研究所から出たとき、濃い樹木の陰にそびえる白い壁がまぶしかった。ぼくに遅れて、セーラもそこから出て来た。他にも人がいるにはいるだろうが、この広い施設にぼくたち二人だけのような、そんな気がした。
“それで、これからどこへ連れてってくれるんだい？”と、ぼくは、白い研究所や、広がる森や、向うのレンガ造りの建物などを見渡しながら、言った。
“こちらよ。行きましょ”セーラは、ぼくと並ぶと、さらに先へ歩くようにして、言った。

やがてやって来たのは、古い木造の建物の、すぐ横が細長いハス池になったり、美事な花壇となっているところだった。
“この建物はね”と、セーラはひとつひとつぼくに説明してくれた、“現在のあのモダンな研究所ができるまでは、ここで実験をしていた昔の建物なの。でももちろん今でも使っているわ。見かけはみすぼらしいけれど、充分使用に耐えますものね。それからこの花壇には香辛用の植物が植えてあるの。いい匂いがするでしょう”
確かにそこには、セイジや、ローズマリーや、オリガンなどの香辛植物が一面に植えられていて、爽やかに鼻をつく、何んとも言えない、いい香りがしていた。セーラはそのうちのローズマリーに近付いてしゃがむと、気持良さそうに目を閉じて、鼻で匂いをかいだ。ぼくは、そんなセーラを、後ろに立ってじっと見つめていた。
“兄さんもかいだら？　いい匂いがするわよ”セーラは振り向くと、ぼくに言った。
それでぼくもセーラの横に座り、その細い葉に鼻を近づけた。なるほど、いい匂いだった。
“夏になればね、この木にもね、青紫色の小っちゃな花が咲くの。そのときのローズマリーも素敵よ”とやがて、セーラは言った、“向うのオリガンも夏にならなきゃダメだけど、セージの方はもうすぐね。これからの季節が、この花壇の見どころよ…”

“なるほどね…”と、ぼくは、セーラが説明するのを聞きながら、じっと花壇を眺めていた。
やがてセーラは立ち上がると、古い木造の研究所の二階が渡り廊下となっている、日陰となったその下をくぐって、向うの明るいところへと歩いて行った。細長い蓮池はまだそちらにも延びていたが、すぐ横は、ハシバミやナラやトネリコなどの木が混在する雑木林となっていた。そのすぐ際には、忘れな草が一面に咲いている。
“いいところだねえ”とぼくは、それらを見ながら言った、“それで次は、どこへ連れてってくれるんだい？”
“今度はね、わたしが関係している農園よ”と、セーラは言った、“トマトをハウス栽培しているところ”
“へえ〜、お前はこんなところでトマトをつくっているのかい？”と、ぼくは驚いたように言った。
“そうじゃなくて、土壌を改良したり、調べたりいろいろしているの”と、セーラは言った、“ホラッ、見えて来たわ”
セーラが指さした方向を見ると、確かにそれらしい、ビニールで囲まれた温室が見えて来た。その透明なビニールを通して、ビニール園の中で、トマトが美事になっているのが見えていた。セーラはビニールハウスのそばにやって来ると、さっと中に入った。続いてぼくも入ると、中はむっと熱気がこもっていた。しかしすぐ目についたのは、鉄柵上に美事に成ったトマトの、つやのある、真赤な実だった。
“おいしそうだね”と、ぼくはそれを見て言った。
“でもまだ、充分に熟していないわ”と、セーラは答えた。
それから、セーラは、その小さなハウスの中のトマトをゆっくりと見て歩くと、やがてポツリと言った、
“最近は水耕栽培もはやっているけど、土による栽培も捨てたものじゃないのよ。でもハウス栽培では土壌病害が発生しやすくて、連作もせいぜい三年が限度と言われて来たのよ。トマトの大敵である青枯病や、ウイルス病がちょうどその項に発生して来るからね。そうなればもうお終いよ。だから、それをなくすにはまず土づくりから始めなければならないの。わたしたちが取り組んでいる研究はまさにそのことよ…”
“そうかい？　何か知らないけれど、大変なことをやっているんだね”と、ぼくは言った、“いずれにせよ、こんなに美事にトマトが実っているんだから、お前たちの研究も成功している、ということなんだろうね…”
セーラは、赤く実の成ったトマト園の中を、白衣を着たままの姿で一歩一歩歩いた。ビニールの半透明の天井からは、淡い光が、この園内に降り注いでいた。ぼくも、彼女に続いて、美事に成ったトマトを見ながら歩いた。

“素晴らしいね、科学の力って”と、やがて感心したようにぼくは言った、“一粒の種からこのような美事なトマトができるんだからね。土壌を改良すれば、病気にも強い、もっとたくさんの実の成るようなトマトもできるんだろうよ。科学というものは確かに素晴らしいものさ。改良を積み重ねることによって、具体的な成果というものが得られるんだからね。――お前が科学をやるなんて、昔のお前からは考えられなかったことだけれどね、でもやる以上は、一生懸命にやらなくっちゃ…”

“あら、わたしが実験したりしていちゃ不思議だと思うの？”と、セーラは振り向いて言った、“わたしは昔から、こういうことに全く関心がないわけじゃなかったわ。どちらかと言えば、勉強が好きだった方よ…”

“お前が勉強が好きだったのは知っているけどさ”と、ぼくは言った、“まさかこんな方面に向かうなんて、夢にも思わなかった。――でもいいことさ、その人生のあいだに科学に触れられる、ということは。ぼくも含めて大多数の人間は、科学とは程遠いところで生活して行くんだからね。別に科学に触れなくとも生活はできる。でもその生活を支えているのは、やはりなんらかの意味において科学なんだ。ぼくはそういうことができるお前が羨ましいよ…”

“兄さんって、ここの研究所を見て羨ましいって思ったのね”と、セーラは微笑みながら言った、“ときどき見学に来られるお客さんの中で、わたしたちの仕事をそういう風に言われる方もいるわ。でも決してそんなに楽しいことばかりじゃないのよ。研究って、本当に地味な仕事よ…”

セーラはそう言って再び、美事に成っているトマトを見つめた。ぼくも彼女と同様、トマトを見つめていたが、やがて、セーラはぼくの方に向いて、ポツリと言った。

“兄さんも早く、いい仕事が見つかるといいのにね”

ぼくはその言葉で、セーラの方を見た。

“無理さ”と、ぼくは小さく答えた。“…ぼくは何もできない。体を壊すことの他はね。もう仕事をやめてから何年になるだろう。そのとき以来ぼくはさすらい人さ。旅から旅へ渡り歩いて、いかなる世間にも属していない。今さら仕事って、そんなものはもう不可能さ…”

“――でもそれじゃ、寂しくはないの？”と、セーラは少し心配したようにぼくに言った、“人は仕事を通じて世間と交渉するものなのに…”

“寂しくないと言えば、嘘になる”とぼくは言った、“――でも、この寂しさは、人生の根源に触れさせてくれるから、それでいいのさ。いつまでも自分自身であり続けること――寂しさは、そのことの代償なんだ。人は変わって行く――それはそのことでいいことなんだ。でもぼくは、容易に進歩はできない。容易に世間に入って行くこともできない。その前に、自分の心の中でやることが余りにも多いのさ…”

“自分の心の中でやることって、それは何んなのよ”と、セーラは尋ねた。

“ホラまた、昔に戻ってしまいそうだ。セルッカにいた頃の昔にね”と、ぼくは言った、“その問題で、お前とも余りにも多く議論を重ねたことがあったじゃないか。お前は賛成はしなかったけれども、ぼくにとっちゃその問題をすり抜けるわけには行かないのさ…”

”そんなことを昔、言い合っていたみたいね”と、セーラは昔のことを思い出し笑いをしながら言った、“つまり兄さんは、あの「ブリキの太鼓」のオスカル少年っていうわけ？”

“まあそれに近いかも知れないね。成長を止めてしまった、という点において”とぼくは答えた、“世の中が余りにも矛盾に満ちて、耐え難かったから、ぼくは世間に入って行けなくなってしまった――そんな見方も確かに成り立つだろう。でも問題はそれだけじゃない。もっと深く、心の問題なんだ…”

“兄さんの心の問題って、わたしの研究テーマか、それ以上に複雑で、難しそうね”と、セーラは微笑みながら言った、“いずれにせよ、その問題が早く解決できればいいのにね”

“ぼくもそう願っている”と、ぼくは答えた、“――でもこの問題は、ぼくが一生かかっても解答の得られない問題かも知れないけれどね…”

恐らくそうだろう、とぼくは心の中で思った。ぼくが追求すべき問題――それは人生そのものだった。矛盾に満ち、時には甘美な誘惑で幻惑させ、また時には鋭いトゲで突き刺しもする、甘くも苦いこの人生そのものだった。ぼくは、その両面を知っているがゆえに人生のテーマを一つに絞ることは不可能だと悟ったのだ。ぼくは科学者にはなれない。商売人にはなれない。教師にもなれず、生徒にすらなれないだろう。だからと言って、僧侶になれるわけでもなく、技術者になれるわけでもない。しかしただひとつ、詩人にならなれるかも知れない。なぜなら、詩人は、人生というものを、一挙に、直観によって、把握しようとするからだ。人生の苦悩も、歓びも、その他あらゆる感情を、直観によって把握し、それを、あるがままに歌い上げることが可能だからだ。――人は、そんなぼくのことを、何もできないぼくの負け惜しみ、と言うかも知れない。確かに「詩」は空しく、それ以外の「仕事」は充実そのものかも知れない。しかし「詩」は、嘘、偽りのないその人自身を表すし、偽りの「仕事」に捕らわれている人の中にも、いつか、不意に、偽りのない「詩」に立ち返る人が出て来て、そのときには、その「詩」の真価というものが、認められるはずなのだ…

トマト園から出たとき、目の前にはまぶしいほどの緑が広がっていた。濃い緑の森。そして、明るい緑の芝。ぼくに続いて、セーラも、トマト園から姿を現した。

“何を見ているの？”と、セーラは、立って、ぼう然と森や、その前の白い研究所を見つめているぼくに向かって言った。

“いや、研究所がね”とぼくは答えた、“余り素晴らしいから、見つめているんだ。本当にいい空。あの白い雲。小鳥の声も聞こえて来るし、本当にいい眺めだ。こんなところで働けるお前が羨ましいよ。こんなところでのんびりと時を過ごしたい。何も考えることなくね…　お前がいつも弁当を広げている、というところはこの辺なのかい？”

“いいえ、もう少し向うよ”と、セーラは答えた、“向うに見える森の近く。あの近くには花が咲いていて、研究所を見渡すには一番眺めがいいの”

“そうかい、じゃ、そこへ連れて行ってよ”と、ぼくは言った。

やがて、セーラがぼくを連れて来てくれた所は、茶色のレンガ造りの建物のすぐ近くの、ロベリアやクレマチスなどが咲いている、なかなか感じのいい芝生の上だった。
“きょうみたいに晴れた日には、ここに坐って食事をしているの”と、セーラは微笑みながらぼくに言った、“兄さんも一緒に坐ってみない？　いい気持よ”
そう言って、芝生の上に坐って、ぼくを見上げるセーラの顔は、その全身を抱き締めてやりたいほど可愛いかった。
ぼくは、芝生の上に坐って、ぼくを見上げるそんなセーラを、立ったまま見下ろしながら、
“お前って、今が一番、幸福そうだね”と言った。
“そういう風に見える？”と、セーラは、明るい、生き生きした目をぼくに向けながら言った。
“ああ、幸せそうだ”と、ぼくは答えた、“そんなお前を見るのは、ぼくも楽しいけれどね、そんなお前の姿を普段見られないのが残念だ。それに引き較べ、しょっちゅうここでお前の姿を見られる研究所の連中こそ、羨ましい限りだ”
“どうして？”と、セーラは、相変わらず、ぼくを見上げながら言った。
“だって、こんな素敵な研究所で、お前が働いている姿が見られるからさ”と、ぼくは答えた、“他の連中だって、きっと考えることは同じなのさ。お前がここにいるだけで、楽しくなって来るんだ…”
“そう？　そんな風に見てもらえるんならわたしも幸せよ”と、セーラは答えた、“それで兄さんも、ここで働きたいの？”
“そんなことは言っちゃいないさ”と、ぼくは否定した、“ただね”と、ぼくは続けた、“お前がぼくの妹でよかった。こんな可愛い娘がぼくの妹だって、自慢できるからね。将来は別の男のものになろうとも、ぼくがいつまでもお前の兄であり続けるというこの事実を消し去ることができないということが、何に増して、ぼくは嬉しいのさ。ぼくは、お前がどんな男と結婚するのか、それから先どうなるのか、ずっと先の将来まで、お前のことを見守って行きたいものさ…”
“あら、そんな先まで、兄さんに監視されるなんて、窮屈よ”と、セーラは微笑みながら言った、“それに――結婚なんて、まだずっと、遠い将来のことよ…”
“本当に、お前にはいい相手がいないのかい？”と、ぼくは尋ねた。
“付き合っている方はたくさんいるわ。――でも、結婚なんて”と、セーラは答えた、“兄さんには気の毒かも知れないけれど、みんなお友だちで、それ以上ではないのよ。さっき、研究室でお会いしたあのポール・ストペイアさんだって、いい方だけど、仕事上の仲間であると同時に、いいお友だちよ。夕食の誘いを受けることもあるけど、それ以上の関係ではないわ…”

“どうしてなんだい？”と、ぼくは言った、“お前のような娘が相手なら、みんな、結婚したいって、願うはずなんだがなあ…”
“さあ、よくは知らないわ”と、セーラは首を振った、“それよりも兄さん、ここへ坐ってみたら？　風があって、とっても涼しいわよ”
セーラのその言葉で、ぼくは彼女の横に坐ることにした。すぐ後ろには樫の森が広がっていて、その端の木陰にもなっていて、確かに風があり、涼しかった。プーンと、森の香りや、花の匂いが、ぼくの鼻をついた。目の前に広がるグリーンの芝生は、春の光を浴びて、まぶしいほどだった。森の奥の方から聞こえて来る小鳥の鳴き声も、ぼくの耳に達していた。ぼくは、セーラの横に並んで坐ったが、やがて、あお向きに寝ころんだ。
“幸せだなあ、こんな風にお前と過ごせるのは…”としばらくしてから、ぼくは、夢見心地になって言った、“こうして、あの青い空や、空に浮かぶ雲なんかを見つめていると、いろんなことが、ぼくの頭に浮かんで来るよ。風が冷たくて、いい気持だし…”
“例えばどんなこと？”と、セーラは、相変わらず坐ったまま、今度は、寝ころがっているぼくを見下ろすように言った。
“例えば、あの木の葉のざわめきを耳にするだけでいいんだ”と、ぼくは言った、“それだけで、いろんなことが頭に浮かんで来る。まだママがいて、お前たちが小さかったときにも、きっとこの日と同じように、ぼくは、木の葉のざわめきに、耳を傾けたことがあったはずなんだ。そして、今と同じように、ぼくは寝ころがって、あの青い空を流れて行く、真白な雲を眺めたことがあるはずなんだ。――でも、そんな日は、どこへ行ってしまったのだろう？　それでふと、ぼくは思うことがあるのさ。こんなに気持のいい日なのに、お前といて、こんなに幸せなのに、この日も、やがては消えてしまうのだ、と。それでぼくはふと、思うんだ。ぼくがこの世に生まれて来た意味に、何があるのだろうって。ぼくは一体、何を見る為に、あるいは、何をする為に、この世に出現したのだろう？　幸せをつかむ為になのだろうか。それとも、不幸を見る為になのだろうか。ぼくには分からない。ただ今確かなことは、ここにぼくはいて、お前がそばにいて、空が夢見るように青くて、白い雲が流れ、風が木の葉をざわめかせている、ということだけで…
でも、お前は思わないかい？　一体、生ある物は、何をする為に、この世に生まれて来たのだろうって…”
“そんなこと”と、セーラは、にっこりしながら言った、“そんな難しいことなんか、あまり考えたことがないわ…”
“――でも、好むと好まざるにかかわらず、ぼくたちは流れて行く。あの雲のようにね”と、ぼくは言った、“そして、ぼくはこんな気持のいい日には、幸せを夢想するのが好きなのさ。この地上に、どんな幸せがあるんだろうって、夢想する。遠い子供の日には、確かに幸せというものが存在したはずなのだ。だが、年と共にそれは薄れて行く。というのも、子供の頃は、小さな幸せで満足し、年を重ねるたびに、大きな幸せでないと、人は満足しなくなるからさ。世の中には、王侯貴族の幸せ、というものも存在したのだ。でもぼくは、そんな幸せを望んだりはしない。ぼ

くが欲しいのは、この瞬間が永遠に続いて欲しいと願うような、そんな幸せなのさ…”

“でも、わたしたちは流れて行くって、兄さんは言ったじゃない”と、セーラは言った。

“だからぼくは思うのさ”と、ぼくは言った、“人生には、その一生のうちに、きらめくような一瞬がいくつかあればいいって。一生のうちに、そのような時をつかむことさ。そうでないと、単に流されて行くだけでは、つまらないからね。ぼくは常に、そうした一瞬をつかみたいと願って来た。お前に会いに来たのも、その為だったんだ…”

“でもわたしは、兄さんの期待にそえそうもないわ…”と、セーラは答えた。

“いや、お前自身は何もしなくても、お前の存在そのものが、ぼくに様々なイメージを与えてくれるからそれでいいのさ”と、ぼくは、青い空に浮かび上がるセーラを見上げながら言った、“女性でも、お前のように、想像力をかき立ててくれる女性が好きなのさ…”

“例えば、どんな想像力よ”と、セーラは尋ねた。

“お前を見ていると、ぼくの目には海が浮かんで来る。素晴らしい海さ。そして、海辺の素晴らしい庭に囲まれた一軒家のテラスにお前が立って、海を眺めているそんな姿が、ぼくの目には浮かんで来るのさ。それはつまらぬ想像かも知れないけれど、お前の存在そのものが、様々なイメージを、ぼくにかき立ててくれるのさ。そしてそんな女は、お前の他には、リサしかいない…”

“ねえ、気持のいい時も、いつまでも続かないかも知れないわ”と、セーラは言った、“そろそろ行かない？”

“どこへさ？”と、ぼくはセーラを見て言った。

“もうここの案内もざっと終わったし、帰るのよ”

“そんなの、ぼくはいやさ”と、ぼくは言った、“ぼくはまだまだここにいたい…”

“でも、風が少し冷たくなって来たみたいよ”と、セーラは言った。

“なに、こんな程度で、風邪なんか引くものか”と、ぼくは言った、“それよりね、ぼくたちが元の子供の頃に戻ることはもう不可能かも知れないけれど、ママに会いたいとは思わないかい？”

“会えればね”と、セーラは答えた。

“不可能じゃないさ”と、ぼくは言った、“そして、そのときにもまだお前が結婚していなければ、ママも一緒に、みんなで、さっき言ったような素晴らしい海辺の家で暮らすのさ。毎日、海を見て暮らすんだ。それは素晴らしいことだとは思わないかい？”

“きっと、素敵なことでしょうね”と、セーラは、それとなく答えた。

“ぼくの夢はそのことなんだ”と、ぼくは言った、“立派な家を設計して、ぼくたちみんなが一緒にそこで暮らすんだ。もちろん、リサも一緒だよ。そしてぼくたちの子供の頃がそうであったように、みんな幸せに暮らして行くんだ…”

“まるで夢物語ね”と、セーラは言った、“あれから随分色んなことがあったのに、兄さんはまたそこへ帰って行こうと言うわけ？”

“だってさ、結局のところ、ぼくの幸せは、お前たちと暮らす以外にないっていうことを知ったからさ”と、ぼくは言った、“リサとレビエで暮らした幸せの日々のことが、まるで昨日のことのように思い出されるよ。あそこは湖畔の館だったけど、それは素敵な、素晴らしい日々だった…”

確かにぼくたちは、あの館にいて、こんな天気のいい日、玄関の階段に坐って、木陰から見える湖を眺めながら、こんな風に語り合った日もあったのだ。あの日も風は快く、木の葉はざわめき、空は抜けるように青かった。リサはまだ都会への旅立ちを知らず、少女の幼っぽさがその顔に残り、真剣なまなざしで、ぼくの話に耳を傾けた。表情も豊かで、時には大げさな身振りを交えて、リサはぼくに語りかけた。そして、話しが終わると、ぼくたちは疲れたように肩を寄せ合い、うっとりしたまなざしで、もう一度、澄んだ、美しい湖を眺めやるのだった…

“ぼくたちは、日が傾いて、夕陽が庭を美しく染めるまで、存分に、あの館の一日を堪能したものさ”とぼくは言った、“そして、ぼくが幸せだと感じたのは、そのときだった。リサがそばにいて、一緒に夕暮れを迎えたあのときだった…”

ロマンチックな夕辺。そう、そんな夕辺を、ぼくはいつも迎えたかった。セーラとも、ママとも。それは、何もしない、怠惰な一日の終わりにこそ、ふさわしい。ただ夢見るだけで終わった一日の締め括りにこそ、ふさわしい。ロマンチックな夕辺は、悲しい夕辺でもある。そこに、何かしたという充実感はなく、ただ空虚さだけが漂う。しかし、ロマンチックな夕辺は、美しく、優しく、そして、寂しく暮れて行く…

“ねえ、セーラ”と、ぼくは急に体を起こして言った、“ぼくはお前が好きさ。たまらなく好きさ。――でもお前は、ここでの生活を愛している。それはそれでいいことなんだ。でも、ぼくはいつまでもここでお前と暮らしているわけには行かない。ぼくはママを捜しに行かなくちゃならないからね。だから、こうした楽しい日を過ごすのを、当分お預けにしなくちゃならないのが悲しいよ。――ここは本当に素晴らしいところだ。お前の言うように、ここから眺める眺めも素晴らしい。向うの研究所や森が、本当にきれいだ。――でも、もうそろそろ行こうか”

“ええ”

そう言って、ぼくたちは立ち上がった。素晴らしく晴れ上がった研究所。本当は、もっともっと見るべきものがあったかも知れないが、ぼくはもう去ることにした。セーラはまだ仕事が残っていると言うので、ぼくだけが先に帰ることにした。広場を去って、研究所に戻って来ると、例のポール・ストペイアと廊下のところでバッタリ会った。ぼくは、セーラを再び彼に預けた。そして、手を振りながら、ぼくたちは別れ、ぼくはひとり、農業試験場から出て行った。試験場の森や建物は、春の日ざしを燦々と浴びて明るかったが、ぼくは振り向くのが怖かった。もう再び見ることがないかも知れないこの施設を、もう一度見る勇気はぼくにはなかった。そこは、セーラとその仲間たちの施設であって、部外者であるぼくには、用のないものなのだ…

しかし別れ際、セーラは、ぼくを夜のパーティーに招待してくれた。ぼくはそれを楽しみに、この快い、素晴らしい研究所を、ゆっくりと去って行ったのだった…

　研究所を去ってから、ぼくは再びのどかな田舎道を歩くことになった。どこにでもあるような、ごく普通の田舎の景色――しかし、特別変わったことがないにせよ、田舎にはそれぞれの顔があり、ぼくは、このように違った顔を見せる初めての田舎を歩くのが好きだった。そこでは、ぼくの知らない人達の人生が息づき、何か思いがけない発見があるかも知れない――そんなことを期待させる初めての田舎を、このように、何も思い煩うこともなく、ただのんびりと歩いて行くのが好きだった。例えば、あの、黄色い木製の開き窓がまるで目のように見える、グリーンの屋根をした農家の中では、どんな人々の生活が繰り広げられているのだろう？　前には野菜畑が広がっており、何んの変哲もない、ごく普通の農家だが、このように想像力をかき立てる彼等の生活の中に、ぼくが入って行くということは、殆ど不可能なことなのだ。しかし、田舎では、このように一軒一軒が個性を持ち、想像力をかきたてるのに反して、都会では、ほとんど隣の家に関心を持たないのは、どうしたわけだろう？ そんなことを考えながら、ぼくは、ぼんやりと田舎の道を歩いて行った。しかし、ぼくが興味をそそるこれら農家の人々の生活の中に、それほど波乱があるとは思われない。恐らく、これといった事件もなく、平穏に、決まりきった毎日の生活が、くり返されて行っているのだろう。そう考えると、急に、それまで魅力に富んでいたこれら農家が、それほど輝きを持たない、色あせたものに、感じられるようになって来たのだった。ぼくがそれらの農家に期待したのは、平穏無事な人々の生活ではなく、その中から生まれ、旅立って行く、一人の波乱に富んだ人の人生だった。その人がどんな風な運命をたどるにせよ、もしそんな人生をたどる人があるのなら、どんな人であれ、きっとぼくの興味をそそったことだろう。そしてぼくは、それらの農家を目にして、たちまちのうちに、一人の少女の物語をつくり上げてしまうのだった。しかし、その少女はどこかぼくのママに似て、ママに似た運命をたどって行くことにぼくは気が付いた…

　確かに、リトイアのあの農家も、このようだった。ここがそうであるのと変わりなく、どこにでもありそうな、ごく普通の農家の顔を見せていた。そしてこの瞬間も、ここから遥か遠くにあるあのリトイアの農家も、明るい日射しを浴び、ぼくがこの前に見たときと変わらぬ姿を、今も見せ続けていることだろう。――だが、今から何十年か昔の、このような春のある日、一人のうら若い１７才の少女が、あの農家と、あの村から、遠い都会へ胸ふくらませて、旅立って行ったのだった。頭のいい、顔もきれいで、村の若者たちの誰からも愛されていた一人の少女が、その息詰まるような家の生活や、村の習慣からのがれるかのように、都会へ憧れ、ほとんど家出同然の姿で、こっそりと、一人巣立って行ったのだった…　――それがぼくのママだったということが、何か、目頭が熱くなるような、ある種の感動を、ぼくは、このうららかな農村の田舎道を歩きながら、覚えた。それから以後のことについては、ぼくは、途切れ途切れの情報しか、ママや、その他の人々の話から、得てはいなかった。その空白の時代を、だから何んとかして埋めたい、とぼくは思った。

その空白を埋める為には、数十年前のその少女と同じように、ぼくもあの大都会ーーメロランスへ行く以外にないだろう。そこでどんな生活が待っているのか、ぼくは、遥か昔の出来事だったその少女の人生の上に、自分の人生をも重ね合わせて、期待に目が輝くのだった。それは素晴らしい瞬間だった。メロランスという、リサのいる都会が、この瞬間、こんなにも素晴らしく、夢多い、興味の尽きせない都会に見えたことはなかった。ぼくは、静かな農村にいながら、ただ茫然と、向うの森の雲上にそびえる、未だ見えないメロランスを眺めるのだった。そして、その心の内は、そのときママが感じたかも知れない、あの浮き立つような心と、ほとんど同じだった。ぼくはその瞬間、１７才のときのママの心の内に乗り移り、そのときのママと同じような感情を共有していることに気が付いて、はっとするのだった…

　ぼくはまた、背後に森が広がる、薄いグリーンと、白い壁をし、窓からは、白いカーテンさえ覗いて見える、一軒の静かな家を見つめながら考えた。多分ーー想像力とは、このような家を目にして広がるのだ、と。その瞬間、ぼくの目に浮かんで来たのは、ぼくの幸福の原点とも言える、オディープでのあのなつかしい家だった。その家の存在は、長い年月の影に、なんと遠い彼方へと押しやられてしまったことだろう。それが今になって、突然ふと思い出されて、急に、なんとも言えないなつかしさが込み上げて来たのだった。ぼくの人生にとって、あのオディープの家ほど、様々な思いが込められて、なつかしいものは、何もない…　あのオディープの家へは、ある日突然、ママの義理の兄、レオン・ドーク夫妻が、ぼくたち、親のいなくなった兄妹を引き取りに来て以来、もう二度と見ることはなかったのだ…　人は誰しも、心の中に、そのような古い、なつかしい思い出というものがあるものなのだ。それが何かのお祭りだったり、子供の頃に遊んだ家だったり、その他の何かだったりする。ぼくにとって、オディープのあの家は、それらを引っくるめたあらゆる存在そのものだった。例えば、野原の彼方に沈む夕陽が美しかったとする。しかしそれは、オディープの野で見た夕陽が、やはり一番美しかったのだ。ーーぼくの子供の頃、汚れのない目で見た夕陽が、一番美しかった。雨の降る薄暗い昼日中、その異様な光景の中に、自然が持つ一種の恐ろしさのようなものを認めたとする。しかしやはり、あのオディープで感じたときのゾクッとするような恐怖感や、神秘性に及ぶことはないのだ。それはまだ、ぼくが子供で、世間を知らず、汚れのない純粋さが成さしめた技なのだろう。ぼくたちの世界はまだ小さく、世界と言えば、ぼくたちが住むオディープがすべてだった。だからぼくたちは純粋に物事に感じ、反応し、喜んだり、恐れたり、そして、遠くのものに憧れ、未来に希望を持ったりすることもできたのだ…　その世界の中心にあったのがあのオディープの家だった。そしてそこには確かに人間のドラマがあった。ぼくのパパとママがいて、それから、ぼくたち三人の兄妹がいた。パパは、海の近くにあるオディープの街の高等学校に勤め、ぼくたちは、何不自由のない生活をしていた。初めは、街のアパートで窮屈な生活を強いられていたのだが、そのうち郊外にいい家があるのが見つかりぼくが今、なつかしいと感じているあの家に移り住んだ。

それはぼくが十才のときだった。その日以後、ぼくたちは、日曜たんびに、郊外の森や野にピクニックに出掛け、美しい自然の洗礼を受けたものだった。あの、近くの山の上にそびえる天文台へ偶然行くことになったのも、ちょうどその頃のことだった。ぼくたちは、街の学校から、村の小学校に転校し、そこでいろんな友だちと出会った。とりわけ、ぼくに忘れ難い少女として浮かび上がるのは、あの謎に満ちた激情の女、ステリア。残酷さと美しさとを兼ね備えた彼女は数々の話題を投げかけた後、とうとう遠い街へ転校することになってしまったのだ。彼女はぼくたちのいる前で、蛙を飲み込んだり、ピンを飲み込んだりして、周りを驚かせた――　彼女とのそもそもの出会いは、セーラとの大げんかだった。どういうきっかけでそうなったのかは知らないが、校庭で友だちと遊んでいるとき、リサが血相を変えて、「姉さんがクラスメートとけんかしているから止めてあげて」とあわてて駆けつけて来た。ぼくは、けしからん奴だと思い、きっと悪い男の奴がセーラをいじめているんだろうと思って友だちを助っ人にすぐリサの案内する現場へ駆けつけて行った。既に現場では、大勢の子供たちの人だかりで、けんかしている当の本人たちの姿を見ることはできなかった。セーラの大人しい性格では、とうていけんかできるような状態ではなく、恐らく一方的にやられているだろうと思って、その弱い者いじめの相手をこらしめてやろうと、ぼくは人垣をかき分けた。するとそこにいたのは、驚いたことに、思っていたような男の子ではなく、ちゃんとした女の子であり、しかも、鼻息荒く、地面にあお向きに倒れているセーラの上に馬乗りになって、セーラの髪の毛を引っ張ったり、胸をなぐったりしていたのだった。苦痛にゆがんだセーラの顔は、今にも泣き出さんばかりだった。だのに周りに立っている子供たちは、ただ面白そうに見物しているだけで、誰も止めに入ろうとはしなかった。二人のとっ組み合いのせいか、近くに咲いている花壇の花が数本折れて、無残な姿をさらしていた。ぼくは彼女たちの姿を見るや、当然すぐけんかをやめさせに入った。馬乗りになっている見知らぬ少女の手を取って押しのけ、ようやくセーラを抱き起こすことができた。セーラは、口が切れて血を流し、額や頬もなぐられた為に、赤いあざができ、髪の毛も上着もスカートも泥だらけという、無残な姿だった。彼女は､ぼくが助け起こすなり、ワッと泣き出した。ぼくはそんなセーラを、目からこぼれ落ちる涙を、優しくハンケチで拭いてやり、また汚れた泥を衣服から払ってやった。そんなぼくたちの姿を見ていたのが、当の喧嘩の相手の少女だった。彼女は、そばに立ってぼくたちの睦まじい姿を見つめていたが、やがて、プイッと振り向くと、人垣をかき分けて、どこへともなく去って行ってしまったのだった…

　それが、ステリア（愛称シェリー）との初めての出会いだった。彼女は、強気の女だったが、決して心の中まで強い女ではなかったのだ。彼女は、近くの立派なお屋敷に住む一人娘だった。その大きな屋敷にはとても周りの友だちはたち打ちができず、シェリーは常に、自分を一段高い所から見下ろすように、周りを見つめていた。実際彼女は、自分のことを、“神の子”とさえ、名づけていたのだ。ぼくはその言葉を直接、彼女の口から耳にしたことがあった。

彼女はある日、自分のことを“神の子よ”と口にした。それを口にするシェリーは、いかにも誇らしげだった。しかもそんな彼女は、口にするばかりではなく、本当にそのことを信じてさえいたのだ。彼女は、欲しいと思うものは何んでも手に入れることができた。そしてその対象が、あの喧嘩の日以来、このぼく自身、ということになってしまったらしかったのだ…

ぼくはけんかの日以来、彼女のことはすっかり忘れてしまっていた。顔すらよくは覚えてはいなかった。ところが、しばらくしてから、セーラが、見知らぬ女友達をよく家に連れて来ることに気が付いた。ただ同じ二階でも、セーラの部屋とぼくの部屋とは別だったので、彼女たちと顔を見合わす、ということはほとんどなかった。またいつものように誰れかを連れて来て遊んでいるな、程度にしか思わなかった。

ところが、決定的なことがついに起こった。ぼくが自分でもすっかり忘れていた誕生日の朝、目が覚めてみると、机の上に、リボンに包まれた可愛らしい箱が置かれてあることに気が付いた。きっとセーラか、リサが置いたのだろうと思って、それを手に取って中をあけてみると、中からは、可愛らしい象の人形が現れた。それと共に、一枚の紙切れがヒラヒラと床の上に落ちたので、ぼくはそれを手に取って何気なく見たが、それに書かれてある文句を見て、驚いてしまった。それにはこう書かれていたのだ。

「お誕生日、おめでとう。シェリー」

シェリーって一体誰れだ。ぼくにはさっぱり分からなかった。それでさっそく、隣のセーラのいる部屋に行って尋ねた。

“あら、知らなかったの？”と、セーラは、ぼくが問い直したのを聞くなり言った。

セーラの説明では、あの子は、自分のことを兄さんも知っているので、ちょうどお誕生日のことだし、これをこっそりと、朝起きたときに分かるように置いておいてと頼まれたから、自分はそうしたまでだ、と答えた。

“でも、あの子って誰れだい？”と、ぼくはさらに尋ねた。

“ほら、最近よく家に遊びに来る、あの子よ。最初はあの子とけんかをしたけど、今は友だちなの”と、セーラは答えた。

それで初めて、ぼくはその子を知ったのだった。

セーラは、そんなぼくの様子を見て、ガッカリしたように、

“てっきり兄さんはあの子を知っていると思っていたわ。だって、あの子が自分でそう言っていたもの”と言った。

だが、知るはずもなかったし、それと同時に、シェリーという少女の存在に関心を持ったのも事実だった。

ぼくはさっそく、お礼を言う為にも、シェリーに会わせてもらうよう、セーラに申し出た…

シェリーとの出会いは、ぼくにとっては、意外さの連続だった。見たこともない大きなおうち。それなのに、その広い家で、両親とシェリーの三人しか暮らしてはいなかった。そのせいか、シェリーはいつも、人を小バカにしたようなところがあった。ぼくもよく、彼女にからかわれては、苦い思いをしたこともあったのだ。

しかし、そんな彼女がある日、自分の心の苦しみを、ぼくに打ち明けた。

“わたしが、自分のことを神の子と呼ぶわけはね…”と、彼女は、セーラのいないときに、切々とぼくに語りかけた、“わたしのパパは本当のパパじゃないの。それにね…”と言いかけて、彼女はゴクンと唾を呑んだ、“本当のことを言えば、ママだって好きじゃないの。わたしのママは、弱虫で、臆病者で、パパの言いなりばかりなっているの。本当に情けなくなって来るわ。ママはまるで、パパにくっついたいもむしね”

シェリーはそこで、思いがけなくも、自分の両親の仲がうまく行っていないこと、その為に、家の中にいることよりは、外に出て友だちといることの方が楽しいことを打ち明けたのだった。しかもその彼女が、このぼくに目をつけたらしかったのだ。彼女はまた、ぼくの家の両親が仲良くやっているらしいのを羨ましいとも言った。

“家には何んでも揃っているけど、愛情だけないの”と、シェリーは言った、“パパとママはいつも喧嘩ばかりしているの”

その彼女がある日突然、転校することに決まった。理由はよくは分からなかったが、風の頼りで聞いたところでは、シェリーの父親がどうも事業に失敗したらしくて、屋敷を引き払って、田舎の小さな家に移り住まなければならないハメになってしまった、ということだった。

あんなに羽振りのよかった彼女が、転校して去って行くときには、どこか哀れで、小さく見えたのが、印象的だった。

しかし、ステリアとの関係がそれで終わったわけではなかったのだ。セーラとステリアとは、その後も長く文通をかわしていた。そして、ステリアの一家が、オディープからはかなり離れた、ミリー・ベラーニの村に身を落ち着けたことを突き止めた。

それからしばらくしてからだった。突然一通の手紙がセーラの下に舞い込んだ。それは例のステリアからの手紙で、それには、“家出する決心をしたから、助けに来て欲しい”という内容が書かれてあった。セーラは一人だけではどうにもならず、さっそくぼくに相談を持ちかけた。ぼくは、理由はともあれ、セーラを伴って事情を聞きに行く決心を固めた。もちろん家族には内緒で、次の日曜日を決行の日と決めた。ミリー・ベラーニまで行くには、汽車やバスを乗り継いで行かねばならず、その為の旅費の捻出の為、数少ない貯金をおろしたり、また山でキャンプすることになるかも知れないので、その為の道具を、ママに分からないようにくすねるなど、周到な準備にかかった。しかし、決行の当日、セーラとぼくとの異様な行動をリサに見破られ、リサまでも連れて行くハメになってしまった。

ステリアの書いた地図を頼りに、ぼくたちはなんとか彼女のいる家にたどり着き、そこで無事彼女を救出することに成功した。あの、凧を上げる少年たちの姿を見かけたのも、ちょうど彼女

のいる村へ行く途中のことだった。

彼女の話しを聞き、両親を和解させる為に家出をするんだという彼女の決意に同情したぼくたちは、彼女と一緒に森に籠もることに決心した。食糧をそれほど持って来ていなかったうえ、道に迷ってしまったぼくたちは、それからの数日間、苦しい日を送らねばならなかった。

一方、シェリーの家のみならず、ぼくの家でも、大騒ぎが始まった。しかしとりわけ、効果が出たのは、シェリーの家の方だった。それまで家を顧みなかった父親も、今ようやく、シェリーに対する愛情に目覚めたのだ。彼は今初めて、貧しくとも、子供が幸せに過ごすことのできる愛情のある家庭が必要だということに目覚めた。それのみならず、夫人までもが、久し振りに明るさを取り戻した。夫が娘のことで必死になって動く姿を、ほっとしたまなざしで見つめていたのだ。その限りでは、シェリーの予言は確実に当たった、ということができたのだった。そのうち、心配して駆けつけて来たぼくたちの両親とシェリーの親とは合流し、合同しての捜査が始まった。

しかし、シェリーの本当の願いが、実はそこにはなかったのだ、ということがやがて明らかとなって来た。それのみならず、シェリーはもっと恐ろしいことさえ、考えていたのだった…

森に迷い込んで５日目の日に、ぼくはとうとう心配になって、みんなに言った。

“そろそろ帰らなくっちゃ。あんまり長いこといれば、家族の人に心配をかけることになるよ”

しかしそのことに、真先に異議をさしはさんだのは、シェリーだった。

“家族が何よ！ あんな家族なんか”と、彼女は、突然形相を変えて叫んだ、“パパもママも、みんな大嫌い。いやよ、わたしは帰らないわ。わたしはここで、一生暮らすの。そのつもりで出て来たのよ”

“でも食べ物はどうする？　そんなことできっこないさ”とぼくは言った。

するとシェリーは、急に心配そうな顔になった。

“じゃ、あんたたちは帰る気？”と、彼女は言った。彼女は、帰ることなど、少しも考えていないのだった。

そう言えば、ぼくたちといるあいだ、彼女は思う存分、この逃避行を楽しんでいた。彼女は、まるで羽の生えた小鳥のように、自由で、幸せそのものだった。それもみんな、この逃避行の仲間の中に、ぼくがいたからに他ならなかった。その幸せのまっただ中で、彼女は一抹の不安を感じていた。…帰ることは、死ぬことよ、ときっと彼女は、心の中でそう考えていたに違いなかった。

“だって、仕方がないだろう”と、やがてぼくは、何気なく言った。

しかし、この一撃は、彼女の胸にガーンと響いた。

“いやよ、いやよ！”と、彼女は突然泣き叫んだ、“帰らないで。お願いだから、あんたたちも残って。でないと… でないと…”

彼女はとうとうのどをつまらせて、泣いてしまった。
“どうしてそんなに無理を言うんだい”ぼくも困った顔をして言った、“このままじゃ、あと２、３日で、ぼくたち、飢え死にしてしまうよ。それでもかまわないのかい？”
すると、シェリーは、がぜん頭をもたげて、ぼくに食いかかるようにして叫んだ。
“飢え死にしたってかまわないわ。あたしは、あんたといたいの。ずっと、このままでいたいの。あたしは、あんたを愛しているわ。本当よ、あんたを愛しているわ”
“愛しているだって！”ぼくは驚いて言った。
まさか、ほんの友だちのつもりでいた彼女の口から、そんな言葉が飛び出すなんて、思ってもいないことだったからだ。すぐ脇で、このやり取りを見ていたセーラも、驚いた表情を隠し切れなかった。
“そうよ、だから、わたしと残って。でないと… でないと…”
シェリーはそう言って駆け出した。
“どこへ行くんだ、待って、シェリー！”ぼくもあわてて、彼女を追いかけた。
セーラもすぐぼくたちの後を追った。しかしシェリーは、どこまでも駆けて行った。息を切らせながら、しかし、少しも止まることなく、とうとうぼくが彼女を追いつめたとき、シェリーは断崖の上に立っていた。
“危ないじゃないか、そんなところにいちゃ”と、ぼくは、そんな彼女を心配して、言った。
“いいの、ほっといて”彼女はすっかり、目を泣きはらしながら言った、“わたしは死なないわ。死なないようにできているの”
それから、彼女は初めて、今まで黙っていたことを打ち明けた。
“わたし、本当は、家出が目的なんかじゃなかったのよ。ママとパパが仲直りしてくれなんて、あんなのは口実に過ぎなかったの。本当は、ただあんたに来て欲しかっただけ。あんたと、こうして、山で過ごしたくて、それで手紙を出したの。あたし、あんたとずっとこの山で過ごすつもりだったの。でも、それが無理だということが、今やっと分かったわ。――あたしね、あんたと初めて会った頃、セーラみたいに、あんたの妹に生まれて来ればよかったと後悔したわ。そうすれば、わざわざこんなことしなくても、同じ屋根の下で暮らすことができたもの。――でも、もう済んだことよ。わたしは何も、不平は言わないわ。わたしはね、本当はもっと恐ろしいことさえ考えていたの。このキャンプのあいだ、セーラをこの崖におびき寄せて、突き落とそうって。そうすれば、もう邪魔者はいなくなるし、あんたをもう永久に独占することができるんですもの。――でも、そんな勇気はついに出なかったわ。本当にごめんなさいね、わたしの為に、こんなところまで連れて来てしまって。でも、もうあんたたちを帰してあげる。あんたたちにとって、わたしはもう用のない人間ですものね”
そう口走るシェリーの目には、いつのまにか、涙がこぼれていた。
“――でも、でもよ、あの世でならきっと、妹になれるわね。だからわたし、あの世で待っている。あんたがやって来る日をずっと待っているわ…”

“なにを言い出すんだい。君はいつまでもぼくの…”と、ぼくが言いかけたときだった。
“さよなら、あの世でまたね…”と言い残して、シェリーの体はスーッと断崖の彼方へ、吸い込まれるように、消えて行ったのだった。
驚いてぼくたちが駆けつけたときには、シェリーは、遥か下の岩場で小さく横たわっていた。それが、ぼくが目にした、シェリーの最後の姿だった。
捜索隊がやって来たのは、それから数時間してからだった。ぼくたちが、断崖の下に行くこともできず、へとへとになって森の中をさ迷っているところを、幸運にも彼らと出くわしたのだ。捜索隊はすぐ、シェリーの死んでいる現場に駆けつけた。
“一体どうして、あの子は崖から落ちたの？”と、彼らはぼくたちに尋ねた。
それに対しては、ぼくたちは冷静に答えた。
“事故だよ。だって、本当のことを言ったって、大人は誰れも信用してくれないもの”

…あのときの事件が、一軒の家を目にしたとき、ふとぼくの頭に浮かんで来たのだった。その家が、あのとき、シェリーがいた家に、どこか似ていたせいなのだろうか。いずれにせよ、シェリーはあのときで姿を消してしまったわけなのだが、ぼくの気持としては、今も彼女はどこかで暮らしているような気がしてならない。とするなら、彼女は今も、ぼくのような男をつかまえては、からかったりしているのだろうか。そんな、ぼくほどに年取ったシェリーが、今もどこかの町にいて、例の独特のユーモアと、残酷さとを兼ね備えながら、楽しく、威勢よく暮らしているような気がしてならなかった。そしてもしそれが本当なら、ぼくはそんなシェリーに喜んで、会いに行きたい。そして、多分、もう既に結婚しているはずのシェリーの家族や、シェリーの娘たちの話しについて聞きたい。――しかし、実際は、もうそういうことがあり得ないことなのだ、ということが、あの無言の空の青さに似て、ぼくの心を空しくさせるのだった…

いずれにせよ、シェリーとは、シェリーが言ったように、あの世でなら会えるかも知れない。ぼくが生きているあいだは、もうそんなことは不可能なのだ。

しかし、シェリーが代表する子供の時代にも、様々な思い出があった。人形芝居、児童劇なども、そのうちの一つだった。ぼくたちはよく、学校や、村の公民館でやるそういった芝居を見に行ったものだった。そこでは、美しい姉さんや兄さんたちが当時の姿そのままに劇を演じてくれたり、あやつり人形を見せてくれたりして、ぼくたちを夢の世界に誘ってくれた。実際、ぼくたちは、夢中になって、彼らが見せてくれる世界に入り込んだものだった。無論その中には、ぼくの妹たちもいたし、あのシェリーもいた。熱心に劇を見入るそのときだけは、ぼくたちの心は一つになった。とりわけ美事だったのは、明るいライトに照らされている、背景に描かれている風景だった。

山があったり、川が流れていたり、どこへともなく、ぼくたちを誘う、曲がりくねった道や、森があったりした。実際とは違う、その夢誘うような絵の風景が、その前で演じられている主人公たちと共に、ぼくたちをすっかり、おとぎの世界へと連れて行ってくれたのだった。ぼくはひそかに、その道や森の向うにはどんな世界が待っているのだろうかと想像した。それらの、実に美事に描かれた絵は、ただ想像力をふくらませてくれるだけであって、それが、一枚の絵で出来ているだけであって、その後ろには、ただ薄暗い舞台装置や道具類が置いてあるだけの何もない世界だとは、とうてい信ずることができなかった。そのようにしてぼくたちは暗い観客席にあって、そこだけが明るく照らされている舞台を目にしながら、「赤ずきん」や「三匹の子豚」や、「長靴をはいた猫」などの、童話の世界の中に入って行った。それはぼくたちの心にあって、不思議な世界との出会いだった。実際、そのときにだけ存在する、愉快で、楽しく、心が沸き立つような体験だった。――その楽しい数時間が終わり、観客席にライトがともって、お互いの顔を見合わせるとき、ぼくたちはもう一度ライトが消えて、今と同じか、また別の童話が始まるのを祈るのだった。

…そして今、その同じ楽しみを、大人となったあのセーラが、子供たちに与えようとしている。それは素晴らしいことだと思った。

様々な思い出が詰まっている子供時代。黄金時代――　ぼくは、黄金色に染まった夕暮れの空を見つめながら、様々だった子供時代をなつかしみつつ、ゆっくりと、田舎道を帰って行った。行き先は、セーラの家と、それから、セーラが案内してくれた児童劇とだった…

――ぼくが、セーラの案内状に従って、ルブライラの小さな街角の劇場に着いたのは、もうすっかり日が沈んでから、間もなくのことだった。劇場と言っても、正式なものではなく、とあるスポンサーの行為によって借りたものだった。中は小さく、ぼくが入ったときには、劇はもう既に始まっていて、暗い観客席に縮こまった大勢の子供たちが（と言っても、せいぜい４、５０人の子供たちだったが）、静かに、そして、退屈をせず、熱心に見つめていた。奥の舞台の上では、ライトが照らされ、数人の姉さんや兄さんたちが劇を演じていた。その中には一人、明らかに子供と思えるような女の子もいた。ぼくは、劇場に入ると、そのまま坐ることなく、ドアの陰に立ったまま、しばらくこの光景と、舞台とを楽しもうと思った。演じられていた題目は、かの有名な童話「砂の妖精」を基にした劇だった。かの、奇妙な形をした、サミアッドとおぼしき妖精も、それらしいぬいぐるみを着た俳優が演じていた。そして、赤ん坊を除く４人の兄妹たちは、ぼくの知らない俳優たちが演じていた。セーラはどこかと目を凝らして見たが、やがて、見つかった。幕の陰でピアノを弾いているお姉さん――それがセーラだった。

物語はちょうど、兄妹たちの願いがかなって、城の城主となったものの、思いがけなくも敵の攻撃を受けるはめになってしまったあの場面を、いささかオーバーに、いかにも恐ろしそうに演じていた。

舞台の俳優たちが真剣なだけ、見る子供たちの方も真剣だった。そして、敵が城の中に入り込もうとして、斬り合いもあり、いよいよクライマックスにさしかかったとき、例によって夜となり、魔法が切れて、元の家の場面に戻るのだった。まさに、主人公の兄妹たちが危うしとなっていただけに、この歯切れのよい場面転換は、きっと子供たちの胸に安堵の思いをもたらしたことだろう。たわいのない物語と言ってしまえばそれまでなのだが、観客の子供たちの方はみな真剣なのだ。それはさておき、場面転換のところで、黒い装束をしたナレーターが登場して来て、一つの物語が終わり、次の物語が始まるまでの継ぎの役割を果たしたが、それがセーラだと分かった。セーラは子供たちに人気があるらしく、舞台に登場すると、拍手でもって迎えられた。

“さて、みなさん”と、セーラは、落ち着いた口調で、子供たちに語りかけた、“今ようやく夜となって、サミアッドの魔法が解けたところです。子供たちは変なものを願い事したために、大変な目に合うところでしたね。――でもこれで、サミアッドとのお付き合いが終わったわけじゃありません。またあしたという日があります。あしたには、子供たちはどんな願い事をサミアッドに言って、サミアッドを困らせるでしょうかね。結局、困ることになるのは自分たちの方なのに。では、翌日の物語をとりあえず見てみましょう。どんな物語が始まるか、今から楽しみです。それでは、もう翌日が始まりました。どんな物語になるか、また後でお会いしましょう…”

そう言ってセーラは舞台の陰に引っ込み、それと共に次の物語が始まるのだった。赤ん坊が青年になるあの物語だった。ところがしばらくして、その青年役の、恋人役として登場して来たのは、他ならぬセーラ自身だった。セーラは、自転車を修理してもらう為に、その青年の手を借りた。本当は赤ん坊に過ぎないその仮の姿の青年との仲を引き裂こうと必死になっている浮浪者のような子供たちを尻目に、青年の方は、セーラを口説こうと、あの手、この手を使うのだった。

“あの、汚い姿をした子供たちはだれ？”と、セーラは、素っけなく尋ねた。

“きっと、この辺をうろついている浮浪者たちですよ。彼らにはかまわず、さあ、ぼくが家まで送りましょう”と、青年は礼儀正しく答えた。

“ダメですよ、お嬢さん”と、子供のうちの一人、アンシアが叫んだ、“こう言っては信じてもらえないかも知れないけれど、その人はほんの赤ん坊なのよ。もうすぐ日が暮れるから、そのときになって、赤ん坊が自転車の上に乗っているという、世にも恐ろしい光景を、あなたは目にすることになりますわ。そうなってもかまわないって、言うんですか？”

それでも行こうとする二人を、子供たちは、すがりついたり、大声で叫んだりして、必死で止めようとするのだった。

とうとうセーラは、子供たちが気味悪くなり、その青年をさし置いて、一人で自転車に乗って、帰って行ってしまった。

そのとたんに、子供たちは歓声を上げた。ただ一人、困ったような、不服顔をしているのは、魔法にかけられて青年になってしまった、赤ん坊の「ひつじちゃん」だった。

　ところで、ぼくが目を留めたのは、やはり、大きな画面いっぱいに描かれた､書割の夢あふれるような、田舎の道だった。セーラが、自転車に乗って帰って行ったことになっているはずの、ライトに照らされて、森の方へと曲がりくねって延びているあの道は、どんな世界へと続いているのだろう？　それが夢を誘うような風景だけに、いつもぼくは、そのことが気になったのだった。そして――恐らくは、その道の彼方には、夢がいっぱい詰まっている、かのおとぎの園が待っているのだろう。そしてそれこそは、ぼくが一度は訪れてみたい国、あるいはもう、あのシェリーは、そこで暮らしているのかも知れない。そしてもしそれが本当なら、ぼくも早く訪れてみたいものだ。そこには、戦争も言い争いもなく、人々が平和でのんびりと、森や池のある美しい風景の中で、愉快な小人たちや、白鳥や、森の妖精たちと、毎日を、愉快で、楽しく暮らすことのできる国。本当に、そんな国へ行くことができたなら、どんなに楽しいことだろう。――そして、このような児童劇は、ぼくたちの心に、そのような夢と希望とを与えてくれるものなのだ。ぼくは、自分自身が童心に戻って、他の子供たちと同じように、この舞台が、もっともっと続いて、観客席が永久に明るくならないことを願った…

　…しばらくして再び､ナレーターのセーラが、幕間に姿を現した。

　“さて、物語もいよいよ終わりに近づきました”と、セーラは、子供たちに語りかけるように言った、“子供たちも、いよいよ、サミアッドと別れなければならないときが近付いて来ました。どうしてだか分かりますか？　サミアッドは、皆さんが知っての通り、人間の願い事をかなえてあげるためには、体を大きく膨らませなければなりません。願い事が増えれば増えるほど、体をより大きく膨らませなければなりませんし、その為には、非常な体力を消耗しなければなりませんのです。それで、一日ひとつの願い事と決めていたんですが、それでもとうとう、サミアッドは疲れ果ててしまいました。それでとうとう、子供たちに、願い事をかなえるのはこの辺でかんべんしてくれないかと、注文をつけて来たんです。子供たちは、ある事件に巻き込まれていた為に、不承不承、そのサミアッドの最後の頼みを、聞き入れてあげなければなりませんでした。その事件とはどんなものだったか――早くみなさんは見たいでしょう。さあ、いよいよ、最後の物語の始まりです…”

　そう言って、セーラは再び、幕の後ろ側に姿を消した。しばらくして始まったのは、「砂の妖精」でも最終章に当たる、あの「最後の願い事」の場面だった。例によって子供たち四人が、朝ごはんの最中に何か願い事についていろいろと話し合っている。そのときに二つの話しが持ち上がった。一つは、ずっとおばあさんの看病の為に家を留守にしていたお母さんが久し振りに戻って来ること、今一つは、お手伝いのマーサが語った「チッテンデン夫人」の宝石の盗難の話し。末妹のジェインが、この二つの事を結びつけて、帰って来るお母さんへのプレゼントとして、盗まれた宝石類が全部家にあればいい、と漠然とした願い事をしたことから話しはややこしくなって行くのだった。

　ところがやがて、家に到着したお母さんが現れたが、当時の婦人の服装をし、ボンネットをかぶったそのお母さんは誰かと見ると、これがまたセーラだった。

子供たちひとりひとりに抱きつき、たくさんの荷物を子供たちに運んでもらうと、やがてセーラは自分の寝室へ行って、美しいボンネットをとり、それから化粧台に向かった。ブラシで髪の毛をすく仕種を始めたが、そのとき、最初の盗品の指輪が見つかった。他にも、化粧台の引き出しからも、衣装箪笥からも、次々と盗品の宝石が出て来るのだった。お母さんは、どうしてこんなことになったのか分けが分からず、ついに子供たちが、「チッテンデン夫人」の屋敷から盗まれた盗品かも知れないことを白状すると、警察を呼びに行く、と言い出した。犯人は、使用人マーサのいいなづけのビールかも知れないと、お母さんは、状況判断から、そう疑い出したのだ。しかしそれはすべてサミアッドがかけた魔法の成せる技だと知っている子供たちは、必死に、サミアッドに救いを求める為に、例の砂場へと駆けつけるのだった。日光浴の為、砂場に出ていたサミアッドはすぐ見つかり、逃げようとしたが、すぐ子供たちにつかまってしまった。そこで子供たちは、サミアッドの苦情を聞き、最後の願いを頼むのだった…

一つ。「チッテンデン夫人」の宝石は盗まれていなかったことにすること。

二つ。お母さんが、警察へは決して到着できないようにすること。

三つ。お母さんが、ダイヤモンドの事件のことは、全部忘れるようにすること。

　それと、他に、マーサもこの件について忘れ、お母さんが、ビールを犯人だと疑ったことを忘れるようにして下さい、とサミアッドに頼んだ後、あのサミアッドの最後の頼みを、子供たちは聞くのだった。

“どうかあんたたち”と、サミアッドは老いぼれた口調で言った、“わしのことは、決して、誰にも話すことがないようにとな、願っておくれ。そうでないと、大人たちはわしのことを聞きつけて、わしを決して離さないようにした上で、あんたたちのような子供じみた願い事なんぞじゃなく、もっと現実的な、打算的な願い事をするようになるだろうよ。例えば、社長になりたいとか、大もうけをしたいとか、いやな相手をやっつけたいとか、そうなれば、世の中はもうメチャクチャじゃ。そして、その魔法も、夜になってもなお続くような方法を考えつくかも知れぬ。そんなことに引っ張り出されるのは、わしは御免だからな。わしはもっと自分の時間を持って、のんびりとしていたいんじゃ…”

そう言って、サミアッドは、最後の願い事の為に、体を大きくふくらませた後、小さくしぼんでしまうと、そのまま、砂をほじくるようにして、砂の中に消えて行ってしまうのだった。

子供たちが悲しそうな顔をして家に帰って来ると、やがて再び、母親のセーラが現れた。

“ああ、子供たち”と、セーラは言った、“もう、お茶が欲しくて死にそう。お湯が沸いているか、走って見て来てちょうだい”

“だいじょうぶのようね”と、子供のジェインがアンシアにささやいた、“おかあさん、もう覚えていないわ”

そこへ、猟場番人のビールが立ち寄って、チッテンデン夫人の宝石が実は盗まれていなくて、女中が保管していたというニュースを持って来て、この事件もすっかりけりがついてしまったのだった。

そして、子供たちが、「サミアッドにまた会えるだろうか」と気にしているところで、だんだん舞台が暗くなって、この物語も終わって行くのだった。

やがて再び、ナレーターとして、セーラが幕間から現れた。しかし、服を着替える時間がなかった為か、あるいは、わざとそうしているのか、さっきのあのお母さんそのままの服装で、セーラは登場した。

“さて、みなさん”と、セーラは言った、“子供たちはもうサミアッドに願い事はしない、と誓いましたけれど、また会うことはできましたのですよ。でもそれは、ずっと遠いところで会ったのです。そこはどこだか――それは、あなたたちの想像にお任せします。サミアッドがそのことを言って欲しくないと言っているもので…　それはともかく、この物語は、子供たちが、ロンドンという都会から、田舎へ引越して来たことから始まりました。その田舎の遊び場として、砂利採り場を選んだとき、長いあいだ世間から隠れ、眠っていた「砂の妖精」サミアッドを発見したんです。それは、子供たちに夢をかなえてくれる妖精でした。結末はどれもうまく行きはしませんでしたけれど。あんたたちも、こんな妖精に会って、夢をかなえてもらいたいと思いますか？もし本当に欲しいと思うなら、まずは、違う町へ引越してみることですね。だって、あんたたちが今住んでいる町の遊び場は、あんたたちが知り尽くしているし、サミアッドのような妖精が住んでいないことも分かっているんですもの。――でも、別の町へ行くのなら、そこで、サミアッドのような妖精に、巡り会えないとも限りませんよ。この物語の主人公たちが、実際に、そうすることによって、サミアッドに巡り会ったんですもの。ねっ、このように、子供のときの引越というものは、あんたたちに多くの夢を与えてくれるものなんですよ。たとえ、サミアッドのような妖精に出会わなくとも、そのときの体験というものは、後になってもきっと、あなたたちの心に残るはずのものです。それから、引越というものが出来なくても、別にがっかりなさらないで下さい。今までとは違って、ちょっと遊び場を変えるなりすれば、そこではまた違った楽しみが見えてくるかも知れませんからね。そして、運が良ければ、本当にサミアッドのような妖精に出会えるかも知れません。しかしそのときには、この子供たちがやらかしたような失敗の願い事をするんじゃなくて、もっといい願い事をしましょうね…　さあこれで、わたしの話しももう終わりです。帰りは、どうか気をつけて帰ってくださいね…”

すると、子供たちから、一斉に拍手が沸き起こった。そのときに、とうとう観客席に明かりがつき、一切が終わったことを告げた。子供たちは立ち上がり、ある者は背伸びをしたり、別の者はあくびをしたりで、ぞろぞろと部屋から出て行った。すると出口のところに、さっきのあの登場人物たち――主人公の子供たちや、家政婦のマーサ、猟場番人のビール、それにサミアッドたち――が立っていて、出て行く子供一人一人に握手をし、声を掛けた。やがてそこへセーラも加わり、子供たちに握手をすると共に、別れのあいさつを送っていた。ぼくはその場に立ったまま、事の一部始終を見守っていた。そして、最後の子供が帰ってしまうと、ようやく終わったように、団員たちは、ぼくのいる室内に戻って来た。

ビール役の青年は、ぼくよりも少し年上のように見えたが、ぼくに一瞥をくれただけで忙しそうに後片付けを始めた。サミアッドのぬいぐるみを着せられていた男も、今ようやく素顔を現し、暑かったせいか汗をぬぐっているところを、セーラにからかわれたりしていた。子供に見せかけていた兄さんや姉さんたちも、かつらを脱いだり、化粧を落とす為に、控え室へ消えて行った。そんな中で、セーラが目ざとくぼくを見つけると、まだ、母親役の衣装を着たままの姿で、ぼくのいるところにやって来た。向うでは、ぼくの気に入っていた書割を、道具係の男たちが片付けていた。

“どう、楽しかった？”と、セーラはぼくに尋ねた。

“ああ、久し振りに、こんな劇を見せてもらったからね”と、ぼくは答えた。“まるで子供時代に戻ったような気になった”

そう言うと、セーラは、にっこりした。

“わたしたちの仕事と言えば、子供たちに夢を与えることよ”と、セーラは言った、“大人になっても忘れないような夢…　でも、よく来てくれたわ”

“お前が是非見てもらいたいって、言ったからね。どんなものか見に来たのさ”

“それでどうだった？”と、セーラは尋ねた、“兄さんの感想は？”

“ぼくも余り知らなかったけれど、「砂の妖精」という童話があることだけは知っていたよ”と、ぼくは答えた、“――でも、サミアッドって、あんな変てこりんな恰好をした妖精なのかい？”

“そう、目はかたつむりみたいで、こうもりみたいな耳をしていて、胴体はくもで、手足は猿なの”と、セーラは答えた、“だから、ぬいぐるみをつくるのが大変だったわ。とりわけ、あの伸び縮みする触覚のような目を工夫するのが、一苦労よ。でもよくできていたでしょ”

“ああ、でもあれは、自分たちで製作したのかい？”と、ぼくは尋ねた。

“もちろんよ！”と、セーラは強調するように言った、“他に誰れがしてくれるの？　わたしたちは、そんな名の通ったプロの劇団なぞじゃなく、ほんの小っぽけな、アマチュアの劇団に過ぎませんからね。――でも行く行くは、せめて、自分たちの劇場みたいなものを持ちたいとは思っているわ…”

“まあ、夢を与える、という意味では成功していた、と思えるよ”と、セーラの童話劇を結論づけてぼくは言った、“子供たちも、真剣な目で劇を見つめていたからね。あの観客の反応で、舞台が成功したか、失敗したかが分かる、というものじゃないかい。そういう意味では、成功だったよ…”

“ありがとう、そう言ってもらって”と、セーラは、嬉しそうに答えた。それからセーラは、話題を変えたように、“ねっ、このあとで、団員のみんなと、打ち上げのパーティーが、近くのバーであるの。他にも、研究所の人も来るし、兄さんも来てくれるでしょ。きっと楽しいと思うわ”

“もし途中で退席してもかまわないと言うのなら”という条件で、ぼくも参加することに決めた。
“じゃ、さっそく、服を着替えに言って来るわ”と、セーラは言った。
彼女がそう言って、一世紀前の、当時の婦人たちで流行した、腰の締まった、すその長いスカートと、肩をふくらませた袖つきの上着といった、いわゆるギブスンガールスタイルで去って行こうとしたとき、ぼくはそんな彼女に声を掛けた。
セーラが振り向くと、ぼくはにっこりしながら、そんなセーラに言った。
“なかなか似合っているよ、その服装。本当にお前が、お母さんみたいに見えて来るから不思議さ”
“あら、わたしはまだ、お母さんなんかにはなりたくないわ”
そう言ってセーラは、スカートのすそを持ち上げるようにして、控え室へと消えて行った…

ぼくが、セーラや、その劇団員の人々と共にバーに入ったのは、かれこれ八時頃だった。セーラが、ぼくのことを他の人々に紹介し、ぼくに腕を組んで、バーまで運んでくれた。そこは、ここの劇団員が日常愛用しているところと見えて、カウンターの奥のヒゲを生やしたマスターが快く迎え入れてくれた。他の人々はみんな顔なじみだったが、ぼくを見るなり、
“新顔かい？”と彼は言った。
セーラはそれに対しては、
“兄さんよ。今、家に来ているの”と説明してくれた。
“兄さんかい。確かにそう言えば、少し似たところがあるね”と、マスターは、グラスを拭きながら、機嫌よく答えた。
“それで、いつものやつでいいのかい？”と、マスターは言った、
セーラも、セルッカで酒を覚えてから、随分なる。昔は、一滴も飲めなかったセーラだったが、今ではマスターに、飲む酒を覚えられてさえいるのだ。ぼくはふと、何も飲めなかったうぶな頃のセーラのことを、なつかしく思い出した。
“ええ、兄さんも一緒でいいでしょ”と、セーラは振り向いて言った、“マッティーニよ。それで乾杯するの”
マッティーニ。ぼくが教えたカクテルだった。それを、セーラは今でも愛用しているのだ。そのことを知ってか知らないか、セーラはやけに朗らかだった。
“ああいいよ”と、ぼくは答えた、それから小声で、セーラだけに聞こえるように、“これは、お前のおごりなんだろう？”
“今晩はかまわないの”それに対しては、セーラは、すんなり答えてくれた。

いくつかのテーブルを囲んで、劇団員たちのささやかなパーティーが、そうして始まった。

乾杯をし、歌を歌ったり、話し合ったり、実になごやかなパーティーだった。他に、見知らぬ客も来ていたが、彼らは隅に引っ込んでいた。やがて、酔いが回って来た劇団員に、彼らも歌の仲間に入れられるハメになってしまった。それから、お定まりの通り、誰かがピアノを弾き、それに合わせて、ダンスが始まった。セーラは立ち上がり、最初の相手に、このぼくを選んでくれた。軽やかなワルツに合わせて、ぼくは、セーラと一緒に踊った。

“久し振りだよ、お前と踊るのは”と、ぼくはいい気になって言った、“セルッカ以来じゃないのかい？”

“そうらしいわね”と、セーラも、顔を赤く染めて、気持良さそうに答えた。

“長いあいだ会っていなかったのに、まるであの頃に戻ったみたいだ”と、ぼくはセーラを抱きながら言った、“あのときも、お前やリサを、ときどきダンスホールへ連れて行ってやったものさ。あの頃のお前たちはまだ、うぶで可愛らしかった。もちろん今だってきれいだけど、あの頃はお前たち、酒も飲めなかったんだからなあ…”

“あの頃のわたしと、今のわたしと、どっちが好き？”と、セーラは、ぼくを見て言った。

“どっちもいいよ”と、ぼくはすかさず答えた、“あのときはあのときでいいし、今は今のセーラでいい。どっちもそれぞれに魅力的さ。その魅力を、いつまでも失わないで欲しい。それがぼくの願いさ…”

“兄さんって、口がうまくなったわね”と、セーラは、にっこりして言った。

“そうかい？　当然のことを言ったまでだよ”と、ぼくは答えた。

“ところでお前は、これからもこの劇を続けて行く気なのかい？”と、しばらくしてからぼくは言った。

“ええ、もちろんよ”と、セーラはぼくを見て言った、“今のわたしにとって、これのない自分なんて考えられないわ。もっともっと勉強することがあるし、児童劇と言っても、とっても奥が深いものよ。それに――わたしも、わたしなりに夢を持っているの。それはね、素晴らしい童話を創作することと、それともう一つはね、できれば、森の中に住んで、子供たちに夢を与える児童劇場を持つことよ。それが実現できる為には、もっともっとお金を稼がなくっちゃね…”

“そうかい、いい夢だね”と、ぼくは言った、“森の中で暮らして、童話に打ち込むなんて、まるで夢のようさ。――でも、お前ならきっとできる。ぼくは、お前の夢が実現できるよう、応援しているよ”

“そう、嬉しいわ”と、セーラも笑顔で答えた、“そのときには、兄さんも、きっと呼んであげるから”

ぼくは、セーラと踊りながら、そんなセーラをじっと見つめた。快いピアノの伴奏が、ゆったりした、この場にピッタリの甘いメロディーを奏でていた…

“…しかし、お前とこうしていられるのも、もうしばらくかも知れない…”と、やがてぼくは言った。
“どうしたの？　もう帰るの？”と、セーラは、少し心配したように、ぼくを見て言った。
“いや、かつてママが旅立ち、今はリサも住んでいる、メロランスへ行こうか、とも思ってね”と、ぼくは答えた、“――でも、ここは本当にいいところさ。お前の友人たちも、みんな素敵な人ばかりみたいだし、お前は本当に恵まれていて、羨ましいぐらいさ。だから――こう言っちゃなんだが、お前の生活を乱してはいけないって思ってね…”
“わたしの生活を乱すなんて！”と、セーラは叫んだ、“そんな、兄さんなのに、わたしはそんな風に思ったりなんかしないわ。むしろ大歓迎よ”
“お前がそう言ってくれるのは嬉しいんだけど…”と、ぼくは弱々しく言った、“でもやはりここには、お前の、お前たちの生活がある。それは、このぼくの生活とはやはり、別のものなんだ…”
“一体、兄さんは何が言いたいの”と、セーラは、ぼくの目をじっと見つめて言った。
“つまりさ、口ではうまく言えないんだけど”と、ぼくは答えた、“つまり、ぼくが常日頃から感じて来たあれなんだ。あれ――つまり、ぼくの孤独さ。街や村を通るとき、一軒や何軒かの家があって、それが、いかにも裕福そうで、暖かくて、平和で、幸せそうに見えるときがある。この家の人は、どんなに幸せそうな生活を送っていることだろう、とふと想像してしまうことがあるのさ。ここに住んでいる人は、きっと、社会のいろんな人々とつながりがあって、それなりの、満ち足りた生活を送っていることだろうな、とふと想像してしまうのさ。ところが、そのとき感じるのは、ぼくの孤独なのさ。社会のいかなる人とのつながりもなく、孤絶し、過去と夢想とだけを友だちとして暮らしている、寂しい自分の姿なのさ。自分には何もない。たったひとり――これだけなんだ。友人もなく、世間とのつながりもなく、特に目立つということもなく、ひっそりと暮らしている。しかし、そんなぼくでもそれなりに、感じることはあるし、心の叫びのようなものはあるのさ。――ただ、この叫びは、ほとんど誰れの耳にも到達しないかも知れないけれどね。――つまり、ぼくが言いたいのは、恵まれた階層に対するやっかみみたいなものなのさ。どうして自分は、その階層に行けなかったんだろうって、そのことだけが悔やまれてならないんだ…”
“兄さんの言わんとすること、よく分かるわ”と、セーラは、ぼくを見つめたまま言った、“セルッカにいたとき、よく議論したのもそのことだった。――でも、ひとつひとつ、自分で変えて行くしかないじゃないの。わたしだって、条件は、兄さんとほとんど同じだったはずよ。兄さんだって、努力すれば、そのうち道が開けるはずよ。だから、いつまでもそんな風に思わないで、考え方を変えてよ”

“――でも、もはや経済的には貧しくないはずの今でも、ふっと、スキ間風のようなものが、胸の内を過ることがあるのも事実なんだ”と、ぼくは穏やかに言った、“それは何んのスキ間風なのだろう？　それは、これまでのぼくの人生の、悲しみの蓄積によるスキ間風なのさ。随分いろんなところへ出かけて行きもした。しかし、そこで出会ったものは、すべて悲しみばかりだったのさ。自分の孤独や、失恋の悲しみ…　それがときどき、今でも、ぼくの胸に、スキ間風を起こさせるんだ…　お前にはそういう経験はないかも知れないけれど…”

“分かるわ。わたしにも孤独なときがあったもの”と、セーラは答えた、“でも今はダンスをしているのよ。周りの人も見ているわ。もう少し、他の話しができない？”

“悪かったね”と、ぼくは言った、“せっかくお前とダンスをしているというのに、こんなしけた話しになってしまって。――でも、本当に言いたいことはそのことであって、他のことではないのさ。もっと、人生を楽しめばいいのに、ぼくは人生を楽しむことができない。本当に、悲しいことばかり、目についてしまうのさ…”

“いやよ、兄さん。もっと楽しまなくっちゃ”と、セーラはぼくを見て言った、“わたしのできることって、少ししかないけれど、兄さんが楽しめる為に、できるだけのことはするわ”

“いいんだよ、そんなことまで考えてくれなくても”と、ぼくは言った、“自分のことは、自分で見つけて行くつもりだから。それが孤独の道だとしても、自分で選んだのだから、仕方がないさ…”

ダンスは終わった。ぼくは自分のテーブルに戻り、セーラが別の相手と親しげに踊り始めた。そんな、セーラの打ち解けた様子を、少し暗がりのテーブルから、じっと見つめた。マッティーニに浮かんださくらんぼが、どこか寂しげだった。そのとき、バーの扉が開いて、昼間、試験場で会った例のハンサム・ボーイが、仲間を連れて入って来た。セーラは彼らを見ると、踊りの最中だったが親しげに手を上げた。そのとき、ぼくの吸いかけのたばこの灰が、ポタリと、灰皿の上にこぼれ落ちた。本来なら楽しいはずのこの場が、ぼくには、苦痛以外の何物ももたらさないのはどういうわけだろう。きっとぼくはもう、彼らとの共通の場を失っているのだ。彼らと会っても、ただ苦痛しか感じては来ない…

しばらくして、ダンスが終わり、セーラが、ぼくたちのいるテーブルに戻って来た。

“楽しかったわ”と、セーラは戻って来るなり、ウィスキーをグイッと引っかけた。

それから、ぼくや、他の連中を見回した。ポール・ストペイアも、ちゃっかりそこに坐っていた。いかにもインテリ風ですましているが、そのくせ抜目がなく、油断のならない感じの男だった。セーラが気に入っているのがこの男かも知れないと思うと、ぼくは少しがっかりした。彼は、坐ったセーラに、愛想よく話しかけた。彼もまた、セーラを気に入っている男の一人らしい。このように、色んな男から気に入られているセーラを見ることは、少なからず、兄として、悪い気はしなかった。

ただ、彼らが、セーラのそばにいるぼくに対して、気がねをしていることはよく分かった。だからぼくも、表舞台には出るまいと、わざと、話題から少し離れたところにいた。それでも、彼らの会話はよく聞き取れた。

“セーラはいつも、子供のことしか考えていないからダメなんだ”と、ストペイアは、ウィスキーを飲みながら言った、“もっと、我々大人のことも考えてくれなくっちゃ。一体、結婚は考えているのかい？　選ぶとすれば、この仲間からなのかい？　それとも全く知らない、別のところから、偶然見つかるのを待っているのかい？　まさか、観客の子供たちの中から選ぶなんて、言わないだろうね…”

“あるいは、そうかもね”と、セーラはにっこりした。“だって、あんたたちと違って、子供は可愛いんですもの。あの子らを見ているだけでも、勇気が出て来るわ。もっと、一生懸命、今の劇を続けなくっちゃって”

“君を、他のことから遠ざける罪な劇って、いつから始まったんだい？”と、ストペイアは尋ねた。

“だから、前にも言ったでしょ”と、セーラは答えた、“わたしが１８になったときに知ったのよ。実際に活動を始めたのはその一年後だけれど、わたしにこの幸運を授けてくれたのは、ラミーという少年よ。彼がわたしに、演劇の素晴らしさや、童話の面白さを開眼させてくれたの。以来、色んな曲折はあったけれど、なんとかこれまで続けて来ることができたわ…”

“そうかい、じゃ、それからもう五年。君を劇から引き離すのは、もう不可能というわけだね”と、ストペイアは言った。

“劇から引き離す？　とんでもないわ！”と、セーラは言った、“ますます充実させる目標はあっても、劇から身を引くなんて、思いもよらないわ”

ストペイアはそこで、あきれたように笑っていた。

“でも、ぼくとしてはだね”と、彼は言った、“君に、疲れた顔で朝、研究所に現れて欲しくないんだ。ぼくは自分の研究に今、将来を賭けているんだからね。朝の君の仕種を見ていると、危なっかしくて、今にも試薬を床に落とすように見えるときがあるよ”

“それは大げさというものですよ”と、セーラは言った、“そりゃ確かに朝疲れているのは事実よ。前の晩は遅くまで稽古をしているんですものね。ーーでもこれをやめるわけには行かないわ。
もし、どうしてもどちらかを選べとおっしゃるんでしたら、わたしは、演劇の方を選びます。収入の道は、どこか、他で見つけますわ…”

“今のはもちろん冗談だよ”と、ストペイアは苦笑いをした。“君の、そのムキになった顔が、またとてもいいねえ…”

“ストペイアさん、わたしだって真剣なんですからね”と、セーラは言った、“真剣なのは何もあなた一人だけじゃないんですよ。研究も立派ですけど、劇だってどうして、捨てたものじゃないんですよ”

“もちろん分かっているよ。分かっているから、どうか、そうムキになった言い方だけはもうよ

してくれないか…”ストペイアも、ついに、セーラの勇ましさに、音を上げてしまったようだった。

セーラはそれでやっと、追求の手をゆるめたのだった。ちょうどグラスのウィスキーが空になったので、セーラは、マスターにもう一杯を注文した。
そんなセーラを見て感じたのは、セーラもたくましくなったということだった。二人の言い争う光景は、セーラに軍ぱいが上がることにより、何か霧が晴れたような、快い感情をぼくにもたらしてくれたのだった…

しばらくしてぼくがほろ酔い加減で彼らの話しを聞いているとき、どこからともなく突然、快いオーボエやギターの伴奏に合わせて歌う、素晴らしい男性の歌声が響いて来たので、ぼくははっとして目が覚めた。いつのまにか、バーの奥のステージで、明かりに照らされて、彼ら楽団員たちが快い音楽を奏でていた。特に、彼らの前で立って歌う、若い男性の歌声が素晴らしかった。その歌声が、快く響くオーボエや、ギターやベースの伴奏に乗って、ときには哀愁を帯びて、またときには高らかに歌われて行ったが、とりわけ、その素晴らしい歌声とともに聞こえて来る、哀愁を帯びたように響く、伴奏のオーボエの音色がぼくの気を惹いた。「なんと素晴らしい歌声の夕べだろう」と、ぼくは、それを聞きながら、思った。そして、このときばかりは、テーブルでの話し声もやんで、みんな、セーラも、ストペイアも、その他の連中も、彼らの演奏に聞き入っていた…
“なんていう歌なんだい？”と、ぼくは、向う向いているセーラの肩を、チョンと突っ突いて尋ねた。
“CAVAN GIRLよ”と、セーラは、楽しそうに振り向いて、ぼくに答えた。
“彼らはよくここへ演奏に来るのかい？”と、ぼくはなおも尋ねた。
“ときどきね”と、セーラは答えた、“彼らは、わたしたちが児童劇をやっているのを知っていて、ときどき、サービスで演奏を聞かせてくれるの。そのうちね、わたしたちの劇が大きくなれば、彼らにも歌ってもらいたいとも思っているわ”
“そうかい。じゃ、知り合いなんだね”と、ぼくは言った、“なかなか素晴らしい、いい歌だよ。流行の、有名な歌手が歌っているような歌よりずっといい。だのに、こんな素晴らしい歌が、巷では埋もれているなんて、惜しいね…”
“そうでしょ。だからわたしも、彼らの歌を、もっと多くの人々に広めたいと思っているの”と、セーラは答えた、“だって、彼らの歌は、こんなにも素晴らしい歌なんですもの”
“同感だよ”と、ぼくも言った。
そうして再び、彼らの方に振り向き、ぼくたちは、彼らの素晴らしい歌声に、演奏に、聞き入るのだった…

――それは、真白な雲が渡る、素晴らしく静かな湖畔に姿を現した、晴れ晴れした顔つきの、一人の少女を想像させるような、そんな素晴らしい歌声だった。

　それからしばらくして、彼の歌が終わると、今度は飛び入りで、誰でも歌を歌っていいということになった。そこで、最初に彼が歌い手として指名したのは、なんとセーラだった。セーラは困ったような顔をして、周りの者にひやかされながら、おどおどと立ち上がった。向うのステージでは、彼が早く、と言わんばかりに手招きをしていた。ぼくは、セーラがどんな歌を歌うのか、興味があった。余り彼女の歌というものを、ぼくも聞いたことがなかったからだ。
　“頑張っておいでよ”と、ぼくもセーラを励ました。
　セーラはぼくの方を振り返り、困ったような顔をしながら、ステージの方に向かった。
　ステージでは、彼がセーラを迎え入れた。すると、周りでは、大きな拍手が沸き上がった。
　“それで、セーラさん、どういう歌を歌いますか？”と、彼は尋ねた。
　セーラは困ったようにおずおずと、
　“わたし、余り歌を歌った経験がないんです”と、答えた、“――でも、是非とおっしゃるなら、さっきのあの歌を歌わせて下さい。あなたの素敵な歌――CAVAN GIRLを。しかも、あなたにも一緒に歌って欲しいのです。それでよろしければ…”
　“そうですか。じゃ、セーラさんはもう一度、CAVAN GIRLをお歌いになるそうです。みなさんも、どうかお静かに聞いて下さい”
　彼がそう言うと、再びあの演奏が始まった。素晴らしい演奏――しかし、それ以上にぼくの気を惹いたのは、それに合わせて聞こえて来た甘い歌声の紛れもないセーラのあの歌声だった。彼女は張りのある、いい声で歌い、ときどき例の歌手が、とちりそうになったセーラの歌を助けた。二人のデュエットはなかなかのもので、ぼくたちの心を、うっとりした、夢の世界へと連れて行ってくれるのだった。少し長いめの、その快い、夢誘うような歌が終わったとき、セーラは、彼に支えられながら、恥ずかしそうに目を伏せたが、バーの中は、割れんばかりの拍手で包まれた。それほど、彼女の歌は素晴らしく、彼とのデュエットも素晴らしかったのだ…
　彼に見送られながら、セーラは、恥ずかしそうにテーブルに戻って来た。ぼくもセーラに一言声を掛けたかったのだが、それよりも先に、ストペイアの横やりが入り、ぼくが彼女に声を掛けられたのは、やっと、次の誰かがステージに立って歌い始めたときだった。
　“よかったよ、お前の歌”と、ぼくは、やっとセーラに聞こえるぐらいの声で言った。
　“でも、彼もなかなか素敵な彼だね”と、続けてぼくは言った、“何んていう名なんだい？”
　“バーリィコーン”と、セーラは、振り向いて答えた、“なかなか素敵な感じの方でしょ。歌もなかなか上手だし。彼は、土地の埋もれた歌などを発掘するのが得意なの。彼はどちらかと言えば、フォークロアの歌い手ね。――でも、どれも、なかなか素敵な歌でしょ”

“見たところ、お前は、ぞっこん参っているみたいだね”と、ぼくは半分ひやかし気味にセーラに言った、“彼は、まだ独身なのかい？”

“そうよ。それがどうかして？”と、セーラは、ぼくを見て答えた。

“いや、ただ尋ねてみただけさ”と、ぼくは言った、“どうも彼は、お前のお気に入りのようだね…”

“そうよ、なかなかの感じのいい、素敵な方よ”と、セーラは、再び彼の方に向いて言った。“兄さんも会ってみたら？　いろんな、面白い、為になる話しを聞かせてくれるわ。古い土地の話しとか、歴史とか。なかなか彼って、そういう方面では博識なのよ…”

“いや、かまわないんだよ。ぼくは彼の歌だけでもう充分”と、ぼくは答えた。

ほろ酔い加減のぼくには、もう充分、この場の楽しい雰囲気が伝わって来ていた。

セーラの楽しそうな微笑み――それを見るだけでも、充分ぼくは嬉しかった。夜はだんだんと更けて行ったが、歌声とダンスと語り合いのこんな夜なら、こんな楽しい夜なら、いつまで続いて行ってもかまわない。本当に久し振りだった、こんなに心の底から楽しむことのできる夜を味わったのは。そこにセーラがいたから、素敵な歌に巡り会えたから、ぼくは幸せだった。本当に、夢見るように、幸せで、楽しい、素晴らしい夜――この楽しみの他の世界では、もう星が輝いているなんて、信じられない。

“ねえ、お前って、幸せな道を歩んでいるよ”と、ぼくはしばらくしてから、セーラに言った、“児童劇と歌声と。本当に、お前の言うように、森の中に児童劇場ができて、児童劇と、このような歌声が、森の中いっぱいに広がれば、どんなに素晴らしいことだろう！　その幸せな未来が、今、ぼくの目に見えて来そうな気がしてくるよ。だから、本当に頑張って、お前の夢を実現しておくれよ。ぼくは心の底から、そのことを祈っている…”

“今、何か言った？”と、言って、ステージの歌声に夢中になっていたセーラは、突然、ぼくの方に振り向いた。

“いや、何んでもない”と、ぼくは言った、“ただ、お前が幸せな道を歩んでいるのが嬉しいんだよ。本当に、心の底から、嬉しいんだよ…”

“そう、ありがとう”と、セーラは答えた、そして、“兄さんも、幸せになることを祈っているわ”と言うことも忘れなかった。

ぼくは、このまま帰るのが忍びなかった。楽しげな歌声と、ダンスと、語らいと。その中にいつまでもとどまっていたかった。――でも、今夜の喜びは、これで十分だった。セーラの劇団員たちの、あるいは、楽団員たちの、楽しげな夜は、これからもまだまだ続くだろう。だけど、ぼくの楽しげな夜は、もうこれまでだった。これ以上いることは却って、ぼくの心を悲しくさせる。却って、ぼくの心を空しくさせる。この場にいない、無言の悲しげな死者たちの悲しい物語のことを思うと、いつまでも、楽しい場に身を置くことはできなかった。ぼくは、やはり、幸せの中に、忘れることのできぬ彼らの悲しみを見つめないわけには行かなかった。たとえ、楽しげな彼らから離れて、ひとりに戻って、悲しい彼女らのことを見つめたとしても、それは、ぼくにと

っては、一つの使命のようにすら、感じられてくるのだった。

このまま、幸せを享受するわけには行かない。それでは、亡くなった彼女らは、余りにも悲し過ぎる。彼女ら、クリスチーヌやシェリーやエミリー、あるいは、悲しく死んで行った犬や猫や、その他の物言わぬ動物たちのことなどを思うと、彼らのことを見捨てて、一人楽しむという気にはなれなかった。どうにかして、彼女らの悲しい心の奥底にまで入り込むこと――そして、彼女らの悲しみが何んだったのかを見きわめ、その悲しみを少しでも分かち合うこと。それから、その霊を本当に解放するまでは、ぼくの心は晴れないのだった。そして、この楽しい歌声の夕べ、ぼくの目の前は、急に、開けたように明るくなった。そうだ、亡くなった悲しい彼女らの為に、ぼくは歩もう。もう、ぼくの楽しい夕べは、これまでで十分だ。今からは、無言の、この場に参加していない亡き彼女らの為に歩むのだ…

“セーラ、もうぼくは帰るよ”と、ぼくは言った。

セーラは、驚いたように振り向いた。

“あら、もう帰るの？ まだ早いのに”と、セーラは意外そうに言った。

“そうだよ。本当に、今晩は楽しかった”と、ぼくは言った、“お前のおかげで、楽しい夜を味わわせてもらったよ。本当に、ありがとう…”

“でも、もう少しゆっくりしたら？”と、セーラは、なおもぼくを引き止めようとした。

“いや、みんなには悪いけど、やっぱりぼくは帰るよ”と、ぼくは言った、“ぼくには先に帰ってすることがあるんでね。みんなによろしく言っておいておくれよ”

そう言って、ぼくは立ち上がった。みんなはまだ、ステージの歌声の方に目を向けていて、テーブルから立って去って行くぼくに、注意を向ける者は、幸いにもいなかった。セーラだけが振り向いて見送る中、ぼくは、気が付いたマスターにだけ挨拶を送って、静かにバーから出て行った。歌声は、まだ部屋中に響き渡っていた。外に出ると、真暗な外と共に、ヒンヤリした空気がぼくの膚をこすった。そのとき、気になったセーラが、やはりぼくを見送りにやって来た。

“本当にかまわないの？　兄さん”と、セーラは、ぼくの腕を取って言った。

“いや、いいんだよ。ぼくはただ、ひとりになりたいだけなのさ”と、ぼくは言った、“ひとりになって、じっくりと考えたい。人生や、人のこと。幸せや、悲しみのこと。ただそれだけのことなんだ。心配は何もいらないさ”

“本当に、兄さんって変わった人”と、セーラは言った、“せっかくみんなと楽しい夜を過ごしているというのに、もう帰るなんて言い出すんですもの。――でもいいわ。兄さんの気ままを許すわ。その代わり、これだけは受けてね”

そう言ってセーラは、背伸びをして、ぼくの頬にキスをした。

“じゃ、夜はまだ寒いから、気を付けてね”セーラは、キスを終えると、ぼくを見て言った。

“ああ、気を付けるよ。間違わないように、家に帰るよ”と、ぼくは、そんなセーラを見つめて言った。“お前も、楽しく、幸せにやって行っておくれよ。そのことを、心から祈っている…”

　そうして、しばらくのあいだ、ぼくとセーラとは、お互い、じっと見つめ合った。
　お互い、歩む道は別であっても、ぼくたちは兄妹であり、ぼくたちの心の中は、共鳴するような、ある種の暖かさに包まれていて、お互いに分かり合っていたのだ…
　“じゃ、行くよ”そう言って、ぼくは、暗い夜の中、ただ一ケ所、明るさのともったバーを後にした。
　セーラは、入口のところに立ったまま、ぼくが、暗闇の中に消えて行くのを、じっと見守っていた。空気は、思いの他冷たく、見上げた星空が、どことなく、悲しく、冷たく感じられた…

　…そう、ぼくの帰って行く道は、寂しく、冷たかった。真暗となった街角の石畳の上を、ただぼくの靴音だけが、カ〜ン、コ〜ンと鳴っている。あの賑やかな歓声と、歌声と、笑いとから去って、ぼくは何をしようと望んでいたのだろう？　クリスチーヌの嘆きに、シェリーのささやきに、あるいは、エミリーの叫び声に、その他諸々の亡き死者たちの呼び声に、ただ耳を傾けたかったのだろうか？　あるいはそうかも知れぬ。あの、何千光年もの彼方から光を運ぶ、夜空にまばたく星を見つめながら、ぼくは人生について、たった一人で、もう一度、見つめ直したかった…

　…ぼくが家に帰り着いてから、もう何時間になるだろうか？　柱時計の音が、ただ静かに時を刻み、薄暗がりの中で、ただそっと、息を殺すかのように、時の流れに耳を傾けていたのは。ぼくはただじっと、窓の外の、淡い、星明かりの光景を見つめながら、時を過ごした。人は、そんな時間を無駄と形容するかも知れないけれど、ぼくは昔から、そうするのが好きだったのだ。というのも、ただこの時間だけなのだ、夜の神秘と、人生の真実に触れることができるのは。この時間を、有効に、無駄なく過ごす人には、恐らく、そういう感情というものを、理解することはできないだろう。しかし、夜は、その暗さに触れるだけで、人生の思いがけない部分が、明るみとなって出て来るのだ。だから、ぼくは、夜には、その暗さに触れるのが好きだった。思いきり暗い夜――そんな夜を、ぼくは体験したかった。
　そしてこの夜、ぼくは、星明かりの窓のそばに腰掛けながら、様々な思いが、浮かんでは消えるままに、時を過ごした。そのあいだ、人の声もなく、ただ猫の悲しい鳴き声が、空しく、闇夜に響いて来るだけだった。ぼくはぼんやりと、この日一日のことを振り返った。セーラと公園に行き、セーラの過去の話しを聞かされたこと。それから、素晴らしい程晴れ渡った空の下で、驚くような研究所を目にして、そこでセーラと再び出会ったときのこと、研究所の庭でセーラと語り合ったこと、そして、帰り道に考えたこと、そして夜が来て、セーラの児童劇を見に行ったこと、それが終わってから、打ち上げのパーティーに招かれたときのこと――それらすべてを、なつかしい思いを込めながら、ぼくは回想した。

そして、それらは何んだったのだろう、とぼくは自問した。ぼくはこの日、そのようにして時を過ごした。それは事実だった。しかし決して、ぼくの魂は満たされた気にはなれなかった。どこか空しくて、悲しかった。ぼくは絶えず何かを求めている。未だ見ぬ、はっとするような、美しい何かを。それで死んでしまってもかまわないような、素晴らしい衝撃を。それはもう、過去に見た何かかも知れず、あるいは、未だ見ぬ、未来に起こるべき何かかも知れなかった。しかし、そのような何かを、ぼくは絶えず求めて来たのだ。そして、そのように生きることは、およそ人々の生きる道とは正反対の道を歩むことだった…

ぼくは悲しみで、自分自身を打ち砕いてしまいたかった。どうすれば、この満たされない魂を、救いに到らしめることができるのだろう？

――そうして、暗い闇夜に、悲しみに浸っているとき、突然外に、一つの光明が、一つの人影が現れて、ぼくをドキリとさせたのだ。もう夜中の二時は回っていたろうか。それはやがて、こちらへ近づいて来て、家のドアのノブを、カタリと回した。セーラだった。彼女がドアをあけたとき、彼女の姿は、外の薄明かりを背景に、シルエットとなって、ぼくの目に映った。家の中は、明かり一つなく、真暗だった。彼女はきっと、ぼくはもうとっくに眠ってしまっていて、部屋の、こんなところに坐っているなんて、よもや思ってもいないことだろう。ぼくは、息をひそめて、彼女が動くままに任せた。彼女はやがて、明かりもつけず、自分の部屋に向かおうとして、ぼくのすぐそばを通り過ぎようとした。しかし、そのときに、ぼくがそこに腰掛けていることに、初めて気が付いたようだった。

“兄さんなの？　そこにいるのは”と、セーラは、少し驚きながら言った。

ぼくか、それとも別人なのか、セーラは、判断しかねているのだ。しかし、窓際に坐っているぼくからは、暗がりに浮かぶセーラの青ざめた表情はもちろんのこと、窓明かりにキラキラ輝き、こちらを見つめているセーラの瞳もよく見えていた。

“そうだよ、ぼくだよ”と、ぼくはやっと答えた。

“なんだ、まだ起きていたの”と、セーラは、ほっとして答えた。それから、ぼくの方に少し歩み寄ると、セーラは、暗がりの中で、ぼくの顔を確認しようと、その顔を近づけた。

“でも、明かりもつけずに、どうしてそんなところにいるの？”と、セーラは、顔を近づけながら、ぼくに言った。

“ただ考えていたのさ”と、ぼくはポツリと答えた、“いろんなことをね。明かりはない方がいいんだ、考え事をする為にはね。ぼくはじっと、夜のささやきにも、耳を傾けて来た…”

“夜のささやき！”と、セーラは驚いたように言った。“随分と静かな夜ね。わたしたちの過ごした夜とは大違い”

“きっと、結構楽しかった夜だったんだろうね”と、ぼくは言った、“こんなに遅くなったんだもの、ぼくの寂しい夜とは大違いさ…”

“兄さんも残っていればよかったのに”と、セーラは言った、“あれからまたダンスをして、歌えや踊れやの大騒ぎよ。飛び入りで、物まねをする人がいたりしてね、久し振りに腹を抱えて大笑いさせてもらったわ。兄さんはいやなの？ あんなパーティーは”

“別に嫌いじゃないさ”と、ぼくは答えた、“ただ一人になって、夜風に当たりたかっただけなんだ。それだけの理由さ”

“みんな、兄さんがいなくなったんで、どうしたんだって、言っていたわ”と、セーラは、少しぼくに当たるように言った、“でも、兄さんが帰ると言ったんだから、どうすることもできなかったでしょ”

“御免、途中で、退席したりして”と、ぼくは、素直に謝った、“――でも別に、みんなを避けていたわけじゃないんだ。その点は誤解のなきよう。みんなお前の友だちなんだから、大切にしたい気持は、ぼくにもあるさ。――でもただあのときは、さっきも言ったように、急に一人になりたくなっただけなんだ…”

“分かっているわ、兄さん”と、セーラは、急に励ますようにぼくに言った、“だから、みんなにもそう言っておいたわ。兄さんは、ときどき一人になりたくなるときがあるんだって。そう言えば、みんな、あっさり納得してくれたわ”

“御免よ、セーラ”と、ぼくは急に、セーラが可哀そうになって言った、“いつも迷惑ばかりかけてしまって。変な兄がお前のそばにいて、お前の人生の妨げになりやしないだろうかって、そのことが心配なんだ。本当に御免よ”

“妨げなんて、それは、兄さんの思い過ごしというものよ”と、セーラは言った、“そんな、周りの人は誰も、兄さんのことを気にしてはいないわよ。だから、謝る必要なんかもないの。それより、さっ、元気を出して。わたしの手を握ってよ”

そう言って、セーラは、ぼくに両腕を差し出すのだった。

ぼくは椅子に坐ったまま、そんなセーラの、柔らかくて、暖かい手を握った。すると、そのとたん、それまで感じていた、ぼくの悩みも、苦しみも、空しさも、悲しさも、一切のことが、急に目の前に光がさして、一度に解決されるような、そんな気がして来るのだった…

“さっ、お前もそこに坐って、星明かりが美しいよ”と、ぼくは言った。

セーラは、暗がりの中でもう一つの椅子を取って来ると、ぼくと向かい合わせの、窓際のところに坐った。

“さて、兄さん、これから何をしようというの？”と、セーラは尋ねた。

“いや、ただ、お前と、こうした星明かりを楽しみたいだけなんだ”と、ぼくは答えた、“ねっ、外は静かだろう。あの静かな、暗い外を見つめていると、距離の近い、遠い、時間の、現在、過去などは、もう関係なくなってくるのさ。そしてただ、想像で、頭がいっぱいになってくる。お前はたった今、パーティから帰って来たところかも知れないけれど、ぼくにとって今は、過去なのさ。

それも、ぼくもまだ見たこともないほど、遠い過去――場所も中国さ。ぼくの知らない、遠い過去の、中国の片田舎の光景が、ふと、ぼくの目に見えて来たりする。時は昼で、大きな屋敷があって、庭は広く、本当に静かなんだ。明るい日ざしが、樹木の殆どない、白い庭を照らしている。土塀に囲まれた広い庭の向うは、もう何もない、一面の草原さ。今も、そんな、ぼくのイメージにピッタリのところがあるかも知れないけれど、そこが本当に静かなところなら、そんなところへぼくは行ってみたい。ねえ、こんなに外は暗いのに、ぼくは、様々なことを想像してしまうんだ…”

“面白い兄さん”と、セーラは、ただ一言、そう言った。

“――でも、セーラ”と、ぼくは言った、“これはもうできないことかも知れないけれど、一度、色んなところへ行ってみようよ。大旅行をするんだ。スイスもいいし、ドイツの森の中もいい。色んな町の、色んな人に出会って、気分を変えるのもいい。そんな旅をしてみないかい？”

“いいわねえ、夏になれば暇もできるから、そんな旅を考えてもいいわ”と、セーラは答えた。

“本当だね。もしお前も乗り気なら、ぼくも真剣に考えてみる”と、ぼくは言った、“リュックをかついで山を歩くのも、なかなかのものなのさ。そこでうまい自然の空気を吸い、静かな山小舎で、夜明け前に目覚めて、すがすがしい夜明けを見つめる。なんて、なかなかのものさ。素敵なお前が相手なら、その旅も、何倍も楽しいものになるだろう…”

“ところで、兄さん、もう疲れたから、眠らせて欲しいわ”と、セーラは言った、“まさか、夜明けまでこうしている気？”

“そうだね、もう夜も遅いし、そうしよう…”

ぼくたちが、それぞれの寝室へ引き上げたのは、もうかれこれ、三時頃だったように思う…

第７章

…ぼくは、自分の部屋のベッドの上で眠りについてから、素晴らしい夜を体験した。
そこは、どこかアフリカのジャングルかも知れなかった。あるいは単なる森の中だったのだろうか。夜は深まり、ただ赤々と燃える焚火の炎の他には、真暗闇の空だけが広がっていた。ただ聞こえて来るのは虫の音と、ときおり吠える野性動物の鳴き声だけ――　そこに、セーラとぼくとの二人だけがいた。もう話すこともなく、ぼくたちは向き合ったまま、ただ焚火の炎だけを見つめていた。炎のゆらめきにつれて、セーラの表情も、姿もゆれていた。ふと空を見上げ、暗闇に目が慣れて来ると、空には、満天の星が輝いていた。ここはどこだろう？　しかし、場所はともかく、そんな場所で、セーラと二人きりでいる、ということが重要だった…
そのときぼくは、ベッドの上で、半分、夢見ていたに過ぎなかった。当のセーラは、隣の自分の部屋で、ぼくと同じように眠っているはずだったのに――

そして今は朝――ぼくは全き自由を手にしていた。セーラはまた、いつものように研究所へ勤めに出かけていた。今頃は、睡眠不足の否めない寝ぼけ眼をこすりながら、仕事に精出していることだろう。夜はあんなに遅かったのに、それでもセーラは、定刻になれば起き出して、ひとり勤めに出かけて行ったのだ…
恐らく、この夏の、セーラとの旅行という約束は、実行されることはないだろう。セーラには、ぼく以外にも、多くの友人がいるのだ。中には、セーラの気に入った男友だちも、きっと現れて来ることだろう。
そして――長い滞在の末に、ぼくも、そろそろここを去る潮時だ、と感じた。そのことをきょう、セーラに告げよう。しかしその前にもう一度、セーラの勤めている研究所に行って、セーラの元気に働いている姿を、一目、この目で確認したい、という思いを強くした。そして、そこで、今夜、ぼくがここを去ることを、そして、リサのいるメロランスへ行くことを、セーラに告げるのだ…

ぼくはゆっくりとベッドから起き上がり、誰もいない階下へ降りて行った。もう朝だというのに、相変わらず、階下の居間は薄暗くて、ヒンヤリしていた。昨夜、セーラと語り合った椅子が、そのままの状態で、窓際に置いたままになっていた。――でも、窓の外は、もう昨夜のように、星明かりがさし込むのではなく、昼間の明るさが、外の樹木の緑と共に、のぞいて見えていた。
ぼくは急に、ここを去るのだと思うと、ここがなつかしく感じられて来た。一度旅に出れば、ここへは当分、帰って来ることもないだろう。セーラと食事もしたこの居間の古い木製のテーブルや椅子、黒光りのする天井や、クリーム色の壁などが、なぜか、もう何年も住みついた家のように、なつかしく感じられて来た。

それら物言わぬ家具類が、まるで息をひそませてぼくを見つめているようにさえ、ぼくには思われた。それで、ぼくが思いついたことは、彼ら一つ一つについて、別れのあいさつをかわして、それから別れようということだった。ぼくは、順番に、彼らを見て回った。マントルピースや、キャビネットや、壁に掛けられた額、それに、活けられた花瓶の花や、藤椅子までも、一つ一つ見て回った。続いて、隣のキッチンにも行って、レンジや、窓や、テーブルや、そこに無造作に飾られた額など、一つ一つ見て回った。それから、ついに、セーラの裸を見ることもなかった、浴室へもぼくは行った。ドアをあけると、狭い部屋の中に、脚付きの浴槽が無造作に置かれていた。壁からは、給湯と給水の蛇口が出っ張っていて、浴槽のそばの小さなテーブルには、化粧道具がそれとなく置いてある。また、椅子もあって、その背もたれには、タオルが掛けてあった。白い壁と、ピンクの模様入りの壁紙が貼ってあるこの浴室をそっと見回して、ぼくは、何度も、この浴室に入った日のことを思い出した。ぼくと交替で、セーラが入って行ったのもこの浴室だったのだ。しかしセーラが出て来たときは、いつもバスローブを身につけていて、彼女の裸を目にしたことはなかった。あるとき、セーラは、ゆかたを着て浴室から上がって来て、窓際で、少し胸をはだけ、扇子で体をあおいでいた。そのとき、足組した部分の衣服がはずれ、彼女のなまめかしい太股がふとぼくの目に止まったのを覚えている。

“そのゆかたをどうしたの？”と、ぼくが尋ねると、

“友人の紹介で、そういう古着専門の店で見つけたの”と、セーラは答えた。

しかし、そのゆかたは、セーラに実に似合っていて、彼女の美しさを一層際立たせていた。

ぼくは、浴槽を見つめながら、ふとそんなときのことを思った。

そして、ぼくが今思い出すのは、これまで目にして来た様々な家での、様々な浴室なのだ。オディープでの、子供の頃の浴室もあれば、ドシアンの、現在の家の浴室もある。ドシアンの家の浴室は全面白いタイル張りの浴室だが、とりわけ、印象深いのは、リトイアの、レオノールの家の浴室だった。つい最近、リトイアのあの家に行ったとき、浴室のその変わりように驚いたものだが、ぼくたちがそこで暮らしていた頃は、もちろん、現在のとは全然違ったものだった。しかし、その浴室の様子は、今でもよく覚えていた。ひびの入った、色のくすんだ壁、白くペンキで塗った跡がはっきりする天井、それが、あの貧しい頃、ぼくたちが暮らしていたときの浴室だった。その狭い浴室の隅に、薄汚れた、白い脚付きの浴槽がひとつ、どんと置かれていた。天井からは、シャワーの設備もある、到って簡単な設備が整っていた。そばにはテーブルがあり、その上には、洗面器やバケツなどが置いてあり、冬が寒く、水道が凍ったときなどは、そのバケツで、近くの井戸へ、水を汲みに行ったものなのだ。いつの日でもそうなのだが、レオノールが一番最初湯を使ったあと、ぼくたちの使うべき湯の量は、余り多くは残ってはいなかった。レオノールは、それ以上湯を沸かす為の石炭の使用を禁じたのだ。それで、ぼくたちは互いに優先順位を譲り合った。

たいてい末っ子のリサが一番最初に入らせてもらったが、ときには、風邪を引いているセーラが一番最初に入ることもあった。それどころか、ぼくたちが文句を言ったときには、

“お前たちはまとめて三人一緒に入ればいい”と、レオノールに無理やり、三人一緒に浴室に入れさせられたときもあった。ぼくたちは、セーラもリサも、みんな一緒に裸になって、狭い湯舟に押し込められた。しかし、その頃は、ぼくたちはまだ小さく、お互いの裸を意識する、ということもなかった。レオノールが、ドアの外に去ってから、ぼくたちは、狭い湯舟の中で、入れ代わり立ち代わりの大騒ぎを演じなければならなかった。誰れかが洗っているあいだ、誰れかが立たねばならず、セーラがぼくの前に立つこともあれば、リサが立つこともあった。無論、ぼく自身も立った。しかし、そのとき、彼女らの裸を見ても、ただ可愛なと思ったり、冗談を飛ばしてみたりすることはあっても、それを変な目で見つめるというようなことはなかったのだ…

しかし、そのような事件をきっかけとして、その日以後、セーラとリサが一緒に浴室に入る、ということが多くなった。そして、いつも一番最後に入ったのが、このぼくだったのだ。

しかし、その浴槽は、ぼくたちに、一日の締め括りにふさわしい憩いをもたらしてくれたのには変わりがなかった。セーラたちが、タオルで頭を拭き拭き出て来るのと入れ代わりに、ぼくは浴室に飛び込んだ。蛇口からは、湯が少ししか出て来なかったが、それでもぼくは、その暖かみに感謝をした。開かれたドアからは、まだすっかり日の沈み切らない庭の光景が見え、そこから吹き寄せて来る風が、なんとも冷たく、さわやかだった。セーラたちが、その庭を横切り、不意に、ぼくのいる浴室に目を向けた。しかし、ぼくは平気だった。そのようにして、彼女たちが湯舟につかっている姿を、ぼく自身も、庭を通り過ぎるとき、何十回となく、目にしたことがあったからだった。そんなとき、彼女たちは別に恥ずかしがりもせず、ときには、裸のまま、手を振って答えてくれることさえあった。だから、それとは逆の今、ぼくは湯船につかったまま、彼女たちに手を振った。

また雨の日には、ぼくは湯舟につかりながら、空いたドアを通して、雨にけむった庭の様子を、ぼんやりと見つめていた。その雨の中を、傘もささず、ぬれねずみになって、セーラが走り去ることもあった。ぼくは、また、雪の日にも、浴槽から雪を眺めた。一面が雪景色で、壮観という他はなかった。また、湯舟につかりながら、夕陽を見たことも、虹を見たことさえあった。そのように、あの浴室から眺めた、日々姿を変える庭の光景とは、何んだったのだろう？　雨の降る、くすんだ庭を見て、恐ろしいほどの淋しさを感じたのは、何んだったのだろう？　それらはすべて、開かれたドア一枚分の空間を通して、暖かい浴槽から見つめられた光景だった。その長方形に区切られた空間から見える光景は、まるで切り取られた一枚の絵のようであり、日々刻々と姿を変えたその絵は、様々な思いを残して、ぼくの目に刻み込められている。長く湯舟につかることは許されなかったが、その短い間にも、様々な印象を、ぼくの脳裏に刻みつけたのだ。そして、その開かれた入口は、同時に、妹たちの裸を目にすることのできる、数少ない機会の一つでもあった。

ぼくは庭で作業をしながら、湯舟に交替で入ろうとしている、色んなバケツや洗面器が雑然と置かれている、とても清潔とは言えない浴室での、真白な膚をした、細い体つきの、まるで妖精のような彼女たちの裸の、折り曲げた体や、柔らかいその後ろ姿を目にしたのだ… ぼくは、雨の降る庭を、湯舟につかりながら、じっと見つめていた。胸の中はもう、泣きたいぐらいだった。なぜそんなに悲しいのか、ぼくにもよく分からなかった。雨は容赦なく、勢いよく降り、風は特に強かった。よく締まらないドアは、例によってきしんだ音をたてながらすぐ開いてしまい、バタンバタンという音をくり返す。その嵐が、浴槽につかるぼくを悲しませたのだ。人生の悲痛さをぼくに感じさせ、裸のぼくは、じっと嵐の空を見上げた。頼る者も、いかなる励ます者もなく、そのときほど、ぼくはたったひとりぽっちだと感じたことはなかった。庭はいつのまにか水びたしとなり、大粒の雨がたまった水たまりの上に幾つもの同心円を描いていた。庭の隅の花は、哀れっぽく震えている。それを見て、ぼくは叫びたくなった。今すぐにでも、ここから逃げ出したくなった。しかし、不意に、パタパタしたドアの向うに、セーラの姿が見え、ぼくはここが、ひとりぽっちの孤独地獄じゃないことを感じた。そして、大きな雨音よりももっと大きな声で、

“セーラ、その戸を閉めてくれないか！”と叫んだ。

もう、こんな悲しい庭なら、見ないほうがよっぽどよかったのだ。

すると、通りすがりのセーラは振り向き、力いっぱいガタピシのドアを閉めてくれた。ぼくはほっとした。だが、それも束の間で、間もなく、風の力に押されて、再び自然に開いてしまい、元の大きな音をくり返すのだった。

セーラはもういなかった。ぼくは再び、以前よりももっと恐ろしい淋しさを、その雨の庭の中に感じた。

しかし、それとは対照的に、晴れた日の夕暮れの庭は、ぼくの心をなごませてくれた。本当にそれは、憩いの、心休まるひとときだった。そんな日には、空はゆっくりと暮れ行き、いつのまにか星が瞬いている。そして、庭の片隅では、自然に咲いた花々が、静かに風に揺れていた…

ぼくはふと、そんなときがあった日のことを思い出していたのだ。そして、もう一度、もう何度も入ったことのある浴槽を目にすると、浴室のドアを閉めた。

ぼくが居間に戻って来たとき、居間はまるで何事もなかったように、暗くて静かだった。ぼくは、テーブルの前の椅子に腰を降ろし、しばらく体を休めた。

ぼくが再びあの素晴らしい研究所にやって来たのは、もうかれこれ、午後の三時頃だった。昨日にも増して、研究所の白い建物が、緑濃い森の背後に、ひと際まぶしく、美しく輝いていた。ぼくはゆっくりと、その白い研究所を眺めながら、一歩一歩、坂道を歩んで行った。

研究所のゲートの前に来ると、昨日とは違って、この日は門衛所の中に、少し年取ったグレーの制服を着た門衛が一人、番をしていた。ぼくが案内の窓ガラスをこつこつ叩くと、彼はこちらへやって来た。

“済みませんが、ここの従業員のホールバラさんに会いたいんだけど、どうすればよろしいんでしょうか”と、ぼくは尋ねた。

“面会かね？”と彼は言った。

“ええそうです”と、ぼくは答えた。

すると彼はすぐ、部屋の奥にかかっている受話器を手に取り、なにかやりとりを始めた。そして話しの途中で、彼は、ぼくに大声で怒鳴った。

“君の名前と、用件は？”

“彼女の兄です。用件は、ちょっと話したいことがありまして”と、ぼくは答えた。

門衛は再び電話でやりとりをしたが、やがて電話を切ると、ぼくのところにやって来た。

“よろしい。今、ホールバラさんは、ちょうど温室のそばの池の近くにいるそうだから、そこへ行きなさい。場所は分かるかね。あの白い建物の向うの方だがね”と彼は、ぼくに、親しみを込めてあいさつを送ってくれた。

“ええ、なんとか分かります”と、ぼくも笑顔で答えた。

守衛に見送られながらゲートをくぐり、白い、美しい研究所を巻くように、ぼくはゆっくりと歩いて行った。カーテンの開かれた研究所の窓のところどころに、中で働いている研究員の白衣の姿が、ここからもよく見えていた。また、研究所の、美しい芝の敷き詰められた中庭を横切って行く人の姿も見られた。昨日とは違って、この日の研究所には、どこか活気がみなぎっていた。やがて、ぼくが目当ての池の近くへやって来たときは、周りには美事な樹木が茂り、うっそうとした森のようなふんいきをつくっていた。そして、池が目に飛び込んで来たときには、池のほとりに小さな研究室のような建物があり、そこから池に向かってせり出すような板張りのテラスが見え、その上に、白衣を着て、池の鯉に餌をやっている若い女の研究員と、すぐそばに立つ男の研究員の姿を認めることができた。池には睡蓮が浮かんでいて、そのあいまから、鯉どもがパクパクと餌をほおばっていた。餌をやっているその女の研究員は、紛れもなくセーラだった。そして、そばに立っている眼鏡をかけた背の高い男は、どうやらポール・ストペイアらしかった。彼女らは、守衛からの連絡をまだ受けていないと見え、ぼくが来ているのも気づかないように、ただ池の方を見つめ、鯉への餌まきに熱中していた。セーラの楽しそうな笑顔が、ぼくのいるところからもよく見えていた。ぼくがこの池を取り巻く沈黙を破ったのは、そのときだった。

“セーラ！”と、ぼくは言った、

そのとたん、テラスの上の二人が、驚いたように顔を見上げた。

セーラは、ぼくだと見るなり、すぐテラスから戻り、ストペイアをひとりそこに残したまま、池のへりを通って、ぼくのところへ駆けて来た。

“どうしたの？　今どき”と、セーラは、少し驚いた表情でぼくを見上げながら言った。

池のほとりに立つ、彼女のその姿は、本当に抱き締めたいほど、可愛らしかった。
“御免よ、急に驚かせたりして”と、ぼくは謝った、“ーー実は、お別れのあいさつにやって来たのさ。今夜の汽車で立とうかとも思ってね”
“それ、本当？”と、セーラは、一層驚いた顔になった、“でも、またどうして急に…”
“きのうのパーティ、なかなか楽しかったよ。そして、お前と過ごした夜もね”と、ぼくは、そんなセーラを見つめながら言った、“きょうは寝不足で、少ししんどいんじゃない？”
“朝のうちはね。でも、もう大丈夫よ”と、セーラは答えた。
それから、ほんの少しの間、ぼくたちは何も言わず、見つめ合った。
“ーーきのうのあのパーティで、ぼくは、ここへ来たかいがあった、と感じたのさ”とやがてポツリと、ぼくは話し出した、“お前や、お前の友人たちの楽しそうな生活。それを見せてもらっただけでもう十分さ。ぼくはここへ来てよかったと思ってるよ。ーーでも、もうそろそろここを去らなくっちゃね。昨日の晩、そのことを強く感じたのさ。いつまでもお前の家に居候をさせてもらって、お前の生活の邪魔をしてはならない。いや、そういう意味じゃないんだが、もともといつまでもここにいるつもりじゃなかったんだからね。それに、ぼくには、探すべき大切な目標がひとつある。それは、お前も知っての通りママのことさ。そろそろ、その探究にかからねば、とぼくは思ったのさ。ここにいつまでもいるようでは、それもできなくなってしまう。ーーだから悪いけれど、この辺でお別れをさせてもらいたいんだ。本当は、もっとお前とここで過ごしていたいんだけど、そうもしていられないのさ。分かってくれるだろう、ぼくだって辛いんだけど、いつかはこうしなければならないのさ。ーーぼくは今夜の八時の汽車で、ここを立つつもりさ。それまでお前は帰って来ないかも知れないと思って、それでここまで、お別れのあいさつにやって来たのさ…”
“それならそうと、どうしてもう少し早く言ってくれなかったの”と、セーラは悲しそうな顔をしてぼくに言った。
“だって、そのことをはっきりと決めたのは、けさになってからのことだったからさ”と、ぼくは答えた、“本当に突然だけど、昨夜、ひとりで家に帰ってから、だんだんとそういう決意が固まって来たのさ…”
“そう、よく分かったわ”と、セーラは、寂しそうに目を伏せた。そして、ぼくの方には見ずに、セーラは続けた、“兄さんがこちらに来てくれたことは、本当に嬉しかったのよ。毎晩、帰って行くのが楽しかったわ。兄さんが家にいてくれて、本当に安心することができたのよ。仕事やその他の関係で、十分に兄さんと過ごす時間がなかったかも知れないけれど、でも、それ以外のときは、本当に兄さんと過ごすのが楽しみだったのよ。兄さんが来てくれたおかげで、生活にも張りができて、本当に感謝していたのよ…”
“そのお前の言葉を聞いて、ぼくも嬉しいよ”と、ぼくは答えた、“ぼくがこちらへ来て迷惑じゃなかったって、実はそのことを一番心配していたのさ。ーーでもそうじゃないってことがお前の口から聞けて、安心したよ”

“迷惑だなんて！”と、セーラは、ぼくを見つめて言った、“実際はそれとは正反対だったのに。ーーでも、残念ね。もう帰ってしまうなんて。いいわ、今晩は兄さんの為に見送りに帰る。できれば食事も一緒にしましょうよ、兄さんがこの街へやって来たあの日のように…”

“いいのかい？　何か、予定があったのじゃないのかい？”と、ぼくは尋ねた。

“ううん、いいの。兄さんの為だもの”と、セーラは笑顔になって、ぼくに言った、“どうせ小さな約束だもの、その方をキャンセルすれば大丈夫よ”

“悪いね、予定を変更させたりして”と、ぼくは言った、“ーーでも、楽しい毎日だった。本当に、あっという間だねえ、ここへ来てからというもの。さて、それじゃ、そろそろ帰るよ。仕事の途中だから、いつまでもお邪魔をしては悪いからね。あのストペイアさんも、お前が戻るのを心待ちにしているようだし”

そう言って、相変わらず、池に突き出たテラスの上に立っているストペイアに、水を向けた。セーラも、そう言われて、彼の方に振り向いた。ストペイアは、こちらの方を絶えず伺いながら、所在なさそうに、鯉に餌をやっているのだった。

セーラはやがて、ぼくの方に向き直ると、

“彼のことは気にしなくていいの”と、ぼくに言った。

それからじっとぼくを見つめ、

“それより兄さん”と、セーラは言った、“またいつ会えるか分からないから、これはわたしの思い出の為よ”

そう言って、セーラは、ぼくを抱き締め、ぼくの胸の中に、幸せそうに、彼女の頬を埋めた。ぼくも、そんなセーラをしっかりと抱き締めた。彼女のしっとりした肉体が、ぼくの腕の中で、幸福そうに安らっていた。ぼくは、彼女の背をしっかりと押さえ、もう一方の手で彼女の髪の毛を優しく愛撫した。そうして、池のほとりに立ったまま、数分間かが、過ぎて行った。池には心地良い風のせいか、水面にさざ波が立ち、池のほとりに咲くユリの花が、優しく揺れていた…

ぼくはそうして、この研究所を去って行った。もう、多分、見ることもないだろう、この研究所を…

…ぼくは、研究所のある山を降り、静かな野が広がるところにやって来ると、ひとり考えた。

この短い滞在中、本当はもっと、セーラといろんなことがやりたかった。一緒に、街へショッピングやレストランに行ったり、あるいは、近くの公園へ行ったりするだけでなしに、一緒にちょっとした旅ぐらいしたかった。リサとなら、あの幸せな時期、本当に楽しい旅をしたことがあったのだが、セーラとは、まだそんな旅をしたことがなかったのだ。

だから、これがそのいい機会だったのかも知れないが、あいにく、セーラの方が忙しくて、ついにそのことを言い出す機会を失ってしまった。間もなくぼくはここを去ってしまうから、今度そんな機会が訪れるとしても、どれほど先になってしまうことだろう。あるいはもう永久に、そんな機会はやって来ないかも知れない。そう考えると、セーラと一緒に旅のできなかったことが、むしょうに、心残りに思われて来るのだった。セーラと、ちょっとした、近くの山登りでもよかったのだ。そこで自然に触れ、思う存分、心のたけを打ち明ければよかった。ぼくはお前が好きで、お前のことを一生忘れたくはないのだ、と。いや、本当のところは、一生、お前を手放したくはなかったのだ…

――しかし今となっては、晴れた日の午後、セーラと、このルブライラの街へショッピングやレストランへ行ったときのことが、なつかしく思い出されて来た。明るく、清潔な街。それが、このルブライラの街の印象だった。セーラが、夕御飯の買物に行く、というので、ぼくは彼女に付き合ってあげたのだ。間もなくして、いつも見慣れている朝市とは違った、清潔な建物のショッピングセンターにぼくたちはやって来た。そこの食品売場には、新鮮な野菜や果物や魚などがどっさり売られていて、セーラは、一つ一つ熱心に見つめながら、選んで行った。食料品の買物を終えると、続いてセーラは、洋品店に行って見たいと言ったので、ぼくも彼女に付き合うことにした。洋品店は、食品売場からそう離れていないところにあるブティックで、セーラは、以前から目をつけていたと思える、感じのいい黒い模様のついた黄色のセータを、しきりに鏡の前で身にまとって見せるものだから、ぼくは思い切って、買ってあげることにした。セーラは、悪びれることもなく、すんなりとぼくの好意を受けて、その代わり、笑顔で、ぼくの頬にキスをしてくれた。それからぼくたちは、ショッピングセンターの最上階にあって、街を見下ろせる、感じのいいレストランへ休憩に行った。そこでちょっとした飲物を注文し、美しいルブライラの街を見下ろしながら、ぼくたちは話し合った。彼女の、児童劇にかける熱意や、ぼくたちの将来のことについて…

“そんなにお前が、その児童劇に夢中になる秘訣って、一体、何なんだい？”とぼくはズバリ、セーラに聞いてみた。

“それはね、子供が好きだからよ”と、セーラは答えた。それから少しうつ向き、やがて顔を起こしたときには、今までのセーラとは思えないほど、真剣な表情になってぼくを見つめ、こう言った。“本当は、それだけの理由じゃないの。わたしの不幸な過去がそうさせるの。前にも言ったでしょ。わたしの不幸のどん底のときに、ラミーに出会ったって。ラミーが、このわたしの命を救ってくれたのよ。あのとき、ラミーがいなけりゃ、わたしどうなっていたか分からないわ。今こうして兄さんと話していることさえ、できているかどうか。だから、ラミーはわたしの命の恩人なのよ。そればかりか、失意のわたしに生きる方向さえ与えてくれたわ。彼がわたしに、児童劇の楽しさや、素晴らしさを教えてくれたんだもの。彼と一緒に、その夢を実現させる為に、苦難の道を突っ走って行ったわ。それは本当に、苦しい道のりだったわ。幾多の妨害にも合い、何度挫折しかけたか分かりやしない。それでもわたしたちはあきらめなかった。決して、決して

負けやしなかったわ。

――その戦いの最中に、ラミーは死んでしまったの。わたしはひとり残されて、その遺志を引き継ぐことにしたの。わたしの心の中にはね、今もラミーが生きているの。そして、やっとここまで来たんですもの、もう決して後に引くことはないわ。みんな道楽でわたしがこんなことをやっていると思っているらしいけれど、決してそんなことはないわ。これを続けるのはね、わたしのこれまでの歴史がそうさせるからよ。あのときの出会いがなかったら、確かにこんなことをわたしはしていなかったかも知れない。――でも、もっと不幸な道を歩んでいたかも知れなかったわ。でもラミーとの出会いがあったからこそ、わたしの進むべき道は決定づけられたのよ…”

“分かったよ。お前が、今の児童劇を続けるための深い深いわけがある、ということが”と、ぼくは答えた。“そうである以上、お前の児童劇にかける熱意が本物であることが分かったさ。そういうことなら、これからも、本当に、一生懸命やって行くことだな”

“ありがとう、兄さん”と、セーラは、笑顔に戻って、ぼくに言った。

“ねえ、あの街の片隅には、多くの恵まれない子供がいる”と、セーラはやがて、ポツリと言った、“そういう子供たちに夢を与えてあげたいのよ。わたしの過去も不幸だったから、そういう子供たちの気持がよく分かるの。たとえそれが、その場限りの夢でしかなく、子供たちの生活の何んの解決にならないとしても、わたしたちのやっていることに意味がないとは思わないわ。そんな子供たちの心に、ほんのささやかな火をともしてあげたいと思うことは、わたしの単なる思い上がりかしら？”

“そうじゃないさ。立派なことだよ”と、ぼくは言った。“お前がそう思うことは大切なことさ。ぼくだって、ぼくたちの貧しい子供時代のことは、よく分かっているつもりさ。だから、他の子供たちに、同じような思いをさせたくないっていうお前の気持はよく分かるんだ。いいさ、そういう子供たちの為に一生懸命になるってことは、なかなかいいことなんだよ…”

“そんなことがあったりで、それで兄さんと十分お付き合いできないことは、悪いと思っているわ。せっかく来てくれたのに、本当に御免ね”

セーラはそう言って、ぼくに謝った。

本当にその通りだった。ぼくのつもりでは、もっともっとセーラとの楽しいときを過ごしたかった。今回の訪問で、それが十分にできなかったことが、ぼくの心残りだった。しかし、素晴らしい街。若い街。ルブライラ。そして、この、研究所のある郊外の田舎。ぼくは、思い切って、来てよかったと思った。そして、そこで、ぼくの最愛の妹、セーラの生活の一端をかいま見ることができただけでも、ぼくは幸せだ、と言うべきだろう…

それにしても、ぼくは一体何を恐れていたのだろう？　この広い野を歩きながら…　セーラと一緒に歩けないのを、ぼくは悲しんでいたのか。

そうではない、結局のところ、ぼくはひとりぽっちだ、ということを、ぼくは恐れていたのだ。セーラの幸せな生活に触れ合ったときは、ぼくも幸せだった。しかし、今、そのセーラとも離れて、ぼくはひとり旅立とうとしている。なるほど行く手には、リサのいる大都会メロランスが、このぼくを待っている。しかしそこへ行っても、もう以前のように、リサと暮らすということは許されないのだ。彼女には彼女の生活があるし、その中に、このぼくが入り込んで行くことはできない。同じ都会に住みながら、リサとぼくとは、きっともう別になるだろう。たまには会うかも知れないが、もうそれだけなのだ。そして、以前、ぼくがセルッカで味わったあの孤独を、ぼくは再び味わうことになるだろう。それは、寂しく、絶望的な体験だが、メロランスへ行く以上、仕方のないことなのだ。だから、ぼくは、メロランスの滞在は、できるだけ短くしたいと思った。早く切り上げて、都会の孤独を味わわずに済ませたかった。しかし、それから先は？

それから先のことは考えたくはなかった。どうせひとりぽっちになるのなら、それから先は、ないほうがいいのだ。

風は冷たく、激しく、ぼくに吹き寄せた。まるで、ぼくの暗い未来を暗示するように。

ぼくは風に追い立てられるように、誰もいない寂しい野を、ひとり去って行った…

夕方、ぼくが薄暗い自分の部屋で荷造りをしているとき、セーラが帰って来た音が、玄関の方でした。間もなく、トントントンと階段を上がって来る音が聞こえ、やがて、ドアがばたんと空いた。振り向くと、スーツを着たセーラがそこに立っていた。

“もう準備をしているの？”と、セーラは、カバンに衣類を詰め込んでいるぼくの姿を見た。

“ああ、早い方がいいかと思って”と、ぼくは答えた。

“何か手伝いましょうか？”と、セーラは、ぼくの仕種を見つめながら言った。

“いや、いいよ。こんなの、簡単に終わるから”と、ぼくは答えた。

“そう、じゃわたしも、出かける支度をして来る”

そう言って、セーラは、自分の部屋へと、降りて行った。

しばらくして、化粧を直してセーラが上がって来たとき、もうぼくはすっかり片付けて、ほっとひと息をつくように、ベッドの上に腰掛けているところだった。

“疲れた？”と、セーラはぼくを見て言った。

“いや、ちょっとね”と、ぼくは、ちらりとセーラの方を見て言った、“考え事をしていただけさ。この部屋を、とうとう出ると思うと、ちょっぴり寂しくなったりしてね”

“そうね、この部屋もまた、人のいない部屋になってしまう…”と、セーラも言った、“――でもまた、いつでも兄さんを迎え入れるように、待っていてくれるわ”

“そうだといいんだけど”と、ぼくは言った、“さあ、それじゃそろそろ、出るとするか”

しかしぼくは出しなにもう一度、この部屋に振り向いた。夕暮れの、淡い光が窓から漏れている薄暗い部屋。カーテンも、天蓋のあるベッドも、家具も、ぼくが来たときそのままの姿だ。いつになるかも知れないが、今度ぼくが来たときにも、同じ姿を見せてくれるだろうか。それとも、もう二度と、お目にかかることはないかも知れない部屋。ぼくはそっと、心の中で別れを告げた。

セーラは、この別れをそんなに悲しんでいる風もなく、単なる儀式のように、とっとと、元気よく階段を降りて行った。

玄関を出たとき、外はまだ明るかった。もう何度も見慣れたこの辺りの裏山の光景が、この日に限って、裏山に茂るとがった杉の木立の群れが、頭を垂れているようにぼくには思われた。空にはいつのまにか雲がおおい、風が出て来て、決して気持のいい旅立ちの日とは言えなかった。

ぼくが外に出て、それらの光景を眺めているとき、戸締りの済んだセーラが続いて出て来た。

“少し寒いわね”と、セーラは、うっとおしそうな空を見上げながら言った。

“でも、本当に、お邪魔じゃなかったのかい？”と、ぼくは、そんなセーラを見つめながら言った、“帰って来るのがいつもより早かったようだけど…”

“仕事が終わると、すっとんで来たのよ”と、セーラは、ぼくを見て言った、“気にしないで。きょうは兄さんのための日なんですもの…”

“それで、夕食はどこへ行くつもりなんだい？”と、ぼくは尋ねた。

“決まってるじゃない”と、セーラは言った、“兄さんが初めてこの街にやって来たとき、連れて行ったあの店。この街では最高級の店よ”

“そりゃいいねえ”と、ぼくはにっこりして、答えた。

古い家並が立ち並ぶ細い路地を降りて行くと、やがてぼくたちは、街を流れる小川のほとりまでやって来た。向うには二つのアーチ状の石橋が通っており、ぼくたちが行き当たった、樹木が茂り、石塀のあるところでは、男の子がひとり、熱心に釣り竿を垂れていた。水の流れは静かで、街の建物が岸辺近くまで建て込んでいたので、川岸は決して広いとは言えず、むしろ狭いぐらいだった。日はゆっくりと暮れて行き、橋のアーチを通して見える、彼方の古びた建物は、西陽を浴びて黄色く輝き、光の浴びない反対側は、むしろもう暗かった。そして、建物の陰となったこの川の辺りも、もう暗くなりつつあった。

“もう、この街も終わりだね”と、ぼくは、向うで釣りをしている少年の姿を見つめながら、ぽつりと言った。

“ねえ兄さん、せっかく行くんだから、少しは元気を出して”と、セーラは言った。“でも、ここは本当にいい街でしょう。街の人も、みんないい人ばかりだし、本当に是非、兄さんにももう一度来てもらいたいわ”

“そうだね、確かにね”と、ぼくは言った、“夕暮れの街の姿が特に美しい。じ〜んと来るよ。とりわけ今夜は、この街を去ってしまうんだからね。――その点、お前が羨ましい。お前はすっかり

この街に、根づいてしまったようだからね”

“そうでもないけど”と、セーラはにっこりした、“わたしはこの街が好きよ。それほど大きな街でもなくて、ふもとの古い街並と、丘の上の新しい街とが同居している。人も、いい人ばかりだし、心からわたしはこの街を愛しているわ。兄さんも、今は旅人かも知れないけれど、そのうちきっと、落ち着く場所を見つけ出すわよ…”

“そうだといいんだけどねえ…”と、ぼくは少し寂しそうに答えた。

セーラは、ぼくの寂しそうな様子が少し気になったのか、あわてて口をすべらせた。

“なんなら兄さんにも、ここを落ち着き場所にしてもらってもかまわないのよ。わたしや、わたしの友人は、いつでも喜んで、兄さんを迎え入れるつもりなんですから。その気になればいつでも、この街に戻って来てよ。わたしたちは喜んで、そんな兄さんを迎え入れるわ。そして、住めばいいわ。そうすれば、この街の良さが、だんだんと分かって来るでしょうから…”

“そう言ってもらって、嬉しいよ”と、ぼくは言った。“少なくとも、ぼくにも帰るべき場所が一つできたんだからね。それは、お前のいるこの街、ルブライラさ。この街のことは決して忘れやしない。ありがとう、お前のその優しい気持、しっかりとぼくの胸の中に受け止めておくよ。――ぼくもねえ、本当は、こんな旅なんかばかりしないで、落ち着く場所が欲しい。でも、そうする為にも、今は旅することが必要なんだ。そのうちぼくもどこかいい場所を見つけて、お前を呼んであげることになるかも知れない。そのときにはきっとお前も来てくれるね”

“ええ、そういうことになれば喜んで”と、セーラは、にっこりと、目を輝かせながら答えた。

“さあ、ここもそろそろ寒くなって来たようだし、もう行こうか”

“そうね、あの子はまだ釣り続けるらしいわ。こんなに暗くなって来ているのにね”

ぼくたちは、そんなことをしゃべりながら、ゆっくりとそこを引き上げて行った…

再び古びた街並を通り、両側に街路樹の茂ったストリートを上がって行くと、やがて見覚えのある看板のあるあのレストランのところまでやって来た。ここは少し丘を登ったところにあり、ここからは、ふもとの美しい街並を見降ろすことができた。しかし、街の彼方にある夕陽は、ゆっくりと沈みかけていた。街路樹のプラタナスのあいだに見える夕焼けの雲は、なんと美しかったことだろう。その手前に、ルブライラの街は、山に囲まれ、落ち着いて、眠るように存在していた。

ぼくたちは、沈み行く夕陽の光を浴びながら、吸い込まれるように、レストランの中に入って行った。

レストランは、あのときと少しも変わってはいなかった。趣のある白い壁。ランプの置かれた赤いテーブルクロスのテーブル、そして花が至るところに飾られていた。そして偶然にも、ぼくたちは、前に案内されたのと同じテーブルに案内された。

　ぼくたちは、向かい合わせに腰を降ろすと、互いに、驚きの目くばせをした。
　やがて、メニュを持って来たウェイターに、鴨のローストやワインを注文し、彼が去ってしまうと、ぼくたちは二人きりになった。
　“これが、お前との最後の食事だね”と、ぼくは言った、“そう思うと、しっかりと食べなくっちゃ”
　セーラは、ぼくを見つめながら、にっこりした。あのとき着ていたのとは違って、ピンクのスーツが彼女によく似合っていた。
　“その前に言っておかなくっちゃならないことがある”と、ぼくは続けた、“この前はお前がここでおごってくれたんだから、今回はぼくのおごりだよ。いいね”
　セーラは、愛らしい笑顔で、ぼくを見つめた。
　“いいわ。兄さんのお好きなように”と、セーラは答えた。

　そのうち食事が運ばれて来て、ぼくたちは、どの御馳走も、舌つづみを打ちながら、食事をした。ワインがほのかに回って来て、ぼくは、昨夜セーラのパーティで味わった、あの楽しい気分になって来た。本来なら悲しい別れのはずなのに、そんな気がして来なかったのは、この赤ワインのせいなのだろうか…
　“本当に長いようで、短いあいだだった”と、ぼくはポツリと言った、“お前といたあいだ、考えてみれば本当に楽しかったよ”
　“そう？　そう言ってもらって嬉しいわ”と、セーラも、フォークで、カモのローストを口に入れながら、ぼくに言った。
　“でも、結構ひとりでいたときも多かった”と、ぼくはポツリと言った、“そんなときはね、ちょっと街に出掛けたり、田舎へ出かけたりして、いろんなことを考えたりしたものさ。ぼくは、ひとりになると、いろんなことを考えるんだ…”
　“例えばどんなこと？”と、セーラは尋ねた。
　“たいていはね、とりとめのないことさ”と、ぼくは答えた、“たとえばね、いつか郊外へ電車で出かけたとき、乗った電車は小さくて、ガラガラだったけど、田舎のおばさんや、年寄りや、中学生たちに混じって、ひとりの若い女の子がぼくの斜め向かいに坐っていた。その子は行儀がよくて、きちんと両足をそろえた姿勢でうつむき、静かに本を読んでいた。何気なく旅の風情を楽しんでいたぼくの目に、ふとその子の姿が止まったのさ。すると、とたんにその子のことが気になった。年の頃は十八から二十過ぎのあいだだろう、長い髪の毛と、きりっとした、なかなかいい顔立ちをしていた。そこでぼくは、得意の想像が始まったのさ。周りの、おばさんたちや、中学生たちのペチャクチャ声の騒音も気に止めず、静かに本を読み続けているこの子、その子はふと、昔のリサを思い起こさせたのさ。いや、何も、リサがそうだったからというわけじゃなく、なんとなく、ふんいきが似ていたからさ。彼女だって、あんなときがあったはずだ、とぼくはそんな気がした。――しかも、遥かなる田舎へ向かうこんな列車に乗って、彼女はどこへ行くつ

もりなのだろう？

ぼくは、流れ行く車窓ののんびりした景色を見つめているふりをしながら、心の中はもう、その子のことでいっぱいだった。その子の人生、その子の家のこと、その子の将来などについて、気になって仕方がなかった。ぼくは、その電車の終着駅まで行くつもりだったが、途中でその子が降りてしまいはしないかと少し不安だった。でも幸い、最後までその子はついて来てくれた。――そして、本当の田舎の終着駅に着くと、ぼくは真先に外に出て、先頭を歩いた。そのとき、ふと、その子のことが気になって振り向くと、なんとその子は、ぼくのすぐ後ろを歩いていたのさ。そして、ぼくが立ち止まった隙に、さっと、ぼくを追い抜いて、ぼくの先を歩いて行った。その終着駅の村は、静かでいい村だった。ぼくの行くところは、そこにある古い聖堂が目当てだったけれども、その子は、その方向とは違って、普通の、民家のある方向へと、静かな道を歩いて行った。つまり、旅行者であるぼくにとっては未知であるこの村も、その子にとっては、単に、家に帰って来ただけのことで、今から、自分の家に帰ろうとしているだけのことだった。ぼくは、彼女の後を追いはしなかった。あの彼女が、こんな静かな、いいところで暮らしている、と思えるだけで満足だった…”

“なかなかいい話しね”と、セーラは言った、“その子に気があったのなら、こっそりと家までついて行くべきだったのに”

“いや、そんなことまで考えてはいないさ”と、ぼくは答えた、“ぼくがただ言いたかったことは、この世の中には、いろんな人生がある、ということさ。お前の人生――それは、ぼくが知っている。でも、ぼくの知らない女の子の人生もある、ということさ。その子が、気になればなるほど知りたくなる、というのは当然のことさ。――でも、ぼくは、そのいずれの人生にも関係してはいない。そういう淋しさのことを言いたかったのさ。田舎の電車で出会ったその子には、その子の幸せな家庭がある。友人もいれば、先輩もいるだろう。そして内心、そういう、その子の生活を羨みもしたのさ。いや、そうでなくても孤独の影を引きづっていない乗客のすべてが、ぼくには羨ましかった。だって、彼らはみんな生活をしている。だから、親しい人もいるし、家に帰れば待ってくれる人もいる。――ところがぼくは、そのいずれでもないのさ。ぼくは、生活をしていないんだ。その実感が何もない。ただ空気のように生き、夢を見ているに過ぎないのさ…”

“少なくとも、わたしは、兄さんを待っているわ”と、セーラは言った、“兄さんは、思っているほど、そんなに孤独じゃないわよ”

“孤独って、なんだろうか”と、ぼくは、ひとり言のように言った、“それは、人の生活ばかり見つめていて、自分の生活が何もない、ということなのさ。それは、気の滅入ってしまう、寂しい人生さ。街や村に出て、ぼくはやたらと、人の生活が目についてしまう。ぼくと同じように、聖堂をひとりで見物にやって来ていた女の子――その子も含めて、ぼくはふと、人の人生のことを考えてしまう。本当は、自分の人生を、ただそれだけを考えればいいのにね…”

“兄さんは、今は、特にすることがないから、ただ暇なだけよ”と、セーラは言った、“わたしなんか忙しくて、とっても、自分とは全く関係のない他人のことを考えている余裕なんか、ないわ。兄さんも、早くそういう目標を見つけてよ”
“ひとりぽっちの時間が、余りにも多過ぎたからねえ…”と、ぼくは言った、“今さら、みんなと同じようになれ、というのは無理な話しさ。ぼくはひとり、どこまでもひとりさ。そして、人々の人生を、ただ眺めて暮らす…”
“それじゃ、余りにも空しいわ”と、セーラは言った、“そんなんじゃダメよ。もっと燃えなくっちゃ。兄さんの人生は、まだまだ長いのよ。いろんなことができる可能性があるのに、それをみすみす放棄をするなんて…”
“セーラ、ぼくは病気かい？　それとも正常かい？”ぼくは急に、セーラを見つめて尋ねた。
セーラはぼくを見つめ、やがて、ポツリと言った。
“兄さんはただ疲れているだけ。ひとりぽっちの生活に疲れているのよ。だから、誰かと暮らさなきゃだめ。わたしの言いたいことは、それだけよ…”
“分かったよ、その言葉、よく肝に銘じておく”と、ぼくは答えた。
だが、そんな人、どこにいるだろう？　ぼくのママを除いては。ぼくは、セーラを求めて、はるばるとこの街にまでやって来た。リサに夢を打ち砕かれ、今また、セーラにまで、夢を打ち砕かれようとしている。他にはもう誰もいない。ぼくを分かってくれるような人はもう誰も…

“せっかくの別れだというのに、こんな話しになって御免よ”と、ぼくはやがてポツリと言った、“でも、これがぼくなんだ。ありのままのぼくなんだ。それだから、仕方のないことなのさ”
“分かっているわよ。いつものことだもの”と、セーラは言った、“本当は、兄さんを旅に行かせたくはないんだけど、この際、兄さんの旅の無事を祈っているわ”
“お前のその気遣いには、いつも感謝しているよ”と、ぼくは言った、“なにしろ、ぼくの頼れる人と言えば、もうお前と、リサしかいないんだからな。この広い世の中で、全く寂しい限りさ。――でも、ぼくは、なんとか生きて行く。ひとりでもなんとか。それが、ぼくの、運命みたいなものなんだ…”

“それで兄さんは、メロランスへ行って、そこでママと出会えると思っているの？”
やがて、セーラは、それとなくぼくに尋ねた。
“いや、分からない”と、ぼくは答えた、“なにしろ、今度の旅は、ママの青春時代の形跡をたどるだけの旅に過ぎないんだからね。そこから何か出てくれれば幸いさ。そして、出て来なくってももともとなんだから、余り大きな期待はかけていないんだ…”
“その旅が終わると、それからどうするの？”と、セーラは尋ねた。

“分からない”と、ぼくは首を横に振った、“ともかく、まずドシアンに帰るだろう。何しろ、長いあいだ、空けたままになっているんだからね。それからは、しばらく、ひとりで暮らすつもりさ。そして、また、どこへともなく、旅に出るかも知れない…”

“兄さんの話しを聞いていると、まるで兄さんは、空を流れて行く雲のようね”

と、セーラは、心持ち表情を和らげながら、ぼくを見つめて言った。

“ぼくは雲が好きさ”と、ぼくは言った、“そして、あの雲のような人生を、ぼくも生きたい…”

“空の上から人の生活ばかり眺めて、自身は、雲のようにフワフワしているのね”と、セーラは、言葉に力を込めて言った。

“ぼくだって本当は落ち着きたい”と、ぼくは、セーラを見つめて言った、“お前が今、安定を得ているようにね。――でもぼくが、落ち着き場所を見つけるのは、もっともっと先の話しさ。ぼくは、夢物語を、今だに持ち続けているのかも知れない…”

“兄さんの言う夢物語って、それは何んなの？”と、セーラは尋ねた。

“それはね、今までのような人生じゃなく、もう一度、一からやり直したい、ということさ”と、ぼくは答えた、“ママがいなくなってからのあの惨めな人生じゃなく、一日でもいいから、早くママに会いたい。――そうでないと、ぼくは先へ進めないんだ。なにもできやしない。そうでない人もたくさんいるけれど、ぼくは、彼らとは違うんだ。まだ、この年齢なら間に合うだろう。ぼくにとって、ママの思い出は、余りにも強過ぎたのさ。あの時代は、もう帰っては来ないだろうけれど、ぼくにとって一番幸せな時期は、まさにその時期だったんだ。パパがいて、ママがいて、オディープに移り住んで来た頃の、あの時期だったんだ。ぼくに、その幸せを与えてくれたママに、ぼくは何んとしても会いたい…”

“人の人生は一回きりよ。もう過去に戻るなんて、不可能なことよ”と、セーラは言った。

“――でもぼくはときどき、今でも思い出すのさ。ぼくたちの、何不自由のない、幸せな子供時代のことをね。学校や家や、田舎の道や、丘や、小川や、森や、野や、あのときの光景が今も目に浮かんで来るようだ。そして、その中でも特に印象深い光景がひとつあるのさ。それは後になって、ぼくが都会で苦しんでいた頃、ふと思い出したんだが、その日以後、あれは忘れられない光景として、何度も脳裏に浮かんで来た。それは、何んでもない、子供の頃のごく普通の光景だったけど、後になって考えれば、あれこそが子供の頃の幸せを象徴するような、その夢や、歓びや、平和に包まれた、ほのぼのとした幸福感など、子供の頃のありとあらゆる感情を包み込むような、そんな光景のように、ぼくには思われたのさ。そしてそれは、余りにもくり返し、ぼくの脳裏に浮かんだものだから、今では、その光景にもう一度出会うことが、一つの目標になってしまっているように、ぼくには思われるぐらいなんだ。それはともかく、その光景とは、当時としては、ごくありふれたものの一つだった。お前も知っての通り、学校が終わってから夕方まで、ぼくたちは、学校や家の近くの野原で、自転車に乗ったりして、思いっきり遊び回ったものさ。

近くには、山があり、野があり、小川が流れている。小川に沿って、いくつかの民家が並び、山のふもとの幾箇所からかは、野を焼く煙が立ち昇っている。そして、民家の煙突からも、夕御飯のけむりが立ち昇る頃、そろそろ夕陽を背に、ぼくたちは、他の友だちと一緒に、我が家へと向かって、自転車を走らせたものさ。そして、ぼくが思い出そうとしながら、なかなか思い出せなくて、ついに思い出した光景が、次に待っていた。いったいぼくは、幼い頃、何に心を驚かされ、幸福を感じたのか？　幼い頃の幸福は、幸福それ自体に他ならなかった。後の惨めな時代にそれを探究し、強く心を動かされながらその正体のつかめなかった思い出の一つを、ついにある日、突然思い出したのだ。そうだ、あの日！　ぼくには二人の妹がいて、晴れた春の夕方、遊びに疲れて家に帰って来ると、ママは、エプロンをスカートにつけて、台所で夕食の支度に精を出していた。そして、ふと、応接間を見ると、そこではパパが、口にパイプをくゆらせながら、ひとり、安楽椅子に腰を掛けて、のんびりと新聞を読んでいた。その光景を目にして、ぼくは家に帰って来た幸せにひたりながら、勢いよく、二階にある自分の部屋へと駆け上がって行った…　――そう、あのとき目にした、あの柔かなうろこ雲、あの夕焼け、そして、その夕陽に照らされて存在する家の中の平和の光景は、ぼくの生涯でも、忘れることのできない光景の一つとなった。あれこそが、ぼくの幼少の幸福そのものではなかったか、と、その後ぼくはひとりになってから、自問したものさ。それなのに、なぜ、それが崩れ去ってしまったのだろう。どうして、ぼくはあの楽園を、楽園が形づくる夢物語を、失墜しなければならなくなってしまったのだろう。いずれにせよ、あの最悪の日以後、ぼくが失ってしまったのは、あの楽園だったのさ…”

“兄さんは今も、その楽園を求めている、と言いたいんでしょ”と、セーラは、真剣な表情になって言った、“でも、そんな楽園って、あるかしら？　もうわたしたちって、子供じゃないのよ”

“ぼくはもはや、そんな楽園を求めたいって、思ってもいない”と、ぼくはポツリと言った、“楽園のないままに、徒に年を取ってしまったんだからね。――でも、ぼくの求めているのは、そのときの思い出、ぼくの知らなかった事実、そういうことでいいのさ。もう一度、ぼくの心を、当時に向けてみたい。その時代に帰ることは不可能だとしても、心をその時代に向けることは可能なことだからね…”

“振り返って、それでどうしようというの？”と、セーラは尋ねた。

“何んにもならないことだけれども”と、ぼくは言った、“せめて、その思い出を書いてみたいとは思っているね…”

“そういうことなら、兄さんにお任せするわ”と、セーラは言った、“わたしにはこれからまだ先、することがいっぱいあるんですものね。――それに、兄さんの分からないことで、わたしの知っていることがあれば、喜んで協力しもするわ”

“ああ、そういうことなら、お願いすることがあるかも知れない”と、ぼくは言った、“――でも、本当に、お前には興味のないことなのかい？　ぼくたちが生きて来たということ。その道のりを、もう一度たどってみたいとは思わないのかい？”

“そんなこと、たどってどうなるというのよ？”と、セーラは、ぼくを見つめて言った、“私には、過去に目を向けるより、未来に目を向けることの方が、まだまだたくさんあるのよ”
“…ぼくに、未来なんて、もう何もないさ…”と、ぼくは、小さく言った、“ぼくにあるのはただ過去――それだけなんだ…”

“ねえ、いつか”と、ぼくは、しばらくしてから言った、“まだママもいて、シェリーが生きていた時代のことだと思うけど、ぼくたち三人だけで、静かな湖畔を、沈みそうな古ボートに乗って探検した日のことを覚えているかい？　やがてぼくたちは、湖の対岸に人知れない洞窟があるのを発見した。奥へは結局入って行けなかったけれども、あのとき、リサが泣き叫んだ後で、ぼくたちが互いにかわした約束を覚えているかい？　晴れた春先の、本当に静かな日だった。葦の葉が湖面に揺れて、古びたボートが波間に、静かに停泊していた。そこでぼくたちは、二人だけの約束として、互いに誓ったのさ。今後、どんなことが起ころうとも、ぼくたちはいつも一緒だ、ということを。お互いに、離れ離れになることがあったとしても、協力し合って生きて行こう、ということを――　三人で手を握り合って、あの日、あの湖のそばの洞窟の中で、ぼくたちは誓い合ったのさ。その日のことを、ぼくはまるで昨日のことのように、今も鮮明に覚えているんだ…”
“覚えているわ、わたしも”と、セーラは答えた、“そして、それは今でも生きているわよ。そういうことでしょ？”
“そのことを覚えていてくれたのなら、それでいいんだ”と、ぼくは、セーラを見つめて言った、“ただぼくが言いたかったことは、あのときの誓いが、今も守られているかどうかということじゃなく、あのときの体験が、今も鮮やかに、ぼくの心の中では生き続けている、ということなんだ。そのことだけをお前に知ってもらえれば、それでいいのさ…”

ぼくがセーラに打ち明けたかったことは山ほどあった。しかし、それらを全部打ち明けたところで何んになるだろう？　セーラは、未来に生きる女。しかしぼくは、もう過去にしか生きられない人間だった。これ以上自分のことを語るのは、セーラを当惑させるばかりだと悟って、ぼくは話しを打ち切ることにした。

“もう、お前といられる時間も、残りわずかだね”と、ぼくはふと言った、“後は、汽車に乗って、孤独な長い時間が待っているだけさ…”
セーラは、そんなぼくを見て、顔をほころばせた。
“そんな風には言わないこと”と言って、セーラは、自分の人指し指で、ぼくの口をふさごうとした。“わたしだって、兄さんがいなくなれば、寂しくなるわ。兄さんは、その孤独な長い時間を、どうやって過ごすつもり？”

“ある意味ではね、ぼくたちの昔に今度こそはゆっくりと帰れるんじゃないかと、期待している面もあるのさ”と、ぼくは言った、“だいたい、どうしてママは、突然、ぼくたちの前から失そうしてしまったのだろう？　そのことだけでも分かれば、大きな収穫というものさ。その他にも、例えば、ママとパパが結婚に至ったいきさつとかね、メロランスに行く為の課題というものは、結構多いのさ”

“もし、メロランスに行って、何か新しいことでも分かれば、わたしにも知らせてね”と、セーラは、目を輝かせて、ぼくに言った。

“ぼくは、ここへ来るまでに、ママが昔過ごしたことのある、ロアズマや、リトイアにまで足を運んで来た。そこで、まだお前たちには言っていない新事実も随分発見したものさ。その旅でぼくが知り得たことは、おぼろげながらも、ママの幼少期がどんな風で、ママの少女時代が、どんなだったか、ということなのさ。そのある程度の像を、ぼくは頭の中に思い浮かべることができるようにさえなった。今となれば、そのママの生い立ちについて、一つの物語が書き上げられるぐらいだろう。――でもまだ不足しているのは、ママが、メロランスに行ってからどうしたのか、ということなのさ。これを補足しない限り、ママに関しての完全な物語を書き上げることは出来ないのさ”

“兄さんは本当に、ママに関する物語を書き上げるつもりなの？”と、セーラは、驚いたように、ぼくを見て言った。

“できればね”と、ぼくは、セーラを見て答えた、“今のところ、ぼくにとって、ママほど興味をそそる対象は、他に存在しないんだ…　なぜって”

“じゃ、本当のことを言おう”と、ぼくは、ひと息入れてから言った、“ジェット機が空を飛び、機械文明や、高度技術が、ぼくたちの生活を脅かそうとしているこの時代、ぼくは、本当の素朴さというものを求めているのさ。そしてそれは、ぼくたちの幼少期や、ママの時代には存在したものなんだ。ぼくはあるとき、それを失ってはならないものだ、と心に決めた。周りでは、次々とその火が消されて行ったとしても、ぼくの心の中では、今もその火がともっているのさ。ぼくが知りたいのは、本当の素朴さ、そして、幸福。それ以外のものを、ぼくは知りたいとは思ってはいない…”

“ママの時代にはそれがあった、と兄さんは信じているのね”と、セーラは言った。

“いや、今だって、それを求める人の前には、開かれるはずのものなんだ”と、ぼくは言った、“――でも、ぼくがママにこだわるのは、その時代と、その時代の空気に触れられるからさ。一世代前のぼくの知らない時代。その時代を覗き見る、というだけでも、ぼくの胸はワクワクする。――反対に、ぼくは、現代の窒息するような時代には向いていないのさ…”

“でも、その時代を生きて行くしかない…”と、セーラは言った。

“ぼくは、その矛盾に絶えず悩まされて来たし、これから先もずっと悩まされ続けることだろう”と、ぼくは言った、“そして、それを解決することができたときに初めて、ぼくは恐らく、幸福を手にすることができるんだ…”

“現代と一致しているお前やリサに乾杯さ！ そして、何も知らない猫にも”と、ぼくは不意に言った。
“猫？　どうして猫なの？”と、セーラは尋ねた。
“だって猫は何も知らないから、いつだって、その時代に一致することができるからさ”
とぼくは答えた。
“じゃ、わたしもリサも、その猫並、というわけなのね”と、セーラは皮肉っぽく言った。
“じゃ、なくて、そんなお前たちが羨ましい、っていうわけさ”と、ぼくは答えた、“――でも、もうこんな議論をやめて、そろそろここを出ようか…”

ぼくたちが再び店を出たときには、もう消え入るようなたそがれの灯がかすかに西の地平線近くで光っているだけで、見下ろすルブライラの街並は、もうすっかり夜のとばりの下に、黒い影を見せていた。風は冷たく、空にはいつのまにか、他の星々に混じって、半月が静かに輝いていた。

ぼくたちは、タクシーを呼ぶのでもなく、夜風に当たりながら、しばらく歩いて行くことにした。言葉もなく、セーラと二人だけの散歩は、快かった。

プラタナスの並木がシルエットとなっている人気のない坂道をゆっくりと歩きながら、ふと、ぼくは言った。
“ふもとの方に街が見えるこの坂道――ぼくはふと、あの素朴な子供の頃、丘を通って、丘のふもとのぼくたちの村へ帰って行った夕暮れの時を思い出すよ。それはもう遥か遠い昔のことだけども、こういう風景をきっかけに、ふと思い出すこともあるんだね”
“兄さんは何んでもすぐ、子供の頃に結びつけてしまうのね”と、セーラは、暗闇の中で、月明かりに、顔を浮かび上がらせながら言った。“でも、わたしは違うわ”
“ほう、じゃ、お前にも何か思い当たることがあるのかい？”と、ぼくは尋ねた。
“そうね”と、セーラは考えるように言った、“マロンと一緒に歩いた夜のことかしら。どこだかもう忘れてしまったけど、こんな寂しいところを歩いた夜のことを覚えているの”
“随分とロマンチックな夜だったんだね”と、ぼくは言った、“でも、そういう夜は、本当にいい夜なんだよ。お前も、なかなかやるじゃないか”
“でももうそれも、兄さんと同じで、済んでしまったことよ”
セーラは、寂しそうに、ポツリと言った。

やがてぼくたちは、そこだけが明るく輝いている夜の駅にやって来た。駅の構内は、ドーム状の鉄骨の天井の下に既に列車が二台ほど止まっており、人々があわただしくホームを往き来して

いた。

壁には、まぶしい広告がいくつも掲げられ、そのうちの一つは、この鉄道の路線の案内図だった。ぼくの予約してあった列車も既にそこに止まっていた。
　セーラは、ぼくの荷物の片方を持ってくれて、ぼくが列車内の二人用の自分の寝室へ運ぶのを手伝ってくれた。まだ相手の客が来ていないと見え、向かいのベッドはがらんとしていた。
　“何んならお前も、ここに坐って、一緒に行くかい？”と、ぼくは、冗談に、セーラに言った。
　“行きたい気もあるけど、今回は遠慮させてもらうわ”と、セーラは、その誘いを、丁寧に断った。
　“居心地はよさそうだ”と、ぼくは、シートを直しながら言った、“ここに横になっておれば、もうあしたの昼頃には、メロランスに着いているんだからね”
　“まだわたしの行ったことのない街ね”と、セーラは、少し羨ましそうに言った、“あるいは、わたしのような田舎者には、用のない街かもしれないわ…”
　“それは、大きな街だよ”と、ぼくは言った、“今回行くことは、リサには内緒にしてあるんだ。向うで不意にリサに会えば、きっとリサ、驚くだろうな”
　“わたしからもよろしくって、言っておいてね”と、セーラは言った。
　“ああ、リサの顔なんか見たくないって言っていた、と言ってやるよ”
　“相変わらず意地悪ね”と、セーラはぼくをにらみつけるように言った。
　“こうしてお前を引き止めているうちに、列車が動いてしまえばいいのにね”とぼくは言った、“そうすればもうお前は、帰れなくなる”
　“そうなれば大変。そうならないうちに、早く外に出なくっちゃ”と、セーラは、あわてたように窓から外を見渡した。
　“まだ大丈夫さ。出発の時刻まで、十分時間がある”と、ぼくは、にっこりして言った。“――でも、お前がまだ乗っているのを見ていると、昔見たある映画を思い出すよ。チャーリーという犯罪者が、姪のチャーリーを、列車が動くまで車内に引き止めようとするのさ。その目的はもちろん、自分の秘密を握っている姪のチャーリーを、動く列車から突き落として殺す為だったのさ。でも結果は反対に、その犯罪者の方が列車から落ちて死んでしまって、物語の方は、めでたしめでたしで終わるんだが、「疑惑の影」っていうその映画、お前は知っているかい？”
　“そんな怖い映画、知らないわ”と、セーラは答えた。“まさか兄さん、わたしを同じ目に合わせようって、思っているんじゃないんでしょうね”
　“どうして？　そんなことをして何んになるの？”と、ぼくは言った、“お前を動く列車から突き落として何んの得があるというんだい？　――それはともかく、あの映画のチャーリーは気の毒だった。純真無垢のチャーリーは、叔父のチャーリーを一番愛していたが、彼はとてつもない犯罪者だった。それに、自分の母親を悲しませたくない為に、叔父が犯罪者で、しかも自分を殺そうとさえした、自分ひとりだけが知っている秘密を、他の誰にも打ち明けることはできないのさ。

周りの人には、彼が死んだ後でさえ、叔父は立派な人だ、で通っているのに、そうでない事実を、チャーリーひとりだけが知っているのさ。だからぼくは、あの映画の最後のシーンが一番好きなのさ。あんなに胸に突き刺さるような映画は、めったに見ないからね”

“そのチャーリーに限らず、誰にも打ち明けられない秘密を持っている、ということは悲しいことだわ”と、セーラは言った、“愛する人に裏切られたその女の子の将来は、どうなるでしょうね”

“そういう風に考え始めると、映画っていうものも、結構楽しい見方ができるものなのさ”と、ぼくは言った。“ところでセーラ、お前はチャーリーなのかい？ そうでないのなら、そろそろ降りた方がよさそうだよ”

“そうね、もうそんな時刻なの？”と、セーラは言った。

“いよいよ、お前ともお別れさ”と、ぼくは言った。それから、ぼくは、立っているセーラをつくづくと見つめた。“いいかい？　お前に、もう一度、別れのキスをさせてもらっても…”

“いいわよ”セーラは、微笑みながら、ぼくを見つめて言った。

ぼくはその場に立って、しっかりとセーラを抱いた。彼女の体は固く、そして冷たかった。しかしその柔らかい頬は、ぼくに快い感触をもたらしてくれた。快い、キスのひとときは終わった。

“これで当分、お前の夢を見なくて済むようになるさ”と、ぼくは、セーラを離すなり言った。

セーラも、ぼくを見つめて、そこに立っていた。

“わたしも、兄さんの思い出に、今のキスを大事にとっておくわ”と、セーラは、愛くるしく、ぼくに言った。

それから、セーラは、列車の奥の出口の方へと、ひとり去って行った。ぼくも、彼女を追いかけようと思ったが、ガックリとその場に腰掛けた。

やがて、窓ガラスを叩く音がしたので、窓を押し上げると、そこに、ぼくを見上げるように、セーラが立っていた。

“もう、間もなくね”と、セーラは言った。

“今晩は、家に帰ってどうするんだい？”と、ぼくは尋ねた。

“ひとり寂しく、兄さんのことでも考えるわ”と、セーラは答えた。それからセーラは、同じ質問を、ぼくに返した、“兄さんはどうするの？”

“ぼくかい？”と、ぼくは言った、“ゆっくりと、お前やリサのことを考えるさ。なんと言っても、もうあしたはメロランスなんだからね”

そのときだった、ガタンと振動がして、列車がゆっくりと動き出したのは。

ぼくは、窓から身を乗り出すようにして、セーラに手を振った。

セーラも、プラットホームを、少し歩きながら、ぼくに手を振った。

“じゃあまた、いつか会える日を楽しみにしているからね”と、ぼくは叫んだ。
“その日を待っているわ”と、セーラも声を限りに返事をした。
“じゃあ、さようなら…”
もう、セーラの“さようなら”という声は聞きとれなかった。
列車が、明るいドームの天井から出たとき、突然真暗闇が列車を襲い、ただセーラの立っている明るい駅が、次第に小さく、小さく遠のいて行き、それもやがてはあの大きな闇の中へと吸収されて行ってしまうのだった…

再び長い列車の夜が始まった。ぼくは、そう明るくはない車内の、シートに頭をもたせかけ、半分眠るように車内を見渡した。今回はまだ、ぼくの寝室に乗って来る人は誰もいない。それを寂しさと呼ぶべきなのか、それとも幸運と呼ぶべきなのだろうか。古びた内装の板壁のつや光だけが、ぼくの目に止まるのだった。きっと他の寝室には乗客がいるのだろう。ガタゴトと揺れるこの車内で、ぼくはできるだけ、寂しいことよりも楽しいことを考えようと思った。何十年も昔、ぼくのママも、このような列車に揺られながら、メロランスへと旅立って行ったのだ。それは四月の気候のいいときで、時もこのような夜ではなく昼だった。心は未知なる都市への希望に燃え、きっと窓外に広がる景色も、その歓びに呼応するかのように、笑顔に燃えていたのだろう。ママの旅立ちは、今のぼくのように決して寂しさの中にあったのではなかった。向うでは、ミロンが紹介してくれたミロンの友人達が、ママを優しく迎え容れてくれる筈だった。そんな向うみずのママが乗って居る列車に乗り合わせた他の乗客たちは、まだ十七才になったばかりのそんなママの姿を、どんな風に見たのだろうか？　――できるものなら、ぼくもその列車に乗り合わせたかった。乗り合わせて、ママがどんな風に希望に燃えていたのかを、この目でしっかりと確かめて見たかった。そんな気がしてくるのだった。その日の様子のことは、ぼくはママから聞かされて、よく覚えていた。それは忘れもしない、ママが十七才になったばかりの四月八日、半年も以前から計画を練って来た決行の日は、まるでママの門出を祝うかのように快晴だった。その日は折りよくあの乱暴なレオノールが留守で、その代わりに、リランで働きながら苦学をしていた義兄のレオンが里帰りの為家にいた。ママが部屋のベッドの上に大きな口を開いた旅行鞄を置き、そこへドレスや本や洗面道具、化粧道具などを詰め込んでいる様子は、すぐこの義兄には見つけられてしまったのだった。義兄は、最初は驚きその旅立ちを阻止しようとしたが、やがては理解を示すようになってくれた。
“どうしても行く気かい？”と、彼は言った。
“ええ、決心は変わらないわ”と、ママは答える。
“もうオヤジとは仲直りする気はないんだな？ この家とはもう絶交かい？”
“お父さんだなんて。あんな人、お父さんでもなんでもないわ。でもレオン、あんたは別よ。なにも、あんたから逃げて行こうというつもりじゃないんだから”

“そう言ってくれれば、嬉しいよ。でも、何年もお前を育ててくれたオヤジから何も言わずに出て行くなんて、考えものじゃないかな？　もちろん、オヤジが悪かったのは、ぼくも知っている。でも、なんだか、それはお前が逃げて行く為の口実って気が、ぼくにはするんだ…”

“口実って、それ、どういう意味？”と、ママは言った、“わたしが逃げて行くのは別な理由があるっていうの？”

“そうじゃないのかい？”と、レオンは答える、“だって、オヤジがお前をいじめるなんて、そうたびたびあったもんじゃないだろ？”

“兄さんは何も知らないのよ。あの人が、わたしをどんなに苦しめていたか。だって、ちょっとマホルさんところの息子と付き合ったりしたら、彼の家が地主だからって、ただそれだけの理由で、わたしたちの幸福をだいなしにしてしまったのよ”

“確かに、オヤジにも頑固なところがある”とレオンは言った、“でもそんなときは忍耐強く待って、一歩一歩オヤジを説得して、オヤジから勝利を勝ち取るべきじゃないかな。お前みたいに、腹が立ったらすぐ出て行ってしまうようでは、それこそ、元も子もないぞ”

“余計な口出しをしないで！”と、ママは、ベッドの上に広げられた鞄を見つめながら、わめくように言った、“わたしが行くって言えば、絶対に行くんだから。こんな家にいるなんて、もうわたし、耐えられない…”

義兄は、そんなママの様子を横に立ったまま、じっと見つめていた。

“とうとう本音を吐いたようだな、リディア”と、彼は言った、“本当は、都会にあこがれているんじゃないかい？　そして、それが、家出の第一の理由なんだろ？”

“言ったわね”と言って、ママは義兄の方に振り向いた。しかしその表情は、晴れやかだった。“でもこの際、兄さんに嘘をついたって仕方がないわ。そうなの、わたし、もう田舎暮らしは、あきあきしたの。毎日毎日、お父さんの手伝いをして、なんの変哲もない生活を続けるなんて、わたし、耐えられないわ。でも兄さん、お父さんには、わたしがお父さんに腹を立てて出て行ったとだけ言っといてね。だって、そのことも本当なんだから”

“分かったよ”とレオン。“でもそんなこと、お前から直接聞いたとは言わないよ。だって、お前の家出の現場を見ていながら、黙って見過ごしておいたなんてことがバレれば、親父、それこそ何するか分からないからな”

“フフ”と、ママは、そんなレオンの様子を見て笑った、“兄さんに後始末が全部降りかかって来るってわけ”

“でもホント”とレオンは言った、“お前が出て行くと、寂しくなるな。特に、親父なんか、がっかりするぜ”

“フン、自業自得よ”と、ママは冷たく言った、“お父さんったら、わたしに農業の後継ぎをさせようってつもりでいるんだから。このままいたら、わたしの結婚相手まで、お父さんに選ばれて、押しつけられてしまうわ。それじゃまるで、わたし、お父さんの家畜みたいじゃないの。いいえ、きっとそうだわ。お父さんは、私を犬か猫のように思ってるんだわ”

“そんなことはないさ”とレオン。“でもやはりお前、恋愛がしたいのかい？　街に出れば、ここと は違って、いい男がいっぱいいるだろうけど…”

“あら、そんなことが目的で行くんじゃないわよ”と、ママ。“兄さんったら、変なことに気をまわしてさ。もちろん、恋愛はしたいわ。でも、そんなこと、まだずっと先の話しでしょ”

“いや、案外早くやって来るかも知れない。都会に着いて早速っていうわけには行かないだろうけど、でも、二年や三年で…　ぼくにはそういう気がするんだ”

“兄さん、嫉妬してんのね”と、ママは、レオンをからかうように見つめながら言った、“わたしが他の男にとられやしないかと、ビクビクして”

“バカ言え”と、義兄は強く否定した、“お前が他の男と結婚しようが、そんなことは関係ないさ。ただ、お前の性格からして、都会へ出たお前がどんな茶番劇をやらかすかと、それが心配なだけなんだ…”

“大丈夫よ、兄さん”と、ママはケロッとした表情で言った、“わたし、都会のことについては、少し調べてあるの。それに、友だちを尋ねて行くつもりだから、決して初めからひとりぽっちというわけじゃないのよ”

“フフーン、だいぶ前から計画していたようだね、ひとりこっそりと”と、したり顔のレオン。“でも、都会にお前の友だちがいたとは知らなかった。どうして、そんな友だちがいるの？”

“あら、ミロンの友だちよ”とリディア。“まだ、一度か二度くらいしか会ったことがないんだけど、きっと助けになってくれると信じてるわ”

“なんだか心細い話しだな。でも、あいつの友だちなら大丈夫だろう。正義と信念に燃えている連中が多いという話しだからね”

“兄さん、知ってるの？　あの子の友達のマルスっていう子”

“いや、そいつは知らない”と、レオン。“まあしかし、そのマルスという子にしても、あんまり頼り切るような気持で行くようではダメだな。ひとり立ちってのは、なかなか大変だぞ”

“決して、頼り切ったりなんかしないわ”と、ママは、自分に言い聞かせるように言った。それから、おもむろに時計を見ると、ママは言った、“そろそろ行かなくては…”

“そう、とうとう行くんだな？”と、レオンも柱時計に目をやりながら言った。

“ええ、兄さんをひとりほっといて、ごめんなさいね”ママは、レオンに、素直に謝った。

“いや、ぼくはかまわないよ。またすぐリランに帰るんだし”と、レオンはそんなママを見つめながら言った、“でも、出る前にちょっとそこで待っててくれないか”そう言って彼は、奥の自分の部屋へ駆けて行った。しばらくして戻って来たときには、手に小さな小箱を持っていた。“はい、これ”と、彼は言った、“お前の１７才の誕生日にって思って買っていたんだけど、お前が急に出かけるっていうもんだから”

ママはレオンからそれを受取り、さっそく中を開けて見た。中には可愛らしい木彫の花模様のブローチが入っていた。
“まあ、ブローチなのね、ありがとう”と、ママはそれを手に取り、驚いたように見つめながら言った、“さっそくつけさせてもらうわ”ママはそう言って、家出用の黄色いブラウスの胸のところにそれを付けた。
“なあに、安ものさ”と、義兄は満足深げに、そんなママの様子を見つめながら言った、“でも、それがせん別になるなんて、思ってもいなかった。それから、そうだ”と言って彼は内ポケットを手さぐりして、そこから、幾枚かの紙幣を取り出して来た。そして彼は言った、“お前の小遣いだけじゃ、とても足りないだろう。旅に出れば、とかく費用がかかるもんだからな”
“そんなこといけないわ、兄さん”と、ママはいったんは紙幣の受取を拒否しようとした、“せっかく、兄さんが汗水垂らしてもうけたお金じゃない”
“まっ、そう言わずに、気軽に取っとけよ”レオンはそう言って、その紙幣を無理やりママの手の中に押し込めようとした、“ぼくにしても、そのお金がお前のためになるなら、嬉しいんだから…”
ママはとうとう受け取る決心をし、その紙幣の額を目にして、今さらながら驚くのだった。
“こんな大金も”と、ママは驚いて言った、“ああ兄さん、本当にありがとう”
そう言ってママは、レオンの首の周りを両手で抱き締め、その頬に、力いっぱいキスをするのだった。
キスが終わると、義兄は言った。
“それからリディア、ぼくの下宿先にでもいいから、ときどき手紙をよこしてくれないか。お前のことが、とっても心配なんだ”
“いいわ。約束する。向うに着いて、落ち着いたら、兄さんにまっ先に手紙を書く”
“お願いするよ。そうだ！　お前の行く先を聞くのをすっかり忘れてた”
“もちろん、メロランスよ”と、ママは言った、“でも、お父さんには内緒よ”
“選んだね。うん、分かってる。親父には知らないって答えておこう。それからリディア、忘れないうちに言っとくけど、もし向うで辛いことがあったり、生活が続けられなくなったりしたときには、遠慮なく、ぼくの下宿先まで尋ねて来てくれていいんだよ。ぼくは、どんな相談にも乗ってあげるから。ぼくの下宿さき、知ってるね”
“ええ、ありがとう”と、ママは言った、“でも大丈夫よ、わたし、たいていのことは耐える覚悟でいるんだから”
“お前という人間を見直したよ”と、レオンは、そんなママを見つめながら言うのだった、“ますます好きになってしまいそうだ…”
“じゃあ兄さん、これで”と、ママは鞄を持って言った。
“ああ、元気でな。そこまで、送ろうか？”と、彼は、ママの鞄に手をかけようとして言った。

“いえ、いいの。あんまり世話をかけちゃ悪いわ。それに、寄るところもあるんだし”とママは、その誘いを、丁寧に断った。
“分かった。じゃあ、しっかりな”
“ええ、さようなら”
“さようなら…”
ママはそうして、レオンと別れの握手をすると、手を振りながら、希望の未来に向かって、住み慣れた我が家から、春の陽光と、花々の咲き匂う外へと、確かな一歩を踏み出して行ったのだった…

列車は、闇夜の中を、音をたてながら走っていた。ほの明るい車内には、人は誰もいない。ぼくは、都会へ行く寂しさを紛らせる為に、心の中に光を取り戻そうとした。もう何十年も前の、ママが意気揚々と、リトイアの片田舎のサビーノの村を去って行った日の出来事へと…

リディアが、旅行鞄を持ってひとり家を出て行ってから、ぽつんと家の中に残されたレオンは、すっかり気落ちをしてしまった。彼は二階の窓から、リディアが明るい野原を歩いて行く後ろ姿を、いつまでも見つめていた。そして、彼女が完全に視界から消えてしまい、再び静かな野原の風景以外の何も見えなくなってしまったとき、彼は初めて、リディアが存在したことの重みを、身にしみて感じた。なぜなら、リディアが去ってしまった今、もうこの家にはなにひとつとして、彼を惹きつけるものは残っていないことを感じたのだから。彼は、リディアが去ることによる虚しさのようなものを、心に感じた。そして、リディアをそのようにまでさせた義父レオノールのことを、今さらのように呪うのだった。彼は、リディアに会って、彼女とこの村を一緒に歩き回ることを楽しみに、久し振りに帰って来たのだった。それなのに、思いがけなくも、彼女の家出という場面に、彼は出くわすことになってしまったのだ…
“ああ、もっとリディアと一緒に暮らしたかったな”と彼はひとり言のようにつぶやいた、“リディアが行っちまった。ぼくの可愛いリディアが。くそ！　親父がいけないんだ。あんまり、リディアの自由を奪うから。ああ、もっとリディアと一緒に、町や村や山を歩きたかったな。――でも、もう、これでおしまいだ。あしたには、ぼくもこの家を出よう。いたってしかたがない。そしてまた、リランで単調な日々が始まる。会社。事務。夜学。勉強。ああ、うんざりだ。リディアがいなくなるとこうも世の中がつまらなくなるとは、思ってもいなかった。せっかく楽しみにしていた休暇もこれで終わりか。しかしまだ希望はある。リディアから手紙がやって来る。ぼくも出そう。リディアを励ましてやるんだ。半年に一回？　いや、月に一回だ。そして、いつまでも、ぼくとリディアの仲は変わらない。たとい、リディアが素敵な男を見つけて、結婚したとしても…”

一方リディアの方は、レオンには済まないことをした気がしたものの、彼のことはもはや頭にはなく、心は明日への希望でいっぱいだった。彼女には、いつも歩き慣れている野道の両側に咲いている花が、この日は自分の門出を祝福してくれているように思われた。タンポポやヒマワリやケシの花が風に揺れ、真青な空には、白い雲がゆったりと流れている…
“ああ、いよいよだわ”と、リディアは、遠く丘の彼方を見つめ、希望に胸ふくらませながら思った、“わたしの冒険が始まった。大丈夫かしら？　どうしたの？　リディア、しっかりしなさいよ。早くも心配したりしてさ。フフ、驚いてる。わたしの心の赤ん坊が初めて顔を出したように驚いてる。でも、本当に大変。あんまり大変で、何をしようとしているのか、分からないみたい。――でも楽しいわ。ああ、心が弾む。とってもいい天気だわ。いよいよ春ね。春の門出。暖かくて、小鳥も草も花も、みな息を吹き返したみたい。そうよ、あんたたち、これからわたしは行くの。向うには大きな御殿があって、わたしはそこへ迎えられたお姫様なのよ。分かる？ このわたしの気持ち。少しも怖くなんかない。晴々して、とってもさわやか。ああ、空が美しい。まるで、あそこに浮かぶ雲のような気持なの。軽やかで、浮き立って、期待に胸あふれて、本当に、じめじめした地中の冬眠から覚めて、初めて地上に顔を出したときのあの亀さんのような気持なのよ。見るもの、聞くもの、触れるものなどすべてが、驚きばっかり。何千回も通ったこの道も、この木も、この草も、あの太陽も、すべてが今までと違って新しく見えるの。――でも、いよいよあんたたちともお別れね。わたしがいなくなるからって、そう寂しがらないでね。レオンったら、口には出さなかったけど、とっても寂しそうな顔をしていたわ。わたし、あんな顔をされるのが弱いのよ。でも――わたしの決心は変わらなかった。なんと言っても、半年も前から計画を練っていたんだもの。半年も前から！　我ながら感心するわ。そんなにも長く待って、とうとう実行したんだって。もう後には引かないわ。もう意気地なしのリディアじゃない。どんどん、したいことをやってやるわ。そして、町に出れば、うんと勉強して、うんとえらくなってやるの。うんと出世をして、家出をしたリディアがちゃんと立派な仕事をしたって、村のみんなをあっと言わせてやるの。そうよ、わたしは普通の女の子なんかじゃない。そんな子に収まるぐらいなら、死んだ方がましよ。わたしの血は、もっと大きなことを意欲するようにって、うづいているの。わたしには、他の女の子と違って、気骨ってものがあるのよ。そのことを立派に証明してみせますから…”

そんな風に、自己陶酔をしながら、リディアはやがて、地主のマホル家の家の近くまでやって来た。家の庭先には、花に水をやる為に、ちょうどマホル夫人が出ていたところで、旅行鞄を持って近付いて来るリディアの様子に、夫人はすぐ気がついた。
“ミロン君いる？”と、リディアは、マホル夫人と目が合うなり、垣根ごしに尋ねた。

“ええ、います”と、夫人は答えたが、その視線は疑わしそうに、リディアの持っている鞄に注がれるのだった。“あんた、どこか行くんですか？”
“ええ、ちょっと旅行に”と、リディアは答えた。
“じゃあ、ちょっと呼んで来ますから”そう言って、マホル夫人は、ミロンを呼ぶために、家の中へ消えて行った。

しばらくリディアが手持ちぶさたそうに体を揺らしながら、庭の花などを見つめていると、やがて、ミロンが、マホル夫人と一緒に家の中から姿を現した。
“やあ、リディアかい？　旅行鞄を持って、どっかへ行くつもりかい？”
“ええ、あんたとちょっと話しがあるの”と、リディアは言った。
マホル夫人は、疑い深そうな目つきで、そんなリディアの様子をしげしげと見つめていた。
しかし、ミロンが、そんな母をすぐ追っ払ってくれた。
“ママ、ちょっと向うへ行ってて欲しいんだ…”
そうミロンが言うと、マホル夫人は、未練がましく、その場を去ってくれた。
“で、なんだい？　話しって何んなの？”と、マホル夫人が消えるなり、ミロンは尋ねた。
“わからない？　この鞄を見て”と、リディアは、顔をほころばせながら言った。
“旅行に行くんだろ？”と、ミロンは当惑したように言った、“それとも何か他に、家出でも…”
“そうよ、とうとう決心したの。もう帰れないわ”
“で、でも、その家出が、ぼくと、どんな関係があるんだい？”
そのあわてふためいたミロンの表情を読み取りながら、リディアは冷静に言うのだった。
“あんたって、意外と臆病で、冷たいのね。この前、わたしを連れてってあげるって言ったのに、約束守らなかったじゃないの。おかげでわたし、お父さんにぶたれたわ。あんな奴と駆け落ちしようと思ったのかって”
“ごめんよ。でもあれは、君に無理やり約束させられたようなものじゃないか”と、彼は弁解した、“ぼくにはまだ、とっても、君を養ったりする勇気も、力もないよ。で、今度はどうなんだい？　早くもママは警戒の色を濃くしていたようだけど、まさか、ぼくにも一緒に行けって言って、ぼくを困らせるんじゃないだろうね”
“フフッ、わたしのことがそんなに怖い？”と、リディアは笑いながら言った。
“怖くはないけど、なんだか、君のその目に見つめられると…”
“大丈夫、今度は、ひとりで行くつもりだから”と、リディアは笑顔で答えた。
“へえそうかい。とうとう決心したんだね”
ミロンは、緊張の糸が切れたみたいに、肩を落として答えた。
“まるで、災難を逃れたのを喜んでいるみたい”
リディアは、そんな彼の様子を眺めながら言った。

“喜んでなんかいないさ”と、ミロン。“心配だよ、君のことが。で、ぼくに役立つことが何かあるの？　あんまり力になれそうにないけど、金かい？　金なら少しぐらいは工面できそうだけど…”

“そんなことじゃないの”と、リディアは言った、“――でも、あんたって、本当にあのときに行く気なんかなかったのね。それじゃ初めから、駆け落ちなんてできないって、断ってくれればよかったのに…　わたし、本当に信じて、喜んでいたのよ”

“あの話しはもうよしてくれ”と、ミロンは言った、“お互いに気まずくなるだけだから…”

“分かったわ。もう言わないわ”と、リディア。“それでね、話しっていうのは、あんたの友だちにマルスっていう子がいたでしょ。あの子の住所を教えて欲しいの”

“なんだって！ あいつの家に行く気かい？”と彼は驚いたように言った、“君って子は…”

“バカねえ、何も大騒ぎすることなんかないでしょ。わたしはただ、あの子がメロランスに住んでいるって、あんたから聞いたもんだから、それで聞いただけなのよ。それなのに、あんたは、変なことに気をまわしたりしてさ…”

“それでほっとしたよ”とミロンは言った、“また、いつの間に君が、奴に気を持つようになったのかと思ってね。ともかく、君って女は…　まっいい、教えてあげるよ。ただし、確かに奴はメロランスに住んでいるけど、あそこは、本当は奴の家じゃなく、ぼくと同じく、下宿をしているところなんだ。まっ、その方が、君にも都合がいいだろう。あいつなら大丈夫さ。君にも、なにくれと役に立ってくれる”

“わたし、そう思っていたわ”とリディア。“この前、あんたを通じてちょっとしゃべったときにも、優しい子だってことが分かったの”

“ただし、あんまり深入りしようたってダメだぞ。あいつは、女よりもまず社会改革が問題なんだから”

“まあ、闘争しているのね。勇ましいわ”

“ぼくだって、その一員だけどね”と、ミロン。“まっ、そんなことどうでもいいさ。それじゃリディア、ちょっと待ちな。ぼくが直々に奴に手紙を書いてやるよ。そうすれば、君もとまどわずに済むだろう？”

“ええ、ありがとう、ミロン。お願いするわ”

“じゃあとにかく、ぼくの家に上がれよ。なに、気にすることなんかない。ぼくの部屋はすぐそこだから”

彼はそう言って、外では長い付き合いだったリディアを、このときになって初めての日以来、家の中へと案内するのだった。

家の中では、彼らの様子を伺っていたマホル夫人が、玄関を入ったすぐ横のところにいた。二人が入って来るのを見ると、彼女はすぐ息子に声を掛けた。

“ミロン、お茶を入れてあげましょうか？”

“ああ、お願い！”と、彼は母を見るなり言った。彼女がキッチンへ姿を消すと、ミロンは、リディアを自分の部屋に案内しながら言った、“ママはどうやら、君のことを干渉したいらしい”

“きっともう知っていらっしゃるわ。わたしが家出して来たこと”と、リディアは、ミロンを見つめながら言った。

“そうとなれば急がなくっちゃ”と、彼は自分の部屋の机に向かいながら言った、“ママが説得しにかかれば大変だろ。さてと、よし、何んて書こうかな”

そう言って、彼が机に向かいながら文章を練っているあいだ、リディアは、物珍しそうに、ミロンの部屋の中を見回すのだった。

“あんたの部屋には色んなものがあるのね”と、ひとり言のようにリディアは言った、“随分本もあるし、これ、全部読んだの？”

“いや、とてもとても”と、彼は、文章に気を取られながら答えた、“買うだけは、買っちまうんだけど。え～と、我が親愛なる同士諸君。ここに、いと可憐なるひとりの家出娘を、あなた方にお届けする、ってのはどうだい？”

“バカおっしゃい。それじゃまるでわたし、木箱に詰めて送られるリンゴか何かみたいじゃない”と、リディアは笑いながら答えた。

“じゃ、今の箇所取り消そう”と、ミロン。

“本当にそんな文章を書こうと思っていたの？”と、リディアは驚いたように言った、“あんたって、まるでセンスがないのね”

“だって、こんな手紙書くの、初めてなんだから”とミロン。“あっ、ママがやって来たらしいぞ。手紙は隠したほうがよさそうだ。さあリディア、なんでもいいから、そこの本を一冊手に取って”

“どうして？”と言いながら、リディアはあわてて、一冊の本を抜き取るのだった。

マホル夫人がやがて開いたドアのところに姿を現し、スーッとお茶などを乗せたお盆を持ったまま、彼らのいる部屋の中に侵入して来た。

“はい、これ”と言って、マホル夫人は、お茶と軽食とをテーブルの上に置くのだった。

“ありがとう、おばさん”と、リディアは、そんな夫人に、丁寧に礼をした。

しかし、マホル夫人は、すぐには立ち去りそうもなく、その場に立ったまま、つくづくとそばに立っているリディアを見やるのだった。

“そう”と、やがて彼女は言った、“それで旅に出ますの？　おひとりで？”

“ママ、ぼくたち、ちょっと忙しいんだ。あっちへ行ってくれないか”とミロンは、母親を追っ払おうとした。

“追い出すのね”と、夫人はちらっとミロンを見やりながら言った、“でも、ちょっと聞くぐらい、いいでしょ？”

“ええ、おばさん。わたし、ひとりで旅するんです”と、リディアは答えた。

“そう、勇敢ね”と、夫人。“わたしなんか、あんたの年頃にはいつも両親と一緒で、ひとりで旅するなんて思いもよりませんでしたけど。で、あっちこっち行くんですか？”

“ええ、まあ…”

“そう、あんたのお父さん、なかなか頑固な方なんでしょ。よく許してくれましたわね”マホル夫人は、なおも疑い深そうな目で、リディアを見つめながら言うのだった。

それを見かねて、口をさしはさんだのは、ミロンだった。

“ママ、もういいだろ。ちょっと度が過ぎるよ”

“そうかしら。でも、本当ですものね、リディアさん”

“ええ、でも許してくれました”と、リディアは落ち着いて答えた、“わたし、とっても喜んでいるんです。だって旅は、わたしのずっと前からの夢でしたもの…”

“そう、それはいいわね。さぞかし楽しいでしょ。でも、ひとり旅というのはなかなか大変でしょ。特に、あんたみたいな若い女の人には。で、どんなところへ行くおつもりなの”

リディアは口を開きかけたが、ミロンが口をさしはさんだ。

“もういいだろ。リディアはまだはっきり決めていないんだ。自由な旅がしたいって言ってるんだから。さっママ、ぼくたちの邪魔をしないで”

そう言って彼は、母親の背に手を当てて、力づくで追い出しにかかった。

“はいはい”と、マホル夫人は、追っ払われながら言った、“ミロンはまさか、一緒に行くとは言わないでしょうね”

“ぼくがかい？”とミロン。“どうしてさ。リディアは、ひとり旅がしたいって言ってるんだよ”

“分かりました。ちょっと尋ねてみただけですよ”マホル夫人はそう言って、部屋の外へ出て行った。

彼女が消えてしまうと、リディアは言った。

“分かるわ。あんたのママの気持。でもわたし、平気で嘘をついちゃった”

“なに、かまうもんか。それより、早く続きを書こう”

そう言ってミロンが机に戻ると、リディアは初めて、自分が手にしていた本に気づくのだった。

“あら、大きな本を手にしちゃって。「資本論」って、書いてあるわ”

“「資本論」だって？”と、ミロンは驚いたように言った、“また、ごついのを手にしたんだな。ママがそんなのを目にしたら、さぞかしびっくりしただろうよ”

“これも、あんたの勉強と関係があるの？”

“うん、大ありだ。ただし、大学の勉強とはなんの関係もないけどね。でも、それを読みこなせたら、大したもんだよ”

“そう？　どんな風に？”とリディア。

“どんな風にって、ぼく自身、まだ読んでないんだから大したことは言えないけど、ともかく君も、一個の闘志となるよ。いや、むしろ、理論家だな”

“そう、そういう本なの”と言って、リディアは、興味深げにぺらぺらとページをめくった、“なんだか、肩がこりそうな本のようね”

“無理もないさ”とミロン。“誰だって、この本には泣かされるんだから。ただし、この本は、パパには内緒だ。パパに見つかれば、こんな本、たちまちビリビリに引き裂かれて、ぼくなんか、すぐ追い出されてしまう…”

“たった、こんな本だけで？”とリディア。“また、大変な本を持ってんのね。いったい誰が、そんな怪物みたいな本を書いたんでしょ”

“マルクスだ。聞いたことはないかい？　その名前は覚えておいた方がいい…”

“なるほど、マルクスって、そう書いてあるわ”

“ちょっと話しが過ぎたようだ”そう言ってミロンは再び手紙を書き始めたが、すぐに筆を置いた。“さあできた。これでいいかな”

リディアは本を元の所へ戻すと、すぐミロンのそばに駆け寄った。

“ちょっと見せて”

“はい、どうぞ”と、ミロンは答えた。

リディアはそれを手に取ると、声を出して、読み始めた。

“マルス、元気かい？ きっと、この手紙を読む頃には、君のところで大変なことが起きていると思うけど、それは、君のところへこの手紙を持って来たとっても可愛らしい女の子のことだ。君はよもや忘れてはいないだろうね。いつかぼくの村へやって来たとき、道端で会って、この子と三人で楽しく語り合ったときのことを。もちろん忘れてはいまい。名前ももちろん覚えているだろう。蛇足だけど、一応確認する為にも書いておく。リディア・フローバという名前で、年の頃は１７才になる可愛らしいお嬢さんだ。ところでどうして、君のところへ来たかと今頃はうろたえていることだろうね。君のどぎまぎしている顔が目に浮かぶようだ。まっ、それは余談だけど、実は、君に頼みがあって、一筆書いた次第だ。君はもう、彼女から聞いただろうか？ もしまだだったら、ぼくから直接言わせてもらうけど、実は、この子は、家出をしてしまって、行く場所がなくて困っているんだ。まさか君は、そう聞かされて困惑したりはしないだろうね。君のことだからむしろ、今頃は力になってあげようと張り切っていることだと思う。で、ぼくも、そういう君だからこそこうして頼んだわけだけど、しかし、何もかもすっかり君に負担をかけようと思っているわけじゃない。リディアもその点はちゃんと心得ていると思うよ。そこで相談だけど、どうか君の助力によって、リディアに彼女にふさわしい職場とアパートとを世話してやってくれないだろうか。なにぶん彼女は都会は初めてのことだし、今頃はきっとめまぐるしい都会の動きに、目を円くしていることと思う。初めての体験ということで、分からないことや、とまどうことが既にあるかも知れない。もちろん、そういう細かいところまで、いちいち君の世話になろうとは、彼女自身も思ってはいないと思うけど、きっと君のことだ、そう煩わしがらないで、むしろ喜んで、彼女の世話をし、彼女を立派に、正しい道へと導いてくれるね。約束したよ。これは、ぼくからのたってのお願いだ。

何分、こういうことは君にも初めての体験だろうし、いろいろとまごつくことがあるかも知れないけれど、君にはやれるね。なんなら、君の友だちに紹介してくれてもいい。――ともかく、今、君は、ひとりのさ迷える娘の運命を左右する立場にあるんだ。それを正しく、幸せに導いて行くことは、君にとってもやりがいのある仕事だと思う。彼女をよく見つめて。とっても可愛くて、人なつっこい感じがするだろう。彼女の心の中も、君が見ての通り、まっすぐなんだ。今、彼女は、年頃の娘特有の、あの期待と不安の入り混じった、人生の一つの岐路に立たされているところなんだ。その彼女を、今君に託す。どうか、そんな彼女の期待を裏切らないように――

君の良き友　　ミロン

追伸

ぼくも、この春休みが終われば君のところへ行く。そのときにはきっと、彼女の元気な姿が見られるだろうね。では、そのときまで”

“もっと何か、他に書いて欲しいことはない？”しばらくしてから、ミロンは尋ねた。

“いえ、これで結構よ”とリディアは、心から感謝して言った、“あんたって、とってもわたしのことをほめてくれるのね。ありがとう”

“いや、きっとあいつら、寄ってたかって君の世話をしてくれると思うよ”とミロン。“だから安心して行って大丈夫だよ。そうだ、それからついでに、地図も書いておこう。リディア、メロランス行きの列車の時刻は分かっているのかい？”

“ええ、もうちゃんと調べてあるわ。午後０時１２分発の汽車に乗って行くの”

“そうか。それじゃ急がなくては。リディア、金はあるの？”

“ええ、ちゃんと銀行から下ろして来たの。それに、兄さんも、いらないって言うのに、無理にくれたわ”

“そう、君の兄さんも知っているのかい？　ぼくも、何か君にあげたいのだけど…”

“いいの、あんたは、この手紙だけで十分よ”リディアは、笑顔で彼を見つめながら言った。

“そう、手紙だけでも、君の役に立ってうれしいよ”彼は、リディアを見つめながら言った、“で、地図だけど、メロランスの駅からちょっと遠いんだ。でも、細かく書いてあげるからね”

“ありがとう、頼むわね”と、リディアは言った。

“都会というものは、ややこしいからね”と、彼は地図を書きながら言った、“乗り物も、いっぱい乗り換えなければならないし”

“わたし、大丈夫かな”と、リディアは少し心配になりながら言った、“まごまごして、いつのまにか日が暮れてしまったり、全然別な方角へ行ってしまったりしないかしら”

“そのうちきっと、再びこの家に帰って来るよ”とミロンは、意地悪く彼女に言った。

“バカおっしゃい。いくらなんでも、そんなにわたし…”

“さあできた”と言って、彼は、複雑に書いた地図を手に取って、リディアに見せるのだった。

“随分と細かいわね”と、リディアはそれを見ながら言った、“町の様子が手にとるようだわ。いちいち、目印になる場所までも書いてくれたの”

“絶対に迷わないようにね”とミロン。“さっ、それじゃ行こう。メロランスには、あしたの朝着きそうだね”

“あんた、送ってくれるの？”

“もちろんさ。ちょっとゆっくりし過ぎたようだね。これじゃ駆け足でないと、間に合わないぞ。その鞄は、ぼくが持とう”

“ホント。大変！”と、リディアも、自分の腕時計を見て言った、“あれに乗り遅れたら、きょうはもう行けなくなってしまうわ”

“じゃ、駆け足だ！”

二人は、お互いに手を取り合って、部屋を飛び出した。

庭ではマホル夫人が、落葉をほうきでかき集めているところだった。

“ママ！ ちょっとこの子を駅まで送りに行って来る”とミロンは、二人の様子をあっけにとられたように見つめる夫人に向かって言った。

“すぐ帰って来るのよ！”と、夫人は、厳しくミロンに言った。

二人はマホル家を飛び出し、息を切らせながら、街道を走った。しかし、しばらく走ると、途中で、もうリディアは彼から遅れ始めるのだった。

“待って。もうわたし、へとへと”とリディアは、彼の手を離すようにして言った。

“そんなこと言ってどうする？　駅はまだまだ先だぞ”とミロン。

“だって、あんたは男でしょ。速すぎるわ。ちょっと待ってよ”

“いや待たない”とミロンは言った、“リディア、昼飯はまだなんだろ？　だったら、先に行って、サンドイッチと切符を買っておくよ。君は、汽車に乗り遅れないようにやってくればいい”

“もし間に合わなかったら、ミロン、どうするの？”

“君の代わりに、ひとりで旅に出ようかな。じゃあ、駅で待っているからね”

彼はそう言うなり、鞄を持ったまま、どんどん先へ走って行くのだった。

リディアはしばらく彼に付いて行こうと走っていたが、やがてとうとう歩き出した。彼はみるみるうちにリディアから遠ざかり、ついには、向うの森の陰に姿を消してしまった。

“行ってしまった”と、リディアはひとり、心の中で思った。“でも、みんな親切で、いい人ばかりね。感激しちゃうわ。きっと、この旅、成功するわ。いや、成功させるべきよ。みんな、こんなに一生懸命になって、わたしのことを助けてくれるんだから。そんなわたしが、都会に出てから、抜きさしならないはめになってしまったら、どうするの？申し分けが立たないじゃないの。そうならない為にも、うんと勉強して、うんと頑張らなくっちゃ。そして、リディアが家出をしてやっぱりよかったって、みんなにそう言われるようにならなくっちゃ。

仮にもしわたしが、不良少女になんかになったりしてさ、なんだあんな奴の為に手を貸したのか、とか、せっかく努力してやったのに、あんな風になってしまったのか、なんて思われて、みんなをがっかりさせちゃ気の毒だもの。でも大丈夫。わたしは決して、不良少女になんかにはなりませんから。たとい貧乏になっても、決して、悪い女にだけはならないつもりよ。ねっ、今、はっきりそう誓いましょ。リディア、はっきりそう誓うのよ。どんなことがあっても、けっしてくじけたりはしませんって…”

やがて、リディアがやっとリトイアの駅に現れたときには、ミロンが駅前で、リディアの鞄を持ったまま、待っていてくれた。彼は、リディアがやって来るなり、気落ちしたように言った。

“やっと来たね。でも、もう汽車は行ってしまったよ”

“うそ！　うそばっかり”と、リディアは驚いて叫んだ。

すると彼は急に笑顔になって言った。

“ハハ、ビックリしたかい。でも、もうすぐだ。はい、これ、切符と昼食”

“ずいぶん買ったのね。全部でいくらしたの？”

そう言ってリディアは、ポケットから財布を取り出そうとした。

“いや、ぼくのプレゼントさ。君の誕生祝い、まだだったろう”

“まるでわたし、お金の使いかた知らないお姫様みたいね”とリディアは、素直に彼のプレゼントを受けることにした。

“まっそう言わずに、さあ来た”と言って、彼は、汽車の音に振り向いた。

汽車は、黒い煙を吐きながら、大きな音をたてて、駅に入って来た。二人はさっそく、その汽車に向かった。

“座れそうだね”と、彼は入って来る汽車の内部の様子を見つめながら言った。

やがて汽車が止まると、リディアはデッキに足をかけながら振り向いた。

“じゃ行くわ、ミロン。本当にありがとう”

“ああ、気を付けてね”とミロン。“でも、汽車の旅は長いよ。何か本でも持ってくればよかったな”

“わたし、ちゃんと持って来たわ”とリディアは答えた。

“何んの本？”

“小説よ。ボウエンの「メロランスの家」っていう本”

“そうかい、君らしいね”と彼は言った。

そのとき、汽笛の音と共に、汽車はゆっくりと動き出した。

“いよいよおさらばだね。向うに着いたら、マルスに、ぼくがくれぐれもよろしくって言っていた、と言ってくれ”

“ええ、あんたもいずれ来るんでしょ”

“ああ、５月になったら行くよ”と、ミロンは手を振りながら言った、“そのときにはまた会おう。

それまで、元気でね”

“あんたもよ、ミロン。元気でね。じゃ、さようなら”

“ああ、地図と手紙、落とすんじゃないよ”

“大丈夫よ”

“じゃ、さようなら…”

彼は、リトイアの駅に立ったまま、いつまでも、去って行くリディアの汽車に手を振り続けるのだった…